

川辺郡猪名川町

広根遺跡

-新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書-



平成29(2017)年3月

兵庫県教育委員会

川辺郡猪名川町

広根遺跡

- 新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -

平成 29(2017) 年 3 月

兵庫県教育委員会



調査地点遠景（北西から）



調査地点遠景（南東から）



A区遠景（南東から）



B区遠景（西から）



平成24年度 A区・C区・D区遠景（東から）



D-3区遠景（東から）



E区・F-1区遠景（西から）



E区・F-1区・F-2区（北から）



D区上空より西を眺む（東から）



G-1区・G-2区遠景（東から）



H-1 区全景（北から）



H-2 区・H-3 区（東から）



A-3区 SX01出土土器



D-3区 犬形土製品



A-3区 木製鼻輪



361

H-2区 灰釉陶器長胴壺



533

F-2区 赤間石製硯箱形硯



H-2 南区 SE282出土土器



H-2 南区 SE282出土羽釜

例　言

- 1　本書は、川辺郡猪名川町広根に所在する広根遺跡・和田山遺跡の発掘調査報告書である。本報告では、県道川西三田線以東の調査区A～H区を報告対象とした。
- 2　本調査は、新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、兵庫県立考古博物館・公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部を調査機関として実施した。
- 3　調査の推移
広根遺跡の調査は周辺の分布調査の開始から本発掘調査の終了まで、平成10年度より平成25年度に亘っており、その詳細は第1章にあげた。本報告書に直接関わる確認調査・本発掘調査についても第1章を参照していただきたい。
(発操作業)
平成22年度より、兵庫県立考古博物館が実施、平成24年度より、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部が実施機関となった。
確認調査　平成22年12月6日～平成24年12月18日
実施機関：兵庫県立考古博物館
公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
本発掘調査　平成23年6月16日～平成25年8月19日
実施機関：兵庫県立考古博物館
公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
(出土品整理作業)
平成26年4月1日～平成27年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成27年4月1日～平成28年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
平成28年4月1日～平成29年3月31日
実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
- 4　本書の編集・執筆は、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部　西口圭介・別府洋二・多賀茂治・池田征弘・大本朋弥が行った（第5章・第6章以外）。
- 5　本調査において出土した遺物や作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会（兵庫県立考古博物館）で保管している。

6 その他の記載項目

- ・調査成果の測量は、電子基準点神戸北・箕面・猪名川及び2級基準点 神4-2・神5-2・神5-3・神6-1を使用し、座標は世界測地系に基づくもので、調査地は第V系に属する。
- ・本書に用いた方位は座標北を示す。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。
- ・空中写真測量は、平成23年度は㈱日建技術コンサルタント（2011146）・㈱八州（2011290）、平成24年度は㈱ニコス（2012082）・㈱オオバ（2012120）、平成25年度は㈱日建技術コンサルタント（2013024）に委託した。
- ・遺物写真撮影は、㈱クレアチオに委託した。
- ・本書の図版1・図版6・図版7は、西日本高速道路株式会社関西支社兵庫工事事務所提供の1/2000都市計画図を縮小して使用した。
- ・現地の遺構実測は、調査員と調査補助員が行った。
- ・遺構番号については、特に断らない場合は区（各小区）ごとに割り振っている。
但し、H区については遺構の連続性を考え、H区で通した遺構Noに振替えた。H-1区は1~でそのまま。H-2南区は当初の01~100を201~300とし、101~110はそのまま、H-2北区は131~176でそのまま、H-2東区は301~でそのまま遺構Noとして使用した。
- ・遺構の製図および遺物の実測・製図は兵庫県まちづくり技術センター嘱託員が行った。なお、遺跡は北向き斜面に存在するため、遺構図版の作成に際し、南を天にするものがある。
- ・遺構の計測値は、原則としてm表記とした。
- ・遺物については、兵庫津遺跡Ⅱ（兵庫県文化財調査報告第270冊）の用語を参考とし、土師器・須恵器・瓦器の表現を概ね使用した。用字については、磁器以外の種別には杯・椀・鍋の字を使用、磁器については碗の字を使用した。また、土製煮炊具については土師器鍋・羽釜とし、瓦器・瓦質土器の鍋・羽釜については瓦質土器鍋・羽釜の用語を使用している。また、石製品・木製品・金属製品の用語を使用している。
- ・本遺跡の地形環境については、立命館大学非常勤講師 青木哲哉氏に確認調査段階より現地にてご教示いただき、本報告書の第6章として玉稿を賜った。
- ・炭化物については、放射性炭素年代（AMS測定）を㈱加速器分析研究所に依頼し、第5章に結果を掲載している。
- ・出土木製品の樹種同定についてはパリノ・サーヴェイ㈱に依頼し、第5章に結果を掲載している。
- ・発掘調査及び報告書の作成にあたっては、立命館大学非常勤講師 青木哲哉氏・同志社大学文化情報学部教授 鶴柄俊夫氏・兵庫県立考古博物館学芸員 岡田章一氏 深井明比古氏・雲雀丘学園中・高等学校 大下 明氏・大阪府教育委員会 大野 薫氏・猪名川町教育委員会 青木美香氏から資料提供・御指導等をいただいた。記して感謝の意を表すものである。

本文目次

第1章はじめに	第4章 和田山遺跡の調査成果
第1節 調査に至る経緯 (1)	第1節 遺跡の概要 (73)
第2節 各調査・整理作業の経過と概要 (1)	第2節 調査の方法 (73)
第2章 位置と環境 (5)	第3節 1区の遺構 (74)
第3章 広根遺跡の調査成果	第4節 2区の遺構 (76)
第1節 確認調査と本発掘調査の概要 (7)	第5節 出土遺物 (76)
第2節 A区の調査 (10)	第6節 まとめ (76)
第3節 B区の調査 (18)	第5章 自然科学分析
第4節 C区の調査 (19)	第1節 広根遺跡における放射性炭素年代 (80)
第5節 D区の調査 (20)	第2節 広根遺跡出土木製品の樹種 (83)
第6節 E区の調査 (23)	第6章 広根遺跡の地形環境 (92)
第7節 F区の調査 (24)	第7章 まとめ (107)
第8節 G区の調査 (29)	
第9節 H区の調査 (33)	
第10節 遺物 (48)	

表目次

表1 確認調査概要一覧	表5 広根遺跡A区・H区・I区の樹種同定結果	表10 出土遺物観察表4
表2 本発掘調査概要一覧	表6 広根遺跡遺構概要一覧	表11 出土遺物観察表5
表3 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 補正値)	表7 出土遺物観察表1	表12 出土遺物観察表6
表4 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{14}\text{C}$ 未補正値)、表8 出土遺物観察表2		表13 出土遺物観察表7
曆年校正用 $^{\circ}\text{C}$ 年代、校正年代)	表9 出土遺物観察表3	表14 出土遺物観察表8

本文挿図

第1図 遺跡の位置	第12図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(4)	第19図 G-1区と2区のトレンチ断面図 (c-c'断面図)
第2図 和田山遺跡 調査範囲図	第13図 調査区周辺の地形分類図	
第3図 1区平面図	第14図 A-1・2区と3区付近における 微地形の分布	第20図 H-1区のトレンチ断面図 (d-d'断面図)
第4図 SX01～SX03平面図・断面図		
第5図 2区全体図	第15図 G-1区と2区及びH-1区と 2区付近における微地形の分布	第21図 H-2南のトレンチ断面図 (e-e'断面図)
第6図 和田山遺跡 出土遺物	第16図 D-3区付近における微地形の分布	第22図 D-3区東部のトレンチ断面図 (f-f'断面図)
第7図 和田山遺跡 1区遺構	第17図 A-3～2区のトレンチ断面図 (a-a'断面図)	第23図 D-3区西部のトレンチ断面図 (g-g'断面図)
第8図 和田山遺跡 2区遺構・出土遺物		
第9図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(1)	第18図 A-1・2区北側のトレンチ断面図 (b-b'断面図)	
第10図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(2)		
第11図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(3)		

図版目次

国版1 確認調査位置	国版36 D-3区 漢	国版74 H-1区 挿立柱建物跡SB03・SB04
国版2 A区 確認レンチI	国版37 E区 全体図	国版75 H-1区 挿立柱建物跡SB02
国版3 A区 確認レンチII	国版38 E区 北壁土層断面	国版76 H区 挿立柱建物跡SB06・SB05
国版4 H区 確認レンチI	国版39 E区 漢・草跡 土層断面/簡文書	国版77 H-1区 挿立柱建物跡SB08・SB09
国版5 H区 確認レンチII	国版40 F-1区 全体図	国版78 H-1区 挿立柱建物跡SB11・SB07
国版6 調査地点A~H区 本発掘位置図	国版41 F-1区 北壁・東壁・中央土層断面	国版79 H-1区 挿立柱建物跡SB10・SB12
国版7 A~H区 通構全体図	国版42 F-1区 引生土器堆積・下層土坑	国版80 H-1区 挿立柱建物跡SB13・SB14
国版8 A~D区 全体図	国版43 F-1区 挿立柱建物跡SB01・SB04	国版81 H区 土坑・焼土坑
国版9 A-1・2区 全体図	国版44 F-1区 挿立柱建物跡SB02・SB08	国版82 H区 土坑
国版10 A-1・2区 集石土坑	国版45 F-1区 方形変色部・土坑	国版83 H区 井戸1
国版11 A-1・2区 方形土坑・石散遺構1	国版46 F-1区 土坑・埋植・漢	国版84 H-1区 井戸2
国版12 A-1・2区 方形土坑・石散遺構2	国版47 F-2区 全体図	国版85 H-2北区 土葬墓群
国版13 A-1・2区 石散遺構SX04-1・2	国版48 F-2区 北壁・西壁土層断面	国版86 H-2北区 火葬址・墓
国版14 A-1・2区 焼土1	国版49 F-2区 挿立柱建物跡SB01	国版87 H区 火葬址・火葬墓
国版15 A-1・2区 土坑	国版50 F-2区 土坑・焼土	国版88 H-2北区 集石土遣・SX174集石部
国版16 A-1・2区 土坑・焼土坑・ 集石土坑	国版51 F-2区 集石土坑	国版89 H-1区 塚状石積み遺構
	国版52 F-2区 土坑・集石土坑・漢	国版90 H-1区 水道遺構群
国版17 A-3区 全体図	国版53 G-1・2区 全体図・ G-2区 西壁土層断面	国版91 H-1区 土坑
国版18 A-3-1区 建物配置図		国版92 H-1区 集石土坑・水道遺構群
国版19 A-3-1区 挿立柱建物跡SB01・ SB02・櫛	国版54 G-1区 全体図・南壁土層断面	国版93 H-1区 集石土坑・SK23と関連する 施設
国版20 A-3-1区 挿立柱建物跡SB03・土 器集積SX08	国版55 G-1区 遺構平面詳細図	
	国版56 G-1区 地下鉄状石組構・集石遺構	国版94 H-1区 集石焼土坑・水道遺構
	国版57 G-1区 木棺墓・集石土坑	国版95 H-1区 水道遺構SX08上層
国版21 A-3-1区 挿立柱建物跡SB04・ SB05	国版58 G-1区 土坑・集石土坑	国版96 H-1区 水道遺構SX08下層
	国版59 H区 全体図I	国版97 H-1区 水道遺構SX03-1・3
国版22 A-3-1区 挿立柱建物跡SB06	国版60 H区 全体図II	国版98 H-1区 水道遺構SX05・SX06上層
国版23 A-3-3区 土坑	国版61 H-1区 遺構配置図	国版99 H-1区 水道遺構SX05・SX06下層
国版24 A-3区 土坑・焼土・炉・近代代理構	国版62 H-2南区 全体図	国版100 H-2南区 水道遺構
国版25 A-3-1・2区 中世水田遺構	国版63 H-2北区 全体図	国版101 H-2南区 近世土坑1
国版26 A-3-1区 水道遺構	国版64 H-3区 全体図・東壁・各土層断面	国版102 H-2南区 近世土坑2
国版27 A-4区 全体図・焼土坑・土坑	国版65 H-1区 上層の遺構・土層断面	国版103 H-2南区 土坑群1
国版28 B区 全体図・西壁土層断面・埋植・漢	国版66 H-1区 上層の遺構	国版104 H-2南区 土坑群2
国版29 B区 かまど1・2	国版67 H区 遺構平面詳細図I	国版105 H区 各小区の構
国版30 B区 かまど3	国版68 H区 遺構平面詳細図II	国版106 H-1区 中世水田遺構全体図
国版31 C区 全体図・土層断面・土坑	国版69 H区 遺構平面詳細図III	国版107 H-1区 中世水田遺構部分土層断面
国版32 D-1区・D-2区 全体図・土層断面	国版70 H-1区 繁文時代住居跡	国版108 H-1区 水道遺構SK20・漢SD24
国版33 D-3区 全体図・北壁土層	国版71 H-1区 住居跡石碑跡	国版109 H-1区 水道遺構SK21・漢RSX07
国版34 D-3区 西壁・西壁断ち割り土層断面	国版72 H-1区 土坑	国版110 A-1・2区 出土土器
国版35 D-3区 土坑	国版73 H-1区 挿立柱建物跡SB01	国版111 A-3区 出土土器1

図版112 A-3区 出土土器 2	図版122 F-2区 出土金属製品・石製品	図版135 H区 出土土器10
図版113 A-3区 出土土器 3	図版123 G区 出土土器 1	図版136 H区 出土土器11
図版114 A-3区 出土土器 4・金属製品	図版124 G区 出土土器 2	図版137 H区 出土土器12
図版115 A区 出土石製品 1	図版125 G区 出土土器 3	図版138 H区 出土土器13・金属製品1
図版116 A区 出土石製品 2	図版126 H区 出土土器 1	図版139 H区 出土金属製品2
図版117 A区 出土木製品	図版127 H区 出土土器 2	図版140 H区 出土金属製品3・石製品
図版118 B区・D-3区 出土土器・金属製品・木製品	図版128 H区 出土土器 3	図版141 H区 出土木製品1
図版119 E区 出土土器・金属製品・石製品	図版129 H区 出土土器 4	図版142 H区 出土金属製品4・木製品2
F-1区 出土土器 1	図版130 H区 出土土器 5	図版143 H区 出土木製品3
図版120 F-1区 出土土器 2・金属製品・木製品・石製品	図版131 H区 出土土器 6	図版144 H区 出土木製品4
図版121 F-2区 出土土器	図版132 H区 出土土器 7	図版145 H区 出土木製品5
	図版133 H区 出土土器 8	
	図版134 H区 出土土器 9	

写 真 図 版

卷頭図版1 調査地点遠景(北西から)	卷頭図版4 E区・F-1区遠景(西から)	卷頭図版7 A-3区 SX01出土土器
調査地点遠景(東南から)	E区・F-1区・F-2区(北から)	D-3区 大形土製品
卷頭図版2 A区遠景(南東から)	卷頭図版5 D区上空より西を眺む(東から)	H-2区 底軸陶器長脚壺
B区遠景(西から)	G-1区・G-2区遠景(東から)	A-3区 木製鼻輪
卷頭図版3 平成24年度	卷頭図版6 H-1区全景(北から)	F-2区 赤陶石製鏡形埴堤
A区・C区・D区遠景(東から)	H-2区・H-3区(東から)	卷頭図版8 H-2南区 SE282H土土器
D-3区遠景(東から)		H-2南区 SE282H羽釜

写真図版1 道路遠景 空中写真	写真図版18 A-3区 道構 4	写真図版35 D-3区 道構 4
写真図版2 調査前の状況・A区確認調査	写真図版19 A-3区 道構 5	写真図版36 E区・F-1区 空中写真
写真図版3 A区・H区確認調査	写真図版20 A-3区 道構 6	写真図版37 E区 全景
写真図版4 A区全景 空中写真1	写真図版21 A-3区 道構 7	写真図版38 F-1区 全景
写真図版5 A区全景 空中写真2	写真図版22 A-3区 道構 8	写真図版39 F-1区 土層
写真図版6 A-1・2区 全景	写真図版23 A-3区 道構 9	写真図版40 F-1区 道構 1
写真図版7 A-1・2区 道構 1	写真図版24 A-4区 全景・道構	写真図版41 F-1区 道構 2
写真図版8 A-1・2区 道構 2	写真図版25 B区 全景・道構 1	写真図版42 F-1区 道構 3
写真図版9 A-1・2区 道構 3	写真図版26 B区 道構 2	写真図版43 F-1区 道構 4
写真図版10 A-1・2区 道構 4	写真図版27 B区 道構 3	写真図版44 F-1区 道構 5
写真図版11 A-1・2区 道構 5	写真図版28 C区 全景・土層	写真図版45 F-2区 空中写真
写真図版12 A-1・2区 道構 6	写真図版29 D-1区・D-2区 全景・土層	写真図版46 F-2区 全景
写真図版13 A-1・2区 道構 7	写真図版30 D-3区 全景	写真図版47 F-2区 全景2・道構 1・土層
写真図版14 A-3区 全景	写真図版31 D-3区 土層	写真図版48 F-2区 道構 2
写真図版15 A-3区 道構 1	写真図版32 D-3区 道構 1	写真図版49 F-2区 道構 3
写真図版16 A-3区 道構 2	写真図版33 D-3区 道構 2	写真図版50 F-2区 道構 4
写真図版17 A-3区 道構 3	写真図版34 D-3区 道構 3	写真図版51 G区 空中写真

写真図版52	G区 全景他	写真図版92	H区 造構22 水路遺構群	写真図版130	F-1区 出土土器 2
写真図版53	G-1区 造構1	写真図版93	H区 造構23 土坑	写真図版131	F-1区 出土土器 3
写真図版54	G-1区 造構2	写真図版94	H区 造構24 水路遺構SX03~		金属製品・木製品・石製品
写真図版55	G-1区 造構3		SX06他	写真図版132	F-2区 出土土器・金属製品・
写真図版56	G-1区 造構4	写真図版95	H区 造構25 燃土坑・集石土坑		石製品1
写真図版57	G-1区 造構5	写真図版96	H区 造構26 水路遺構①	写真図版133	F-2区 出土石製品 2
写真図版58	G-1区 造構6	写真図版97	H区 造構27 水路遺構②	写真図版134	G区 出土土器 1
写真図版59	G-1区 造構7	写真図版98	H区 造構28 水路遺構③	写真図版135	G区 出土土器 2
写真図版60	G-1区 造構8	写真図版99	H区 造構29 水路遺構④	写真図版136	G区 出土土器 3
写真図版61	G-1区 造構9	写真図版100	H区 造構30 水路遺構⑤	写真図版137	H区 出土土器 1
写真図版62	H-1区 空中写真	写真図版101	H区 造構31 水路遺構⑥	写真図版138	H区 出土土器 2
写真図版63	H-2区・H-3区 空中写真	写真図版102	H区 造構32 水路遺構⑦	写真図版139	H区 出土土器 3
写真図版64	H-1区 全景	写真図版103	H区 造構33 近世土坑①	写真図版140	H区 出土土器 4
写真図版65	H-1区上段・H-2東区 造構棲出状況	写真図版104	H区 造構34 近世土坑②	写真図版141	H区 出土土器 5
写真図版66	H-2北区 全景・土層	写真図版105	H区 造構35 近世土坑③	写真図版142	H区 出土土器 6
写真図版67	H-3区 全景・土層	写真図版106	H区 造構36 円形土坑群①	写真図版143	H区 出土土器 7
写真図版68	H-3区 造構	写真図版107	H区 造構37 円形土坑群②	写真図版144	H区 出土土器 8
写真図版69	H-1区 上層の造構1	写真図版108	H区 造構38 壁①	写真図版145	H区 出土土器 9
写真図版70	H-1区 上層の造構2	写真図版109	H区 造構39 壁②	写真図版146	H区 出土土器10
写真図版71	H区 造構1 範文時代の造構①	写真図版111	H区 造構41 中世水田遺構①	写真図版148	H区 出土土器12
写真図版72	H区 造構2 範文時代の造構②	写真図版112	H区 造構42 中世水田遺構②	写真図版149	H区 出土土器13
写真図版73	H区 造構3 捶立柱建物跡①	写真図版113	A-1・2区 出土土器 1	写真図版150	H区 出土土器14
写真図版74	H区 造構4 捶立柱建物跡②	写真図版114	A-1・2区 出土土器 2	写真図版151	H区 出土土器15
写真図版75	H区 造構5 捶立柱建物跡③	写真図版115	A-3区 出土土器 1	写真図版152	H区 出土土器16
写真図版76	H区 造構6 捶立柱建物跡④	写真図版116	A-3区 出土土器 2	写真図版153	H区 出土金属製品 1
写真図版77	H区 造構7 捶立柱建物跡⑤	写真図版117	A-3区 出土土器 3	写真図版154	H区 出土金属製品 2
写真図版78	H区 造構8 捶立柱建物跡⑥	写真図版118	A-3区 出土土器 4	写真図版155	H区 出土金属製品 3・石製品
写真図版79	H区 造構9 燃土坑・土坑①	写真図版119	A-3区 出土土器 5・金属製品 1	写真図版156	H区 出土木製品 1
写真図版80	H区 造構10 土坑②	写真図版120	A-3区 出土金属製品 2他	写真図版157	H区 出土木製品 2
写真図版81	H区 造構11 井戸①	写真図版121	A-1・2区 暗渠出土スラッグ	写真図版158	H区 出土金属製品 4・木製品 3
写真図版82	H区 造構12 井戸②	写真図版122	A区 出土石製品 1(打製石器)		(井戸)SEO1出土隠他
写真図版83	H区 造構13 井戸③	写真図版123	A区 出土石製品 2(打製石器)	写真図版159	H区 出土木製品 4
写真図版84	H区 造構14 中世墓①	写真図版124	A区 出土石製品 3(磨製石器)	写真図版160	H区 出土木製品 5
写真図版85	H区 造構15 中世墓②	写真図版125	A区 出土石製品 4(磨製石器)		
写真図版86	H区 造構16 中世墓③	写真図版126	A区 出土木製品		
写真図版87	H区 造構17 中世墓④	写真図版127	B区・D-3区		
写真図版88	H区 造構18 中世墓⑤		出土土器・金属製品・木製品		
写真図版89	H区 造構19 中世墓⑥	写真図版128	E-1区 出土土器・金属製品・		
写真図版90	H区 造構20 中世墓⑦		石製品		
写真図版91	H区 造構21 中世墓⑧	写真図版129	F-1区 出土土器 1		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

広根遺跡は周知の散布地であるが、本報告書及び次年度に刊行を予定しているA～I区は、その大半が新名神高速道路建設（旧称 第二名神高速道路建設）箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う分布調査・確認調査によって存在が明らかとなった。兵庫県土木部建設課より依頼を受け、平成10年度に神戸市北区神戸市JCT（仮称）～川西市の区間にについて兵庫県教育委員会が分布調査を行い、広根地区においても遺物の散布を認め、広根字南下代から字井谷口にかけての猪瀬川に面した北向き斜面にあたる範囲をNo.8地点、観音寺址の麓の南向き斜面に位置する地点をNo.9地点とした。この調査結果を繙緒として更に平成22年度に分布調査を行い、平成23年度以降、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所からの依頼により8度の確認調査を行った。その結果、埋蔵文化財が包蔵されることが明らかとなり、広根遺跡の範囲が拡大することが判明した。この確認調査結果を受け、平成23年度（平成23年3月28日付 関兵工第3015号 平成24年1月25日付 関兵工第1751号）、平成24年度（平成24年5月8日付 関兵工第238号、平成24年8月3日付 関兵工第537号）により本発掘調査を実施した。

また、和田山遺跡については平成22年度の分布調査で発見され、平成23年度の確認調査（遺跡調査番号2011293）を経て、平成24年度（平成24年5月8日付 関兵工第46号）本発掘調査を実施した。

第2節 各調査・整理作業の経過と概要

〔分布調査〕

遺跡調査番号	980063
所在地	神戸市北区・宝塚市・川西市・川辺郡猪名川町
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所 調査第2班 池田正男・吉識雅仁・西口圭介 池田征弘・松野健児・佐々木俊彦・戸田真美子
調査期間	平成10年5月6日～5月13日
調査面積	約1,300,000m ²
概要	対象路線内、施工対象範囲約130万m ² について分布調査を行い、猪名川町猪瀬地区では、埋蔵文化財が包蔵される可能性が高い地点としてNo.11・No.12地点が見つかった。
遺跡調査番号	201055
所在地	川辺郡猪名川町猪瀬から宝塚市切畑
調査主体	兵庫県教育委員会
調査担当者	兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二・山上雅弘
調査期間	平成22年5月20日
調査面積	111,000m ²
概要	工事用道路予定地を中心に調査を実施した。

〔確認調査〕

概要については次章の一覧表にまとめ、主要な土層断面図を掲載した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2010231

所在地 川辺郡猪名川町広根

調査主体 兵庫県教育委員会（以下 各年度の所在地・調査主体は同じ。）

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第1課 西口圭介・柴田紀三光
調査第2課 池田征弘 企画調整課 上田健太郎

調査期間 平成22年12月6日～平成23年3月10日

工事請負 猪名川技研工業(株)

調査面積 1.837m²

概要 広根遺跡A区・H区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2011147

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二・西口圭介・池田征弘

調査期間 平成23年6月16日～平成23年11月10日

調査面積 750m²

工事請負 (株)宮本建設

概要 広根遺跡A区・F区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 20111291

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二・西口圭介・池田征弘

調査期間 平成23年11月10日～平成24年3月9日

調査面積 1.034m²

工事請負 (株)小東組

概要 広根遺跡C・D・G区を中心に調査を実施した。

和田山遺跡(№23地点) 遺跡調査番号 2011293

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 企画調整課 小川弦太 調査第2課 森内秀造

調査期間 平成23年12月2日～平成24年1月10日～12日

調査面積 125m²

概要 14ヵ所のトレンチを設定した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2011319

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 企画調整課 小川弦太

調査期間 平成24年2月15日

調査面積 19m²

概要 広根遺跡D区・H区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2012057

調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課 多賀茂治

調査期間 平成24年5月18日

調査面積 34m²

概要 広根遺跡D区・H区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2012075

調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課 多賀茂治

調査期間 平成24年 6月 8日

調査面積 72m²

概 要 広根遺跡A区・D区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2012083

調査担当者 兵庫県立考古博物館 埋蔵文化財調査部 調査第2課 渡辺 畏・西口圭介・中川 渉

調査期間 平成24年 9月25日～10月16日

調査面積 210m²

工事請負 グリーン興業(株)

概 要 広根遺跡E区を中心に調査を実施した。

広根遺跡 遺跡調査番号 2012121

調査担当者 公益財團法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査第2課 西口圭介・中川 渉・門田諭佳

調査期間 平成24年11月27日・28日、12月17日・18日

調査面積 48m²

工事請負 (株)宮本建設

概 要 広根遺跡B区・F区を中心に調査を実施した。

〔本発掘調査〕

確認調査の結果を受け、広根遺跡A～H区と和田山遺跡の本発掘調査を実施した。詳細は次章の一覧表にまとめた。広根遺跡では所在地から調査主体についてはすべての調査について下記の通りである。

所在地 川辺郡猪名川町広根

事業者名 西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所

事業名 新名神高速道路箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事

調査主体 兵庫県教育委員会

広根遺跡 遺跡調査番号 2011146

実施機関 兵庫県立考古博物館

調査担当者 同 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二・西口圭介・池田征弘

調査期間 平成23年 6月16日～平成23年11月10日

調査面積 6.687m²

工事請負 (株)宮本建設

広根遺跡 遺跡調査番号 2011290

実施機関 兵庫県立考古博物館

調査担当者 同 埋蔵文化財調査部 調査第2課 別府洋二・西口圭介・池田征弘

調査期間 平成23年11月1日～平成24年 3月17日

調査面積 5.624m²

工事請負 (株)はまつ組

広根遺跡 遺跡調査番号 2012082

実施機関 兵庫県立考古博物館

調査担当者 同 埋蔵文化財調査部 調査第2課 渡辺 昇・西口圭介・中川 渉

調査期間 平成24年7月23日～10月19日

調査面積 4,046m²

工事請負 グリーン興業(株)

広根遺跡 遺跡調査番号 2012120

実施機関 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査担当者 同 調査第2課 西口圭介・中川 渉・門田論佳・菅澤敏弘

調査期間 平成24年10月4日～平成25年3月25日

調査面積 11,410m²

工事請負 (株)宮本建設

広根遺跡 遺跡調査番号 2013024

実施機関 公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部

調査担当者 同 調査第2課 渡辺 昇・西口圭介・門田論佳

調査期間 平成25年5月16日～平成25年8月19日

調査面積 2,119m²

工事請負 グリーン興業(株)

和田山遺跡 遺跡調査番号 2012009

所在地 川辺郡猪名川町上野

調査主体 兵庫県教育委員会

調査担当者 兵庫県立考古博物館 総務部 埋蔵文化財課 多賀茂治

調査期間 平成24年4月16日～4月19日

調査面積 94m²

〔整理作業〕

出土遺物の整理については、平成23年度から平成25年度に現地において遺物洗浄を実施し、その他は平成26年度～平成28年度に接合補強から報告書刊行までを実施した。

・担当職員 平成26年度・平成27年度

調査担当者 西口圭介・別府洋二

整理保存課 菱田淳子・長濱誠司・岡本一秀

・担当職員 平成28年度

調査担当者 西口圭介・別府洋二

整理保存課 菱田淳子・池田征弘・岡本一秀

・担当嘱託員 日々雇用職員（平成26年度・平成27年度・平成28年度） 萩野舞衣・島村順子・

嶺岡美見・上田沙耶香・小野潤子・平宮可奈子・藤池かづさ・上西淳子・沼田眞奈美・石田典子・

山口陽太・八木和子・高瀬敬子・佐々木誓子・柏原美音・宮田麻子・寺西梨紗・栗山美奈・池田悦子・

古谷章子・坂東知奈・河合たみ・森本貴子・今村直子・藤尾裕子・吉村あけみ・前谷幸次・門田論佳・

佐伯純子・桂 昭子・梶原奈津子・佐々木愛・大前篤子・大田泉穂・東郷加奈子（順不同）

第2章 位置と環境

地理的環境

兵庫県川辺郡猪名川町は、東は大阪府豊能郡、南は川西市、西は宝塚市と三田市に接し、北は篠山市に隣接する。町域は東西8km・南北18km、周囲71km、面積90.33km²、最高所標高753m・最低所標高66mである。広根地区は猪名川の支流野尻川の下流域にあたり、東西2km・南北0.5kmを測る盆地である。

歴史的環境

広根が登場する文献記録は古く、「新撰姓氏録」左京皇別上42氏のうちに広根朝臣の名が見られ、「続日本紀」延暦6年2月5日条には、光仁天皇の皇子諸勝に広根朝臣の姓を賜うとの記事がある。これを地名起源とする説がある。中世には広根は、多田庄の内にある。源満仲が多田に武士団の本拠を置き、天禄元年（970）に多田庄を開創したが、満仲の曾孫 源頼綱の頃には摂関家に寄進され、以後、長く摂関家領、後に近衛家領となった。仁平三年（1153）には藤原頼長と関連した記述があり、その頃には摂関家領であったことが分かる。多田院文書「応安元年金堂供養棟別銭注文」（1367）には『一 広根村 百十二ヶ本所マテ』とあり、多田院から棟別銭が課されている。永和元年（1374）にも広根村 百廿五家が多田院の法花堂などの造営に対し棟別銭を行っている。室町時代、嘉吉元年（1441）には、多田院御家人の筆頭格 塩川氏の一族 源頼宗が田畠を寄進している（図版39）。塩川氏は守護細川氏の被官人として広根地区を含む多田庄支配の実権を握ったものと考えられる。また、文明7年（1455）には本願寺蓮如が広根地区の最徳寺に逗留したと伝わる（教行寺縁起）。近世に入り広根村は幕府天領として摂津一国御改帳・正保郷帳などに記載があり、江戸時代を通して幕府領として推移したと考えられる。現代に入り広根遺跡の地形環境は大きく変化している。1970年代に入り、日生ニュータウンを皮切りに丘陵上の開発が始まり、広根地区的南側についても丘陵上部が完全に削平されてしまった。

遺跡の位置と周辺の遺跡

今回報告した広根遺跡・和田山遺跡はともに、新名神高速道路建設に伴う遺跡である。各遺跡の存在する地形は第6章 広根遺跡の地形環境に詳しい。

和田山遺跡は広根地区的東の端にある六石山尾根上にある。六石山より東は川西市域に入り、近隣の注目すべき遺跡としては、石道才谷・堂ノ後遺跡がある。平安時代前期を中心とした官衙関連遺跡の可能性が高く、古代の牧の可能性がある。

広根遺跡は広根盆地全域が含まれる広範囲の遺跡であるが、今回の調査は盆地の主に南縁辺（北向き斜面）部分を東西方向に長く横断して行った。遺跡の西端は中世集落遺跡の広根遺跡I区と、多田庄三十三か所観音霊場巡り第6番札所 観音堂（観音寺跡）である。西側の猪瀧地区には猪瀧遺跡がある。広根の盆地中央部は集落遺跡ではなく、田畠を中心とした生産領域の可能性が高いことが判明した。今回の調査では、繩文時代・弥生時代前期・奈良時代～平安時代中頃の遺構・遺物が見つかっている。繩文時代・弥生時代前期の遺構・遺物は猪名川町域では初めての発見である。また、A-3区では古墳時代の須恵器器台が出土している。また、開発によって消滅した遺跡として、奥井谷古墓がある。この遺跡からは海獣葡萄鏡、10世紀代の須恵器碗、加えて古墳時代の須恵器杯蓋が出土している。猪名川町では未だ古墳の発見はなく、奥井谷古墓や広根遺跡A-3区の例から現代の開発行為によって古墳が消滅したことが推測される。



第1図 遺跡の位置

第3章 広根遺跡の調査成果

第1節 確認調査と本発掘調査の概要

確認調査を平成21年度より8次の調査を行った。概要については表1にまとめ、主要な土層断面図を掲載した。またトレンチNo.は新たに振りなおした。

確認調査によって大きくA～I区の本発掘調査範囲が設定された。平成23年度から平成25年度にかけて本発掘調査を実施した。

本発掘調査の概要については表2にまとめ、第2節より各本発掘調査区の概要・遺構について述べてゆく。

確認調査・本発掘調査の期間・面積等の詳細は表1・2にまとめ、所属・担当者名は一部削除した。

表1 確認調査概要一覧

新トレンチ名	調査番号	調査期間	地区名	トレンチNo.	幅(a)×全長(e)	遺構	遺物	時期	立地と備考
1	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 1	2.0×50.0	柱穴・焼土坑	須恵器・瓦器・青磁・焼土	13世紀	遺構面あり・畠状地
2	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 2	2.0×24.0	柱穴・焼土	サヌカイト		遺構面あり・畠状地
3	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 3	2.0×25.0				遺構面あり・畠状地
4	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 4	2.0×50.0				畠状地縁面
5	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 5	2.0×62.0	柱穴	須恵器・唐	古代	遺構面あり・畠状地
6	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 6	2.0×60.0	焼土坑	瓦器・陶器	中世後期か	遺構面あり・畠状地
7	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 7	2.0×73.0		瓦器		畠状地縁面
8	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 8	2.0×29.0		瓦器・青磁碗		畠状地縁面
9	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 9	2.0×25.0		瓦器		畠状地縁面
10	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 10	2.6×30.0	中世水田・稻跡	瓦器・板材	中世前期	水田・土壤
11	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 11	2.6×33.0	中世水田・稻跡	瓦器・箸・板材	中世前期	水田・土壤
12	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 12	2.6×30.0	柱穴群	須恵器・瓦器・土鍋	8世紀～13世紀	遺構面あり・畠状地
13	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 13	2.0×15.0		サヌカイト(石器)		畠状地縁面
14	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 14	2.6×5.0				畠状地縁面
15	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 15	2.5×5.0				畠状地縁面
16	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 16	2.5×10.0		天目梅片	中世後期か	畠状地縁面
17	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 17	4.0×50.0		土師器小皿	中世～近世	氾濫原
18	201029I	2010/206～2011/0310	A区	AT 18	2.6×30.0			近世以降か	氾濫原
19	2011147	2011/0616～2011/1110	A区	AT 19	2.0×10.0				畠状地(斜面)
20	2011147	2011/0616～2011/1110	A区	AT 20	2.0×10.0				畠状地上・削平
21	2011147	2011/0616～2011/1110	A区	AT 21	2.0×5.0	柱穴	須恵器・土器	10世紀か	畠状地上
22	2011147	2011/0616～2011/1110	A区	AT 22	2.0×5.0	柱穴・溝			畠状地上
23	2011147	2011/0616～2011/1110	A区	AT 23	2.0×5.0				畠状地上・段丘崖
24	2012075	2012/0608	A区	4T	2.0×14.0				旧黄土下に地山
25	欠番								
26	201212	2012/1127～2012/1118	B区	1T	1.0×5.0				旧河道
27	201212	2012/1127～2012/1118	B区	2T	1.0×10.0				旧河道
28	201212	2012/1127～2012/1118	B区	3T	1.0×13.0	柱穴	瓦器	中世前期	畠状地
29	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	17T	2.0×15.0		土師器		畠状地
30	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	18T	2.0×10.0				谷壁
31	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	19T	2.0×10.0		土師器・瓦器		畠状地
32	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	20T	2.0×20.0	柱穴		中世か	畠状地
33	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	21T	2.0×25.0	柱穴		中世か	畠状地
34	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	22T	2.0×10.0				畠状地
35	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	23T	2.0×15.0				畠状地縁
36	2011129I	2011/1110～2012/0309	C区	24T	2.0×25.0		瓦器		畠状地縁

37	2011291	20111110~20120309	D区	25T	2.0×10.0	縄文土器か		層状地
38	2011291	20111110~20120309	D区	26T	2.0×10.0			層状地・壁
39	2011291	20111110~20120309	D区	27T	2.0×20.0	青磁		層状地壁
40	2011291	20111110~20120309	D区	28T	2.0×35.0	柱穴か		層状地・谷部
41	2011291	20111110~20120309	D区	29T	2.0×20.0	柱穴か	土師器皿	層状地
42	2011291	20111110~20120309	D区	30T	2.0×20.0	柱穴・水田	土師器 磁器	中世か
43	2011291	20111110~20120309	D区	31T	2.0×5.0	柱穴		中世前期か
44	2011291	20111110~20120309	D区	32T	2.0×5.0		瓦器	層状地
45	2011291	20111110~20120309	D区	33T	2.0×10.0			層状地壁
46	2011291	20111110~20120309	D区	34T	2.0×20.0	柱穴・埴土	サヌカイト瓦器 土師器	平安時代か
47	2011291	20111110~20120309	D区	35T	2.0×20.0	柱穴	加工板片	中世か
48	2011291	20111110~20120309	D区	36T	2.0×12.0		瓦器板片 土師器縄	層状地大半は削平
49	2012063	20120925~20121016	E区	4T	2.0×10.0	水田土壤		近世以降
50	2012063	20120925~20121016	E区	5T	2.0×10.0	水田土壤		近世以降
51	2012063	20120925~20121016	E区	6T	2.0×10.0	水田土壤		近世以降
52	2012063	20120925~20121016	E区	7T	2.0×10.0	水田土壤		近世以降
53	2012063	20120925~20121016	E区	8T	2.0×10.0	溝状落ち込み		中世後期
54	2012063	20120925~20121016	E区	9T	2.0×10.0	溝状落ち込み		中世後期
55	2012063	20120925~20121016	E区	10T	2.0×10.0	水田土壤		近世以降
56	2012063	20120925~20121016	E区	11T	2.0×10.0			盛り土造成
57	2011147	20110616~20111110	F区	F 1T	2.0×50.0		土師器	中世か
58	2011147	20110616~20111110	F区	F 2T	2.0×45.0	中世水田	須恵器・瓦器・土師器 青磁	層状地裏面 削平 包含層あり 層状地削平
59	2011147	20110616~20111110	F区	F 3T	2.0×15.0	柱穴・中世水田	瓦器	中世前期
60	2011147	20110616~20111110	F区	F 4T	2.0×20.0			層状地裏面 削平
61	2011147	20110616~20111110	F区	F 5T	2.0×15.0	柱穴・棗土坑	瓦器・須恵器	中世前期
62	2011147	20110616~20111110	F区	F 6T	2.0×5.0	柱穴	土師器・須恵器・瓦器	古代
63	2011147	20110616~20111110	F区	F 7T	2.0×40.0	溝路・柱穴・埴土	瓦器・伊万里	中世・近世 層状地裏面・谷部 大半は削平
64	2011147	20110616~20111110	F区	F 8T	2.0×5.0			谷部・溝土
65	2011147	20110616~20111110	F区	F 9T	2.0×15.0	遺物包含層	瓦器	中世前期
66	2011147	20110616~20111110	F区	F 10T	2.0×30.0	柱穴	瓦器・土師器	層状地裏面あり・層状地
67	2011147	20110616~20111110	F区	F 11T	2.0×25.0	柱穴	須恵器	中世前期
68	2011147	20110616~20111110	F区	F 12T	2.0×20.0	墓か	土師器	層状地裏面・谷部
69	2011147	20110616~20111110	F区	F 15T	2.0×15.0			層状地上 削平
70	2011147	20110616~20111110	F区	F 16T	2.0×15.0	溝・中世水田土壤	瓦器	層状地・谷部
71	2011147	20110616~20111110	F区	F 17T	2.0×5.0	柱穴	土師器	古代～中世 層状地上
72	2012057	20120518	F区	1T	1.0×3.0			
73	2012057	20120518	F区	2T	2.0×7.0			
74	2012057	20120518	F区	4T	2.0×2.0			
75	2012057	20120518	F区	5T	2.0×2.0			
76	2012057	20120608	F区	1T	2.0×14.0			地山が改変
77	2012057	20120608	F区	2T	2.0×2.0			地山が改変
78	2012057	20120608	F区	3T	2.0×6.0			地山が改変
79	2012121	20121217~20121218	F区	T 4	1.0×10.0			地山
80	2012121	20121217~20121218	F区	T 5	1.0×10.0			砂礫層
81	2011291	20111110~20120309	G区	1T	2.0×10.0	中世水田	土師器	層状地壁・谷
82	2011291	20111110~20120309	G区	2T	2.0×10.0			層状地
83	2011291	20111110~20120309	G区	3T	2.0×10.0		瓦器 土師器縄 丹波 黒色土器	層状地
84	2011291	20111110~20120309	G区	4T	2.0×10.0		須恵器杯 瓦器 土師器 縄	層状地壁
85	2011291	20111110~20120309	G区	5T	2.0×10.0		土師器縄 瓦器	層状地
86	2011291	20111110~20120309	G区	6T	2.0×10.0		土師器	層状地
87	2011291	20111110~20120309	G区	7T	2.0×10.0		縄文土器か 須恵器	層状地壁
88	2011291	20111110~20120309	G区	8T	2.0×10.0			層状地
89	2011291	20111110~20120309	G区	9T	2.0×10.0			層状地
90	2011291	20111110~20120309	G区	10T	2.0×10.0			溝路・層状地
91	2011291	20111110~20120309	G区	11T	2.0×15.0	ピット・溝	瓦器・丹波焼	層状地あり・層状地
92	2011291	20111110~20120309	G区	12T	2.0×15.0	ピット・燒土坑	瓦器 白磁	層状地あり・層状地
93	2011291	20111110~20120309	G区	13T	2.0×20.0	溝路	須恵器 土師器 瓦器	中世前期
94	2011291	20111110~20120309	G区	14T	2.0×15.0			層状地

95	201129I	20111110～20120309	G区	15T	2.0×15.0				扇状地
96	201129I	20111110～20120309	G区	16T	2.0×15.0	土器			扇状地
97	2011319	20120215	G区	T 1	2.0×3.0				湿地状
98	2011319	20120215	G区	T 2	2.0×3.0				盛り土下から湧水
99	2011319	20120215	G区	T 3	2.0×2.0				河川堆積
100	2011319	20120215	G区	T 4	1.0×3.0				盛り土
101	201029I	20101206～20110310	H区	HT 1	2.0×20.0	ビット			扇状地上
102	201029I	20101206～20110310	H区	HT 2	2.0×20.0	柱穴群・小土坑	瓦器	中世前期	扇状地上
103	201029I	20101206～20110310	H区	HT 3	2.0×10.0	土坑・溝	瓦器	中世前期	扇状地上
104	201029I	20101206～20110310	H区	HT 4	2.0×25.0	柱穴・溝	瓦器	中世前期	扇状地・旧河川上
105	201029I	20101206～20110310	H区	HT 5	2.0×20.0	柱穴・溝・焼土坑	瓦器	中世前期	扇状地上
106	201029I	20101206～20110310	H区	HT 6	2.0×20.0	清水田跡群・方形溝・立ち込み	瓦器	中世前期	旧河川
107	201029I	20101206～20110310	H区	HT 7	2.0×5.0	水田土壤	瓦器	近世	
108	201029I	20101206～20110310	H区	HT 8	2.0×10.0	水田・石組	瓦器	近世	
109	201029I	20101206～20110310	H区	HT 9	2.0×4.0	ビット・溝	瓦器	中世前期	扇状地上
110	201029I	20101206～20110310	H区	HT10	2.0×4.0	柱穴・包含層	瓦器・青磁	中世前期	扇状地上
111	201029I	20101206～20110310	H区	HT11	2.0×25.5	柱穴	瓦器	中世前期	扇状地上
112	201029I	20101206～20110310	H区	HT12	2.0×16.0	柱穴・土坑・焼土坑	瓦器	中世前期	扇状地上
113	201029I	20101206～20110310	H区	HT13	2.0×14.0	溝・水田跡群	瓦器・天目桙	中世	旧河川
114	2011147	2010616～20111110	H区	13T	2.0×5.0	焼土坑	瓦器	中世前期	扇状地
115	2011147	2010616～20111110	H区	14T	2.0×30.0	柱穴・側溝	瓦器・土器	中世前期	扇状地
116	2011147	2010616～20111110	H区	補足1	1.2×4.0				削平
117	2011147	2010616～20111110	H区	補足2	1.2×4.0				削平
118	2012057	20120518	H区	3T	2.0×6.0				
119	2012063	20120925～20121016	H区	1T	2.0×10.0				地山
120	2012063	20120925～20121016	H区	2T	2.0×10.0				地山
121	2012063	20120925～20121016	H区	3T	1.0×5.0				地山
122	2012063	20120925～20121016	H区	12T	1.0×5.0				地山

表2 本発掘調査概要一覧

道路 調査番号	道路名	区名	小区	主たる 調査担当者	調査面積	各地区 面積	遺構	遺物	時期	備考
201146	広報	A区	A-1	油田・別府・西口	7,249m ²	3,902m ²	集石土坑・焼土坑	縄文・土器・すり石	縄文・中世	旧AI
201146			A-2	油田・別府・西口		2,685m ²	石敷道構・ビット	須恵器・青磁・瓦器	古代・中世	旧II
201146		A3-1・2	油田・別府・西口	502m ²		古代～中世集落	須恵器・黒色土器・灰陶・鉢輪・木器	古代・中世	旧AIII-1・2	
2012062		A-3・3	渡辺・中川	100m ²		古代・近代集落	須恵器・灰土器	古代・近代		
201146		A-4	西口	100m ²		焼土坑	瓦器片	中近世	旧AN	
2012120		B区	B-1	渡辺・西口	355m ²	355m ²	酒藏・壺	近世陶磁・瓦器	近世	
2012082		C区	C-1	渡辺・中川・西口	240m ²	240m ²	島・土坑	丹波燒	中近世	
2012082		D区	D-1	西口	3,244m ²	701m ²	ビット・旧河渠	須恵器	古代・中世	
2012082		D-2	西口	317m ²		ビット	瓦器	中世		
2012120		D-3	西口	2,226m ²		ビット・井戸・溝	大形土製品	中近世		
2012120	G区	E区	E-1	西口	661m ²	661m ²	中世島造構	濁石・天目桙	中世	
2012120		F区	F-1	西口・中川・門田	3,038m ²	1,234m ²	柱穴・溝・古代土坑・仰生土坑	仰生土器	縄文・弥生前期・古代・中世	
2012120		F-2	西口・中川・門田	1,804m ²		柱穴・集石土坑	近世陶磁・瓦器	中世		
2012120		G-1	渡辺	1,324m ²	629m ²	629m ²	屋敷地・茆池	瓦器・丹波・瀬戸・埴輪・四耳壺・黑色土器・木器	縄文・古代	縄文・古代
2012120		G-2	渡辺			695m ²	溝	瓦器	中世前期	
2011290		H区	H-1	別府・油田・西口	7,325m ²	5,624m ²	屋敷地・水田・墓地・縄文住居	瓦器・丹波・瀬戸・埴輪・四耳壺・黑色土器・木器	縄文・古代	縄文・古代
2013024		H-2	西口・門田	1,005m ²		屋敷地・墓地	瓦器・丹波・瀬戸・埴輪・四耳壺・黑色土器	近世		
2013024		H-3	西口・門田	696m ²		島	瓦器	中世		
計					23,436m ²					
201209	和田山	多質			94m ²	近世墓地		近世陶磁	近世	火葬骨

第2節 A区の調査

1. A区の概要（図版8 写真図版4）

A地区は平成23年度当初、1区から4区に分かれていたが、調査開始直前に1・2区間の農道部分の調査が可能になり、A-1・2区として合わせて調査をおこなった。

また、3区では調査区内に現在使用している農道・上水管が存在することから、農道を残し、西側をA-3-1区、東側をA-3-2区とし、更に平成24年度調査区をA-3-3区として調査を行った。

2. A-1・2区の調査

概要（図版9）

南北約90m・東西約70m、西側へ大きく張り出した不整形の調査区である。面積約3,902m²を測る。

調査区全域から遺構が検出されたが、調査区全体は近現代に入って削平され、全体に分布は疎である。

調査区の北端部周辺ではサスカイトチップや縄文土器片が採取され、縄文時代中期末の集石土坑が検出されている。縄文時代と特定できる遺構は1基であるが、北西半部ではAMS測定によって縄文時代の可能性のある土坑・焼土が検出されている。

調査区全域からは、瓦器などの鎌倉時代の遺物が出土している。柱穴や集石土坑2基、焼土坑3基などが検出されており、これらは概ね中世前期の遺構である。柱穴の分布は調査区南半を中心に分布するが、概ね疎であり、掘立柱建物を復元するに至らなかった。

この他に、中世後半以降のものと推測される2列に石を敷き並べた敷石遺構や、古墳時代から奈良時代の須恵器壺片が大量に出土する石遺構などが検出された。今回の調査では、断続的ではあるが長期間にわたって人々が生活・利用していたことが判明した。

遺構

集石土坑S K01（図版10 写真図版7） A-1・2区の北部で検出された。野尻川に面する微高地に位置する。形状と礫や土器の出土状況から少なくとも2基の土坑が切り合っているものと考えられるが、調査時には識別できなかった。

北東部分は南北1.45m、東西1.10m以上で、底部は部分的に深い部分があり、最も深い部分で0.40m程度である。東側は耕作地の段差で削平されている。埋土中層付近で縄文土器片が、中層以上で長径50cm以下の礫及び石製品が出土している。

南西部は南北1.30m、東西約1.20mで、南部が一段深くなっている、最も深い部分で0.40m程度である。北東部分の土坑に切られていると思われる。埋土から礫及び石製品が少數出土している。

北東部から中津式直前階の縄文土器1~9、石製品S15~21・25・26が、南西部から石製品S14・22~24が出土している。2基の土坑から出土した石製品を含む礫は総数約160点である。長径50~4cmの礫のなかで、長径15~5cmのものが多い。円礫と角礫のうち角礫のほうがやや多い。半数以上が割れており、明瞭な被熱痕が認められるものは多くないものの、被熱を受けている可能性が高い。出土した土器は縄文時代中期末で、埋土から出土した炭化物の¹⁴C年代は2578calBC~2472calBC(95.4%)である。

方形土坑S X01（図版11・12 写真図版8） A-1・2区の南部で検出された方形堅穴状の遺構である。北辺はSX02に切られている。各辺が、ほぼ正位に向き、平面形は長方形、東西5.90m、南北5.00m、深さは0.10m弱である。床面は平坦で、遺構に伴う柱穴などは確認されなかった。埋土から土師器鍋13、黒

色土器壺14が出土している。出土土器から13世紀以降と考えられるが、遺構の時期は特定したい。

石敷造構SX02（図版11・12 写真図版8・9） A-1・2区の南部で検出された石敷造構である。南辺がSX01を切る。SX01・SX02の周囲は洪水の堆積による砂礫が多く、北辺の石敷範囲は、洪水による砂礫（断面Dの西端以東、SX02より北8m以南）との区別が不明瞭であった。

石敷きの範囲は東西11.50m、南北6.00mで、径20cm以下の礫が敷き詰められている。南辺は長20~30cmの石材を、南面を揃えN83°Eに向けて並べている。石敷きは幅0.60m程度で南北方向に単位が見て取れるが、南辺に対して直交していない。石敷中から土師器皿10・11、黒色土器壺12、須恵器壺15・16が出土している。また、周囲の礫層からも須恵器壺17・壺18が出土している。

SX01を切り、13世紀の土師器皿が出土していることから、13世紀以降と考えられるが、遺構の時期は特定したい。

石敷造構SX04（図版13 写真図版9） A-1・2区の北部で検出された石敷造構である。南北方向の石敷2基とその北端に接続する東西方向の石敷きからなる。長径40cm以下の礫を薄く敷き詰めている。西側の石敷は長さ26.00m、幅1.00~2.00mである。途中の断続部は確認調査時に除去したことによる。東側の石敷は西側の石敷きから東へ2.50~4.00m離れて位置している。長さ24.00m、幅1.50~2.00mである。北側の石敷は東西端とも削平を受けており、残存長9.00m、幅1.50mである。石敷き1・2はほぼ正方位、東西方向の石敷きはN80°EWの向きをとる。遺構の時期は不明である。

焼土1（図版14 写真図版10・11） A-1・2区の北部で検出された焼土塊を多く伴う土坑状の遺構である。南北1.70m×東西1.00mの土坑埋積後、その最上層もしくは上面に焼土塊が集積され、その周囲にも焼土塊が散布している。土坑の底部は場所によって深い部分があり、深さは0.10~0.30mである。埋土には焼土粒が少量含まれている。土坑埋積後の崖地に焼土塊を集積したものと考えられる。

遺構に伴った遺物は出土していない。焼土塊に伴って出土した炭化物の¹⁴C年代は807calBC~789calBC(68.2%)である。

土坑SK02（図版15 写真図版12） A-1・2区の北部で検出された焼土塊を多く伴う土坑状の遺構である。SX04石敷き2の下にある。確認トレンチによって損壊してしまったが、東西長3.50m・南北幅2.28m・深さ0.35mを測る隅丸台形状の土坑である。断面形状は船底形を呈する。褐色細砂混じりシルトが堆積しており、下層には炭化物と共に繩文土器と考えられる摩滅した土器片を含んでいる。また、土坑底からは焼土塊を検出している。

土坑SX03（図版15 写真図版12） A-1・2区の北部で検出された焼土を伴う土坑状の遺構である。確認トレンチによって一部損壊してしまったが、全長2.96m・幅1.80m以上・深さ0.15mを測る不整形の落ち込みである。断面形状は浅い皿状、埋土は暗黄灰もしくは黄褐色のシルト質細砂～極細砂、炭を含んでいる。土坑内には平石及びピット6個があり、ピット内には焼土が存在する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

焼土2（図版16 写真図版13） 標高85.50m前後、焼土3の東側に位置する。長軸約0.65m・短軸約0.30m・深さ0.05mを測る、不整な焼土である。断面形状は浅いU字形、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

焼土3（図版16 写真図版13） 標高85.50m前後、焼土2の西側・焼土4の北側に位置する。長軸約0.40m・短軸約0.25m・深さ0.02mを測る、不整な矩形の焼土である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

焼土4（図版16 写真図版13） 標高85.70m前後、SX04の東側、焼土3の南側に位置する。径約0.40m・深さ0.25mを測る、不整な円形の土坑である。断面形状は深いV字形、底面は凹凸が激しい。埋土は上下に分かれ、上層土坑中央には焼土塊をもつ。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK04（図版16 写真図版13） 標高85.70m前後、SK01の南側に位置する。長辺約0.65m・短辺約0.45m・深さ約0.20mを測るおむすび形の土坑である。断面形状は深いV字形、黄褐色シルト質極細砂～極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

集石土坑1（図版16 写真図版13） 標高85.70m前後、調査区西端に位置する。長軸約0.70m・短辺約0.40m・深さ約0.25mを測るまゆ形の集石土坑である。断面形状は深いU字形、5cm～20cmの亜角礫が密集する。瓦器挽片が出土している。中世前期と考えられる。性格は不明である。

集石土坑2（図版16 写真図版13） 標高85.80m前後、調査区西端に位置する。長軸約0.60m・短軸約0.40m・深さ約0.20mを測る米粒形の集石土坑である。断面形状は丸みを帯びた深い箱形、5cm～15cmの亜角礫が密集する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明であるが、集石土坑1と同じく中世前期と考えられる。

3. A-3区の調査

概要（図版17）

A-3区は東西約140m・南北約60m、約3,247m²の面積を測る。上水道管の入った農道によってA-3-1区とA-3-2区は分かれており、A-3-1区の上部を平成24年度に拡張し、A-3-3区とした。A-1・2区同様、調査区全域から瓦器などの鎌倉時代の遺物が出土する。

A-3-1区の北半部（扇状地）では掘立柱建物跡SB06と土坑SK01が見つかっており、これらは中世前期と考えられる。

地形的に高い北西部周辺のA-3-1区（尾根斜面）とA-3-3区（尾根斜面）からは、平安時代中期頃の掘立柱建物跡5棟、鐵冶遺構・土坑が検出された。

A-3-1区の掘立柱建物SB03の内部では黒色土器を中心とする土器集積SX01が検出され、縄釉陶器片や鐵釦（雁股釦）も出土している。

A-3-3区では、東向きの斜面に遺物包含層が残存しており、柱穴・焼土・土坑・溝などの遺構を検出した。また山裾部においても、削平をこうむってはいたが、柱穴が検出できた。

しかし斜面上部の平坦面は、大きく削平されていたため、遺構はほとんど残っていないかった。検出した柱穴の並びから、2棟の掘立柱建物（SB01・02）が復元できた。SB01は斜面を段状にカットした平坦面に建てられており、平坦面の山側には溝を造らしている。西端の南北2周分を検出したが、東側は削平のため残っていない。柱穴からは平安時代中期の土師器碗などが出土した。

焼土は、SB02の南側（焼土A）と、北側（焼土B）の2箇所で検出した。焼土Aは1m×1.5m程度の広がりで、地面が被熱のために赤変している。下方に連なる土坑群には焼土や炭が含まれており、一連の作業場的なものであったとみられる。土坑群からは、平安時代中期の土器片や金属製品などが出土している。焼土Bは径0.80m程度の広がりで、地面が被熱のために赤変している。SB02の柱列と重複するが、前後関係は不明である。この他、SB02内では2か所、焼土が検出されている。

土坑は、古墳時代と平安時代のものがある。不整形な土坑SK108からは、須恵器甕の破片が多数出土

している。付近からは6世紀代の須恵器器台の破片が出土しており、古墳時代の土坑の可能性がある。

また、A-3-1区の南半部からA-3-2区の南半は谷地形（沖積地）であり、そこからは水田造構が検出された。水田は畦畔によって細かく区切られており2時期が重複している。また、水溜状の石組造構も検出された。鎌倉時代に各地で開発された谷地田（谷戸田）にあたる造構である。水田土壤からは木製の鼻輪などが出土した。

造構

A-3-1区・A-3-2区・A-3-3区の造構について述べる。A-3-2区の旧SK01はSK06、A-3-3区の土坑の造構No.については冒頭に1をつけ、SK101から番号を割り振り記述する。

A区の掘立柱建物跡と伴う施設は全てA-3区西端の尾根斜面から扇状地にかけて存在している。6棟の掘立柱建物跡と横列1か所、区画溝1本を検出した。

掘立柱建物跡SB01・溝SD15（図版18・19 写真図版15） A-3-3区南半において検出した。SB02の北側、標高87.00m～86.00mに位置する。斜面を段状にカットした平坦面に建てられ、平坦面の山側には溝SD15を巡らしている。西端の南北2間分を検出したが、東側は削平のため残っていない。軸方位をほぼ正方位にとるSB02と同様の東西棟の建物跡と考えられる。南北2間（4.60m）を測る。建物の柱間は、2.30mである。東西方向の柱穴は検出出来なかった。斜面が削平を受けたものと考えられる。柱穴は円形を基本とし掘方径50cm～70cm、深さは約50cmである。柱痕は径20cm～25cm、何れも径10cm～20cmの亜角礫が詰め込まれていた。柱穴からは図示できる遺物は出土していないが、平安時代中期の土師器碗片などが出土した。周辺の造構の時期と柱穴の遺物から平安時代中期と考えられる。

柱列P67・P68の背後には建物を区画したと考えられるSD15が走る。全長5.00m・幅0.40m～0.90m・深さ山側から0.40m、断面形状は浅い皿形を呈する。軸方位をほぼ正方位にとるが、北端は若干斜面谷側（東側）に垂下した形状を見せる。溝の埋土は2層に分かれる。溝の走る部分の等高線を検討したところ、SD15を含め、南北方向約10.00mに亘って方形の窪みが見られる。斜面を掘削し、建物が建てられる平場を造り出していた可能性がある。

掘立柱建物跡SB02・横列SA01（図版18・19 写真図版16） A-3-3区南半において検出した。SB01の北側、標高87.50m～87.00mに位置する東西棟の建物跡である。桁行方位をN10°Wにとる側柱建物跡である。桁行東西2間（4.40m）以上・梁行南北2間（4.40m）、床面積19.00m²以上の規模である。建物の柱間は、2.20m前後が基本である。東梁行き側の柱穴は造成・削平によって建物規模は不明である。柱穴は円形を基本とし掘方径50cm、深さは約40cmである。柱痕は径20cmを測る。

SB02の北側には3m距離を置き、並行してSA01が存在する。全長4.80m以上、軸方位をN84°Wにとる。柱穴の径は約40cm・深さは約40cmである。柱痕は径20cmを測る。SB02は土坑SK05と切り合い新しい。また、建物範囲内にはSK107・SK108、焼土2か所が存在するが、関係は不明である。また、SA01の線上には焼土Bが位置するが、関係は不明である。柱穴からは、図示していないが平安時代中期の土器片が出土している。

掘立柱建物跡SB03（図版20 写真図版17） A-3-1区西端において検出した。SB04の南側にあり、一部重複するが、柱穴の切り合いはない。標高85.90m付近に位置する。軸方位をN7°Eにとる南北棟の建物跡と考えられる。平面プランは北梁行が聞く台形である。桁行南北6間（12.20m）・梁行東西1間（北側3.00m・南側2.60m）、床面積34.16m²の規模である。建物の柱間は、1.40m・2.20mあるいは2.70m前後が基本である。柱穴は山側の西桁行の柱穴は円形を基本とし掘方径40cm～20cm、深さは約10cm～15

cmである。対して谷側の東桁行の柱穴は梢円形を基本とし掘方長軸50cm以上のものもある。深さは30cmと深い。

柱穴P10・P11・P27からは、土師器杯26・28・27、更にP10からは土鍤31～36が出土している。これらは、建物廃絶時に柱の抜き取り穴に入れられた可能性がある。遺物の時期は平安時代中頃、10世紀代と考えられる。

SB03と重複して土器集積SX01がある。建物内の中央からまとめて検出されており、関連する遺構の可能性が考えられることから引き続き述べておく。

土器集積SX01（図版20、写真図版17） SB03内の中央付近で検出された土器集積である。南北4.00m、東西2.00mの範囲で、長径20cm以下の砾とともに土器などが薄く広がっている。

土師器杯49～67、壺68～74、鍋75、黒色土器皿76・杯77～81、碗82～85、須恵器皿86・87・杯A88～90・杯B91・壺94・95、綠釉陶器碗92・93、羽口96、土鍤97～99、鉄鎌M2、砥石S27・28が出土している。

土師器、黒色土器、須恵器、綠釉陶器とも9世紀後半の時期を示している。SB03柱穴出土の土器よりは若干古い時期を示している。

掘立柱建物跡SB04（図版21 写真図版18） A-3-1区西端において検出した。SB03の北側にあり、一部重複するが、柱穴の切り合いはない。標高86.00m付近に位置する。軸方位をN15°Eにとる南北棟の建物跡と考えられる。桁行南北9間（11.80m）、梁行東西1間（2.90m）、床面積34.22m²の規模である。建物の柱間は、0.60mあるいは0.90m前後が基本であるが、一定ではない。特に平面プランを含め、東桁行きは歪みを伴う。また、東桁行の柱穴は2か所が検出出来なかつた。削平を受けたものと考えられる。柱穴は円形を基本とし掘方径40cm～20cm、深さは約40cm～20cmである。柱穴からは須恵器皿42が出土しており、平安時代中頃と考えられる。

掘立柱建物跡SB05（図版21 写真図版18） A-3-1区西半、扇状地上において検出した。SB06・土坑SK01と重複するが、先後関係は不明である。桁行方位を東西方向N75°Wにとる側柱建物跡である。桁行東西3間（7.20m）、梁行南北2間（4.80m）、床面積34.56m²の規模である。建物の柱間は各2.40mである。南東隅の柱穴を含め2か所の柱穴が検出出来なかつた。削平を受けたと考えられる。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm～15cm、深さは約20cmである。柱穴から図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB06（図版22 写真図版18） A-3-1区西半、扇状地上において検出した。SB05・土坑SK01と重複する。SK01より古く、SB05との先後関係は不明である。桁行方位をN85°Wにとる総柱建物跡である。桁行東西4間（8.50m）、梁行南北4間（8.40m）、床面積71.40m²の規模である。建物の柱間は2.30m前後が基本であるが、東桁間は1.90mである。柱穴の内、中央の柱穴は2か所なく、土間であったと考えられる。また、北側の桁行3間分の柱穴もまた検出されず、これは削平を受けた可能性がある。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm、深さは20cm～30cmである。柱穴からは土師器小皿38が出土しており、平安時代中頃と考えられる。

土坑SK101（図版23 写真図版19） A-3-3区南半において検出した。SB01の南側、標高86.80m前後に位置する。軸方位をN57°Eにとる長軸0.90m・短軸0.50m・深さ0.15mを測る矩形の土坑である。断面形状は浅いU字形を呈し、上層オリーブ褐色土・中層褐色土・下層明黄褐色土が堆積する。土坑の南端より土師器壺44が出土している。時期は平安時代中頃と考えられる。遺構の性格は不明である。

土坑SK103（図版23 写真図版19） A-3-3区中央において検出した。標高87.40mに位置する。軸方位をN82°Wにとる長軸1.40m・短軸1.20m・深さ0.40mを測る梢円形の土坑である。断面形状は箱型を

呈し、最上部から集石を伴う径0.50mの掘り込みがある。中層の3層は旧表土を含んでいる。施釉陶器製灯明皿45が出土しており、旧表土を含み、近世～近代にかけての埋植の可能性が高い。

土坑SK104（図版23 写真図版19） A-3-3区南半において検出した。SB02の南側、標高87.00m前後に位置する。軸方位をN60°Wにとる長軸0.70m・短軸0.65m・深さ0.15mを測る隅丸方形に近い卵形の土坑である。断面形状は皿状を呈し、埋土は上下層に分かれるが、炭・焼土を含むにぶい黄褐色もしくは明黄褐色極細砂～細砂である。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK105（図版23 写真図版19） A-3-3区南半、標高87.10m前後に位置する。SB02のP79と切り合い古い。長辺（底辺）1.70m・短軸（高さ）1.00m・深さ0.15mを測る隅丸三角形の土坑である。断面形状は浅い皿状を呈し、にぶい黄褐色極細砂～細砂が堆積する。鉄製品M1が出土している。遺構の性格は不明である。時期は出土した土師器片から平安時代と考えられる。

土坑SK106（図版23 写真図版20） A-3-3区中央東端、標高86.80mに位置する。SK110と並んで検出した。軸方位をN80°Eにとる長軸1.70m・短軸1.05m・深さ0.08mを測る達磨形の土坑である。断面形状は浅い皿状を呈し、炭を含む褐色極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK107（図版23 写真図版20） A-3-3区中央東端、標高86.80mに位置する。SK110の北側から検出した。軸方位をN8°Eにとる長軸1.22m・短軸0.65m・深さ0.23mを測る不整梢円形の土坑である。断面形状は片葉研状を呈し、底部は円錐を帯びる。中層は地山の客土、下層は暗褐色細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK108（図版23 写真図版16・20） A-3-3区中央東端、標高87.00m～86.80mに位置する。SK107の北側から検出した。東辺は造成によって消失している。軸方位をN8°Eにとる南北長1.65m前後・東西長1.20m以上・深さ0.50mを測る不整形の土坑である。北西隅には集石が目立ち、平面形にも凹凸が目立つ。断面形状もまた、箱形であるが、底部は凹凸が激しい。土層堆積は複雑であるが、概ね上層と下層に多量の炭・焼土を含み、中層には炭・焼土を含んでいない。6世紀代の須恵器台46の他、土師器片や須恵器壺片が多数出土している。遺構の性格は不明である。

土坑SK109（図版23 写真図版16） A-3-3区中央、標高87.25mに位置する。SK105の西側、焼土Aに隣接して検出した。南北方向に軸をもつ不整梢円形の土坑である。軸方位をN3°Eにとる長軸0.90m・短軸0.30m・深さ0.08mを測る。断面形状は浅い皿形である。埋土は、にぶい黄褐色極細砂～細砂に加え炭・土器片を含む。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK110（図版23 写真図版16） A-3-3区中央東端、標高86.80mに位置する。SK106の北側から検出した。SK113と切り合い新しく、SK112と切り合い古い。土坑は中央がくびれた不整梢円形で、軸方位をN78°Wにとる。長軸2.22m・短軸0.80m・深さ0.08mを測る。断面形状は浅い箱型である。にぶい黄褐色極細砂～細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK112（図版23 写真図版16） A-3-3区中央東端、標高86.80mに位置する。SK106の北側、SK113と切り合い新しい。土坑は一部角張った不整梢円形である。長軸0.45m・短軸0.35mを測る。須恵器壺47が出土している。遺構の性格は不明である。

土坑SK113（図版23 写真図版20） A-3-3区中央東端、標高86.90mに位置する。SK110と切り合い古い。軸方位をN36°Eにとる涙滴形の土坑である。長軸0.70m以上・短軸0.45m・深さ0.40mを測る。断面形状は深い箱型である。上層はにぶい黄褐色極細砂～細砂、中層以下は概ね暗褐色のシルト混じり極

細砂～細砂・炭・焼土が堆積する。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。

土坑SK114（図版23 写真図版20） A-3-3区中央東より、標高87.00mに位置する。SD115の西側から検出した。土坑は一部窪んだ楕円形を呈する。軸方位をN90°Eにとる。長軸0.80m・短軸0.60m・深さ0.13mを測る。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明である。埋土は上下層に分かれるが、炭・焼土を含むにぶい黄褐色極細砂～細砂である。

土坑SK04（図版24 写真図版21） A-3-1区中央南より、水田遺構Aの北西隅、標高85.10mに位置する。南北方向に軸をもつ不整梢円形の土坑である。軸方位を正方位にとる長軸1.44m・短軸1.20m前後・深さ0.40mを測る。断面形状は逆台形型で、底部は平坦である。粗砂を含む灰色極細砂～シルト質極細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。遺構の性格は不明であるが、埋土から中世の遺構と考えられる。

土坑SK06（図版24 写真図版21） A-3-2区中央より、水田遺構の北肩、標高84.00mに位置する。南北方向に軸をもつ勾玉形に近い不整梢円形の土坑である。軸方位はN14°Wにとり、長軸1.40m・短軸86.00m前後・深さ0.15mを測る。断面形状は浅い船底形である。礫を含む淡褐灰色極細砂質シルトを埋土とする。土坑の北端には径30cm前後の平石があり、土坑の南半は径80cmの円形に窪む。土器小皿48が出土しており、時期は中世後期、土坑墓の可能性が考えられる。

近代埋桶（図版24 写真図版21） A-3-3区北端、標高87.60mに位置する。径0.80mの掘方に径0.60m・深さ0.44m以上の桶を据える。桶内から寛永通寶M7・M8、おろし金M9、ベル状の金属製品M10、銅製品M11、鉄釘M12が出土しており、図化はしていないが、スプーンM77・78、肥後守M79などM74～M79の製品も出土している。近代の遺構と断定できる。

焼土A（図版24 写真図版21） A-3-3区中央、標高87.30m前後に位置する。SK109に隣接して検出した。長軸1.50m・短軸1.10m・厚み0.06m程度、おむすび形に広がっており、下面の埋層が被熱のために赤変している。特に中央部は良く被熱しているが、ピットが穿たれており、明確ではない。本焼土の下方に連なる土坑群には焼土や炭が含まれており、一連の作業場的なものであったとみられる。

焼土B（図版24 写真図版21） A-3-3区中央北よりにて検出された。標高87.40m前後に位置する。丸みを帯びたおむすび形の土坑である。規模は長軸約0.95m、短軸0.82m、厚み約0.10mを測る。土坑底は丸みをもち、埋土は3層に分かれる。1層は焼土層。2層は明黄褐色極細砂、3層は焼土混じり礫である。1層は西半に偏っており、かまどあるいは炉状の遺構であった可能性も考えられる。SA101と重複しているが、関係は明らかではない。

炉1（図版24 写真図版21） A-3区の西部、SB03の東側で検出された鍛冶炉である。検出面より0.05mの深さで、直径0.20mの被熱酸化部と直径0.13mの被熱還元部が検出された。良好な個体の遺物は出土していない。時期はSB03などと同様の時期と思われる。

炉2（図版24 写真図版21） A-3区の西部、SB03の南側で検出された炉である。東西0.70m、南北約0.60mの平面梢円形で、深さは0.08mである。坑内は酸化被熱した部分があり、床面に炭化物が残っていた。良好な個体の遺物は出土していない。時期は不明である。

水田遺構（図版25 写真図版22）

A-3-1区からA-3-2区の南半からは水田遺構が検出された。水田遺構は、旧谷部・旧河道の凹部が埋没、湿地化し、水田化した、いわゆる谷水田である。A-3-1区の西端からA-3-2区の西半、標高85.50m～84.00mにかけて検出した。水田遺構は2枚存在する。重複関係から上層を水田遺構（畦

畔) A、下層の水田を水田遺構(畦畔)Bとする。水田土壤は旧河道が洪水砂礫によって埋没した上に構築されている。

水田遺構A 水田遺構Bと重複し新しい。旧河道の形状に沿った区画ではなく、現在へと続く水田区画の方向に軸をもつと考えられる。

後世の耕作により水田区画の残りはよくない。水田区画の大半は標高85.20mより下部の比較的傾斜が緩い部分に残っており、辛うじて東西方向に走る幅1.00m前後の中規模の畦畔①・②と南北方向に走る中規模畦畔③・④、それぞれから分岐し水田区画を造る小畦畔を検出した。このうち、畦畔①の両側には溝がとりついている。小畦畔の幅は0.30m内外を測り1辺4.00~5.00mの区画からなる不整形な水田区画を形成していた。

畦畔③と畦畔④の間隔は約25.00mを測り、東西1/4町分と考えられる。また、畦畔①が途切れる西端から畦畔③までの距離についても24.50mを測り、東西1/4町分を検出したと考えられる。

水田遺構B 扇状地の傾斜にしたがって造られた水田区画が検出された。

水田区画の大半は標高85.20mより上部の比較的傾斜が急な部分に残っており、主に、等高線に沿って、幅0.30m前後の中規模な畦畔が検出された。等高線と直交する畦畔の検出は部分的に留まつたが、概ね幅5.00m内外の不整形な水田区画を形成していたと考えられる。

水田土壤の上層からは18世紀代の国産陶器101・17世紀前半代の初期伊万里焼染付碗102が出土している。水田土壤中からは15世紀代の土師器小皿103、11世紀代の土師器小皿104、中世前期の瓦器椀105・106、須恵器瓶底部107、13世紀後半~14世紀前半の白磁口皿108、中世前期の白磁端反碗109が出土した。

この様に上層に中世後期から近世の遺物が含まれており、土壤中には中世前期から中世中期の遺物に加え古代の遺物が含まれることから、水田遺構は中世前期から後期にかけて営まれ、A・B2時期に分かれると考えられ、概ね中世前期(水田遺構B)と中世後期(水田遺構A)と捉えられる。

水溜遺構(図版26 写真図版23) A-3-1区南端において検出された石組みを伴う水溜状遺構である。北端を一部トレーンチ11によって損壊してしまったが、卵形の掘方をもつものと考えられる。土坑は軸方位をN7°Eにとり、規模は長軸2.40m以上・短軸は1.70m、深さ0.28mを測る。中央西よりに長方形の石組みが造られており、最終的には集石によって埋積している。石組み部分は一辺15cm~20cmほどの石材を横積みに2段から3段で積み上げ、内法長辺0.55m・短辺0.25m前後・高さ0.30mを測る「コ」の字形の石組みを造り上げている。軸方位はN20°Wにとる。北側は開放されているが、据え付け痕と考えられる溝状の痕跡が存在しており、北壁が存在した可能性は高い。

石組を除去すると石組の南東部分に長軸1.10m・短軸0.70mのイチジク形の落ち込みが残っており、先行する水溜め遺構が存在した可能性が高い。

時期を特定できる出土遺物はなく、石組内からは杭材と考えられる木製品が出土している。また、水田土壤が一部被覆していることから、中世後期を前後する時期と考えられる。

4. A-4区の調査

概要と遺構(図版27 写真図版24)

一辺10.00mの正方形の調査区を設定した。面積は100m²である。

遺構は確認調査で認められた焼土坑と土坑が各1基検出された。周辺には柱穴も存在するが、それらの性格は不明である。他の地区同様に瓦器などの鎌倉時代の遺物が出土している。

焼土坑SX01（図版27 写真図版24） A-4区中央より検出された。確認調査時に検出されており、トレンチ6の側溝によって南端付近を損壊してしまった。土坑は地山面より掘削された、不整な長方形あるいは長楕円形を呈していたと考えられ、端部はSX02の下部に潜り込み明確ではない。軸方位をN30°Eにとり、長軸は1.80m以上（SX02下層までを考慮に入れた場合、2.60m以上）・短軸1.20m、深さ0.30mを測る。土坑内には長軸1.20m以上、短軸0.55m、深さ0.20m前後の窪みがあり、炭・焼土・石材が検出されている。燃焼炉があったと考えられる。周辺からは中世前期の遺物が出土しているが、具体的な時期・性格は不明である。土坑内の炭化物をAMS測定したところ670AD-775ADの測定値がでている。

土坑SX02（図版27 写真図版24） A-4区中央より検出された。SX01と切り合い新しい。不整な長楕円形を呈していたと考えられる。軸方位をN43°Eにとり、長軸は2.05m・短軸0.70m、中央部の深さ0.33mを測る。土坑内には灰黄褐色中砂混じりシルト質極細砂が堆積し炭化物は含んでいない。図示できる出土遺物がなく時期・性格は不明である。

第3節 B区の調査

1. B区の概要（図版28 写真図版25）

B区は野尻川北岸に所在する地区で、広根遺跡の北東部に位置する。水田部分を対象とした。調査時、B区はB-1区としていたが、B-2区以降の調査区の設定はなく、報告書作成に際し、B区とした。

調査区は長台形を呈し、東西長約41.5m・南北短辺約8.5m・南北長辺約11m、面積約355m²を測る。

調査区のうち、北西部には野尻川旧河道が検出されており、洪水堆積物が厚く存在する。

調査区東端から中央部にかけて造構を確認した。造構は上下2層に分かれ。

下層は鎌倉時代から室町時代の造構である。ピット・溝を検出しているが、掘立柱建物には復元できなかった。炭・焼土を伴っている。

上層の造構はかまど3基と埋植1基・ピット数基である。時代は近世で、酒蔵関係の造構である。北西側の近隣に酒蔵を持つ川辺酒蔵（岡田家）の古い段階の造構と思われる。

かまど1・かまど2（図版28・29 写真図版26・27） 調査区西端より検出された半地下式の2基連基型の大型かまどである。標高86.90mに位置する。燃焼室のかまど1とかまど2は2基で1対になるもので、ともに南側に焚き口があり、長方形の前庭部（掘方）がつく。かまど・前庭部の埋土内には瓦が多く含まれており、廃絶は近代になってからである。

前庭部（掘方）は西辺が調査区外にある。全長5.50m以上・幅2.00m・深さ0.95m、石積みを伴わない素掘りの前庭部（掘方）である。両かまど焚口前は、全長4.00m以上・幅1.10mの規模で叩き面となっている。前庭部からは陶器底部125が出土している。

かまど1は内径1.45mの円形プランで、床面からの高さは約0.70mである。壁は1辺20cm~30cmの石材によって組み上げられており、前面は崩落しているが、奥側は概ね5段分が残存している。また、底部には内法で長さ約1.40m・幅約0.25m・深さ約0.20mの「凹」形に組んだ石匂いの灰落とし（燃焼部）が設けられている。灰落としの向きはN18°Eにとる。焚口に近い部分には平石を置いている。石材は地元の流紋岩を使用している。

かまど2は内径1.50mの円形プランで、床面からの高さは約0.75mである。壁は1辺25cm~40cmの石材によって組み上げられており、焚口付近の石材は一部崩れているが、そのほかは概ね4段分が残存してい

る。また、底部には内法で長さ約1.30m以上・幅約0.30m・深さ約0.20mの「凹」形に組んだ石匁いの灰落とし（燃焼部）が設けられている。灰落としの向きはN25°Eにとる。焚口に近い部分にはかまど1と同じく平石を置いている。現況では、焚口付近の灰落としの石材は一部崩れている。石材は地元の流紋岩を使用している。

かまど3（図版30 写真図版26・27）

かまど1・2の北側、標高87.00mに位置する。かまど3は単独で築かれている。ほぼ完存しており、西側に焚き口を有している。床面の径は1.55mで持ち送り、上面の径は1.30mである。上面には瓦を並べ、その上に幅0.40mの粘土帯を貼っている。また、粘土帯上には石列が検ある。中央床面には長さ1.40m・幅0.30m～0.40mの「凹」形に組んだ石匁いの灰落とし（燃焼部）が設けられている。灰落としの向きはN64°Wにとる。また、焚口に近い部分には平石をおいている。壁は1辺25cm～40cmの石材によって4段～5段で組み上げられており、下部には大型の石材が使用されている。石材は地元の流紋岩を使用している。西側に幅0.50m・高さ0.50mの焚き口を設けている。

前部は広くなく、僅かに広がる程度である。粘土帯上の石列については、かまど3に伴うと考えられるが、性格は不明である。

埋 桶（図版28 写真図版25）

B区西端、標高86.90mに位置する。径1.40mの掘方に径1.05m・底径0.90m・深さ0.55m以上の大型の桶を据える。軒平瓦124のほか陶器が出土しており、近世末から近代の遺構と思われる。

溝SD01（図版28 写真図版25）埋桶の東側に位置する。幅0.40m前後の蛇行した溝である。地山土を含んだ黒褐色極細砂が埋土である。時期・性格は不明である。

柱穴群（図版28 写真図版25）調査区中央から検出した。18個の柱穴を検出した。確認調査時に一部を検出しており、中世前期の土器片が出土している。概ね径20cmを測る柱穴群である。周辺の削平が激しく、柱穴も積極的には並ばないことから建物跡とせず、柱穴群としておくが、少なくとも南北2間（3.20m）、東西1間（1.80m）の建物跡が存在した可能性が考えられる。

第4節 C区の調査

概 要（図版31 写真図版28）

もともと野尻川に近い低位段丘に位置する長方形の調査区である。東西長約30m・南北幅約8.5m、面積約240m²を測る。調査時、C区はC-1区としていたが、C-2区以降の調査区の設定はなく、報告書作成に際し、C区とした。

中近世の水田土壤を除去した面で、ピット・集石土坑及び中世後期と考えられる畦畔の痕跡などを検出した。遺構面の標高は87.75m～87.20mを測り、東端と西端は窪みを見せており、基本的には緩やかに東側へと傾斜している。

遺 構

土坑SK01（図版31 写真図版28）調査区西半、標高87.70m前後、波板状凹凸面の西側延長上に位置する。長軸2.15m、短軸0.75m、深さ0.15m前後、ほぼ東西方向に軸をもつ長楕円形の土坑である。断面形状は浅いU字形であり、灰黄色極細砂が堆積する。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明であるが、波板状凹凸面の延長上にあることから関連施設の可能性がある。

土坑SK02（図版31 写真図版28） 調査区北西隅、標高87.80m前後、底辺1.60m、高さ1.05m、深さ0.10m前後、軸方位をN70°Eを測る不整三角形の土坑である。断面形状は浅い皿形であり、灰黄色極細砂～細砂が堆積する。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

波板状凹凸面（図版31 写真図版28） 調査区中央北より、標高87.70m前後に位置する卵形の土坑がほぼ東西方向に並列する土坑群である。延長上にSK01がある。形態から畦畔や道路造構の基底部に見られる波板状凹凸面と考えられる。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明であるが、層序などから中世後期前後の時期と考えられる。

第5節 D区の調査

D区はA-1・2区の西側に位置しており、南から延びる二股の尾根の山裾部分に位置する調査区である。用水路、調査不要部分の存在によって東からD-1区・D-2区・D-3区に分かれる。

D-1区では調査区中央から谷部が検出されており、D-3区では調査区の南東側と北西側が谷状に浅く落ち、D-3区の中央部が微高地として検出された。

1. D-1区の調査（図版32 写真図版29）

A-1・2区の農道を挟み西側に設定した調査区である。南北幅約30.00m・東西長約30.00m・701mの多角形の調査区である。丘陵を挟み西側の山懐状になった部分、標高87.00m～86.50mに位置する。

調査の結果、埋没した谷（旧河道）及びその上面に被覆する水田土壤及び畦畔・ピット・溝などを検出した。

谷部は、調査区の西壁から大きくスプーン状の窪みを検出した。東西長11.00m・南北幅13.00mを測り、3.00m前後の深さをもつ。窪み内より9世紀代の須恵器が出土している。この谷部は埋没の最終段階であったと考えられ、等高線からは西へ開く谷地形が読み取れる。

水田土壤は、調査区西壁の土層断面において確認した。11層・12層・13層が対応する。南より、畦畔状の高まり12層を介し、階段状に北側へと延びる。本調査区では確認調査において瓦器・青磁片が面上より出土しており、中世前期の水田が谷部の窪みに存在した可能性が考えられる。

2. D-2区の調査（図版32 写真図版29）

D-1区から約20m隔てた西側に位置する。南北長30.00m・北辺14.00m・南辺10.00m・面積317m²を測る長台形の調査区である。標高88.00m～87.50mに位置する。

調査区全域が近現代の水田造成などによって削平を受けており、造構の残り方は希薄であった。概ね北半部よりピット・溝を検出した。溝は畦畔の痕跡と考えられる。建物の復元はできなかった。図示できなかつたが、瓦器片が出土した。

3. D-3区の調査（図版33 写真図版30・31）

D-2区と用水路を隔てた西側に位置し、D区の中でもっとも上流側にあたる調査区である。標高89.00m～88.50mに位置する。東西長57.00m前後・南北幅38.00m前後・面積2,226m²を測る不整な平行四辺形の調査区である。調査区は3～4段の棚田に及び、上段（1～2段目）・中段（3段目）・下段（4段目）に分かれ段状の造成のため削平が激しい。

D-3区の両端から谷状の落ちを検出しており、北西隅側については確認トレンチ及び本発掘調査において設定した西壁断ち割りトレンチによって湿地堆積・洪水砂礫を検出している。南東側については、D-1区の谷部に対応する可能性が考えられる。

遺構は上段では耕土下面で、ピット・土坑・溝などを検出した。中段・下段では、中世前期～戦国期の水田土壌・ピット・土坑・溝、中世後期～近世にかけての井戸・戦国期の水田畦畔などを検出した。溝には中世前期及び戦国期のものがあり、戦国期の溝からは大形土製品が出土している。

遺構

土坑SK01（図版35 写真図版32） 調査区南西端、標高90.00mに位置する。径約0.80m・深さ約0.35mを測る円形の土坑である。断面形状は浅いU字形であり、灰色シルト混じり粗砂～中礫が堆積する。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK02（図版35 写真図版32） 調査区南西、SK01の北側、標高89.90mに位置する。長軸1.10m・短軸1.00m・深さ0.25mを測る不整円形の土坑である。断面形状は皿形であり、上層ににぶい黄橙色細砂、下層ににぶい黄橙色シルト質極細砂が堆積する。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK03（図版35 写真図版32） 調査区南西、SK02の北西側、標高91.00mに位置する。径0.85m・深さ0.15mを測る不整円形の土坑である。断面形状は箱形であり、内部に径20cm前後の集石をもつ。灰黄色シルト質極細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK04（図版35 写真図版32） 調査区南西、SD12の北西側、標高89.70mに位置する。径1.75m・深さ0.30mを測る不整円形の土坑である。断面形状は箱形である。埋土は、上層に灰黄褐色中砂混じりシルト質極細砂が堆積し炭化物が混じる。下層は灰黄色粗砂混じりシルト質極細砂が堆積する。上下層とも鉄分が沈着し土壤化している。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK07（図版35 写真図版33） 調査区西端中央、SK08の南側、標高89.60mに位置する。径1.45m前後・深さ0.30mを測る不整円形の土坑である。断面形状は凹凸の激しい皿形である。埋土は2層に分かれ、上層には灰色極細砂質シルト～極細砂、下層は灰色粗砂～中礫が堆積し、SK01に近い。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

土坑SK08（図版35 写真図版33） 調査区西端中央、SK07の北側、標高89.00mに位置する。長軸2.10m・短軸1.70m・深さ0.35mを測る卵形の土坑で、スプーン状の底面を呈している。土坑の中央西よりには径1.00m・深さ0.35mの円形土坑が掘り込まれている。円形土坑内にはシルト混じり極細砂～粗砂が堆積している。図示できる遺物はなく、時期は不明である。その形状から埋植遺構と考えられる。

土坑SK15（図版35 写真図版33） 調査区北端西半、調査区の北壁から舌状に突き出した土坑である。断面形状は浅いU字形であり、標高88.80mに位置する。軸方位をN 7° Wにとる溝である可能性が高い。土坑内から、図示できる遺物は出土していない。時期は不明であるが、16世紀代の溝SD13よりも古く、13世紀代の溝SD25の上層に広がる洪水砂礫の下にある。13世紀代～16世紀代の間の可能性が高い。

土坑SK19（図版35 写真図版33） 調査区中央西より、標高89.20mに位置する。径0.85m前後・深さ0.10mを測る五角形に近い不整円形の土坑である。断面形状は浅い皿形である。土坑内から図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD21・SD25・土坑SK22・SK24（図版36 写真図版34） 溝SD21・SD25・SK22・SK24は調査区北東隅を南東から北西に走る。標高88.50mに位置する。SK22・SK24についても溝底の残れと考え

この項であつかう。SD21・SK24はSD25と重複し新しく、掘り替えが行われたと考えられる。溝は軸方位をN50°Wを測り、残存する当初の溝は幅0.40m前後、深さ0.08m前後の浅い皿状の断面形状である。埋土はにぶい黄褐色極細砂混じり中砂～細砂である。掘り替え後は幅1.40m～1.00m前後となる。埋土は灰黄褐～にぶい黄褐色極細砂混じり～細砂である。等高線に沿って走り溝底の深さはほぼ一定で、流向は定かではない。溝内から瓦質羽釜脚部127・瓦器碗片が出土した。中世前期の溝と考えられる。

溝SD23(図版36 写真図版34) 調査区東端を南北方向N4°Eに走る溝である。標高88.50m前後に位置する。幅0.60m前後、深さ0.10m前後の浅い逆台形の断面形状である。埋土は黄褐色細砂～中砂混じりシルトである。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD27(図版36 写真図版34) 溝SD21・SD25と切り合い新しい。走行をN22°Wにとる。幅0.30m・深さ0.05m、浅いU字形の断面形状をとる。埋土は黄褐色極細砂混じり細砂、SD23に近い。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD12(図版36 写真図版30) 調査区南西隅を南東から北西に走る溝である。走行をN37°Wにとる。南端は東側に曲がりを見せる。標高89.80mに位置する。幅0.60m・深さ0.08m、凹凸の激しい浅い皿状の断面形をとる。埋土は上層が灰黄色シルト質極細砂、下層は黄灰色粗砂混じりシルトである。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD13(図版36 写真図版31・35) 調査区西端を南北方向に走る。溝の両肩は畦畔となっており、谷部へと向かう北西側には若干の東西方向の畦畔の分岐を確認している。走行は水田区画の向きによって多少蛇行するが、SD13-bはほぼ正方位、SD13-aは概ね走行をN14°Eにとる。また、SD13は上下2層に分かれ、北壁土層断面図の22a'が上層の埋土、上層の水田土壤22a"が下層の埋土に対応する。

上層の溝は幅約0.35m～0.50m・深さ約0.10m～0.15m、灰黄～暗灰黄色の細砂～極細砂が堆積する。また、西溝肩(畦畔)には一辺30cm前後の山石(角礫)を並べている。また、下層の溝は幅0.70m前後、深さ0.12mを測る。下層の溝肩(畦畔)には径10cm前後の杭痕が顕著に残っている。

上下層は不明であるが、溝内からは土師器小皿126が出土している。また、この石列と絡んで大形土製品133が出土している。上層の溝に伴うものと考えられる。

溝SD14(図版36 写真図版35) 調査区北西半を東西方向N84°Wに走る溝である。標高88.80mに位置する。幅0.60m・深さ0.08m、浅い皿状の断面形をとる。灰黄色極細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD16・17(図版36 写真図版35) 調査区北壁中央を南北方向に走る溝である。幅0.10m～0.15m、深さ0.05m前後、断面はV字形を呈する。並行して検出されているが、南端がカーブを見せることから輪跡の可能性が高い。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

溝SD18(図版36 写真図版34) 調査区北壁中央を南北方向N24°E前後に走る溝である。幅0.30m、深さ0.05m前後、断面は浅い皿形を呈する。南端がカーブを見せる。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。

第6節 E区の調査

E区は猪瀬川南側の低地に設定した調査区である。当該地は広根字上京田にあたり、嘉吉年間の田畠寄進状（図版39）の中に経田として登場する地点である。当初E-1区としていたが、他に小区の設定がなく、報告書作成段階で、E区とした。F-1地区北側に位置している。調査区は不整台形をしており、南北幅約24.5m・東西長約37.5m・面積661m²の調査区である。

概要と層序（図版37・38 写真図版36・37）

溝2条のほか多数の耕作痕（犁溝）を検出した。耕作痕（犁溝）は、上下2層に分かれ、加えて、その方向を違えている。上層は北東、下層は西北西を指向する。耕作痕はその形状から牛耕による犁痕と判断している。上下2タイプの犁溝は畠の耕作に伴うものと考えられ、上層の畠耕作土が北壁の第8層、下層の畠耕作土が北壁の第10層に対応する。第10層は洪水起因の第11層の上層にあり、多数の溝が第11層上面に掘り込まれている。第10層中には多くの炭・焼土が含まれている。

上層の畠耕作土第8層に対応する犁溝は第9層もしくは第10層を掘り込んでいるが、これらの層は薄く、調査区中央付近でのみ確認されている。多くは第11層上面において検出されている。

溝SD01は床土層と考えられる第7層よりも新しく、第6層に対応すると考えられる。但し、第6層の下底にも犁溝と考えられる凹凸が見受けられ、SD01と同時期の犁溝痕が遺構面において検出されている可能性は高い。第6層の上面には小畦畔状の隆起が3m～5m間隔で確認できる。溝SD02はさらに上層5層（床土層）上面から掘り込まれており、SD01よりも新しい。

遺物は第8層以下を掘削したところ、中世前期の瓦器椀・青磁窯蓮弁文碗、中世後期の青磁窯蓮弁文碗・瀬戸美濃系天目茶椀、温石などが出土している。

遺構

溝SD01（図版37・39 写真図版37） 調査区東端を南北方向N13°Eに走る溝である。北壁の第8層上面より掘り込まれている。標高88.40mに位置する。検出全長18.00m、幅0.70m～0.80m・深さ0.15m～0.22m、逆台形状の断面形をとる。埋土は上層オリーブ褐色～褐色細砂・中層は褐色の極細砂混じり細砂、下層は褐色～オリーブ褐色のシルト質極細砂を埋土とする。埋土中の各層に炭・焼土を含んでいる。黒色土器椀片134が出土している。下層の犁溝群を切っている。上層の犁溝群との先後関係は不明である。

溝SD02（図版37 写真図版37） 調査区東端を南北方向N13°Eに走る溝である。概ね溝の西肩を検出している。調査区北壁の第5層上面より掘り込まれている。灰黄色極細砂を埋土とする。瀬戸美濃系天目茶椀片135が出土している。遺構の時期は室町時代以降と考えられる。

上層の犁溝（図版37 写真図版37） 調査区全域において南北方向N11°E～N15°Eに走る溝が検出されている。SD10を参考にすれば、概ね幅0.25m・深さ0.07m前後、U字形の断面形をとる。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂を埋土とする。埋土中には炭・焼土を含んでいる。

下層の犁溝（図版37 写真図版37） 調査区全域において南北方向N48°W～N70°Wに走る溝が検出されている。SD7・SD08・SD09では、概ね幅0.25m～0.30m・深さ0.05m前後、U字形もしくは逆台形の断面形をとる。暗灰黄色極細砂を埋土とする。埋土中には炭・焼土を含んでいる。

その他の溝SD05・SD06（図版37・39 写真図版37） 調査区中央南端において検出した南北方向N6°Wに走る溝である。上層の犁溝よりも若干西へ振る。幅0.40m～0.50m・深さ0.07m前後、U字形の断面形をとる。にぶい黄褐色シルト質極細砂を埋土とする。埋土中には炭・焼土を含んでいる。

第7節 F区の調査

F区はD区とは北向きに突き出す尾根状の高まりによって隔てられ、H区との間もまた、北向きに突き出す尾根状の高まりと南北に走る農道によって隔てられた調査区である。F-1区とF-2区の2小区に分けられる。両区の間には旧河道がF-1区寄りに北流しており、別地区としてもよい。

1. F-1区の調査

概要と層序（図版40 写真図版38・39・45）

東西長50.00m・南北最大幅約32.00mを測る変形六角形の調査区である。面積1,234m²を測る。

調査区は現水田による造成のため、上・中・下3段の棚田となっており、上・中段は山裾の緩斜面を造成した部分で、下段は平地部分に位置している。それぞれ、水田造成に伴い山側（南側）を削り、谷側（北側）に盛り土を出す作業を行っている。そのため、遺構は山側で削平のため密度が薄く、谷側では包含層が残り、遺構の密度が濃い状況である。

上段では、掘立柱建物跡1棟・焼土坑群・方形変色部・焼土・溝等を検出した。遺構の時期は主に平安時代中頃から鎌倉時代である。

中段では、東半から、掘立柱建物跡2棟・土坑が検出されており、概ね鎌倉時代である。中央から西半にかけては、焼土と配石を伴う縄文時代中期の土坑と弥生時代前期の土坑を検出している。

下段では、近世と考えられる埋植遺構及び調査区北壁に沿って水田に伴う溝もしくは犁跡を検出した。

遺構

土器棺墓SK242（図版42 写真図版40） 中段北端西よりから検出した土器棺墓である。標高94.20m前後より検出した。中央部を暗渠によって損壊されているため、遺構は完全には残っていない。長軸0.45m・短軸0.38m、深さ0.10mの卵形の土坑に弥生前期末～中期初頭の甕146を長軸向きに、横倒しに据えている。墓坑埋土は黒褐色微砂混じり細砂を埋土とする。甕146は土器棺の棺身と考えられるが、別個体の甕145が出土していることから145は蓋となっていた可能性が考えられる。

ピットP102・P103下層土坑（図版42 写真図版40） 中段中央より検出した土坑である。標高94.30m前後より検出した。P102・P103を断ち切った所、下層より石材及び焼土が出土し土坑となった。長軸1.30m・短軸1.00m、深さ0.30mの楕円形の土坑である。土坑底に薄く粘土が堆積しており、その上に20cm前後の割石が座っている。土坑内からは焼土・炭・縄文時代中期末の深鉢片が出土した。

掘立柱建物跡SB01（図版43 写真図版41） 中段東半において検出した。標高94.40mに位置する。土坑SK152・SK153と重複する。同時期もしくは新しい。梁行方位をほぼ南北にとる総柱建物跡である。梁行東西3間（8.50m）・梁行南北3間（6.60m）、床面積56.10m²の規模である。建物の柱間は、桁間は約2.83m、梁間は2.20mである。柱穴の内、土坑SK152・SK153と重複する部分は柱穴が見つからず、土間であった可能性もある。また、南東隅の柱穴と、北側の桁行2間分の柱穴もまた検出されず、これは削平を受けた可能性がある。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm、深さは20cmである。柱穴P65から土師器鍋152が出土している。土器の時期は平安時代と考えられる。

掘立柱建物跡SB02（図版44 写真図版41） 中段中央において検出した。標高94.40mに位置する。SB01と接続し、SB03と柱穴が切り合い古い桁行方位をN85°Eにとる総柱建物跡である。桁行東西3間（7.00m）・梁行南北2間（4.00m）、床面積28.00m²の規模である。建物の柱間は、桁間は約2.20m～2.60m、梁間は2.00mである。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm、深さは30cmである。柱穴から図示でき

る遺物は出土していない。時期は不明である。

掘立柱建物跡SB03（図版44 写真図版41） 中段中央において検出した。SB01と近接する。SB02の棟行の柱穴を新たにしたもので、その他の桁・梁の柱穴は同じである。標高94.40mに位置する。桁行方位をほぼ正方位にとる総柱建物跡である。桁行東西3間（7.00m）・梁行南北2間（4.00m）、床面積28.00m²の規模である。建物の柱間は、桁間は約2.60m・2.30m・2.10mである。柱穴から図示できる遺物は出土していない。時期は不明である。

掘立柱建物跡SB04（図版43 写真図版42） 上段東半において検出した。標高95.10m～94.70mに位置する。方形変色部と重複し新しい。桁行方位をN14°Wにとる掘立柱建物跡である。桁行南北3間（6.40m）以上・梁行南北2間（4.70m）以上の規模である。建物の柱間は、桁間は約2.20m・2.00m、梁間は2.35mである。柱列の内側に桁行2間・梁間1間の柱穴を検出しているが、関係は不明である。束柱の可能性がある。柱穴から図示できる遺物は出土していない。時期は不明である。

方形変色部（図版45 写真図版42） 上段東半にて検出した。標高95.20m～94.70mに位置する。東西南向約6.00m・南北方向約5.50mを測る方形の変色部である。褐色に土壤化している。立地は、北方へ聞く谷地形の根元にあたり、現況では湧水を伴う地点である。変色部の下及び周辺には後述する平安時代中頃の土坑が存在している。のことから、方形堅穴建物の床面などの可能性が考えられるが、土坑と変色部の関係は不明であり、方形変色部は谷堆積による変色の可能性もある。

土坑SK156（図版45 写真図版43） 方形変色部の南東隅に位置する。標高95.10m前後に位置する。長軸1.60m、短辺0.76m、深さ0.20mを測る不整楕円形の土坑である。断面形状は凹凸が激しく中央で盛り上がりを見せる。暗褐色粗砂混じりシルトが堆積する。径20cm前後の礫と共に土師器杯157が出土している。時期は平安時代中頃と考えられる。

土坑SK157（図版45 写真図版43） 方形変色部の東側に位置する。標高95.30m前後に位置する。長軸2.00m、短軸1.30m、深さ0.25mを測る楕円形の土坑である。断面形状は船底形である。炭混じりのない黄褐色細砂質シルトが堆積する。土師器杯158・159、黒色土器160が出土している。時期は平安時代中頃と考えられる。

土坑SK163（図版45 写真図版43） 方形変色部内の南よりに位置する。焼土Cと切り合い新しい。標高95.00m前後に位置する。長軸1.00m、短辺0.60m、深さ0.35mを測る米粒形の土坑である。断面形状は深い箱形である。埋土はにぶい黄褐色細砂質シルトで、SK157と類似しており、上層と下層に炭・焼土を含んでいる。土師器皿161が出土している。土師器杯157よりも若干新しい時期と考えられる。

土坑SK164（図版45 写真図版42） SK157の北西側、SD172と切り合い新しい。標高95.00m前後に位置する不整円形の土坑である。径約0.70m、浅いU字形の断面形状を呈する。炭・穢混じりの粘質シルトが堆積する。土師器甕162が出土している。

土坑SK165（図版45 写真図版43） 上段東壁に沿って検出し、一部が調査区外にある。標高95.50m前後に位置する。長軸1.60m、短軸0.65m、深さ0.22mを測る丸底の長楕円形の土坑である。上層の灰黄褐色細砂質シルトに炭が含まれる。下層にはにぶい黄褐色粗砂混じりシルトが堆積する。図示できる遺物はなく、時期・性格ともに不明であるが、埋土から周辺の土坑と同時期と考えられる。

土坑SK166（図版45 写真図版43） 上段南端より検出した。焼土Bの東側、標高95.50mに位置する。等高線に直交して軸をもつ長軸0.66m、短軸0.60m、深さ0.15mを測る卵形の土坑である。断面形状はU字形、上層ににぶい黄褐色粗砂混じりシルト・下層に褐色細砂質シルトが堆積する。土師器甕164が出土

している。

土坑SK168（図版45 写真図版42） 上段中央、方形変色部内の北端に位置する。SK169と切り合い新しい。長軸2.10m、短軸0.90m、深さ0.14mを測る涙滴形の土坑である。須恵器杯163が出土している。時期は平安時代中頃と考えられる。

土坑SK151（図版46 写真図版44） 中段東半、掘立柱建物跡SB01と重複して検出した。北側を水田造成によって消失し当初の形は不明であり、舌状に残る。南北残存長0.88m・東西幅1.05m・深さ約0.15m、皿状の断面形状である。埋土は暗灰黄色土、焼土、炭を含むが土坑は焼けていない。SK152と切り合い新しいが、最終的には炭・焼土を含む同一層によって埋没している。瓦器片が出土している。

土坑SK152（図版46 写真図版44） 掘立柱建物跡SB01と重複して検出した。北側を水田造成によって消失し、東辺はSK151に切られ、当初の形は不明である。南北残存長0.80m・東西残存幅1.22m・深さ0.25m、皿状の断面形状である。埋土は黄灰色細砂、焼土を含むが土坑底は焼けていない。SK151と切り合い古いが、最終的には炭・焼土を含む同一層によって埋没している。瓦器片が出土している。

埋 桶（図版46 写真図版44） 下段西半、標高93.55mに位置する。長軸1.90m、短軸1.55m、深さ0.70mの掘方に径1.15m・底径1.10m・深さ0.45m以上の大型の桶を据える。桶底より掘方底が0.30m前後深い。出土遺物はないが、周辺の検出例から推して近世以降の遺構と思われる。

溝SD153（図版40・46 写真図版41） 中段中央北端、SB02・SB03北側より検出した。東西方向N78°Eに走る溝である。標高94.30m前後に位置する。検出長3.00m、幅0.25m、深さ0.10m前後の浅い逆台形の断面形状である。埋土は灰茶褐色細砂である。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。走向を現水田区画と同じくし、下段のSD73とも近い。

溝SD155（図版40・46 写真図版44） 上段西端、走行をN20°Wにとる溝である。検出長4.00m、幅0.52m・深さ0.18m、U字形の断面形状をとる。埋土は灰オリーブ色細砂。図示できる遺物は出土していない。時期・性格ともに不明である。走向を現水田区画と同じくしている。

溝SD160（図版45・46 写真図版42） 上段、SB04の南側より検出した走行をN38°Eにとる溝である。SD161と並行する。検出長2.90m、幅0.35m・深さ0.05m、極浅い皿状の断面形状をとる。埋土はにぶい黄褐色細砂質シルト。図示できる遺物は出土していない。

溝SD161（図版45・46 写真図版42） 上段、SB04の南側より検出した走行をN42°Eにとる溝である。SD160と並行する。検出長1.20m、幅0.50m・深さ0.05m、極浅いV字状の断面形状をとる。埋土はにぶい黄褐色細砂質シルト。図示できる遺物は出土していない。

溝SD162（図版45・46 写真図版42） 上段、SB04の南側を平行して走行する。走行をN10°Eにとる溝である。検出長1.60m、幅0.35m・深さ0.08m、浅いU字形の断面形状をとる。埋土は炭を含むにぶい黄褐色細砂質シルト。図示できる遺物は出土していない。

溝SD172（図版45・46 写真図版42） SK157の北西側、SK164と切り合い古い。標高95.00m前後に位置する溝である。検出長1.30m、幅0.22m・深さ0.06m、浅いU字形の断面形状をとる。埋土は炭を含む灰黄褐色粗砂混じり細砂質シルト。図示できる遺物は出土していない。

2. F-2区の調査

概要と層序（図版47・48 写真図版45・46・47）

南北長約50m・東西最大幅45m、面積1,804m²を測る変形六角形の調査区である。現況は、東側は上・

中の2段、西側は大きく上・中・下3段の水田となっており、上・中段は山裾の緩斜面を造成した部分で、下段は更に緩斜面の平地である。それぞれ、水田造成に伴い山側（南側）を削り、谷側（北側）に盛土を出す作業を行っている。そのため、遺構は山側で削平のため密度が薄く、谷側では包含層が残り、遺構の密度が濃い状況である。遺構はその殆どが西半に集中しており、上段では集石遺構、中段にかけては東西方向の溝と集石遺構、下段では掘立柱建物跡が検出されている。

現況の水田の向きは東西方向をやや東に振ったN70°～80°Wを指向しているが、調査後の等高線は、削平が認められない部分では、ほぼ東西方向に走っており、これが旧地形の等高線である。削平以前の地形として、なだらかに北側へ向かっての傾斜面が存在したと考えられる。この部分の包含層、特に西側の上・中段から東側の中段にかけては中世の遺物包含層が厚く堆積しており、鎌倉～室町時代にかけての瓦器・土師器・陶器などが多数出土した。

調査時点では、調査区の西側に谷部が入ると考えたが、それは誤りである。H-1区の地形と照らし合わせたところ等高線はほぼ並行に走り、谷部を表現していない。辛うじて、南側から延びる尾根端の西向き傾斜が調査区南西隅の集石遺構部分に表れている。谷堆積としたものは、近現代の造成と旧地形の間に生じた各段の三角形部分に残る包含層（14層・15層）を谷部と見誤っていたものである。谷部堆積と考えた包含層のうち14層は中世後期、15層からは土師器甕189・瓦質羽釜190・191・192、須恵器捏鉢193、青磁鍋連弁文碗194が出土しており、何れも13世紀代である。

遺構

掘立柱建物跡S-B01（図版49 写真図版47） 西下段西半において検出した。標高94.90mに位置する。桁行方位をN85°Wにとる矩柱建物跡である。桁行東西3間（8.40m）・梁行南北2間（3.90m）の母屋に桁行1間（1.20m）・梁間2.20mの張り出しがつく。建物の西桁行1間分の柱は建て替えられており、図版の白抜き柱穴から薄い網かけの柱穴、濃い網かけの柱穴へと変遷している。総床面積35.40m²の規模である。建物の柱間は、桁間は約2.80m、梁間は2.20m・1.70mである。柱穴は円形を基本とし掘方径40cm、深さは殆どが20cmと浅く、一部が60cmと深い。柱穴P01から瓦器甕178、P02から土師器小皿176、P16から暗文を施した須恵器杯179及び須恵器捏鉢180が出土している。時期は12世紀代と考えられる。

土坑SK03（図版50 写真図版48） 西下段西半、SB01の北側、標高94.90mに位置する。長軸0.55m・短軸0.40m・深さ0.15mを測る卵形の土坑である。断面形状は箱形である。埋土は主に黄褐色細砂質シルト、炭を含んでいる。図示できる遺物は出土していない。時期・性格は不明である。

土坑SK14（図版50 写真図版48） 西下段西半、SB01の西側、標高94.80mに位置する。長軸0.75m・短軸0.70m・深さ0.18mを測る不整円形の土坑である。断面形状は弓形である。埋土は上層がにぶい黄褐色シルト質細砂、炭を含んでいる。下層は灰黄褐色シルト質細砂、炭を含まない。土師器羽釜181が出土している。時期は12世紀代と考えられる。

土坑SK17（図版50 写真図版47） 西下段西半、SB01の東側、標高94.90mに位置する。長軸0.70m・短軸0.45m・深さ0.15mを測る卵形の土坑である。断面形状はU字形である。埋土は明黄褐色細砂質シルト、炭を含んでいる。土師器小皿182が出土している。

焼土A（図版50 写真図版48） 調査区下段北西半、SB01の北西側標高94.50mに位置する。長軸0.50m・短軸0.35m以上・厚さ0.07mを測る卵形の焼土である。東半部がよく被熱している。焼土を断ち割った所、下層（2層）が焼けており、当初は浅く窪んだ火廻もしくはかまとであった可能性がある。更に下層には焼土・炭を含んだ黒褐色土（3層）を埋土とする土坑が存在した。

焼土B（図版50 写真図版48） 東半中段、標高97.15mに位置する。長軸約0.90m、短軸0.65m、厚み約0.05mを測る。上面0.03m前後がよく被熱する。伴う遺物はなく時期・性格は不明である。

集石土坑S K12（図版51 写真図版49） 西中段、標高95.90mに位置する。造成に伴い、上部を削平、破壊されている。円・方形を組み合わせた形状の不整形土坑内に径15cmから50cm程度の自然石（山石・角礫・亜角礫）もしくは自然石の割石が1段～2段で敷かれている。土坑は南北長約3.00m、東西幅は円形部で2.70m、南辺で2.10m、深さは中央で0.20m、南端では0.15mを測る。長軸の向きをN16°Eにとる。敷石の状況は場所によって違いがある。方形部分（土坑の南半部）は浅く、径の大きな石材が直線的に敷かれている。対して、北半～中央の円形を指向する部分は土坑がやや深く、径の大きな石材が短辺を内側に向け円形に巡り、内側にやや小径の石材が若干まばらに敷かれている。円形部分が水溜、方形部分が作業場等の石敷きにあたる可能性が考えられる。但し、内部に滲水した痕跡は認められない。集石内からは瓦器椀の細片が出土しているが、時期決定にはいたらない。

集石土坑S X11（図版52 写真図版50） 西中段北端、標高95.30mに位置する。造成に伴い北半部が破壊され、全貌は不明である。土坑は切り合い新旧に分かれる。新をa、旧をbとする。

S X11-a 東西長2.40m・南北残存長1.00m・深さ0.24mを測る隅丸長方形を指向する不整形土坑である。幅は北西隅のコーナーが残っていることから、1.00mを大きく出るものではない。断面形は皿状を呈する。南壁に沿って長20cmと25cm・60cmの石材が立っており、その高さは50cmを測る。堆積土には炭を含む。遺物は図示できるものではなく、時期・性格は不明である。

S X11-b 東西長2.50m・南北残存長1.60m・深さ0.20mを測る隅丸方形を指向する不整形土坑である。断面形は皿状を呈する。南壁に沿って長30cmと長60cmの石材が立っており、内側に被熱痕がみられる。堆積土には炭・焼土・粘土ブロックを含む。遺物は図示できるものではなく、時期・性格は不明である。

集石造構（図版47 写真図版50） 西上段南西隅より検出した。一边20cm前後の角礫が密集して敷かれている。立地は調査区の南側から延びる尾根端の西向き傾斜面の肩部にあたり、西側と北側へ傾する。傾斜に合わせ、標高98.60m～97.70mにかけて、東西辺約3.00m・南北長約4.00mの規模で、逆三角形に広がっている。集石間からは土師器小皿183の他、直上の包含層からは瓦質羽釜脚部片、赤間石製の硯箱形硯が出土している。直上の層（12層）が明確な中世前期の包含層ではないため、時期は確定できない。造構は中世前期の可能性が高い。造構の性格についても大半が現農道下に潜るために不明である。

土坑S X05（図版52 写真図版47） 調査区下段西半、SB01の西側、標高94.70mに位置する。長軸4.00m・短軸0.80m・深さ0.07mを測る浅い舌状の落ち込みである。断面形状は皿状である。

溝S D07～10（図版47・52 写真図版46） SD7～SD10は西中段から検出した。等高線を東に沿ってから西へと流れる。

SD07・09は東西方向（N85°W）の走行をもつ。SD07は幅0.45m以上・深さ約0.20m、U字状の断面形状をとる。埋土は灰黄褐色シルト、炭を含む。SD09はSD07の延長上にあり、両者を合わせ19.00mの延長を検出した。SD09からは土師器小皿185が出土している。

SD08は東西方向（N85°E）にとり、埋土はにぶい黄褐色シルト、炭を含む。SD07に切られている。瓦器椀184が出土した。

SD10は南北方向からSD07に合流する。土師器小皿186、鍋187が出土している。

溝S D14（図版47・52 写真図版46・50） 西中段、標高95.40m、SD07・SD10付近から始まりカーブを描きSK11に切られる。幅は1.20m、深さ0.08m、浅い皿状の断面形状を呈し黒褐色シルトが堆積する。

第8節 G区の調査

G区は猪瀬川の北岸（左岸）に設定した調査区である。H-1区の対岸に位置している。広根遺跡の中では数少ない南向きの扇状地に位置する調査区である。

調査区は里道を挟み北側のG-1区と南側の猪瀬川に隣接するG-2区に分けて調査を実施した。両者の間には標高差があり、河岸段丘が存在する。

県道を隔てた北西丘陵部に1区が存在する。I区から伸びた緩斜面に遺跡が広がっていたと思われるが、確認調査の結果、G・I地区間は削平されて遺跡は残存していない。

1. G-1区の調査

概要と層序（図版53～55 写真図版51・52）

全長東西46m・幅南北30m、三角形に近い調査区である。面積629m²を測る。調査区の中央には現在の水田の境が横切り東半は一段低く、削平のため検出された遺構の密度はやや薄い。西半部は高く、掘立柱建物跡2棟・柵列2条、圍池状石組、集石土坑、土坑群を検出した。

掘立柱建物跡は2棟復元したが、他にも複数の柱穴があり、更に複数の建物が存在したと考えられる。

圍池状遺構は石組で築かれたもので、4m四方と小形のものである。石材は地元で産出される流紋岩の円礫を使用している。埋土から輸入陶磁器・瓦器、土師器が出土している。

土坑のうち3基は上面に礫を並べた集石土坑で、SK18は木棺墓の可能性が高い。各土坑からは丹波焼甕・擂鉢や古瀬戸四耳壺・瓦器椀・土師器椀・皿などが出土している。

多くの遺構は遺物から推して13世紀から14世紀にかけて営まれたと考えられる。

遺構

掘立柱建物跡S B01（図版55 写真図版53） 西半において検出した。標高90.50m付近に位置する。南北軸をN16°Wにとる総柱建物跡である。東西3間（6.50m）以上・南北2間（5.20m）以上、総床面積33.80m²以上の規模である。建物の柱間は、東西は1間約2.00m・2.20m、南北は1間2.60mである。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm前後である。柱穴から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。但し、隣接するSX03によって柱穴が消失している可能性が高く、SX03が14世紀代に埋没していることから、それ以前の時期と考えられる。

また、木棺墓SK18が建物と重複して検出されている。軸方位がほぼ同じであり、興味深い。

掘立柱建物跡S B02・柵列SA01～SA04（図版55 写真図版53） 西半部中央、標高90.70m付近に位置する。掘立柱建物跡SB02とその南側及び東側を画する柵列を検出した。建物と柵は方向をともにしており、関連する施設と考えられる。SA01・SA04はSB02を含む建物敷地を大きく囲む柵列と考えられ、SA02・SA03は建物と柱穴が希薄な敷地内空閑地とを分ける柵列ととらえられる。

S B02 南北軸をN35°Wにとる建物跡である。南北桁行3間（6.00m）以上・東西梁間3間（5.50m）、総床面積33.00m²の規模である。建物の柱間は、南北は1間約2.00m、東西は1間1.30m・1.70m・2.20mを測るが、柱数が少なく、明確ではない。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm前後である。柱穴から図示できる遺物は出土していない。

S A S01 SB02の南側を約0.90mの間隔をあけて東西に走る、軸をN55°Eにとる柵列である。全長11.80m、柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～30cmである。柱間にはばらつきがあり、1間1.20m・2.80

m・3.20mを測る。SA01は、東端にて直角に北へ曲がりSA04となる。また、西端から8.50m部分で、分岐し、SA02が北へ伸びる。柱穴から図示できる遺物は出土していない。

S A04 軸をN35°Wにとる4間程度の柵列である。全長6.50m、柱穴は円形を基本とし掘方径15cm～30cmである。柱間にはばらつきがあり1間1.00m・1.70mを測る。図示できる遺物は出土していない。

S A02 軸をN35°Wにとる2間の柵列である。全長1.70m、柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～30cmである。柱間は、1間0.70m・1.00mを測る。柱穴P12から瓦器鉢201が出土している。柱穴抜き取り後に納めたと考えられ、13世紀前半と考えられる。

S A03 SB02の東側を約0.90mの間隔をあけて南北に走る、軸をN35°Wにとる3間の柵列である。全長3.50m、柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～30cmである。柱間は1間1.00m・1.50mを測る。柱穴から図示できる遺物は出土していない。SA03とSA02は一直線には位置せず、約1.40mの間が空いている。空閑地への出入り口の目的をもつと考えられる。

園池状石組遺構S X03（図版56 写真図版54～57） 西半南壁際より検出した石組遺構である。遺構の一部は調査区外へと延びる。一部が調査区外へと延びるため形状・規模の全容は明らかではない。全長7.00m・幅約4.90m以上・深さ0.20m～0.30mを測る浅い皿状の掘方に長方形の石組遺構が組まれている。

石組遺構は掘方の西半により造られている。南北4.30m・東西3.70mの不整積円形に石を集め、内側に内法南北3.20m・東西2.00m前後の規模で、石積み・石壁を持った区画を築いている。石組は概ね田の字形の石組と認識できるが、周辺に段落ち・円形土坑が付随しており、便宜上a～gに分けて述べる。

石積み区画は中央に東西方向の石積みを追加し、大きく南北2室の区画を造りだしている。更に両区画は内部を東西に仕切っている。ここでは南側の区画をa・b、北側の区画をc・dとする。

a・cの西側の石積みは、西側の壁は延長4.00mほど築かれ、北半部については弧を描いている。一辺20cm～40cmの亜角礫を横積みあるいは小口積みに2段～3段で積み上げている。

区画a・b 東西（北辺）2.00m・南北（西辺）1.15m・高さ0.40mを測る区画である。軸をほぼ正方位にとる。一辺40cm前後の石を横積みあるいは小口積みに積み上げている。北辺の石積み（北壁）は平滑な面をa・b側に向けて並べており、外周の石組より後に追加したと考えられる。また、区画bの東辺は区画dの東辺よりも内側に延っている。北壁と共に追加されたと考えられる。また、中央に南北方向の小石列があり、床面の高さも若干違うことから更にa・bの2つの小区画に分かれる。

区画c・d 東西（南辺）2.20m・南北（東辺）1.50m・高さ0.50mを測る区画である。軸をN9°Eにとる。一辺20cm前後の石を横積みあるいは小口積みに積み上げている。先述したように西壁は弧を描いている。西半部には礫が多く、床面の高さも若干違うことから更にc・dの2つの小区画に分かれる。

区画e 区画c・dの外側にある径0.50m前後の擂鉢形の落ち込みである。

区画f・g 区画b・dの石積みに沿って東側はわずかに低くなってしまい、底面では数cmの落差を生じている。また、fとSK21側では約20cmの落差がある。そして若干の集石が認められる。

S X03の埋土は概ね各区画とも下層に黒褐色細砂～極細砂が堆積しており、これは、中世前期の包含層と同一堆積土である。SX03の西半部分には更に焼土・炭が堆積している。これは後述する各土坑の埋土に含まれる炭・焼土と一緒に因である可能性がある。区画内からは土師器小皿217～220、瓦器鉢221、土師器鍋222、土師器鍋223～226、土師器羽釜227、無軸陶器鉢228が出土している。時期は概ね13世紀後半から14世紀前半にかけてである。

木棺墓SK18（図版57 写真図版58） SB01と重複して検出された集石土坑である。その形状から集石

土葬墓、更に断面の状況から木棺墓と推定される。主軸をN 8°Wにとり、SB01と並行する。墓坑は、小口側周辺を一旦浅く掘り、更に深く全体を箱形に掘削する。土坑底は平坦であり、側面は真っ直ぐである。法量は長軸1.95m、短軸0.78m、深さ0.35mを測る。墓坑上全域に、径10cm～25cmの自然石が集石している。下層を断ち割った所、断面から幅47cmの木棺痕跡を検出した。墓坑内からは土師器皿204が出土しているが細片である。

集石土坑SK03（図版57 写真図版59） SB02と重複する集石土坑である。先後関係は不明である。軸をほぼ正方位にとる不整な楕円形を呈する。長軸1.30m・幅0.94m・断面は浅い皿状を呈し、深さ0.16mを測る。土坑内には径5cm～15cm前後の円窯もしくは亜角窯が、丹波焼窯の破片と共に密集して入っている。丹波焼窯210・211が出土した。211は1個体が投入されていた可能性があり、時期はともに13世紀末から14世紀前半と考えられる。

土坑SK01（図版58 写真図版60） SB02の西側に位置し、SK02・SK04と並んでいる。標高90.75m前後に位置する。軸をN 33°Eにとる卵形の形状を呈し、長軸約0.90m・幅0.58m・深さ0.29mを測る。断面形状は箱底である。上層には黒褐色シルト質極細砂、下層にはオリーブ褐色細砂・暗灰黄色細砂～極細砂が堆積する。上層には大量の炭を含んでいるが、被熱はしていない。瓦器碗206が出土している。

土坑SK02（図版58 写真図版60） SB02の西側に位置し、SK01・SK04と並ぶ。標高90.70m前後に位置する。軸をN 22°Eにとる卵形の形状を呈し、長軸約1.00m・幅0.54m・深さ0.22mを測る。断面形状はU字形である。上層には黒褐色細砂、中層に黒褐色シルト質極細砂、下層には暗灰黄色細砂～極細砂が堆積する。各層に炭を含んでいるが、被熱はしていない。図示できる遺物は出土していない。

土坑SK04（図版58 写真図版60） SB02と重複し、SK01・SK02と並ぶ。標高90.70m前後に位置する。不整なおむすび形を呈し、南北幅約0.72m・東西長0.84m・深さ0.30m、断面形状は深いU字形である。炭を多く含む黒色細砂～極細砂が堆積する。被熱はしていない。瓦器碗207が出土している。

土坑SK05（図版58 写真図版60） SB02の内側に位置し標高90.70m前後に位置する。米粒形を呈し、長軸約1.05m・幅0.74m・深さ0.14mを測る。断面形状は船底形である。上層には黒褐色シルト質極細砂、下層には黒褐色細砂が堆積する。土坑内から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑SK06（図版58 写真図版60） SB02の東側に位置し、SK07と隣り合う。標高90.65m前後に位置する。不整な俵形を呈し、長軸約0.72m・短軸0.50m・深さ0.15mを測る。断面形状は深いU字形、底面はやや平坦である。上層は黒褐色極細砂、下層はオリーブ褐色極細砂が堆積する。ともに炭を含む。被熱はしていない。図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑SK07（図版58 写真図版60） SB02の東側に位置し、SK06と隣り合う。標高90.65m前後に位置する。不整な米粒形を呈し、長軸約1.15m・短軸0.62m・深さ0.26mを測る。断面形状は深いU字形。1層は黒褐色極細砂、2層は黄灰色極細砂、3層は暗灰黄色極細砂、4層は暗灰黄色極細砂、1～3層は炭を含み4層は地山土を含む。被熱はしていない。図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑SK09（図版58 写真図版61） SA04の北東側に位置する。標高90.60m前後に位置する。SK10に切られている。軸をN 39°Wにとる長軸1.54m、短軸0.43m、深さ0.10m前後を測る長楕円形の土坑である。断面形状は浅いU字形で、黄褐色極細砂が埋積する。南半の窪みはピットが切り込んでいた可能性が高い。土坑内から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

集石土坑SK10（図版58 写真図版61） SA04の北東側、標高90.50m前後に位置する。SK09を切り、SK29に切られる可能性が高い。長軸0.86m、短軸0.76m、深さ0.20m前後を測る不整な隅丸五角形土坑

である。断面形状は浅いU字形で、黄褐色極細砂が埋積する。土坑内から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

集石土坑SK29（図版58 写真図版61） SA04の北東側、標高90.50m前後に位置する。SK09・SK10を切る可能性が高い。長辺0.68m、短辺0.42m、深さ0.14mを測る不整な隅丸方形土坑である。断面形状は箱形で、黄褐色極細砂が埋積する。土坑内から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑SK11（図版58 写真図版60） SA04の北東側に隣接、標高90.60m前後に位置する。長軸0.86m、短軸0.54m、深さ0.16m前後を測る空豆形の土坑である。東よりに深い箱形で、上層は黒褐色極細砂、下層には褐灰色極細砂が埋積する。土坑内から図示できる遺物は出土しておらず、時期は不明である。

土坑SK12（図版58 写真図版60） SB02と重複し標高90.60mに位置する。不整な涙滴形を呈し、南北長約1.02m・東西幅0.53m、深さ0.50mを測る。断面形状は深い逆台形である。上層は黒褐色極細砂、中層は暗褐色シルト質極細砂、下層にはぶい黄褐色シルト質極細砂が堆積する。位置的にはSB02の柱痕抜き取り孔の可能性がある。土坑内から図示できる遺物は出土していない。

土坑SK16（図版58 写真図版61） SB01の西側に近接し、柱列に対面する。標高90.40m前後に位置する。軸をN70°Eに据る不整な隅丸長方形を呈し、長軸約1.34m、短軸0.90m、深さ0.08mを測る。断面形状は浅い皿形。暗灰黄色極細砂が堆積する土坑東半には径25cm前後の亜円礫が入っている。土坑内から図示できる遺物は出土していない。

土坑SK17（図版58 写真図版61） SB01と重複して検出された。標高90.50m前後に位置する。不整な隅丸方形を呈し、擂鉢形に掘削し土坑底は平坦である、長辺約0.80m、短辺0.70m、深さ0.18mを測る。黒褐色細砂が堆積する。土坑内から図示できる遺物は出土していない。

土坑SK27（図版58 写真図版59） SX03とSA01間、標高90.45m前後に位置する。涙滴形の土坑の西半部を更に隅丸方形に掘り下げ、古瀬戸四耳壺216と丹波焼擂鉢213・214・215を入れている。土坑は東西全長0.80m・方形部分の東西長0.48m、南北幅0.54m、深さ0.08mを測る。出土状況から古瀬戸四耳壺に丹波焼擂鉢をかぶせ横倒しで埋納した可能性が高い。土器を覆う埋土には多量の焼土・炭が入っている。古瀬戸四耳壺を骨壺、丹波焼擂鉢を蓋とした火葬墓であった可能性がある。

その他の遺構 土坑SK14・SK30・SK31・SK32は個別に遺構図を挙げていない。これらは東半部から検出されているが、性格等は不明である。SK14からは瓦器碗208、SK31からは瓦器碗209、SK32からは白磁玉縁口縁碗212が出土している。概ね13世紀代である。また、SK21（写真図版61）については、SX03上に掘り込まれており、SK01～04・06・07と同じく炭が堆積している。

2 G-2区の調査（図版53 写真図版51・52）

G-1区の南側に里道を隔てて位置する全長東西50m・最大幅南北17m、撥形に近い調査区である。面積695m²を測る。後世の削平のため遺構は残っておらず、落ち込みとピットを検出したのみである。

調査区の南半は概ね猪渕川の旧河道で占められている。旧河道の堆積中に遺物を包含しており、本発掘調査に含めたが、現猪渕川に近く、深い深度への掘削は実施できなかった。

旧河道中にはG-1区と同じ時期の中世を通しての遺物が含まれている。旧河道は幅9.00m以上・深さ0.60m、調査区を縱断しており、北側に少し弧を描いて北東へ流れている。

断面図1～4層は現代から近世の土層である。5層は砂礫層、6層・7層は褐・黒褐色極細砂の遺物包含層である。包含層には主に中世前期の瓦器碗片が含まれている。8層は更に古い礫層である。

第9節 H区の調査

H区は猪瀧川の南岸（右岸）に設定した調査区である。全体に猪瀧川へ向かって傾斜する北向きの扇状地に位置する調査区である。総調査面積は7,325m²を測る。

調査区は里道を挟み北側のH-1区・H-2東区と南側のH-2南区、西側のH-2北区・H-3区に分かれる。調査区が細分された理由は、埋設管・里道に起因する部分もあるが、その多くは本発掘調査開始時に住居等の立ち退きが完了していなかったためである。

1. 各区の概要

H-1区の概要（図版59～61 写真図版62・64・65）

H-1区は南北長83m・東西幅85mを測る釣鐘形の調査区である。南端の一角は構造物立ち退き後の次年度に調査を実施した（H-2東区）。調査面積は5,624m²を測る。

H-1区は北面する扇状地上に形成されており、全域より遺構が検出されている。調査区は現況では、大きさく4段の棚田となっており、南上段からH-1-1区～H-1-4区とした。各段は水田造成に伴い山側（南側）を削り、谷側（北側）に盛り土を出す作業を行っている。そのため、遺構は山側で削平のため密度が薄く、谷側では包含層が残り、遺構の密度が濃い。包含層が最もよく残る部分は調査区南西隅の一角で、この部分のみ、上下2面の遺構面で調査を行うことが出来た。

縄文時代中期後半～後期前半の住居址・11世紀代の溝、13世紀代の掘立柱建物跡・水田遺構・井戸・火葬址・墓・区画溝、室町時代～近世初頭にかけての建物跡・水溜遺構・焼土坑を検出している。

H-2区の概要（図版62・63 写真図版63・65・66）

H-2区は東西に長く凹凸のある調査区である。東端の地点をH-2東区、旧道路下をH-2中区、道路の北側をH-2北区、道路の南側をH-2南区と呼称する。合わせて1,005m²を調査した。

・H-2東区 平成23年度調査時に家屋が立ち退いていなかった地点である。鎌倉時代の建物跡、焼土坑、溝が見つかっている。SD319は平成23年度調査のSD02の延長部分である。屋敷地内の東西方向の区画溝であったと考えられる。11世紀代の溝である。

・H-2中区 旧道路下を対象とした調査区である。旧道路の下には上下水道管や消火栓、暗渠、排水溝が複雑に走り、遺構面まで擾乱が及んでいた。このため本報告書ではこの小区の記述は割愛した。

・H-2北区 中世の墓地跡（土葬墓群・火葬墓・集石墓）、鎌倉時代の溝、柱穴を検出した。

墓地跡は鎌倉時代後半～室町時代にかけ営まれたと考えられる。鎌倉時代の木棺墓1基・土坑墓2基、室町時代の火葬址・火葬骨を埋納したと考えられる集石遺構が検出された。鎌倉時代の木棺墓からは瓦器碗、室町時代の火葬墓からは腰刀・銭貨・中国南方系無釉陶器耳壺片などが出土している。

鎌倉時代の溝SD168は南北方向に走り、屋敷地の西側を限る溝であった可能性が高い。

・H-2南区 中世の柱穴群・多量の土器を投棄した石組み井戸、室町時代の石組土坑（水溜遺構）や円形土坑群、18世紀の埋桶群、地鎮めをしたと考えられる江戸時代の土坑を検出した。

井戸は鎌倉時代後半に廃棄されており、多量の瓦質羽釜、瓦器碗、須恵器捏鉢・甕とともに中国南方系灰釉陶器壺片が出土している。井戸は下層断ち割り調査により旧河道上に構築されていたことが判明した。この井戸の存在から、H-1区の屋敷地の南端が、調査区南側の尾根下まで及ぶことが判明した。

H-3区の概要と遺構（図版64 写真図版63・67・68）

南北長33m・東西27mを測る不整台形の調査区である。調査面積は696m²を測る。

調査区の南端には幅0.20m前後の浅い溝が数条東西方向へと走る。これはその向きからH-1区の犁跡へとつながる犁耕の痕である。

SD03は幅0.70m前後の浅いV字溝である。犁耕と併存する畠の溝と考えられ、H-1区のSD06へとつながる。これらの犁溝やSD06は、H-1区のSD07やSD11よりも新しく、中世後期以降の溝である。また、調査区北端のSD01・SD02もH-1区へと延びる。埋土より瓦器陶片が出土している。

集石を伴う落ち込みSX07は水田造成によって切られており、土師器小皿381・382、土師器鍋383、青磁碗384が出土している。SX07は更にSX08・SX10といった小ブロックに分かれる。性格は不明である。

2. H区の遺構分布

H区の遺構のなかで、最も古い遺構は、H-1区北端の、縄文時代中期後半～後期前半の住居址1棟のほか、前後する時期の土坑群である。

次に、11世紀代の黒色土器を含む溝SD02がH-1区南北端より検出されている。H区周辺に集落を形成し始める最初の例として注目される。H区の遺構の多くを占めるものは鎌倉時代（13世紀）の遺構と考えられ、H区のはば全城から柱立柱建物跡・土坑・井戸・墓・水田遺構・溝が検出されている。

屋敷地の南限はH-2南区まで広がり、北端はH-1区北端まで伸びる。H-2南区の南端からH-1区北端までは約100mを測る。東西方向では、H-1区東端からは水田遺構・井戸と共に、火葬址・墓が検出されており東端を認識できた。また、西端についても、H-2北区から南北溝SD168、墓地跡が検出されており、東西約70m前後の範囲に屋敷地が広がっていたことが判明した。また、H-3区において殆ど遺構が検出されないことも屋敷地外であったことを示している。H-1区の中央を流れるSD10・SD11は方位をN16°～24°Wにとり、東西34.00m以上・南北60.00m以上で巡り、生産域・墓域・小規模建物を大きく画す溝である。北東半の水田遺構の畦畔とその向きを同じくしており、西半部の大型の掘立柱建物跡とは向きを異にしているが、時期はともに13世紀代である。H区において検出された溝は、生産域側を区画しており、屋敷地（居住区）を区画する様な方形区画溝は見つかっていない。

北東部は谷地形となって低くなっているが、この部分では畦畔の痕跡が検出され、水田として利用されていることがわかった。周囲には同時代では少ない石組をもつ井戸も検出されている。

水田域の縁辺部では火葬址・墓SK18が検出された。SK18は火葬址上に納骨した遺構と考えられる。SK18と南側の塚状石積みの存在は居住区の東側を墓域として認識していたことを推定させる。

H-1区の南西部および北西部では室町時代の遺構が検出された。南西部では鍛冶炉や土師器皿を数枚埋納した土坑SK01などが検出され（上層の遺構）、鎌倉時代と重複して室町時代の集落の中心部が今回の調査区やその南西部に広がっていることが分かる。

また、北西部では石積み井戸や、溝を付属させ石組を有する方形の土坑数基が集中しており、中央部には焼土塊を埋土中に多く含む火廻と考えられる土坑が検出された。火や水を使用した生産活動を行う工房の可能性がある。丹波焼、備前焼、中国製染付が出土しており、付随する可能性のある建物跡の礎石から宋銭などが出土している。

江戸時代にはH-1区は田畠として利用していたと考えられる。素掘り井戸SE03が検出され木製の柄杓が出土している。江戸時代の屋敷地はH-2南区にあったと考えられ、江戸初期の水溜遺構や18世紀～19世紀の埋植が多数見つかっている。

3. 上層の遺構（図版66 写真図版69・70）

H-1区の南西隅の限られた部分から包含層を挟み上下2枚の遺構面を検出した。上層の遺構面からは、土坑2基、炉1基を検出している。遺構面の標高は97.50m～97.20m前後である。下層の遺構面とは0.10m～0.50mの包含層を挟む。上層の遺構面は概ね室町時代に相当する。

土坑SK01（図版66 写真図版69・70） 標高97.40m前後に位置する。軸をN10°Eにとる不整な楕円形を呈し、長軸約0.74m・短軸0.51m・深さ0.05mを測る。断面形状は浅い皿形で、土坑底は平坦である。鉄分を含む黄褐色シルトが埋土である。土坑の北半には土師器小皿257～266が埋納されている。小皿の内4点は正位、3点は逆位に据えられている。小皿の時期は15世紀代と考えられる。

土坑SK02（図版66 写真図版70） 標高97.20m前後に位置する。軸をN55°Wにとる不整な卵形を呈し、長軸約0.64m・短軸0.51m・深さ0.17mを測る。断面形状は深い箱形で、土坑底は中央が窪む。埋土はにぶい褐色極細砂、土師器小皿267が出土している。時期はSK01と同時期と考えられる。

炉1（図版66 写真図版70） SK01とSK02の間から検出された鍛冶炉である。検出面より0.03mの深さで、径0.30m前後の被熱酸化部と径0.20mの被熱還元部が検出された。良好な個体の遺物は出土していない。SK01・02と同時期と考えられる。

4. 下層の遺構

ここでは既に述べたH-3区以外の遺構について個々、まとめて述べてゆく。

（縄文時代の遺構）

堅穴住居跡（図版70・71 写真図版71・72） H-1区の西半で検出された。猪湖川に面する段丘崖の近くに位置する。SK29-3、SK29-4を切っている。削平を受けているため平面形は不明である。中央に石圓炉が存在し、炉をはさんで2基ずつ柱穴が存在する。石圓炉から柱穴付近の検出面が土壤化しており（図版71の点線範囲）、床面の可能性がある。柱穴・床面の範囲から直径は5.00～6.00mと推定される。

石圓炉：長30cm以下の扁平な石材を長方形（長0.50m×幅0.25m）に並べている。南北辺の石材は外側に傾けて置かれているが、東辺の石材は立てて、西辺の石材はかなり寝かせて置かれていることから、西側を焚き口としたと考えられる。石材の炉の内側に面した部分は被熱を受けている。掘方はややいびつな楕円形で、長1.25m、幅1.10mである。東端にピット状の部分があり、西端の石材の下に赤く被熱した部分が存在することから、炉は作り直されていると考えられる。

柱穴：柱穴は炉の北側で2基（P01・02）、南側で2基（P03・04）検出された。直径は35cm程度で、深さは75～55cmである。2本柱の住居が建て替えられたと考えられる。

遺物は、石圓炉埋土から縄文土器240・241が出土している。出土した土器の時期は縄文時代中期末である。石圓炉の掘方内東端のピット内から出土した炭化物の¹⁴C年代は2573calBC～2512calBC（60.4%）、2506calBC～2468calBC（35.0%）である。

土坑SK29-3（図版72 写真図版72） H-1区の西半で検出された。堅穴住居跡の石圓炉に切られる。平面形は不整形である。長さ1.10m、幅0.75mで、深さは0.20mである。遺物は出土していない。時期は遺構の切り合いから縄文時代中期末以前と考えられる。

土坑SK29-4（図版72 写真図版72） H-1区の西半で検出された。堅穴住居跡の石圓炉に切られる。平面形は楕円形である。長さ1.15m、幅約0.90mで、深さは0.45mである。遺物は出土していない。遺構

の切り合いから縄文時代中期末以前と考えられる。

土坑SK31（図版72 写真図版72） H-1区の西半で検出された。SK29-3に切られる。平面形は不整形である。長さ1.15m、幅約0.90mで、深さは0.45mである。南端部の埋土上層には長40cm以下の礫が認められた。埋土から縄文土器242が出土している。出土した土器は縄文時代中期末である。

（中世から近世の遺構）

掘立柱建物跡SB01（図版73 写真図版73） H-1区南北半において検出した。標高96.00m付近に位置する。東西軸をN88°Wにとる総柱建物跡である。東西3間（10.00m）、南北2間（7.00m）、総床面積70m²の規模である。建物の柱間は、東西は1間約3.30m・3.40m、南北は1間2.20mもしくは2.60mである。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm前後である。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB03（図版74 写真図版74） H-1区南端、標高97.00m付近に位置し、SB04と重複する。南北軸をN4°Wにとる総柱建物跡である。東西3間（8.00m）、南北2間（4.40m）以上、総床面積35.2m²以上、柱間は東西1間約2.60m～2.70m、南北1間2.20mを測る。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～40cmである。柱穴から土器類243が出土した。

掘立柱建物跡SB04（図版74 写真図版74） SB03と重複する。標高97.00m付近に位置する。東西軸をN90°Eにとる側柱建物跡である。東西2間（3.00m）、南北1間（2.10m）、総床面積6.30m²の規模である。建物の柱間は、東西は1間約1.50mである。

掘立柱建物跡SB02（図版75 写真図版73・75） H-1区西半において検出した。標高95.60m付近に位置する。東西軸をN90°Eにとる側柱建物跡である。東西5間（12.50m）、南北2間（4.40m）、総床面積55m²の規模である。建物の柱間は、東西は1間約2.30m・2.60m、南北は1間2.20mである。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～40cm前後である。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB05（図版76 写真図版65） H-1区南端、標高97.50m付近に位置する。南北軸をN37°Eにとる側柱建物跡である。南北1間（2.00m）、東西1間（1.60m）、総床面積6.30m²の規模である。建物の柱間は、東西は1間約1.50mである。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB06（図版76 写真図版65） H-2東区、標高97.50m付近に位置する。東西軸をN77°Eにとる側柱建物跡である。東西2間（4.90m）、南北1間（2.00m）、総床面積9.80m²の規模である。建物の柱間は東西1間約2.30mと2.60mである。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB07（図版78 写真図版73） SB01の北西隅、標高95.70m付近に位置する。コの字に柱穴が検出されており、開い状の遺構の可能性もある。南北軸をN27°Eにとる建物跡である。南北2間（4.20m）、東西2間（3.80m）以上の規模である。建物の柱間は、東西は1間約2.50m・1.20mである。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm前後である。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB08（図版77 写真図版92） H-1区北西半、標高94.30m付近に位置する。東西軸をN81°Eにとる側柱建物跡である。建物は台形状の床面プランとなっており、東西4間（もしくは5間7.40m）、南北東辺2間（4.40m）、南北西辺2間（4.10m）、床面積31.45m²の規模である。柱間は東西1間約1.40m、南北1間2.20mを基本としているが、ばらつきがある。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～50cm前後である。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。建物内側には東半部にSE01があり、井戸屋であった可能性がある。また、床面は井戸周りを含め、西半に比べ20cm程度高い。また、SB09と近接し、南桁行を描えている。

掘立柱建物跡SB09（図版77 写真図版76） H-1区北西半、標高94.30m付近に位置する。東西軸を

N75°Eにとる側柱建物跡である。建物は歪みが激しく台形状の床面プランをとなっており、東西7.40m、南北2間（3.80m）、床面積28m²前後の規模である。東西の柱間は不規則で、詳らかではない。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm～40cm前後である。柱穴からは瓦器椀248・254・255が出土している。また、P49には径35cm前後の礎石が掘えられており、掘え付け孔からは銭貨が出土している。唐銭・北宋銭である。またSB08と近接し、南桁行を描えている。時期は13世紀後半と考えられる。

掘立柱建物跡SB10（図版79 写真図版77） H-1区中央北端、標高93.50m付近に位置する。SK26と重複する。南北軸をN21°Wにとる総柱建物跡である。南北2間（3.80m）・東西2間（3.80m）、床面積14.44m²の規模である。SB11と類似した建物である。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm前後である。南辺の柱穴は深さ50cm前後を測り、深く掘らされている。図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB11（図版78 写真図版77） H-1区中央北半、標高94.00m付近に位置する。南北軸をN7°Wにとる総柱建物跡である。南北2間（3.80m）・東西2間（3.60m）、床面積13.68m²の規模である。柱穴は円形を基本とし掘方径20cm前後である。柱穴からは図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB12（図版79 写真図版76） H-1区北東において検出した。SD25と近接すると重複する。標高93.70m付近に位置する。東辺と南辺の柱を欠くが、南北軸をN23°Eにとる建物跡と考えられる。南北2間（3.60m）・東西2間（2.60m）、床面積9.88m²の規模である柱穴は円形を基本とし掘方径30cm前後で、深さ20cm前後を測る。図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB13（図版80 写真図版78） H-1区北東端、標高93.00m付近に位置する。SB14と重複し新しい、南北軸をN18°Wにとる総柱建物跡である。北西隅の柱を欠くが、南北桁行3間（6.40m）・東西梁行2間（5.60m）、総床面積35.84m²を測る。柱間は、南北は1間約2.20m、東西は1間2.70m・2.90mである。柱穴は円形を基本とし掘方径30cmである。図示できる遺物は出土していない。

掘立柱建物跡SB14（図版80 写真図版78） SB13と重複し先行する。東辺と南辺の柱を欠くが南北軸をN18°Wにとる側柱建物跡と考えられる。南北桁行3間（5.90m）・東西梁行2間（5.40m）以上、総床面積31.86m²以上の規模である。柱間は、南北は1間約2.10m・1.90m、東西は1間2.70mである。柱穴は円形を基本とし掘方径30cmである。図示できる遺物は出土していない。

礎石建物状遺構SB15（図版93 写真図版92） SK14・SK23と関連する建物状遺構としてSB15を挙げる。SK23の南辺と東辺に沿って南北3間（5.30m）・東西3間（4.00m）に巡る「コ」の字形の柱列を検出した。南北軸をN2°Eにとる。柱穴は円形を基本とし掘方径30cm前後、深さ40cmを測る。また、柱列と並行して、径50cm前後の規模をもつ礎石掘え付け孔と考えられる土坑列あるいは、礎石もしくは根太石と考えられる石列を検出している。これらは、柱穴の並びと重複もしくは並行しており、1建物の礎石と東柱、もしくは建て替えの可能性がある。

焼土坑SK301（図版81 写真図版79） H-2東区から検出した。SD319と切り合い新しい。標高97.20m前後に位置する。不整な卵形、長軸約0.68m・幅0.60m・深さ0.22m、断面形状は凹凸の激しいU字形である。各層に炭を含み、最下層を中心に被熱が顕著である。図示できるものは出土していない。

落ち込みSK03（図版81 写真図版79） H-1区南壁より検出した不定形の落ち込みである。標高97.40m前後に位置する。東西長1.70m・南北幅0.90m以上を測る。土坑は凹凸のある底部をもつ。埋土は灰黄褐色シルト質極細砂～極細砂、瓦器椀268が出土している。

土坑SK05（図版81 写真図版80） SB01の南西隅にある。標高96.10m前後に位置する。不整な俵形の形状を呈し、長軸約0.96m・幅0.75m・深さ0.12mを測る。断面形状は浅い皿状である。黄褐色極細砂～

細砂が堆積する。図示できる遺物は出土していない。

方形土坑SK06(図版81 写真図版79) H-1区南壁より検出した隅丸方形の落ち込みである。標高97.40m前後に位置する。東西長2.20m・南北幅2.20m以上を測る。土坑は浅い皿状で土坑底は平坦である。南東隅には径20cm前後の亜角礫による集石がある。埋土は暗灰黄色極細砂・黄灰色シルト質極細砂、図示できる遺物は出土していない。

土坑SK07(図版81 写真図版74) SB03の南西隅、標高97.20m前後に位置する。不整な「く」の字状を呈し、全長約0.50m・幅0.20m・深さ0.12m、断面形状はU字形である。土師器杯269が出土した。

土坑SK08(図版81 写真図版80) H-1区南東隅より検出したアーモンド形の落ち込みである。標高98.00m前後に位置する。南北軸をN0°Eにとり、南北長0.76m・東西幅0.44mを測る。凹凸のある底部をもち、にぶい黄褐色極細砂・シルト質細砂の埋土から2個の方形のピットを掘り込んでいる。

土坑SK352(図版81 写真図版80) SB06の南側にある。標高98.35m前後に位置する。不整な円形を呈し、径1.02m・深さ0.25mを測る。断面形状はU字形、底面は平坦である。黒褐色細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。

土坑SK04(図版82 写真図版80) SB01の南側にある管葉様の落ち込みである。標高98.20m前後に位置する。東西軸をN85°Wにとり、南北長3.80m・東西幅1.14m・深さ0.18mを測る。土坑底は中央が窪み、にぶい黄もしくは暗灰黄色極細砂・細砂を含む。図示できる遺物は出土していない。

土坑SK10(図版82 写真図版80) SD19と切り合い古い。SK11の南西にある。標高94.90m前後に位置する。不整な米粒形を呈し東西長軸2.05m・南北短軸1.15m・深さ0.25mを測る断面U字状の土坑である。3層～5層が土坑埋土である。

土坑SK11(図版82 写真図版80) SK10の北東にある。SD19と切り合い新しい。標高95.00m前後に位置する。中世包含層・マンガン集積層の下から検出された。隅丸方形に近い円形である。東西長1.70m・南北幅1.40m以上・深さ0.50mを測る鑿鉢状の土坑である。にぶい黄褐色細礫混じりシルト質中～細砂を埋土とする。図示できる遺物は出土していない。

土坑SK26(図版82 写真図版80) SB10及び繩文住居址と重複して位置する。凹凸のある不定形土坑である。長軸1.28m・短軸(最大幅)0.86m・深さ0.26mを測る箱形の土坑である。上層のにぶい黄褐色極細砂には炭・瓦器碗片を含んでいる。土師器小皿276が出土した。

井戸SE282(図版83 写真図版81) H-2南区北東端において検出された石組井戸である。標高98.00m前後に位置する。掘方は円形を呈し、南北・東西径ともに1.40mである。上半部は若干漏斗状に掘削されているが、概ね真っすぐに掘削され、約2.35mの深さを掘削し、旧河道の礫混じりシルト層へと到達している。石組の井戸側は内法約0.60mの円形に石材を積んでいる。石組は径40cm前後×20cm前後の自然石の小口面を内側に向け、概ね23段が残存していた。水溜部分は顯著なくぼみとしては検出されず、5cm前後の亜円礫が敷かれた状態で検出されている。但し、若干の木片が底面より検出されており、曲物が掘えられていた可能性も排除できない。井戸内から多量の土器が出土した点が、本井戸の特徴である。瓦質脚付き羽釜、瓦質羽釜を主として、土師器小皿、土師器壺、瓦器碗、須恵器壺・捏鉢、華南産灰釉長胴壺が出土している。このうち華南産灰釉長胴壺の接合破片がH-1区遺構面から出土している。これらの土器は井戸を埋め尽くす状態で入っており、井戸の廃絶に伴いまして投棄されたと考えられる。時期は13世紀後半と考えられる。

井戸SE01(図版83 写真図版82) 標高94.00m前後、H-1区SB08内側より検出した石組井戸である。

掘方は楕円形を呈し、長軸2.20m・短軸1.90mである。掘方はほぼ真っすぐに、2.00m前後の深さを掘削している。機械力を援用した半裁作業中に崩落したため、井戸底や裏込めの状況は不明な点が多い。石組の井戸側は中央よりもやや北側にあり、内法約0.65m～0.70mの不整円形に石材を積んでいる。石組は径20cm～40cm前後×20cm前後の自然石の小口面を内側に向けて積んでいる。用材はSE282に比べ大きい。井戸はにぶい黄褐色粗砂混じりシルト質極細砂と径15cm前後の礫によって埋められていた。上層の埋土黄褐色中砂混じりシルトからは明染付磁器小皿295が、下層からは鎌M67・M68・W32が出土している。

井戸S E02（図版84 写真図版82） H-1区北東半、水田遺構の西隣にある石組み井戸である。SB11の北側、標高93.30m前後に位置する。掘方は楕円形を呈し、南北長軸2.30m・東西短軸1.80m～1.90mである。ボウル状に深さ約0.40m掘削している。石組の井戸側は五角形に近い不整円形に石材を積んでいる。特に北東面は直線的に構築されている。内法の径約0.80m、五角形とした場合、一辺が約0.60m前後である。石組は径30cm～40cm前後の自然石（亜角礫）と径10cm前後の自然石（亜角礫）が使われ、高さ約30cm、1段・2段・4段と用材の法量によってランダムである。石積みの基底には径10cm前後の丸太材が敷かれ、軟弱地盤での沈み込みに対応している。本遺構は湧水を伴う地点に構築している点を考慮し井戸とした。埋土より土器壺W296・須恵器捏鉢297が出土している。13世紀代である。

井戸S E03（図版84 写真図版83） H-1区北西半、縄文時代住居址の南側に位置する素掘りの井戸である。標高93.30m前後に位置する。隅丸方形に近い平面形をもつ。南北長・東西幅ともに1.50m、深さ1.15mを測る。井壁は真っ直ぐに掘られ、底面は丸みを帯びる。土坑底の平面形はおむすび形である。井戸底には径20cm～30cmの亜角礫があり、その上より柄杓W27が出土した。

土葬墓・木棺墓 H区において検出した墓の内、土葬墓はすべてH-2北区から検出されている。木棺墓SK167（図版85 写真図版84） H-2北区南西隅より検出された木棺墓である。調査区南壁に一部が入るため全容は詳らかではない。標高97.10m前後に位置する。墓坑は不整な隅丸台形を呈する。検出全長1.50m・幅1.18m・断面は深い箱形を呈し、残存する深さ0.57mを測る。土坑底は平坦であるが、土坑底は北へ向かって傾斜を持つ。地形に合わせ、棺底との間に人為的な埋土9層・10層を入れる。木棺は南小口が調査区外にある。北小口が狭く、中央付近がやや膨らむ長方形の棺痕跡が検出された。検出全長1.34m・北小口幅0.47m・最大幅0.54m・深さ0.44mを測る。主軸をN22°Wにとる。棺内の北西隅には瓦器椀を伏せておいている。但し、椀は完形には復元できず、図化できなかった。もとから完存していないかった可能性がある。時期は13世紀代と推測される。

土坑墓SK155（図版85 写真図版85） 木棺墓SK167の東隣に並列する。調査区南壁に一部が入るため全容は詳らかではない。少し東へ歪む楕円形の掘方をもち、断面形状は深い箱形で底面は平坦である。主軸をN8°Wにとり長軸1.10m以上、短軸0.94m、深さ0.34mを測る。埋土は3層に分かれ、中層には若干炭化物を含む。図示できる遺物はなく時期は不明であるが、木棺墓SK167の掘方を埋める最上層（第63図 37層）が墓坑を直接被覆していることからSK167とはほぼ同時期もしくは、完全に埋没する時期が若干新しい点から、やや新しい時期に営まれた可能性がある。形状から土坑墓と考えられる。

土坑墓SK100（図版85 写真図版85） 集石遺構SK174の西隣、標高97.20m前後に位置する。隅丸方形の掘方が調査区南壁にかかる。南壁に大半が入るため全容は詳らかではない。断面形状は上面を浅く一旦下げた後、箱形に深く下げる。底面は平坦である。主軸をN15°Wにとり長軸0.40m以上、短軸は上部では0.90m、下底では0.66m、深さ0.40mを測る。埋土は6層に分かれ、3層と6層には若干炭化物を含む。図示できる遺物は出土していない。時期は不明であるが、SK155を被覆する層（第63図 14'層）を

墓坑が切っていることからSK155よりも新しい時期に営まれた可能性がある。遺構の性格は、その形状から土坑墓と考えられる。墓坑の最上層の形状は、木蓋の存在も視野に入れたい。

土坑墓SK174下層（図版85 写真図版85） 集石遺構SX174の下層、標高96.80m前後に位置する土坑である。舌状の掘方が調査区南壁にかかっている。南壁に大半が入るため全容は詳らかではない。断面形状は深い船底形、底面は平坦である。底面は平坦である。主軸をN25°Wにとり長軸1.00m以上、短軸は0.74m深さ0.50mを測る。埋土は4層に分かれ、明褐～黄褐シルト～粘土が入る。図示できる遺物は出土していない。時期は不明であるが、SX174の集石が被覆していることからより古い時期に営まれた可能性がある。遺構の性格は、その形状から土坑墓と考えられる。

火葬址・火葬墓 SK157以下 土坑は炭・焼土を伴い、壁面が被熱することから、墓地にあることを考慮し、火葬址もしくは火葬墓として扱った。明確に火葬址と考えられるものはSK157であり、SK157は同一土坑内において埋骨を行っていると判断している。

火葬址・墓SK157（図版86 写真図版86・87） 標高97.00m前後、SK177と切り合い検出されている。SK177と先後関係は明らかではなく、上層の炭化物はSK177と同一起因の可能性がある。遺構は火葬址をそのまま火葬墓（納骨施設）として使用する茶毬墓である。ここでは火葬址・墓とした。火葬址は木棺をそのまま墓坑に埋置し、火葬したものである。木棺の痕跡を残している。

・**墓坑** 長楕円形、軸方向をN84°Eにとり、東西長軸約1.73m・南北幅0.80m前後・深さ0.42mを測る。断面形状はやや丸底の箱形である。

・**木棺** 全長1.45m・幅0.75m（底面幅0.50m）・深さ0.35mを測る。軸方向はN84°Eにとる。

・**火葬址（下層）** 墓坑縁部分が被熱、赤変している。6層・7層・8層には多量の炭・焼土が含まれており、人为的に埋め戻されている。特に8層は地山土ブロックを多く含む。

・**火葬墓（上層）** 6層の上面には径10cm内外の亜角礫が集中している。集石部分が窪んでおり、この部分が納骨施設であった可能性がある。

・**遺物出土状況** 図版86の縦断面図に、各遺物を透視図として記入した。火葬址を埋めた7・8層中は褐釉陶器片が含まれており、7層上面からは、褐釉陶器片・銭が出土している。6層上面には短刀M26・銭M70・土師器小皿が出土している。6層上面もしくはそれより上面の遺物は火葬墓の石組と同時期もしくは後に入れられたと考えられる。これらの遺物から時期は14世紀代に入ると考えられる。

火葬址SK177（図版86 写真図版87） 標高97.00m前後、SK157と切り合う。土坑は卵形、東西長軸約0.64m・南北幅0.50m前後・深さ0.25mを測る。断面形状は丸底である。上層には、焼土・炭を含み、下層には含まない。SK157と先後関係は明らかではなく、上層の炭化物はSK157と同一起因の可能性がある。火葬址ではなく、SK157の炭を始末した遺構の可能性もある。図示できる遺物は出土していない。

火葬址SK158（図版87 写真図版87） 標高97.00m前後、SK157とSK174の間にある。土坑は楕円形、南北長軸約1.00m・東西幅0.70m前後・深さ0.26mを測る。断面形状は丸底である。1・2層には、焼土・炭が含まれている。壁面は被熱している。丹波焼擂鉢294が出土している。

火葬址SK156（図版87 写真図版84） 標高97.10m前後、SK157とSK174の間にある。土坑は楕円形と考えられるが、南縁をサブトレンチで損壊している。長軸約0.90m・短軸0.50m以上・深さ0.10mを測る。断面形状は皿状である。埋土には炭化物を含んでいる。図示できる遺物は出土していない。

火葬址・墓SK18（図版87 写真図版88・89） 標高93.30m前後、中世水田中から検出した。遺構は火葬址をそのまま火葬墓（納骨施設）として使用する茶毬墓である。本稿では火葬址・墓とした。

・火葬址（下層） 軸方向をN 4°Wにとり、長軸1.45m・短軸0.97m・深さ0.15mを測る米粒形の形状の火葬土坑（火葬址）である。土坑の断面形状はU字形、底面は平坦である。土坑の南北両端には径20cm前後の亜角礫が並べられており、土坑底には3か所の被熱痕がある。土坑底には炭屑（4層）が堆積しており、掘方に沿う5層は石材を据え付ける掘方埋土である。形状から火葬炉と考えられる。使用されている石材の大半は裏表が被熱しており、複数回石材が使用されている。

・火葬墓（上層） 土坑中央に石材が集中しており、その周囲に炭化物が少ない第2層が堆積する方形落ち込みを検出した。南北0.62m・東西0.65mのほぼ正方形、深さ0.08m前後を測る。方形落ち込みからは刀子茎の可能性がある鉄製品M40が出土している。火葬骨の出土はないが納骨に伴う木箱が推定される。

・標石 中央にある棒状の石材は被熱しているが、火葬墓に伴う標石として再利用されたと考えられる。主頭・角柱に近い自然石を部分的に加工したものです、全長42cm・幅15cm・厚さ12cmを測る。主頭下の表面と下端に加工痕があり、下部10cmが変色している。立てられていた可能性がある。

集石遺構S X174（図版88 写真図版90） H-2北区南東隅、標高96.90m前後に位置する。東・南側は調査区外に伸び、形状・規模は詳らかではないが、北西隅にコーナーを持ち方形を志向している。東西軸N78°E、東西長約4.80m以上・南北幅約2.20m以上・深さ0.20mを測る。土坑の東半部にはほぼ正方位を向いた南北長1.80m・東西幅1.60mの範囲の集石が存在する。集石の西辺と南辺の縁には径20cm~40cmの比較的大きな石材を使用しており、内側に10cm内外の小礫を敷いている。内法1.3m四方程度の方形石組であった可能性がある。図示できる遺物は出土していない。集石遺構の性格は不明であるが、火葬墓の可能性がある。下層からはSD168及び土坑墓SK174下層が見つかっている。

塹状石積み遺構（図版89 写真図版91） H-1区東半、標高97.00m~96.60m前後に位置する。径2.00m程の範囲に径10cm~20cm前後の自然石が密集している。集石はなだらかな斜面に築かれ、厚さ0.30m内外の盛土・集石を施し盛り上げている。北面の石材は斜面に貼り付ける様に立てている。集石を断ち割ったが土坑などの施設は確認できなかった。集石間から白磁玉縁口縁碗底部375が出土している。

H-1区の水溜遺構群（図版90 写真図版92） H-1区北半に集中して検出された遺構群である。南側（斜面上部）にSX03とSX05・06に分かれ、何れも北流する溝を伴っている。これらの遺構の中で、SX03~SX06は水溜遺構と考えられる。対して北半には集石を伴う焼土坑と井戸・建物跡が検出されており、工房的な意味合いをもつ。

土坑SK12（図版91 写真図版93） 標高93.90m前後、北側を水田造成に伴い失っている。土坑は長方形、南北長軸約1.50m以上・東西幅1.14m・深さ0.40m、断面形状は箱形である。集石上の1層には、焼土・炭が含まれており、壁面は被熱している。丹波焼甕272が出土している。時期は16世紀代である。

土坑SK13（図版91 写真図版93） 標高90.90m前後に位置する。土坑は隅丸方形、長辺1.40m・短辺1.30m、断面形状はU字形で、東側には段をもつ。暗灰黄・灰黄・にぶい黄色極細砂が堆積している。瓦器小杯273が出土している。

土坑SK19（図版91 写真図版93） 標高93.70m前後に位置する集石土坑である。不整形・凹凸形状の落ち込み、集石をもち円形を呈する。径1.60m・深さ0.50mを測る。断面形状は丸底である。瀬戸美濃系折皿274が出土している。SD22bと重複するが先後関係は不明である。埋土に違ひはない。

土坑SK25（図版91 写真図版93） 標高94.10m前後、SK14とSK23の間に位置する。土坑は空豆形、軸をN74°Eにとり長軸約1.10m・短軸0.74m・深さ0.18mを測る。断面形状はU字形、上層は黄褐色粗砂混じり極細砂～細砂、若干の焼土・炭を含み、土坑底にはオーリーブ褐色シルト質極細砂が埋積する。

集石焼土坑S K14（図版94 写真図版95） H-1区の北西部で検出された方形堅穴状の遺構である。北東部からSD22に向かって排水溝が延びている。平面形はほぼ正方形で、N 7°Wに向く。東西3.20m、南北3.00m、深さは0.25mである。床面は平坦で、壁はなだらかに立ち上がっている。遺構に伴う柱穴などは確認されなかった。南辺から西辺にかけて焼土塊が密に堆積しているが、床面そのものには明瞭な被熱の痕跡は認められなかった。焼土塊（写真図版149）はスサを含み、木材の痕跡の認められるものがあることから被熱を受けた壁土と考えられる。中央では長30cm以下の礫が集中して認められた。良好な個体の遺物は出土していない。時期はSX03・SD22などと同時期と思われる。

集石遺構S K23（図版93 写真図版94・95） 標高94.00m前後に位置する建物状遺構SB15と関連する遺構である。SD22と重複し、本来の形状は明らかではない。南北5.80m以上・東西6.00m以上の規模の浅い皿状の落ち込みである。内部に径20cm前後の角礫を敷いている。土師器鍋275が出土した。

水溜遺構S X04（図版94 写真図版96） H-1区の北西部で検出された水溜状の遺構である。

東西4.50m、南北2.50mの平面台形で、深さは0.40mである。南辺と北辺の一部に石列が認められ、北辺の石列の底には根太の材が残っていた。石列の認められない部分では杭の痕跡が認められることから、板材などで壁を押さえていたと思われる。土師器皿367、備前焼擣鉢368・369、丹波焼甕370～372が出土している。土師器皿の年代から16世紀と考えられる。

水溜遺構S X03（図版95～97 写真図版96・97・98） H-1区の北西部から水溜状の遺構などが複合して検出された。北側にはSD22・23が接続している。水溜状遺構のSX03-3は水溜状遺構のSX03-4を切って設けられ、SX03-4上層の石列はSX03-4下層を埋めて作られている。

SX03-1は1.80m、南北1.40mの平面長方形の水溜状遺構で、深さは0.30mである。北辺の肩部には長1.6mの丸太材が据えられている。北辺の石列の底には根太の材が残っていた。床面直上には薄い木葉などの腐植物層があり、漆器椀W26、加工材W27、馬糞の歯W28・29が出土している。埋土上層では長50cm以下の石材を東西方向に並べていた。土坑の南側に接して東西2.00mの石列も設けられている。

SX03-3は石組みをもつ水溜遺構である。掘方は東西3.70m、南北2.00mの平面長方形で、深さは0.50mである。石組は東西北辺と南辺の西端に設けられている。西辺の石組みの裾には根太が据えられている。南西隅は1辺0.50m、深さ0.20m掘り下げられている。

SX03-2・4は段差のある平坦部である。SX03-4下層を埋め、SD22の東辺延長部に石列を設けて、東側のSX03-2部分を0.25m高くしている。作業スペースとして平坦面を確保したものと思われる。

SX03-4下層は南辺に石列をもつ水溜状遺構である。東端はSX03-1と接続する溝が連なっている。東西2.80m、南北2.00mの平面不整形の部分が、1段深くなっている。南辺の石列はやや弧状に湾曲しており、長2.20m、高さ0.20mである。

SX03-1から青磁碗365、漆器椀W26、加工材W27、馬糞の歯W28・29、SX03-2から丹波焼甕366、SX03-3から唐津焼椀364が出土している。新しく設けられたSX03-3から16世紀末から17世紀初の唐津焼椀364が出土していることから、概ね16世紀代と考えられる。

水溜遺構S X05（図版98 写真図版99） H-1区の北西部で検出された水溜状の遺構である。SX06の大半を埋めて縮小した水溜遺構である。SX05の北側には、明瞭に検出できなかったが、SD28に接続する浅い溝が存在したと思われる。SD28との接合部の南北方向の石組みがそれに伴うものと思われる。規模・形態は東西1.70m、南北2.60mの平面長方形で、深さは0.50mである。南辺と東辺はSX06の壁を利用し、北辺と西辺を石組としている。東側にステップ状の部分が付いている。

良好な個体の遺物は出土していない。他の水溜遺構と同様の時期と考えられる。

水溜遺構 S X06（図版99 写真図版99・100） H-1区の北西部で検出された水溜状の遺構である。南側にSD28が接続している。南北6.50m、東西6.50m以上の平面方形である。中央の方4.00m程度の範囲が1段深くなっており、検出面からの深さは0.50mである。南辺と東辺の一部には石列がある。北辺部の石列は、SD28の南辺に位置し、溝をSX06の西側に迂回させた可能性が考えられる。良好な個体の遺物は出土していない。他の水溜遺構と同様の時期と考えられる。

水溜遺構 S X299（図版100 写真図版101） H-2南区西端、標高98.40m前後、SK300と南北に直列する位置にある。石組みを伴う水溜状遺構である。土坑は軸方位をN12°Wにとり、規模は長軸2.50m・短軸は1.80m、深さ0.38mを測る。長40cm前後・幅20cm前後ほどの石材を横積みに1段で積み上げ、内法長軸1.80m前後・短辺0.90m前後・高さ0.15mを測る石組みを造り上げている。南側は開放されているが、崩落した石材が検出されており四周に石材を使用して石組が造られていたと考えられる。石組の内側を中心には径5cm～10cmの小径のビットが穿たれている。石組の崩落を防ぐためのビットと考えられる。最上層の埋土はSX299と同じである。中層以下には焼土・炭化物が含まれている。土坑内より唐津焼皿376・377が出土しており、16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。

水溜遺構 S X300（図版100 写真図版101・102） SK299と南北に直列する位置にある石組みを伴う水溜状遺構である。標高98.50m前後に位置する。土坑はSK299と南北に直列する位置にある。土坑は楕円形を呈し、南端に不定形の落ち込みが取りつく。軸方位をN14°Wにとり、規模は、楕円形部分で長軸2.00m・短軸は1.84m、深さ0.42mを測る。土坑内には石材が転落しており、SX299と同じく石組みがあったと考えられるが、元位置を残すものが残存していなかった。最上層の埋土はSX299と同じである。中層以下の埋土には焼土・炭化物が含まれていない。土坑内より土師器小皿378・京都系土師器皿379・備前焼壺380が出土している。16世紀後半から17世紀初頭の時期と考えられる。

H-2区の近世土坑 以下、SK201～その他の土坑まではすべて近世の土坑である。

土坑 SK201（図版101 写真図版103） H-2南区中央、標高98.55m前後に位置する。SK277に近接する。径0.50m前後、深さ0.07m前後を測る不整円形の土坑である。断面形状は皿形である。土坑底には土師器小皿280・281、行平鍋282が出土した。

土坑 SK277（図版101 写真図版104） H-2南区中央、標高98.50m前後、SK201に近接する。軸をN70°Eにとる楕円形の土坑である。長軸1.30m、短軸1.12m、深さ0.28m、断面形状は箱形である。形状はSK280に類似しており、桶が据えられていた可能性がある。明石焼擂鉢285が出土した。

石組土坑 SK231（図版101 写真図版103） H-2南区西南隅に位置する。標高99.00m前後にあたる地點から検出されている。擾乱によって一部損壊しており、更に削平されることから、形状・規模は詳らかではない。恐らく長軸2.00m以上、短軸1.30m以上、深さ0.03mを測るアーモンド形の浅い土坑である。土坑内に径20cm前後の石材を使用した石組が巡る。石組の内法は長軸1.30m、短軸0.80m以上を測る、長軸を等高線と平行にとる楕円形の土坑である。図示できる遺物は出土していない。

集石土坑 SK233（図版101 写真図版103） SK231と隣接し、SK232を損壊する。標高98.40m前後に位置する。長軸1.60m、短軸1.30m、深さ0.20mを測る不整な楕円形（隅丸五角形）の土坑である。断面形状は箱形である。図示できる遺物は出土していないが埋桶SK232より新しく近世と考えられる。

埋桶 SK227（図版101 写真図版104） 標高98.40mに位置する。径0.80m、深さ0.30mの掘方に径0.64m・底径0.58m・深さ0.18m以上の桶を据える。底板が残存しており、土師器小皿283が出土した。

埋桶SK232（図版101 写真図版103・104） SK231と隣接し、SK233によって損壊される。標高98.40m前後に位置する。径1.30mの掘方に径0.85mの桶を据える。図示できる遺物はない。

埋桶SK280（図版101 写真図版104） H-2南区中央東より、SK281の南側、標高98.50mに位置する。長軸1.50m、短軸1.30m、深さ0.32mの掘方に径・底径0.94mの桶を据える。断面形状は箱形である。出土遺物はないが、周辺の検出例から推して近世の遺構と思われる。

埋桶SK281（図版101 写真図版104） H-2南区中央東より、SK280の北側、標高98.40mに位置する。径1.60m、深さ0.40mの掘方に底径1.30mの桶を据える。断面形状は箱形である。径5cm内外の礫を密に投入している。瓦類のほか染付碗286・瓦質製品287が出土している。19世紀代である。

埋桶SK283（図版102 写真図版105） SK281の東側、標高98.30mに位置する。径1.30m、深さ0.44mの掘方に内径・底径0.98mの桶を据える。掘方断面は箱形である。図示できる遺物はない。

埋桶SK294（図版102 写真図版105） H-2南区東半、SK281の南側、SK295と並ぶ。標高98.10mに位置する。埋桶が据えられていたと考えられる不整円形の土坑である。径1.25m、深さ0.40mの掘方、断面形状は箱形である。図示できる遺物はない。

埋桶SK295（図版102 写真図版105） SK281の東隣、標高98.10mに位置し、SK294と並ぶ。埋桶が据えられていたと考えられる不整円形の土坑である。径1.20m、深さ0.30mの掘方に内径・底径0.98mの桶を据えていたと考えられる。掘方の断面形状は箱形である。図示できる遺物はない。

土坑SK289（図版102 写真図版105） SK281の西隣、標高98.50m前後、SK290に切られる。長軸1.85m、短軸1.30m以上、深さ0.45mを測る不整梢円形の土坑である。断面形状は深い鉢形である。土坑を切り長軸1.10m・短軸0.90mの梢円形土坑が検出されたが、土層断面と整合しなかった。土坑内より肥前系染付磁器碗290・三田青磁鉢291・明石焼擂鉢292が出土した。

埋桶SK290（図版102 写真図版105） 標高98.50m前後、SK289を切る俵形の土坑である。南北長軸1.25m、短軸0.82m、深さ0.16mを測る。断面形状は浅い皿形である。

その他の土坑 SK287はSK277の東側にある不整形土坑である。磁器仏具289が出土した。SK284からは染付小碗が出土している。

円形土坑群SK101～108・SK110・SK208・225（図版103・104 写真図版106・107） H-2南区西半より検出した。径0.80m前後・深さ0.65m前後の円形土坑が密集している。土坑は南北3列・東西3行で整然と並んでいるが、周囲のSK108・SK110・SK114・SK208なども土坑群に含まれると考えられる。土坑底面の大半が平坦であり、SK101・SK103では断面に埋桶状の土層が確認されており、埋桶群の可能性を考えられる。土坑内から図示できる遺物の出土はなく、時期は不明である。土坑群の位置は、18世紀代の埋桶群とは重複しておらず、中世末から近世初頭のSX299・SX300の東側に位置し、SK310はSD229に切られ上部を削られていることから、江戸時代前半以前と推測できる。

下層方形土坑（図版103 写真図版106） 土坑群SK112・SK113、SK111の下層から検出した。長辺約1.00m・短辺約0.70m・深さ0.14mを測る不整な長方形の可能性が高い。遺物の出土がなく、時期・性格は不明である。土坑群の下層から検出されているが、円形土坑を切る部分も存在する。

溝SD02・SD319（図版67・105 写真図版108・110） H-1区南西隅及びH-2東区より検出した。標高97.20m前後で検出した東西方向（N86°～84°E）に走る溝である。SD319はSD02の延長上と考えられ、同時に述べる。両溝を合わせ、検出全長24.00m・幅0.53m・深さ0.12m、断面形は逆台形である。SD02の埋土はにぶい黄褐色極細砂～シルト質極細砂、SD319は黒褐色粗砂混じり細砂と違いがある。

SD02では黒色土器385～387が出土しており、SD319からも黒色土器417が出土している。位置関係からは、SD02・SD319はSD337・347と直交し区画を造っていた可能性がある。

溝S D318（図版67・105 写真図版65・110） SD319の北側にあり、東西方向（N83°E）に並行する溝である。H-1区にも延長が検出されている。検出全長12.40m・幅0.50m・深さ0.08m、断面形は浅い逆台形である。灰黄褐色粗砂混じり細砂が堆積する。

溝S D03（図版67・105 写真図版108） SB03の南桁行の南側を東西方向（N85°E）に走る。全長5.80m・幅0.24m・深さ0.04m、断面形は浅い弓形である。灰黄褐色極細砂が堆積する。図示できる遺物はない。SB03の雨落ち溝の可能性がある。

溝S D06（図版67・105 写真図版108） H-1区中央西壁から東西方向に走り（SD06西）、トレンチ102を介し更に東側へ延びる（SD06東）。犁跡と並行し、東西方向（N83°W）に走る検出全長38.50m、幅約0.38m～0.60m・深さ0.17m、浅いU字状もしくは中央が窪む不整形の断面形状をとる。暗灰黄色極細砂を埋土としている。図示できる遺物はない。

溝S D07（図版67 写真図版108・109） H-1区中央を南から北へ流れる溝である。全長17.00m・幅1.60m・深さ0.15m前後を測る。SD11と並行し、南北方向（N16°W）に走る。東西方向の犁溝に切られる。土師器388が出土している。流末近くで西側へ分岐している。

溝S D09（図版68・105 写真図版109） H-1区南半東端から検出した。SD013・14と並行し、東西方向（N73°E）に走る。検出全長13.00m、幅約0.44m・深さ0.20m、U字状の断面形状をとる。灰黄褐色極細砂が堆積する。明染付皿391が出土している。16世紀代である。

溝S D10（図版67 写真図版108・109） H-1区南東から、中央を流れめる溝である。東西方向から北へと向きを変えSD11と並行・重複し新しい。南北方向（N21°～24°W）に走る。全長17.00m・幅0.50m～1.20m・深さ0.20m前後を測る。本溝の南東端の延長上にはSD09があり、中程からはSD19が重複する。断面からは両溝は並走もしくはSD10が新しいと考えられる。埋土は黄褐色極細砂質細砂に径20cm前後の自然石が多量に入っている。流末は水田造成の段差と削平により不明である。

溝S D11（図版67・68・105 写真図版108・109） H-1区中央を南から北へ流れ北側を水田造成により消失する。検出全長9.40m・幅1.56m・深さ0.22m前後、底面は凹凸が激しい。SD07と並行しSD10と切り合い古い。南北方向（N16°W）に走る。暗灰黄色極細砂～細砂が埋積する。土師器皿392・土師器杯393・瓦器小皿394・瓦器碗395・土師器鍋396・瓦質羽釜397～400が出土した。13世紀代と考えられる。

溝S D13・14（図版68・105 写真図版109） H-1区南半東端から検出した。SD09と並行し、東西方向（N70°E）に走る。幅0.15m～0.20mの浅いU字状の断面形状をとる。灰黄褐色極細砂が堆積する。形状からともに犁溝と考えられる。

溝S D15（図版68） 水田区画A・B間を東西・南北方向に流れる不定形の溝である。幅0.20m～1.00m、深さ0.04mと極浅く、水田区画に伴うものと考えられる。瓦器小皿401が出土した。

溝S D19（図版68・105 写真図版109） 東西方向（N80°E）に走り、北方向（N21°E）へ向きを変え、SD10と重複し古い溝である。東西方向部分は浅く、幅0.60m・深さ0.05m、南北方向は幅0.40m・深さ0.25mを測る。灰黄褐色極細砂～細砂が堆積している。図示できる遺物は出土しなかった。

溝S D22（図版69・105 写真図版94・109・110） SX03-4上層から流れ出る南北方向（N6°E）の溝である。暗灰黄～にぶい黄褐色極細砂によって埋積している。検出全長30.00m以上、SD23を切り、若干蛇行しながら段丘端まで伸びている。溝幅は場所によって変化がある。SX03-4部分では東西両岸に

護岸の石組が存在した可能性が高く、東岸をSX03-4東壁として図示した。西壁は崩落しているが、石材の残り具合から内法0.20m~0.30mの溝であったと推定される。SB08と重複する部分では左岸（西岸）に石積みが存在した可能性が高く、石材が崩落している。SD22北断面では溝幅1.70m・深さ約0.50mで箱形に掘削され、SB08以北では素掘りとなる。本溝は2カ所で分岐がある。以下それぞれb・cとする。

・SD22b SB08と重複する部分で、二股に分かれる。削平部分を含め延長7.00mほど、幅1.10m前後・深さ0.40mを測る。南北方向ほぼ正方位に2.5mの間を空けてSD22と並行する。分岐部分を石組によつて塞いでおりSD22よりも先に機能を失っている。灰黄褐色極細砂によってSK19と共に埋積している。

・SD22c SX03-4集石下に西肩が通り、SK23周辺でSD22と分岐し北流する。幅0.60m内外・深さ0.20m前後、黄灰色極細砂が埋積する。SB08周辺では削平とSD22bによって明瞭でないが、SK19を損壊した可能性がある。SX03-4断面（図版95）から推してSD22（石組溝）以前の可能性が高い。SD22北半から丹波焼甕406・青磁碗407、SD22南半（もしくはSD22b）から丹波焼擂鉢404・備前焼擂鉢405が出土した。これらは概ね15世紀代の土器である。

溝SD23（図版92 写真図版94） SX03-2下層から流れでる南北方向（N19°W）に走る検出全長4.00m、幅約0.80m・深さ0.41m、U字状の断面形状をとる溝である。SD22に切られる。黄褐色極細砂を埋土とする。方向から推してSK19東側を通るSD22b部分に至っている可能性があるが、確証はない。

溝SD21・27（図版69・105 写真図版109・110） H-1区中央北端から検出した。東西方向から北へと向きを変え、東西方向（N16°W）に走り調査区外へ流れだす。水田造成により途中消失した部分があり、南半部をSD21、北半をSD27とした。水田造成により途中消失した部分もあるが、途切れた部分を含め、検出全長39.50m、幅0.40m~2.00m・深さ0.15m、深いU字状の断面形状をとる。埋土はSD21部分では灰黄褐色極細砂～細砂、SD27部分では上層はにぶい黄褐色極細砂・下層は暗灰黄色極細砂を埋土とする。SD21の南延長線上にはSD10・SD19が存在するが、関係性は不明である。合流し、SD10・SD19の流末である可能性も残る。また、SD21と重複する溝（全長4.3m）がSD10・19と関連する可能性も考えられる。SD21からは瓦器椀402が出土している。SD27からは須恵器四耳壺403が出土している。

溝SD28（図版69・105 写真図版110） SX06北辺の石組を南壁とし、弧を描いて南北方向（N8°W）に向きを変え、北流する溝である。SX06からの取りつきは、SX06の北西隅にあったと考えられ、石列が途切れた西端の部分が角となっている。流末は水田造成によって削平され、明らかではない。溝幅は1.00m前後・深さ0.40mを測る。深いU字形の断面形状をとり、溝底には灰黄色粗砂～中砂が堆積している。溝は当初SX06の東側を流れていた可能性があり、南肩の石列の東端もまた角をもつ形状である。その場合、図版99の土層11が溝底の埋土となる。図示できる遺物はない。

溝SD168・SD175（図版63・105 写真図版110） SD168はH-2北区東端から検出した。南北方向（N13°W）に走り検出全長9.40m、幅約0.40m・深さ0.34m、箱形の断面形状をとる。地山を含んだにぶい黄褐色シルト混じり細砂を埋土とし、瓦器椀416が出土した。鎌倉時代と考えられる。SD175はSD168に切られた溝である。南北方向（N2°W）に走る。検出全長4.00m、幅約0.70m・深さ0.14mを測る。

溝SD229（図版62・105 写真図版110） H-2南区中央西よりに位置する。南北方向（N5°W）に走り、検出全長7.00m、幅約2.54m・深さ0.50m、U字もしくはなだらかな片葉研の断面形状をとる。流末は若干東側へのカーブをみせており、北辺の段落ちに続いて行くと考えられる。埋土は底面にオリーブ黒色細砂混じりシルト・中層に褐灰色シルトが堆積する。何れも自然堆積である。上層には黄褐色シルトの盛土が入る。染付碗418が出土しており、SK227・SK289と同時期の18世紀代と考えられる。本溝の北延

長上にはH-2北区のSD168（鎌倉時代）があり、古い地割を踏襲している可能性がある。

水田遺構（図版68・106・107 写真図版64・111）

H-1区北東半からは水田遺構が検出された。水田遺構は、旧谷部・旧河道の凹部が埋没、湿地化し、水田化した、いわゆる谷水田である。標高95.00m～93.50mにかけて検出した。大きくはSD19の北側で検出されている水田A～HとSX07の東側で検出された水田I～Tに立地は分かれ、間の部分は削平のために残っていない。水田遺構は2枚存在する。重複関係から上層を水田遺構（畦畔）A、下層の水田を水田遺構（畦畔）Bとする。水田土壤は旧河道が埋没した上に構築されている。

水田遺構A 水田遺構Bと重複し新しい。旧河道の形状に沿った区画ではなく、N5°～7°W方向に軸をもつ畦畔を検出しておらず、現在へと続く水田区画の方向に軸をもつと考えられる。後世の耕作により水田区画の残りが悪く、辛うじて東西方向に走る幅0.40m前後の溝や水田J上層にある畦畔、南北方向の中規模畦畔などを検出している。溝は火葬墓SK18の上面を通り、畦畔は何れも下層水田の上層から見つかっている。また、溝SD29・SD30は水田遺構Aに伴うものと考えられる。

水田遺構B 主に、等高線に沿って検出された水田遺構をBとした。SD19・SD21・SD27といったN16°W前後に走行を持つ溝によって区画されていた可能性が高い水田遺構である。顕著なものは、SD19と並行する水田A～H、水田JやSX07の南側に存在する水田Xなどの畦畔が対応する。これらの区画の内側には更に非常に不整形な、概ね幅5.00m内外の水田区画が見つかっている。

水田土壤直上層からは土師器皿432・瓦質脚付き羽釜433が出土している。水田土壤中からは瓦器椀435、水田Dからは土師器小皿422・423、瓦器椀425・426・427、瓦質羽釜428・429、瓦質羽釜脚430が出土している。また、水田Iから土師器小皿436、青磁碗437が出土している。

水溜遺構SK20（図版108 写真図版112） 水田Dを切って掘削された石組みを伴う水溜状遺構である。

軸方位をN56°Eにとる卵形の掘方をもち、東西長軸2.80m・南北短軸は2.05m、深さ0.60mを測る。中央北よりにL字形に石壁が造られ、前面に杭を打ち込み、横桟を渡して土留めをしている。石壁はN75°Eにとり、一辺20cm～50cmほどの石材を横積みに2段から4段で積み上げ、東西内法長辺1.50m・南北内法短辺0.40m前後・高さ0.50mを測る。コーナーの集石の性格は不明である。瓦器椀277・瓦質羽釜278・須恵器捏鉢279が出土している。SD24とも同時期と考えられ、13世紀前半代と考えられる。

溝SD24（図版108 写真図版112） 水田R北側、標高92.80mに位置する。東西方向（N80°E）に走る。検出全長3.50m、幅約1.00m、U字状の断面形状をとる。溝の向きはSK20の石壁と同じくし、水田畦畔Aとも同じくする。一辺10cm前後の角礫と共に土師器小皿408、瓦器椀409、瓦質脚付き羽釜410・411、瓦質羽釜412・413、羽釜脚414、龍泉窑刻花文青磁碗415が出土している。13世紀後半である。

水溜遺構SK21・溝状遺構SX07（図版109 写真図版111） H-1区水田遺構西端において検出された石組みを伴う水溜状遺構SK21と、水溜遺構に流れ込む溝状遺構SX07である。

・SK21 全長1.70m・幅1.60m・深さ0.50mを測る隅丸台形の土坑である。底面は丸い。土坑はSX07に掘り込まれており、その部分の断面は2段になっている。土坑底の標高は92.90m前後である。土坑の南・東・北側の縁には0.30m～0.40m間隔で杭が打ち込まれている。

・SX07 検出全長約9.00m、水田区画に従い東側から廻り込み、北側へ向かいSK21に流れ込む。流末部分は開放されず、丸みを帯びた溜まりとなっている。SK21は溜まり部分を掘り込み、杭を打ち込んだ施設である。左肩部の石列はSX07が埋没した後にSX07の肩部に沿って造られた南北方向（N35°W）の畦畔（の芯材）である。水田K・水田L・水田Sに対応すると考えられる。瓦器椀362が出土している。

第10節 遺 物

1. A区の遺物

土 器（図版110～114 写真図版113～119）

A-1・2区出土土器（図版110・111 写真図版113・114）

SK01より中津式直前段階の縄文土器が3個体分出土している。1～4は同一個体。口縁部が緩やかに内湾しつつ立ち上がり、微隆帯によって口縁部文様帯と胴部文様帯を区分する。緩やかな波状口縁を呈し、口縁端部にはキザミを施す。口縁部主文様はなく、「エ」字状の区画側文様は不完全な磨消縄文となる。胴部文様は涙滴文であるが外郭線が横走沈線によって連結する。また、2は磨消縄文意匠、3は隅丸長方形の意匠であり、同一個体内でも文様・施文方法は一様ではない。文様構成・沈線内刺突からは平式の影響を読み取れる。5は文様帯を屈曲によって区分するもの。口縁部は無文、胴部は涙滴文だが外郭線上部が開いて縦位の直線状になる。6・9は同一個体の無文土器。口縁部より縦位の帶縄文を施す。7・8は平底の底部で7は5と同一個体と思われる。

10～12はSX02から出土した。10・11は手づくね成形の土師器小皿である。12は黒色土器碗A類である。

13～18はSX01から出土した。13は土師器鍋である。播丹型の鍋で、口縁端部外縁がやや突出する。14は黒色土器碗A類である。15～17は須恵器壺である。7世紀前後のものと思われる。18は須恵器壺の底部である。体部外面は回転ヘラケズりが施されている。

19～25はA-1・2区包含層の出土土器である。19は黒色土器碗A類底部である。20は須恵器杯Bである。高台は短く直立する。9世紀代の製品である。21は須恵器壺口頭部である。口縁端部を打ち欠いている。礫層内より出土した。22は肥前系陶器皿底部である。底部外面は露胎、17世紀代の製品である。23は同安窯製青磁碗I b類である。トレンチNo.4より出土した。24は青磁錦運弁文碗である。遺構面直上の灰褐色泥隕シルトより出土した。25は龍泉窯製青磁碗である。内面に五弁蓮花の刻印がある。

A-3区出土土器（図版111～114 写真図版114～119）

26～99はA-3区の遺構から出土している。

26～30はSB03に伴う柱穴から出土した。26は土師器杯である。底部が平坦で、体部はやや内湾する。口縁部外・内面はヨコナデを施し縁部は外反する。体部外面・底部外面は粗いナデ・ユビオサエを施す。灯火具として使用されている。27は土師器杯である。体部・口縁部はやや内湾する。外面はユビオサエの後ナデを施す。28は断面三角形の高台を貼付した土師器碗である。器高は低く、口縁部は強いヨコナデによって外反し、下部に稜をもつ。29は土師器碗もしくは杯・皿の底部である。円盤状の底部に低く立ち上がる杯部を貼付する。底部は回転ヘラ切りの後ナデ調整を施す。30は小型の土師器壺である。底部を欠く。最大腹径は体部下半にあり、口縁部は短く外反する。外面は乱方向のハケを施す。

31～36・41は土鍤である。33はSK105、41はSK101、その他はSB03に伴う柱穴から出土した。概ね全長4cm・径1.2cm前後を測る。37と40はSB02に伴う柱穴から出土した黒色土器A類碗である。37は断面三角形の高台を貼付した底部である。内面には一方向のヘラミガキを密に施し、体部との境には横方向のヘラミガキを施す。40は口縁端部内側に弱い沈線が巡り、内面全体には非常に密にヘラミガキを施し、口縁部外面は縦方向のヘラミガキの後、横方向にヘラミガキを施している。38はSB06のP45から出土した土師器小皿である。丸みを帯びて体部は立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は外反する。口縁部は強くヨコナデされ、体部との境に稜が出来る。端部は摘み上げられ、内面に沈線が巡る。10世紀前半代

と考えられる。39はP46から出土した土師器杯である。平らな底部から丸みを帯びて体部は立ち上がり、口縁部は直口する。ユビオサエにて整形されている。42はP28から出土した須恵器皿である。底部外面は回転ヘラ切りの後、板状工具でナデ調整を行なう。内面は擦り、平滑である。10世紀後半代と考えられる。43はSK02より出土した須恵器碗もしくは杯である。丸みを帯びた底部から外方へ直線的に杯部が立ち上がる。口縁端部は端反りする。44はSK101より出土した小型の土師器甕である。下半を欠く。口縁部は短く外方へ屈曲する。外面はタテハケを施す。2次焼成を受けている。45は透明釉（柿釉）が掛かる施釉陶器小皿である。底部は回転系切りを施す。灯明皿に使用され、口縁部には煤が付着する。46はSK108から出土した須恵器台である。受け部は丸みを帯び、外面には波状文と凹線が巡り、口縁端部は内傾する面をもつ。6世紀代である。47は須恵器広口壺である。口縁部を欠く。底部は一段突出し、胴部中位が大きく張る。外面は5本単位の叩き目を施した後、ナデ消している。10世紀後半代と考えられる。48はSK06から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。丸みを帯びた底部に、口縁部は短く外方へ開き、端部は紡錘形である。口縁端部上面は強いヨコナデによって拡張し面をもつ。ユビオサエ整形を行い、口縁端部はヨコナデ、その他の内外面はナデ調整を施す。16世紀～17世紀代と考えられる。

49～99はSX01の土器である。49～67は土師器杯である。49～63・65は底部が平坦で、体部・口縁部はやや内湾する。口縁部外面及び内面はヨコナデ、体部外面・底部外面は粗いナデ・ユビオサエが施されている。64・66・67は底部が平坦で、体部・口縁部はやや直線的である。口縁部外面・体部外面・内面はヨコナデ（底部内面がナデの場合もある）、底部外面は粗いナデ・ユビオサエが施されている。68～74は土師器甕で、小型の球胴甕である。73以外は口縁部内外面にヨコナデ、体部外面に板ナデあるいは粗いナデ、体部内面に板ナデあるいはナデが施されている。73は口縁部外面にヨコハケ、口縁部内面にヨコナデ、体部外面にタテハケ、体部内面にナデが施されている。75は土師器鍋で、外面はタテハケ、内面はヨコナデが施されている。76～85は黒色土器である。いずれも内面のみが黒色処理されたA類で、ヘラミガキが施されている。76は黒色土器皿である。輪高台をもち、口縁部外面はヨコナデ、底部外面・体部外面下半はヘラケズリ、体部外面上半は粗いナデ・ユビオサエが施されている。77～81は黒色土器杯である。77・81は口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリ、78～80は外面にヘラミガキが施されている。82～85は黒色土器碗である。輪高台をもち、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にヘラケズリが施されている。86・87は須恵器皿である。86は輪高台をもち、87は平底である。88～90は須恵器杯Aである。底部はヘラ切り後ナデが施されている。91は須恵器杯Bである。94・95は須恵器壺である。94は肩部に断面三角の突帯をもっている。95は底部が糸切りである。92・93・451は綠釉陶器碗である。焼成は軟質で、淡い緑色の釉はほとんどはげ落ちている。底部は削り出しの蛇の目高台である。京都産と思われる。96は輪の羽口である。97～99は土鍤である。

100～109は中世水田に関係した土器である。

100～102は中世水田土壤より上層から出土した。100は須恵器壺高台である。細片のため正位は定かではない。101は施釉陶器小壺である。算盤玉状の体部下半まで天目釉が掛かる。18世紀代の関西系陶器である。102は染付磁器碗である。初期伊万里焼、17世紀前半の製品である。

103～109は中世水田土壤中から出土した。103は手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部は強いヨコナデによって外反する。底部は欠くが、盛り上がりを見せ、いわゆるヘソ皿の形態であったと考えられる。15世紀代と考えられる。104は手捏ね成形の土師器小皿である。口縁部は強いヨコナデによって屈曲し水平に伸び、端部外側に面をもつ。11世紀後半代と考えられる。105は瓦器碗である。

口縁部は強いヨコナデによって外反気味となり、体部との境に稜が生じている。外面に密にヘラミガキを施す。106は瓦器椀である。外面すべてに炭素が吸着する。口径に対し、器高はやや低く1/3である。底部内面は丸い。底部から口縁部へは直線的に立ち上がり、口縁端部は外反する。底部には断面三角形の低い輪高台が貼付される。内面見込みには平行文の暗文が施され、体部下半から口縁部下にかけて横方向（あるいは円錐状カ）に暗文がなされている。内面口縁部端から外面口縁部はヨコナデが施される。体部外面はユビオサエ後ナデ調整を施している。107は小型の須恵器瓶底部である。外面は回転ヘラケズリ、底部は回転ヘラ切り後ナデを施す。108は白磁口禿皿（IX-1 a類）である。13世紀後半～14世紀前半代と考えられる。109は白磁端反碗である。横田・森分類V類に属する。

110～123は包含層などから出土した。110は手捏ね成形の土師器小皿である。平坦な底部から短い口縁部が立ち上がる。111は土師器椀底部である。厚目の底部から外方に開く。底部は静止糸切りである。112は暗褐色砂（包含層）から出土した土師器椀である。厚目の底部から真っ直ぐ外方に開く。底部は回転糸切りである。113は瓦器椀である。底部から口縁部へ内湾気味に立ち上がり、口縁部は強いヨコナデによって直口し、口縁部下に稜をもつ。114は暗褐色砂（包含層）から出土した須恵器杯Bである。高台は踏ん張りを欠く。10世紀代と考えられる。115は須恵器杯身である。116は須恵器椀である。形態は白磁端反り口縁碗に類似している。体部中位には6カ所列点がある。117は須恵器壺口縁部である。外反し端部を上下に拡張し、外側に面をもつ。118はA-3-1区西端の微高地上から出土した須恵器双耳壺である。119は暗褐色砂（包含層）から出土した須恵器広口壺口縁部である。外反し、端部外側に面をもつ。120はA-3-1区西端の微高地上から出土した縁釉陶器椀底部である。121は白磁玉縁口縁碗底部である。122は確認トレンチ9より出土した。水田土壤を被覆する灰色洪水砂礫より出土した青磁蓮弁文碗底部である。123はA-3-1区西端の微高地上から出土した土鍤である。

金属製品（図版114 写真図版119～121）

M3はA-1区から、それ以外のM1からM12はA-3区から出土している。

M1はSK05出土の板状の鉄製品で、厚さが1cm近くある。鋳造品と思われる。

M2はSX01出土の雁股飾である。ほぼ完形を保っており、全長9.05cm、刃幅4.15cm、茎長3.6cmを測る。比較的浅い削り込みの内側に刃を付けるが、余り銳くはない。茎の断面は方形を呈す。

M3・M4は一端を折り返して頭部を作った棒状を呈したもので、M3は下端部が屈曲する可能性がある。角釘ではない。M4は角釘かもしれない。

M5は断面が「V」字を呈した鋳造と思われる厚手の鉄製品の破片で、犁先の破片と思われる。

M6は一端を薄く叩き伸ばして直角に折り曲げる巻頭釘である。中途で折れ曲がり、先端を欠失する。

M7～12、74～79は埋桶から出土しており、スプーン等も含まれる（写真図版120）。埋桶からは近代までの土器が出土している。

M7・M8は銅鏡で、寛永通寶である。鋳化が著しいが、X線撮影の観察によって「寛」「寶」の下部の様相が新寛永（1668～）と思われる。共に無背鏡である。

M9は銅製のおろし金である。柄部を欠くが、側辺を二重に折り曲げて縁を作っており、細かく上下から目立てられた刃がX線撮影で観察できる。刃は一定の単位では列を成しているが、比較的乱れて立てられている。裏面にも縁が立ち上がっており、両面使用のおろしであろう。

M10は銅製の小型釣り鐘で、鋸が緩やかな稜をもって広がる西洋のベルの形態をもつ。外面には二重の筋が2ヶ所に鋳出されている。頂部には長方形の釣り手部があり、小穿孔がある。内面にも突起があり、

孔は観察できないが、舌を吊り下げたものであろう。

M11は断面が円形に近い銅線を2本重ねたもので、一端を叩いて板状に接合している。

M12は一端を薄く叩き伸ばして直角に折り曲げる巻頭釘である。中途で折れ曲がり、先端を欠失する。

M72・73はA-3区の水田土壤中から出土した鉢型鉄滓である。写真のみ挙げた（写真図版119）。

製品ではないが、スラッグM80～M102がA-1・2区の暗渠から出土している。写真のみ挙げた（写真図版120・121）。ここでは、大きく法量から3タイプに分け掲載した。

石製品（図版115・116 写真図版122～125）

打製石器はA-3-1区SK01から出土した楔形石器S10以外は包含層から出土したものである。平基式石鎚S1、凸基式石鎚S2、石匙S3、石錐S4・5、スクレーパーS6～8、楔形石器S9・10、石核S11・12、剥片S13が出土している。

磨製石器及び石製品はA-1区SK01から磨製石斧S14、敲石S15・16、磨石S17、砥石S18、凹石S19、石皿S20～25、石錐S26、A-3-1区SK01から砥石S27・28、A-3-2区包含層から石臼S29が出土している。S20～25の石皿はすべて削れており、被熱しているものと思われる。

木製品（図版117 写真図版126）

W1からW18はA-3区から出土しており、W9が溝内、W18が水溜遺構から出土したほかはすべて水田土壤層からの出土で、確認調査時出土（W13・W14・W16）も合わせて報告する。水田土壤層直上には陶器・染付が含まれており、耕作によって近世までの遺物が混入する可能性があるが、この水田土壤層は中世前半に属するものと考えられる。

W1は牛の鼻輪である。イヌガヤの枝付きの心去り材を用いて、枝のしなりを利用して鼻輪部の先端を引き棒の穿孔にはめ込むものである。鼻輪部の先端は欠損する。引き棒は断面隅丸長方形に全面を丁寧に加工しているが、鼻輪部は樹皮を除去した程度の加工である。引き棒の穿孔は両面から刃物によって開けられており、一部後線を残す。明瞭な使用痕は確認できない。H区からは馬歎も出土しており、山間の水田を牛耕していた光景が想像される。県内では多可町坂本・クゴ田遺跡からも17世紀前葉までの例が井戸から出土しているが、鼻輪部を引き棒の孔に挿入し、木釘で留めている。

W2は針葉樹の半彫目材を用いた曲物底板である。直径34cm程度の円形或いは梢円形の曲物が復元できる。厚さが1cmを超えており、桶の底板の可能性もある。目釘穴は認められない。

W3は針葉樹板目材を板状に加工したもので、一方の長辺を欠失するが、やや湾曲した板材を作り出している。大型の桶の搏板などに用いられたものを再加工して作業台としている。短辺は鉈状の工具によって切削しており、当初の加工かもしれないが、もう一方の短辺は削りの痕跡を残して斜めに切り落としている。表面には短辺方向や斜め方向に無数の細かい刃物傷が残されており、鋭い刃物を用いた作業台として使われていたことがわかる。裏面は風化が著しいが、刃物傷は認められない。

W4は針葉樹板目材を用いており、一短辺を丸く加工している。やや厚みがあるため棒状の器形をもつものであろう。

W5は針葉樹板目材の薄板である。一短辺をやや斜めに切っているが、曲物側板の一部かもしれない。

W6は針葉樹板目材の薄板で、一部が焼けており、両長辺を欠失する。一短辺は断面が斜めになるようにならへてやや湾曲させて切削しており、もう一短辺は表面から刃物を入れるが、裏面まで到達せず、折り取っている。曲物底板を再加工したものであろうか。

W7～W11は針葉樹を用いた付け木と思われ、一端が焼け焦げている。

W7は板目材を用いた細板で、表面・側面に刃物によって削った痕跡が認められることから、製品を再利用したものと思われる。W11では上端部を薄く作っており、へらや切匙の再利用かもしれない。W8では下端を斜めに切り落としており、松明を作る際に打ち込みやすいように加工したものであろう。そのほかは加工痕が認められず、端材などを割り裂いて作っている。

W12・13は焼けた痕跡はないが同様の付け木と思われる。

W14・15は針葉樹板目材の割材で、板状のものである。加工痕はほとんどないが、W15の上端部には刃物を入れてから折り取っている。

W16～W18は杭である。W16・W17は丸太杭で、W16は針葉樹の一端を5方向から一部に刃こぼれのある刃物で尖らせている。W18はクリのミカン割材の一端を5方向から削って尖らせており、切削面が大きく平らなことから、よく切れる幅の広い刃物を用いたものと思われる。

2. B区の遺物（図版118 写真図版127）

124は埋桶より出土した軒平瓦である。

125はかまど1・2の前室より出土した施釉陶器鉢である。内面には白泥を塗り、窯詰めには陶片をかませた痕跡がある。

3. D区の遺物（図版118 写真図版127）

土器（図版118 写真図版127）

126～133はD-3区から出土した。

126はSD13-aから出土した土器小皿である。ユビオサエ整形後、ヨコナデを施す。

127はSK22より出土した、瓦質羽釜の脚片である。

128は包含層より出土した瓦器碗である。内面下半にヨコナデの後ヘラミガキを施している。

129は機械掘削時に出土した須恵器杯である。底部はヘラ切り未調整、やや突出する高台を持つ。

130は包含層より出土した須恵器捏鉢である。外側に面をもつ。12世紀後半代と考えられる。

131は機械掘削時に出土した黄瀬戸皿である。底部外面に窯道具が付着している。

132は包含層より出土した明染付皿である。底部は甚苟底を呈し、外面に芭蕉文、内面には「寿」が描かれている。

133はSD13上層から出土した犬形土製品である。右前・後肢を欠いている。

452・453・454は写真的みあげた。何れもD-1区の旧河道部分から出土しており、河道埋没に伴う遺物である。452は須恵器杯蓋である。9世紀代と考えられる。453は青磁蓮弁文小碗片、口縁端部が小さく玉縁状を呈している。454は須恵器広口壺頸部である。

金属製品（図版118 写真図版127）

M13はD-3区の中段の機械掘削の際に出土した。鉄製の刀子で、茎先端を欠くが、残存長10.6cm、刃幅1.7cmを測る。背闊は明瞭であるが、刃闊は緩やかである。

木製品（図版118 写真図版127）

W19はD-3区SD25Cから出土した杭W1である。クリのミカン割材を用いており、上半部は腐朽により失うが、厚い板状をなすことから、矢板状の使われ方をしていたものであろう。下端から22cm上から大きく削り込んで細く尖らせている。

W20はD-3区SD13から出土した杭である。クリの丸太材の下端を8方向から削って尖らせている。用いられた工具は鋭利なものである。上半部は、加工痕は不詳であるが、やや扁平に成形されている。

W21はD-3区SD23から出土した杭である。クリの丸太材の下端を8方向から削って尖らせており、1面がきわめて大きいため、断面は扁平になる。

4. E区の遺物（図版119 写真図版128）

土器（図版119 写真図版128）

134はSD01より出土した黒色土器椀である。外面には横方向のヘラミガキが密に認められる。

135はSD02より出土した瀬戸美濃系天目茶碗である。口縁端部は端反りし、口縁部下が屈曲し稜を持つ。中世後期の製品と考えられる。

136は南東部の包含層から出土した土師器小皿である。ユビオサエ整形の後、口縁部を強いヨコナデによって外反させている。底部は浅く、体部との境に稜をもつ。

137は東半部の遺構面上から出土した土師器椀である。外面はユビオサエ整形、内面にはヨコナデ調整が認められる。

138は土師質もしくは焼成不良の三足脚の瓦質香炉である。上半部に文様が残るが詳細は不明である。

139は包含層から出土した瀬戸美濃系天目茶碗である。口縁端部は端反りし、口縁部下が屈曲し稜を持つ。中世後期の製品と考えられる。

140は外面に黒褐色釉がかかる施釉陶器の容器である。底部は平坦であり、離れ砂が付着する。

141は遺構面上から出土した龍泉窯青磁鑄蓮弁文碗である。13世紀代と考えられる。

142は包含層から出土した青磁蓮弁文碗である。蓮弁は退化し鎬は消失している。

143は龍泉窯青磁細蓮弁文碗、蓮弁は退化し鎬は消失する。15世紀後葉から16世紀前葉と考えられる。

144は包含層から出土した染付磁器碗底部である。底部は連子碗状に丸く突み、高台は高く、糸高台である。高台裏には「福」の字が描かれている。国産磁器と考えられる。

その他、室町時代の黄瀬戸皿455・青磁蓮弁文碗456が出土している。455は黄瀬戸皿の底部である。輪状に窓道具が融着している。456は青磁蓮弁文碗である。幅の広い蓮弁が描かれており、鎬は消滅している。時期は15世紀代と考えられる。

金属器（図版119 写真図版128）

M14はE-1区西半部包含層出土の板状鉄製品である。一端は欠失するが、もう一端は尖らせ気味に作る。端部は少し反らしている。鎌などの刃物の茎部か。

石製品（図版119 写真図版128）

S30は滑石製温石である。石鍋の胴部片を再利用している。中央部に外面から内面に向けて穿孔、貫通している。

5. F-1区の遺物（図版119・120 写真図版129~131）

土器（図版119・120 写真図版129~131）

145・146はSK242から出土した。145は弥生土器壺である。短く「く」の字に外折する口縁部の下に3条のヘラ描き沈線が巡る。時期は弥生時代前期末～中期初頃と考えられる。146は弥生土器壺である。肩部以下が残る。145とは別個体と考えられる。外面底部と体部の境にタテハケ調整を施し、内面にはヨコ

ハケ調整を施す。時期は弥生時代前期末～中期初頃と考えられる。

147～156は柱穴から出土した。147・148はP135の柱痕より出土した。147は手捏ね成形の土師器皿である。ユビオサエ整形を行い、底部は丸く、口縁部は強いヨコナデによって外反する。11世紀後半～12世紀前半と考えられる。148は瓦器小皿である。ユビオサエ整形を行い、底部は丸く、口縁部は短く直立する。内面にはヘラミガキが見られる。149は瓦器椀である。厚手の器壁を持ち、外面にはユビオサエ痕が見られ、ヘラミガキは見られない。内面にはヘラミガキが残るが、二次焼成のため、明確ではない。三角形の短い高台が貼り付けられる。12世紀後半代と考えられる。150はSB01を構成するP45より出土した土師器杯である。丸みを帯びた底部から内湾気味に立ち上がり、端部外面にやや強いヨコナデによる凹みをもつ。12世紀中頃と考えられる。51はP188より出土した小型の土師器甕である。口縁部は短く屈曲し、端部には外傾する面をもつ。外面の調整はタテハケと考えられる。

152はSB01を構成するP65より出土した土師器甕である。口縁部は短く屈曲し、端部には外傾する面をもつ。頸部下が張り、最大径をもつ。153はP186より出土した土師器鍋である。口縁部は短く屈曲し、端部は摘み上げられ、外側に面をもつ。頸部下を欠くが、鍋形の器形と考えられる。

154はP198より出土した須恵器杯Aである。杯部下半はやや内湾気味、口縁端部は若干外反する。

155はP121より出土した東播系須恵器甕である。口頸部には左上がりの叩きを施し、肩部には格子状に叩きを施す。156はP194より出土した縁釉陶器椀もしくは皿の口縁部である。細片のため器種は不明である。

157～164は土坑から出土した古代の土器である。157はSK156、158・159はSK157より出土した土師器杯である。157は丸みを帯びた底部から外方に立ち上がり、口縁端部は丸く収める。口縁部はヨコナデ調整、内面は丸くヘラミガキを施す。158は底部が157より丸みをもち、口縁端部は強いヨコナデによって若干外反する。159は157と形状は類似しており、口縁部外面に強いヨコナデによる沈線状の凹みが生じている。内面はナデ調整である。160は黒色土器A類（内黒土器）椀である。底部を欠く。外面は、口縁部はヨコナデ、体部は左上がりのヘラケグリを施す。内面は横方向のヘラミガキを施す。161はSK163から出土した手捏ね成形の土師器皿。口縁部は強いヨコナデにより心持ち外反する。162はSK164から出土した土師器甕である。口頸部を欠き、球形の体部をもつ。外面には粗い並行叩きを施し、内面は当具痕をハケ状工具でナデ消している。163はSK168から出土した須恵器杯Aである。底部は回転ヘラ切りの後若干ナデ調整を施しており、平坦である。杯部は外方に直線的に開く。164はSK166から出土した土師器鍋。外方に直線的に立ち上がり、口縁部は「く」の字に屈曲し伸びる。

165～175は主に調査区の南端（上段部）東半の包含層から出土している。165と175は灰茶色土から出土した。165は土師器小皿である。回転ヘラ切り離しの平坦な底部に短く外方へ開く口縁部がつく。175は白磁端反り口縁碗である。166から172は包含層（黒褐色土）より出土した。166は土師器杯Aである。丸みを帯びた器形を持ち、口縁部外面にヨコナデ、体部外面にユビオサエ後、板状工具によるナデもしくは削りが施されている。郡家今城遺跡に類例が知られ、9世紀前半に遡る可能性がある。167は土師器椀底部である体部との境に断面三角形の高台を貼付する。内面には焼成後に刃物によって付けられた、十字を含む刻線がある。9世紀後半から10世紀前半と考えられる。168は土師器甕口縁部である。口縁部は短く屈曲し、端部には外傾する面をもつ。外面の調整はタテハケ、内面はヨコハケである。169は小型の土師器甕である。口縁部は短く屈曲し、端部は丸く収める。頸部から少し下がった所に最大径をもつ。外面の調整は摩減・剥離のため詳らかではない。内面は強いヨコナデを施す。170は黒色土器A類（内黒土

器) 梗である。底部を欠く。外面は口縁部まで左上がりのヘラケズリを施す。内面は横方向のヘラミガキを施す。171は須恵器小皿である。小破片のため明確ではないが高台が付くものと考えられる。丸みを帶びて立ち上がり、外反して口縁端部は水平に伸びる。172は須恵器杯Bである。ヘラ切り未調整の底部にやや外方へ踏ん張る細身の高台が貼付される。杯部は外方に真っ直ぐ伸びる。内外面にロクロ目が顕著である。173は黒褐色土下の遺構面上から出土した縁釉陶器梗底部である。内外面に施釉する。底部外面は回転ヘラ切り、高台部はヘラケズリにより突出する。174はトレンチNo.56の石垣裏込めより出土した瀬戸美濃系と考えられる青磁碗底部である。内面には砂目が付着する。

図示した遺物以外に457~461の写真を掲載した。

457・458はP102・103下層より出土した。457は縄文時代中期末新段階深鉢Bの口縁部である。2破片は、同一個体と考えられる。458は縄文時代中期末の北白川Cの深鉢片である。波状口縁部である。

459は調査区の南端(上段部)東半の包含層から出土した縁釉陶器口縁部片である。460・461は南端(上段部)東半の黒褐色土より出土した。460は白磁皿底部片である。内面に芭蕉文の模様を施す。大宰府分類の白磁皿Ⅷ-2b類、11世紀後半~12世紀前半の時期である。461は須恵器壺肩部である。球形の体部に細頭が付くものと考えられる。

金属器(図版120 写真図版131)

M15・M16はF-1区から出土した。

M15は中段のP47から出土した板状の鉄製品で、棒状のものが外れた痕跡が残る。

M16は一辺が薄くなるが、刃を付けたものではない。鋳造か。

石製品(図版120 写真図版131)

S31は砥石である。すべての長側面を良く使用している。一端を欠く。

木製品(図版120 写真図版131)

W22は確認調査トレンチNo.12の谷部の暗灰色シルトから出土した板状のもので、針葉樹の柾目材を用いている。長さ16.25cmの板材で、両長側辺を失う。短辺は一方は直角に切られ、もう一方はやや斜めに切り落とされており、相掛け接ぎのはざが切られている。組み合わせの箱物の部品と考える。

6. F-2区の遺物(図版121・122 写真図版132・133)

土器(図版121 写真図版132)

176~180は、177を除き、SB01を構成する柱穴から出土した。177が出土したP23についても関連する可能性がある。176はP02より出土した土師器小皿である。口縁部は「て」の字状を呈し、端部は摘み上げられる。11世紀前半代と考えられる。177はP23から出土した土師器小皿である。厚手の造り、2次焼成を受け、器壁は剥離している。178はP01から出土した瓦器梗である。口縁部内外面は横方向のヘラミガキ、体部内外面は短いヘラミガキが連続している。内面見込みには平行線の暗文を施している。和泉型瓦器梗のI期に属している。11世紀後半代と考えられる。179・180はP16から出土した。179は須恵器杯身状の製品である。丸みを帯びた底部から杯部が立ち上がる。口縁部端を欠く。外面はナデ・回転ナデ、内面には見込みに平行、杯部に横方向のヘラミガキを密に施している。180は須恵器捏鉢である。角頭の口縁端部をもつ。12世紀前半の製品と考えられる。

181~183は各土坑から出土した。181はSK14から出土した土師器羽釜である。円筒状の体部に短く太い三角形の脚が巡る。14世紀代か。182はSK17から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。器高が低く、

立ち上がりに乏しい。浅い器形である。183は集石遺構から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。器高が低く、立ち上がりに乏しい浅い器形である。口縁部は紡錘形を呈し厚みをもつ。

184～187は溝状遺構から出土している。184はSD08から出土した器高の低い瓦器碗である。底径は広く口径の1/3を超える。低い断面三角形の高台が貼付される。体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部は心持外反する。外面体部には横方向のヘラミガキ、内面見込みには螺旋状、体部から口縁部には横方向のヘラミガキを施す。185はSD09から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。器高が低く、立ち上がりに乏しい浅い器形である。186はSD10から出土した土師器小皿である。底部はヘラ切りの後ナデ調整、口縁部は短く外方に伸びる。187はSD10の上層から出土した土師器鍋である。体部は強いヨコナデによって凹線が巡る。口縁部は端部が屈曲し受け口状となる。

188～194は包含層出土の遺物である。188は手捏ね成形の土師器皿である。丸みを帯びた底部に外方へ伸びる口縁部をもつ。外面に粗痕がある。189・190は上段谷部肩から出土した。189は無釉陶器鍋である。口縁端部が外側に拡張し、播磨形甕タイプI類の形態をもつ丹波焼と考えられる。時期は13世紀後半と考えられる。190は小型の瓦質三足脚付き羽釜である。口縁部は内湾し、上端に面をもつ。断面三角形の脚は短く水平である。脚の脱落面には煤が付着しており、脚破損後も使用している。H区SE282出土の328と類似しており、13世紀中頃と考えられる。191は大型の瓦質羽釜である。口縁部は緩やかに内湾し、強いヨコナデによって微かな凹凸を生じる。端部は丸みをもつ。角頭の脚は水平に伸びる。192は大型の瓦質羽釜である。短く立ち上がる口縁部に角頭の短い脚が付く。H区SE282出土の347・349と類似しており、13世紀中頃と考えられる。193は谷部から出土した須恵器捏鉢である。口縁端部が肥厚し外側に面をもつ。13世紀前半代と考えられる。194は龍泉窯青磁鎬連弁文碗である。鎬の稜はやや甘い。大宰府分類II類に属する。13世紀前半代と考えられる。

金属製品（図版122 写真図版132）

M17～M19はF-2区から出土した金属製品である。

M17は銅製で表面の剥がれた部分の色が金色掛かっているが、X線撮影では変化は見られないことから鍍金ではない。銅板を筒状に丸めておそらく蝋付けしており、一端には小段を設けて蝋付けの痕跡が見られることから、煙管の雁首で、火皿が外れたものと思われる。基部側の口径1.0cmを測る。

M18は断面方形の鉄製品で釘であろう。

M19は铸造と思われる断面三角形の鉄棒で、底面から斜めに立ち上がる体部をもつ。五徳などの脚部であろうか。

石製品（図版122 写真図版132・133）

F-2区の包含層から石錐（S32）、石硯（S33）が出土している。

石錐（S32）は木の葉様の形状である。

S33の石硯は中世の漆器硯箱の構成を模している。硯部上方には水滴を置く直径3.2cmの穴がうがたれ、穴の周囲には菊花状の飾りが刻まれている。硯部・水滴の右側には懸子の区画が表現され、わずかに残存する横に渡された筆架の部分は弧状にえぐられている。石材は赤間石と推定され、底面に幅6mm程度のノミ跡がわずかに残っている。水滴の位置から、硯部の幅は8.2cm、懸子が右側のみの場合は全幅11.4cm、懸子が両側の場合は全幅14.6cmに復元される。漆器硯箱の大きさと比較すると懸子部の幅が狭く、約1/2強ほどの大きさとなる。

7. G区出土遺物（図版123～125 写真図版134～136）

195～237はG-1区から出土した。

195・196はP01より出土した手捏ね成形の土師器小皿である。凹凸の激しい底部にヨコナデ調整を施した短い口縁部が付く。195は底部外面にユビオサエ痕が顯著に残る。196は板状工具でナデしている。197はP30より出土した手捏ね成形の土師器小皿である。口縁端部を欠く。198はP47から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。粘土紐巻き上げ痕が残る。厚みのある底部に極短い口縁部が付く。199・200はP42より出土した。199は196と類似する。底部外面に粘土紐巻き上げ痕が残る。200は瓦器椀である。外面にはヘラミガキがなく、内面見込みは平行の暗文、体部のヘラミガキも粗い。器高が低く、断面半円形の高台が付く。和泉型III-3期と考えられ、13世紀前半代と考えられる。201はP12から出土した瓦器椀である。外面にはヘラミガキがなく、内面見込みは平行の暗文、体部のヘラミガキも粗い。器高が低く、断面半円形の高台が付く。和泉型III-3期と考えられ、13世紀前半代と考えられる。202・203はP11から出土した。202は須恵器捏鉢である。口縁端部は肥厚し、上内方に拡張する。13世紀後葉か。203は大型の丹波焼甕底部である。

204～216は各土坑から出土している。204はSK18より出土した手捏ね成形の土師器皿である。底部内外面はナデ調整により平滑、口縁部は強いヨコナデによって短く外反気味に聞く。205はSK30より出土した京都系の土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部は強いヨコナデによって外反する。206はSK01より出土した瓦器椀である。口径に対し、器高は低めの形態である。体部との境は丸く、体部は外方へ直線的に立ち上がり、強いヨコナデによって口縁部は直口する。底部と体部の境には断面三角形の低い高台が貼付される。全体に器壁の残りが悪く、詳細な調整は残っていないが、内面体部には暗文があり、外面にはない。口縁部から体部上半はヨコナデが施される。207はSK04から出土した小型の瓦器椀である。深い器形を持ち、底部から口縁部まで丸みを帯びて立ち上がる。底部と体部の境には断面三角形の低い高台が貼付される。内面体部には暗文があり、外面にはない。208はSK14から出土した小型の瓦器椀である。207よりも浅い。底部から口縁部まで丸みを帯びて立ち上がり、底部と体部の境には断面三角形の低い高台が貼付される。内面体部には暗文が密に施され、外面にはない。209はSK31から出土した、極浅い、皿状の器形をもった瓦器である。外面には暗文ではなく、内面には口縁部下まで密に施される。210・211はSK03より出土した大型の丹波焼甕である。210は口頭部の破片である。口縁部は短く外反し、端部は拡張し、口縁端部内側に浅い凹線が巡る。端部は水平に拡張し、上面は丸味を帯びる。外側面は強いロクロナデによって外反する。211は、最大径を中位よりやや上方に持つ。不接の体部破片も出土している。口縁部は短く外反し、端部は拡張し、口縁端部内側に浅い凹線が巡る。端部は水平に拡張し、上面は丸味を帯びる。外側面は強いロクロナデによってやや座む。16世紀前半と考えられる。212はSK32から出土した白磁玉縁口縁碗である。玉縁は小さく大宰府分類II-1もししくは2類である。213・214・215・216はSK27から出土した。213～215は丹波焼擂鉢である。213は口縁端部が上方に肥厚し、端部外面は内傾し面をもつ。端部内面は丸みを持ち下部に段をもつ。御目は一本引き、「の」の字のヘラ記号がある。214は口縁端部が上方に肥厚し、端部外面は内傾、強いヨコナデによって凹面をもつ。体部は丸みを帯び、不規則な間隔の一本引きの御目をもつ。215は小型の擂鉢である。口縁端部は若干肥厚し内傾する面をもつ。内面には縦5本・横4本の格子状のヘラ記号（道満印か）を記している。216は古瀬戸灰釉陶器四耳壺である。底部を欠き、耳直下から体部下半にかけて5条の沈線が巡る。

217～228はSX03から出土した。217は手捏ね成形の土師器小皿である。ナデ調整の後口縁部はヨコナ

デを施す。全体に丸みを帯びる器形である。218は京都系土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部は強いヨコナデによって外反する。底部は盛り上がりを見せ、いわゆるハソ皿の形態である。14世紀代と考えられる。219は手捏ね成形の土師器皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部は強いヨコナデによって外反する。底部はナデ調整を施し平坦である。220は石組下より出土した手捏ね成形の土師器小皿である。ナデ調整の後口縁部は短く、やや強いヨコナデを施す。底部はナデ調整を施し平坦である。器壁は薄い。221は小径の瓦器椀である。底部から体部、口縁部まで丸みを帯びて立ち上がる。体部との境に低い断面三角形の高台が付く。外面には暗文ではなく、内面にはまばらに施される。樟葉型のⅢ-4期に対応するか。222は土師器鍋である。口縁部は頭部から「く」の字に屈曲し、肥厚し、端部は丸みを帯びる。最大腹径は頭部直下にある。内面にはヨコハケ調整を施す。223は土師器鍋である。口縁部は体部から緩やかに外反（外頬）し口縁端部は断面三角形につまみ出される。兵庫津編年Ⅱ類に相当する。14世紀前半と考えられる。224は223と比べ口縁端部が丸みを帯び、内面には板状工具によるナデ調整を施す。兵庫津編年Ⅲ類に相当する。14世紀後半に下る。225・226は223と比べ口縁端部の上面が丸みを帯び、内面には板状工具によるナデ調整を施す。兵庫津編年Ⅲ類に相当する。14世紀後半に下る。227は大型の土師器羽釜である。鍔は広く水平に張り出し、口縁部は強いヨコナデによって端部を含め四線状に窪む。鳴上郡衛18E地区井戸や岡本古墓群に類例があり、14世紀前半代と考えられる。228は陶器鉢である。口縁端部は折り曲げ、小さな玉縁となっている。丹波焼か。

229から237は包含層から出土している。229は手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部はヨコナデによって若干外反する。底部はナデ調整を施し平坦である。230は手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部は強いヨコナデによって外反する。口縁端部は尖る。底部はナデ調整を施し平坦である。底部・体部は厚みをもつ。231は手捏ね成形の土師器小皿である。口縁部は「て」の字状を呈し、端部は摘み上げられ、丸みを帯びる。11世紀後半代と考えられる。232は小径の瓦器椀である。底部から体部、口縁部まで丸みを帯び、外方へ真っ直ぐ立ち上がる。外面には一部暗文を施す。内面にはまばらに平行と右上がりの暗文が施される。12世紀後半の時期と考えられる。233は暗褐色砂から出土した瓦器椀である。外方へ踏ん張る断面三角形の高台をもつ。底部内面は平坦である。丸みを帯びた体部から口縁部が真っ直ぐ立ち上がる。内外面ともに摩滅が激しい。外面はユビオサエ痕が顯著である。全体に厚手の製品である。和泉型のⅡ期、12世紀代と考えられる。234は無釉陶器もしくは須恵質の鍋である。口縁部は外方へ立ち上がり、端部は拡張し上部に面をもつ。器形は兵庫津編年甕タイプⅠ類に相当する。13世紀後半代である。235は土師器羽釜である。円筒形の体部・口縁部の形態を持ち、短鍔が貼付される。口縁端部は短く外反する。体部外面には平行叩きを施す。236は同安窯系青磁碗である。口縁部を欠く。外面に櫛描文、内面には櫛及びヘラ状の施文具により花文を施す。大宰府分類Ⅲ-1c類に属する。12世紀中頃から後半代である。237は白磁端反り口縁碗である。大宰府分類V-4a類に属する。12世紀中頃から後半代である。

238・239はG-2区の包含層出土の瓦器椀である。238は口縁部外面と内面全域にヘラミガキを施す。内面体部は比較的密に施される。和泉型Ⅱ-3期、12世紀後葉と考えられる。239は口縁端部が若干外反する。内面は密に、外面はやや粗く全域にヘラミガキを施している。和泉型Ⅰ-2期からⅡ-1期、12世紀初頭を前後する時期と考えられる。

8. H区出土遺物（図版126～145 写真図版137～160）

土器（図版126～138 写真図版137～152）

240・241は堅穴住居跡に伴う遺物である。240は石開炉、241は石開炉周辺から出土したものである。240は縄文土器深鉢で、無文土器の口縁である。縁部に縄文が施されている。241は縄文土器の底部である。縄文時代中期末と考えられる。

242はSK31から出土した。242は縄文土器深鉢で、胴部に縱方向の沈線文をもつ。A地区SK01出土器（1～4）のように水滴文の可能性がある。縄文時代中期末（北白川C式）と考えられる。

243～256は柱穴より出土した。

243はSB03に伴うP66より出土した。手捏ね成形の土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部はヨコナデによって外傾する。底部はナデ調整を施し平坦である。244はH-1区P22より出土した手捏ね成形の土師器小皿である。底部は丸みを帯びる極浅く器壁が薄い個体である。245はH-1区P26より出土したロクロ整形の土師器小皿である。厚みのある底部に短い外方へ開く口縁部が付く。底部は回転糸切り離しである。246はH-1区P38より出土した手捏ね成形の土師器小皿である。厚みのある底部に短い外反する口縁部が付く。247はH-1区P92より出土した。京都系の土師器皿である。ユビオサエ整形を行い、口縁部はヨコナデによって大きく外反する。底部はナデ調整を施し平坦である。器高が低く16世紀代に入る時期と考えられる。248はSB09に伴うP25より出土した瓦器碗である。底径に対して口径が大きく、外方へ開く個体である。断面三角形の高台が貼付される。内面は摩滅しており詳らかではないが、ヘラミガキが全面に、外面は体部全体にやや粗いヘラミガキが施されている。口縁部は強いヨコナデによって外反する。12世紀後葉と考えられる。249はH-1区P39より出土した瓦器碗である。底径に対して口径が大きく、外方へ開く個体である。内面は全体に密にヘラミガキが施され、外面は粗いヘラミガキがまばらに施されている。12世紀後葉と考えられる。250はH-1区P107より出土した瓦器碗である。口径は12.5cmと小さい。底径は口径の1/2以上と大きく、断面三角形の高台が貼付される。底部は平坦、体部は丸みを帯びて立ち上がり、口縁部にいたる。内面には粗いヘラミガキが全面に、外面は口縁部下、体部全体に粗いヘラミガキが施されている。251はH-2北区P143から出土した。小径で深さのある瓦器碗である。外面にはヘラミガキはなく、内面には間隔をもったヘラミガキが施されている。252はH-1区P26より出土した瓦器碗である。断面三角形の高台が貼付されており、底部から体部、口縁部まで丸みを帯び、外方へ真っ直ぐ立ち上がる。外面は体部下半に粗いヘラミガキが施され、内面は、見込みには平行線状暗文、体部から口縁部まで、まばらにヘラミガキが施されている。橋本編年和泉型II-3期、12世紀後葉と考えられる。253はH-2東区P324から出土した瓦器碗である。口径は12.5cmと小さい。底径は口径の1/2近く、断面三角形の高台が貼付される。底部は平坦、体部は丸みを帯びて緩やか立ち上がり、口縁部にいたる。内面には粗いヘラミガキが施され、外面はヘラミガキが省略されている。13世紀代と考えられる。254はSB09に伴うP23より出土した瓦器碗である。低い断面四角形の高台が貼付されており、底部から体部は丸みを帯び、口縁部は若干外反する。外面はヘラミガキが省略され、内面は、見込みに鋸歯状暗文、体部から口縁部下まで、密にヘラミガキが施されている。橋本編年和泉型II-3期、12世紀後葉前後と考えられる。255はSB09に伴うP24より出土した瓦器碗である。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。外面はヘラミガキが省略され、内面は、体部から口縁部下まで、ヘラミガキが施されている。橋本編年和泉型III-2期、13世紀後半と考えられる。256はSB13に伴うP54より出土した和泉型の器高の低い瓦器碗である。断面三角形の高台が貼付され、内外面にヘラミガキは認められず、13世紀

後葉以降と考えられる。

257～266はH-1区上層遺構SK01から出土した土師器小皿である。257～265は手捏ね成形の京都系土師器小皿である。ユビオサエ整形を行い、内面の底部・体部境を強くヨコナデし窪ませる。また口縁部はヨコナデによって外反する。底部はナデ調整を施し平坦である。個体差が大きく、257・260・261・262・265は底部が比較的平坦であるが、258・259・263・264はあげ底となっている。口縁部は何れも端部を丸く收め、拡張などは行っていない。266は同じく手捏ね成形の土師器小皿であるが、口縁部の外反は乏しく、杯形態となっている。これらの小皿は15世纪代と考えられる。

267は上層遺構SK02から出土した京都系土師器小皿である。形態は257～265と同じである。

268はSK03から出土した瓦器椀である。丸みを帯びた底部・体部に扁平な断面三角形の高台が貼付される深い椀である。内面には粘土紐の巻き上げ痕が顕著である。外面にはナデ調整、内面は摩滅のため不明である。丹波型瓦器椀か。13世纪以降の時期が考えられる。

269はH-1区SK07から出土した土師器皿もしくは杯である。底部から内湾して立ち上がり、端部は丸く收める。調整は摩滅のため不明である。

270・271はH-1区SK11から出土した。270は土師器鍋である。口縁部は直立し、口縁端部は外傾し、面をもつ。体部外面は平行叩きを施す。兵庫津編年甕タイプII類に近いと考えられる。271は瓦器小椀である。体部は直線的に開き、口縁部は外反する。外面はヘラミガキが省略され、内面は、体部下半にヘラミガキが認められる。橋本編年和泉型IV期-1、14世纪代と考えられる。

272はH-1区SK12から出土した丹波焼甕である。円筒状の体部から肩部で内傾し口縁部にいたる。口縁部は外方へ極端に折れ曲がり、端部は丸く收める。15世纪代か。

273はH-1区SK13から出土した瓦器小杯である。断面三角形の低い高台が貼付され、底部との境に稜を持ち、口縁部は外反する。内外面ともにヨコナデ調整を施す。

274はH-1区SK19から出土した瀬戸美濃系陶器折皿である。内外面に縁軸がかかり、削り出しの高台裏、疊付きは露胎である。近世の製品と考えられる。

275はH-1区SK23から出土した土師器鍋である。口縁部は屈曲し開く。口縁端部は摘み出され、外傾する面をもつ。体部外面は平行叩きを施す。兵庫津編年甕タイプI類に相当し、13世纪後半である。

276はH-1区SK26から出土した手捏ね成形の土師器小皿である。薄い平らな底部に短い若干外反する。口縁部が付く。

277～279はH-1区SK20から出土した。277は石組から出土した器高の低い瓦器椀である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は外反する。外面はヘラミガキが省略され、内面は隙間が目立つヘラミガキが施されている。橋本編年和泉型III期、13世纪代と考えられる。278は瓦質土器羽釜である。内傾する口縁部に端部が丸い水平に伸びる鈎が貼付される。279は下層から出土した須恵器捏鉢である。体部は直線的に開き、口縁端部は若干上方に拡張し矩形である。12世纪後半から13世纪初頭と考えられる。

280～293はH-2南区の近世土坑から出土した。

280・281・282はSK201から出土した。280は手捏ね成形の土師器小皿である。薄い底部に短い若干内湾する口縁部が付く。281は口縁部が280よりも開く。282は黒褐釉が掛かった施釉陶器鍋である。底部に短い脚が3つ貼付され、口縁部には2カ所に把手がつく。時期は18世纪代である。

283・284はSK227から出土した。283は手捏ね成形の土師器小皿である。口縁端部に煤が付着する。284は肥前系染付磁器碗である。外面に二重網目文を描く。18世纪後半代と考えられる。

285はSK277から出土した明石焼擂鉢である。

286・287はSK281から出土した。286は肥前系染付磁器碗である。高い高台をもつ広東碗である。287は瓦質土器である。側面には連子窓様の宝珠が描かれ、上部には孔と剥離痕がある。置物などの台座であったと考えられる。

288はSK284から出土した肥前系染付磁器小碗である。波佐見焼製品である。

289はSK287から出土した染付磁器の仏飯具である。脚部から底部外面は露胎である。

290～293はSK289から出土した。290は肥前系染付磁器碗、いわゆる「くらわんか」碗である。18世紀後半。291は三田青磁の角鉢である。19世紀前半と考えられる。292・293は明石焼擂鉢である。292は口径19cm足らずの小型、293は35cm弱の大型品である。

294はH-2北区SK158から出土した1本引きの鋸目をもつ丹波焼擂鉢である。

295は井戸SE01埋土（上層）から出土した明染付磁器小皿である。外面に草花文を描く。

296・297は井戸SE02から出土した。296は土師器碗である。器形は瓦器碗に近く、口縁部内外面はヨコナデ、体部はユビオサエ整形後、ナデ調整を施し、13世紀代と考えられる。297は須恵器捏鉢の口縁部である。外反し、端部は上方に拡張し、外側に面をもつ。12世紀後半代と考えられる。

298～361はH-2南区井戸SE282から出土した。

298～300は手捏ね成形土師器小皿である。298はやや厚手の製品。底部は丸みを帯び、口縁部は短く内湾する。内面にはナデ上げ痕が見受けられ、一部は板状工具を使用しナデ調整を行っている。底部外面には板目状压痕が残る。299は298よりも薄手の製品である。底部は丸みを帯び、口縁部は短く直口する。底部外面には板目状压痕が残る。300は平坦な底部に短く内湾する口縁部をもつ薄手の製品である。

301～303は土師器鍋である。301は兵庫津分類の甕タイプ。最大腹径が中位よりやや下にもつやや扁平な器形である。口縁部は短く外方へ開き、端部を内外に拡張し上部に面をもつ。体部外面に平行叩きを施す。体部内面は板ナデ・ナデ、一部で具痕が残る。302は301よりも一回り大きい。兵庫津分類の甕タイプI類。最大腹径が中位にもつやや扁平な球形である。口縁部は短く外方へ開き、端部を外方に拡張し上部に外傾した面をもつ。体部外面上半には平行叩き、下半には左上がりの叩きを施す。体部内面はナデ調整を施すが、同心円のあて具痕が残る。303は鍋タイプ。口縁部は「く」の字に屈曲し端部は丸い。体部は半球形である。外面はタテハケ、内面はヨコハケ調整を施す。

304～325は瓦器碗である。308・322を除き、外面の調整はユビオサエ整形後ナデで、ヘラミガキは認められない。304～307・310は口縁部が直線的に開く器形である。304はやや厚手の製品。口縁端部が筋状に肥厚する。高台は低く扁平で外側へ拡張する。内面は横方向の板ナデを行っている。310もまた、内面は板ナデ調整を行っている。口縁部の形状が類似している。305はやや厚手の製品。粘土紐の痕跡が顕著である。口縁端部は強いヨコナデによって段状になる。高台は外側へ拡張し外側は直立する。内面体部は横方向のヘラミガキ、見込みには平行に暗文を施す。306・307はやや厚手の製品。口縁端部は強いヨコナデによって側面が窪む。高台は高く三角形。内面体部は横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状に暗文を施す。308・309は口縁部が内湾気味に立ち上がる。308は306・307に比べやや薄手。口縁端部は丸く收める。高台は高く三角形。内面体部は横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状に暗文を施す。体部外面に一部左上がりのヘラミガキが認められる。309は薄手の製品。口縁端部は丸く收める。内面体部は横方向のヘラミガキ、螺旋ではなく、鋸歯状に往復を繰り返している。見込みには鋸歯状に暗文を施す。311は器高が低く、薄手の製品である。底部は平坦、口縁部が直線的に開く。端部はやや尖る。高台は三

角形。内面の調整は摩減のため詳らかではない。312は器壁の薄い、小型椀である。底径が口径の1/2近く、腰をもって立ち上がる井様の器形をもつ。内面には横方向のヘラミガキ、見込みには螺旋もしくは連結輪のに暗文を施す。313はやや腰の張った器形をもつ薄手の製品である。口縁部が直線的に開き、端部は拡張し外側に面をもつ。高台はしっかりととした四角形である。内面体部は横方向のヘラミガキ、見込みには螺旋状に暗文を施すと考えられる。314は器壁の薄いや小型の椀である。底径が口径の約1/2.5と広く、腰をもって立ち上がる井様の器形をもつ。口縁部は外反気味に立ち上がり、端部は丸く收める。高台は小さく系高台である。内面には横方向のヘラミガキ、見込みには平行の暗文を施す。

315～325は低い高台をもつ和泉型の瓦器碗である。概ね口径に対して器高が低く、開いた器形である。315はかまぼこ型の高台が貼付される。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状の暗文を施す。和泉型Ⅲ-1期、13世紀前半代と考えられる。316はかまぼこ型の高台が貼付される。内面体部下半を中心に横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状の暗文を施す。和泉型Ⅲ-1期、13世紀前半代と考えられる。317は三角形の退化した高台が貼付されるやや小径の製品である。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには平行の密なヘラミガキの後、鋸歯状の暗文を施す。和泉型Ⅲ-1期、13世紀前半代と考えられる。318は三角形の退化した高台が貼付されるやや小径の製品である。口縁部は316・317に比べ、やや立ち上がる。内面には比較的密な横方向のヘラミガキ、見込みには平行の暗文を施す。319は三角形の退化した高台が貼付されるやや厚手の製品である。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状の暗文を施す。320は器形は319と類似する。かまぼこ状の退化した高台が貼付されるやや厚手の製品である。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには平行する暗文を施す。炭素吸着がまばらな製品である。321はかまぼこ型の退化した高台が貼付される器高の低い製品である。内面にはまばらな横方向のヘラミガキ、見込みには鋸歯状の暗文を施す。322は底径が口径の約1/3.5、腰が張った体部をもつや小型、厚手の製品である。三角形の高台が貼付される。体部内外面にまばらな横方向のヘラミガキ、見込みには平行の暗文を施す。323は底径が口径の約1/4近くと小さく、器高が低い製品である。退化した三角形の高台が貼付される。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには平行の暗文を施す。324はかまぼこ型の退化した高台が貼付されるやや小径の製品である。体部は直線的に開き、口縁端部にいたる。口縁内部に螺旋状に横方向のヘラミガキを施し、見込みの平行の暗文が口縁部直下まで及んでいる。325は退化したかまぼこ型の高台が貼付される薄手の製品である。摩減が激しく、体部外面には板ナデ痕、内面には一部ヘラミガキが認められる。

326・327は瓦質土器鉢である。326は、底部は丸みを帯び体部との境に稜をもつ。口縁部はやや外反気味に伸び、端部は角頭である。327は内湾気味の器形をもち、口縁端部は拡張し、上方に面をもつ。外面にユビオサエ痕が認められる。

328～354は瓦質土器羽釜である。

328～345までは三足脚が付く瓦質羽釜である。

328・329は口径（内径　以下同じ）が15cm以内の小型の製品である。328は最大径が中位にあり、深さに対して大きい扁平な個体である。体部から口縁部へは内湾して至り、口縁部は短い。端部は若干内側に挿み擧げる。口縁の内側は強いヨコナデによって窪みをみせる。鈎は口縁直下に貼付しており、断面三角形で上面が水平である。脚は3カ所に付き、断面は円形である。体部は、外面はナデ、内面は板ナデ調整を施す。329は328に比べ若干大きいが、体部は最大径が中位以下にあり、扁平である。口縁部は極端に内湾しており、内面の体部との境に稜が顯著である。口縁端部は丸く收める。鈎は口縁直下に貼付してお

り、断面は板状でやや上むく。脚は3カ所に付き、断面は扁平である。体部は、外面はナデ、内面は、上半は横方向の板ナデ調整、下半はナデ調整を施す。

330・331は口径15cmを前後する。330は体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位にある。口縁部は極端に内傾するが、内面の体部との境に稜は顯著でない。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は板状で上方をむく。脚は3カ所に付き、断面は円形である。体部は、外面はナデ、内面は横方向の板ナデ調整、底面は一方向の板ナデ調整を施す。331は形状が329に近く、口縁部は極端に内湾しており、内面の体部との境に稜が顯著である。口縁端部は丸く収める。鈔は口縁直下に貼付しており、短い台形の断面形状である。上面が水平である。外面の調整は縦方向の板ナデである。

332～342は口径が20cmを前後する個体である。332は形状が330に近く、体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位にある。口縁部は極端に内傾するが、内面の体部との境に稜は顯著でない。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は三角形に近い矩形で上方をむく。脚は3カ所に付き、断面は円形である。本個体は脚の全長が分かる資料である。脚端は外方に鉤状に曲がっている。調整は、最大径周辺に横方向のヘラケズリである他、体部の外面はナデ、内面は、上半は横方向の板ナデ調整、下半はヨコナデ調整を施す。

333は332と同様に脚が残る個体である。最大径が体部中位以下にあり、扁平である。口縁部は内湾しており、内面の体部との境に稜がある。口縁端部は丸く収める。鈔は口縁直下に貼付しており、短く断面は三角形、上面が水平となる。脚は3カ所に付き、断面は円形である本個体は脚の全長が分かる資料である。脚端は獸足状である。体部は、外面はナデ、内面は、上半は横方向の板ナデ調整を施す。

334は形状が330に近く、体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位より下にある。口縁部は極端に内傾し端部上面が若干拡張する。内面の体部との境に稜は顯著でない。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は板形に近い矩形で上方をむく。脚は3カ所に付き、断面は円形である。調整は、体部の外面はナデ・板ナデ、内面は板ナデ調整を施す。

335は330と形状が近く、体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位にある。内面の口縁部と体部との境に稜は顯著でない。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は太い板状で上方をむく。脚は3カ所に付き、断面は円形である。体部は、外面はナデ、内面上半は横方向のハケ下半は摩滅のため詳らかではない。336は形状が332に近く、体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位にある。口縁部は極端に内傾するが、内面の体部との境に稜はない。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は板状に近い矩形でやや上方をむく。脚は3カ所に付き、断面は円形である。調整は、最大径周辺に横方向のヘラケズリである他、体部の外面はナデ、内面は横方向の板ナデを施す。

337は脚部がついた口縁部片である。330に近似した形状である。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は板状に近い矩形でやや上方をむく。体部の外面はナデ、内面は横方向の板ナデを施す。338は口縁部周辺の破片である。330に近似した形状である。体部から口縁端部まで、極端に内湾し、端部は丸く収める。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は板状に近く短い矩形でやや上方をむく。脚部の貼付痕が残る。体部の外面はナデ、内面は横方向の板ナデを施す。339は口縁部周辺の破片である。331に近いが、内面に稜は生じない。端部は内側に摘み出され、拡張している。鈔は口縁直下に貼付しており、断面は短い矩形でやや上方をむく。脚部の貼付痕が残る。体部の外面はナデ、内面は横方向の板ナデもしくはナデを施す。

340は、体部から口縁端部まで極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位よりやや下にあるタイヤ状の形態である。口縁部は極端に内傾し端部は稜をもつ。また、内面の体部との境は顯著でない。鈔は口

縁直下に貼付しており、断面は長方形で上方をむく。鈎の直下にはユビオサエ痕が顯著である。調整は、体部の外面はユビオサエの後ナデ、内面は、上半は横方向の板ナデ、下半はナデ調整を施す。脚は確認できず、347と同じく、持たない可能性が高い。341は340と同じく扁平な個体である。最大径は中位周辺にもつ。内面の口縁部と体部境には甘い稜が認められ、338に近い。鈎は口縁直下に貼付しており、板状でやや上方をむく。体部の外面はユビオサエの後ナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。342は341と類似し、鈎の端部は丸く收める。体部の外面はユビオサエの後ナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。脚部の痕跡が存在する。343は体部下半と脚部片である。最大径は中位より下にある。腹径（最大径）は約28cmを測り、342とはほぼ同じ法量の羽釜と考えられる。体部の外面はユビオサエの後板ナデ、内面は板ナデもしくはナデ調整を施す。

344・345は器壁の厚い羽釜である。344は体部から内傾する口縁をもつ球形の器形である。口縁端部は内傾し若干端部を拡張する。内面の口縁部と体部との境に甘い稜がある。鈎は口縁部下に貼付しているが、328～343に比べ口縁部は高く、板状で、若干下方を向く。鈎の端部は外傾している。脚は3カ所に付き、断面は扁平である。調整は、体部の外面はナデ、内面は粗いヨコハケ調整を施す。345は体部から口縁端部まで、極端に内湾する扁平な器形である。最大径は中位より下にあり、下彫れの形状である。328～343に比べ口縁部は高く、口縁部は若干内傾し、端部を拡張する。内面の体部との境にない。鈎は口縁直下に水平に着く。端部は外傾する。脚は体部中位の3カ所に付き、断面は梢円形である。外面はナデ、内面は板ナデ調整を施す。346は脚である。脚端は外方に鈎状に曲がっている。

347～353は脚が付かない羽釜である。347は丸みを帯びた底部、寸胴の体部、内傾する口縁部が付く。内面には口縁部と体部の境は明確ではない。口縁端部が丸みを持った角頭で、上部に面をもつ。鈎は短く矩形を呈し、水平に伸びる。鈎の直下にはユビオサエ痕が顯著である。調整は、体部の外面はユビオサエの後ナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。348は口縁部周辺の破片である。体部は寸胴、口縁部は鈎を境に「く」の字に内傾する。口縁端部は内傾し端部を拡張する。口縁部はヨコナデ、体部外面はいたナデ、内面はユビオサエの後ナデ調整を施す。349は最大径を体部中位にもつた扁平な器形である。体部から口縁端部まで内湾し、口縁端部は内側に水平に拡張し、上部に面をもつ。鈎は短く、角頭のものが水平に付く。鈎の直下にはユビオサエ痕が顯著である。調整は、体部の外面はユビナデ、内面は横及び斜め方向の板ナデ調整を施す。350は寸胴の体部から若干内湾して口縁端部にいたる。口縁部は短く、直下に板状の鈎が貼付されている。体部の外面にはユビオサエ痕が顯著、内面は粗いヨコハケ調整を施す。351は口径24.4cmを測る大型の羽釜である。平坦な底部に球形の体部、高い口縁部が付く。鈎もまた、幅の広い板状のものが貼付される。端部は丸く收めている。口縁部の外面には段及び凹線が巡る。調整は、体部の外面はユビオサエ後ナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。352は口径25.8cmを測る大型の羽釜である。寸胴の体部から若干内湾して口縁端部にいたる。口縁部は内傾し、端部は拡張して内傾する面をもつ。口縁部は高く、幅の広い板状の鈎が貼付される。端部は丸く收めている。口縁部の外面には段が巡る。外面はヘラ状工具によるナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。353は口縁部を欠く、鈎周辺の破片である。寸胴の体部に幅の広い板状の鈎が貼付される。端部は丸く收めている。外面は板ナデ、内面は横方向の板ナデ調整を施す。

355～358は東播系須恵器捏鉢である。355は直線的な体部・口縁部を持ち、口縁端部を上方に拡張し、上端に鋭角の稜をもつ。外側には内傾する面をもつ。356は口縁端部が355に比べ、上端の稜は丸みを帯び、内側はやや窪む。また外側は丸みを帯びて肥厚する。357は355・356に比べ低く扁平な個体である。358

は口縁部を心持ち外側へ傾け、口縁端部を肥厚・上方に拡張している。口縁部内側は356・357に比べ更に窪んでいる。

359・360は東播系須恵器壺である。359は球形の体部から頸部は直立し口縁部は短く外反する。端部外側はやや外傾する面をもつ。体部外面は平行叩きを左上がりに施し、更に部分的に平行に施している。内面には同心円のあて具痕が残る。360は体部下半を欠く。また、被焼した可能性が高い。やや長胴の体部に、頸部は直立し口縁部は外反し端部は屈曲する。口縁端部は上下に拡張し側面は窪む。体部外面は平行叩きを平行に施し、更に部分的に左上がりの方向で施している。内面にはあて具痕は認められない。兵庫津遺跡に13世紀前半の類例がある。

361は華南産灰釉陶器長胴壺、大宰府条坊跡編年の陶器壺IV-1b類に相当する。接合片がH-1区南西隅の整地土及び褐色包含層からも出土しているが、頸部の接合片がなく、大宰府条坊跡の個体を参考とした。底部は内側を削り込んだ基筒底風の輪高台をもつ。外観は底部から真っ直ぐ立ち上がり、長胴形となり、緩やかに内済して肩部へと至る。口縁部は短く外へ屈折し外側に丸く収める。内面体部下半には口クロ目が明瞭に残る。釉は灰白色に発色し、全体に黒ごま様の灰が付着している。

362はH-1区SX07出土の瓦器椀である。復元径12.0cmと小径である。体部は内湾し口縁部は摘み上げられている。外面は隙間があり、内面は密にヘラミガキを施す。12世紀代と考えられる。

363はSX01から出土した丹波焼擂鉢である。口縁部は上方に拡張し、端部は丸く収める。内面にヘラ撒きの鉢目に加え、菱垣状の刻線がある。時期は15世紀後半である。

364~366はSX03出土土器である。364はSX03-3より出土した唐津焼椀である。高台裏はときん状に削りだす。365はSX03-1から出土した青磁無文碗である。見込みは蛇の目釉洞ぎが行われ、高台裏は酸化鉄が塗られている。15世紀後葉から16世紀前葉と考えられる。366は丹波焼壺底部である。

367~372はSX04出土土器である。367は手捏ね成形の京都系土師器皿である。器壁が薄い製品である。平な底部から体部は直線的に開き、口縁部は紡錘状に肥厚し、上部に面を造る。内面底部体・体部の境には弱い円圧が生じている。16世紀後半代と考えられる。368は備前焼擂鉢である。4本1単位の擂目を施す。備前焼編年V A期、15世紀後半である。369は備前焼擂鉢底部である。8本1単位の擂目を8単位もつ。370は丹波焼壺口頸部である。口縁部は屈曲し水平に伸びる。端部は肥厚し上面に凹線が生じている。兵庫津V類に相当する。15世紀代である。371~372は丹波焼壺底部である。371の内面には板状工具痕がある。

373~374は近世の遺構SX249から出土している。373は手捏ね成形の土師器小皿である。外面に布目が残る丸い器形である。布上で整形したと考えられる。374は施釉陶器椀である。削り出された不整な厚い高台をもつ。器壁は厚く、体部は大きく内湾する。

375は塚状集石遺構の集石部から出土した白磁玉縁口縁鏡の底部である。

376~377は水溜遺構SX299から出土した。376は鉄絵を描く胎土日唐津小皿である。377は胎土日唐津折皿である。何れも16世紀末から17世紀初頭と考えられる。

378~380は水溜遺構SX300から出土した。378は手捏ね成形の土師器小皿である。内面にはヨコナデ後に施されたナデ上げ痕が残る。379は手捏ね成形の京都系土師器皿である。器壁が薄い製品である。平な底部から体部は直線的に開き、肥厚などがなく口縁端部にいたる。内面底部体・体部の境は強いヨコナデによって窪みが生じている。16世紀代と考えられる。380は備前焼壺もしくは瓶類の下半である。

381~384はH-3区SX07の出土土器である。381は176と類似する土師器小皿である。口縁部は「て」の字状を呈し、端部は摘み上げられる。11世紀前半代と考えられる。382は手捏ね成形の土師器小皿である。

ユビオサエ整形を行い、口縁部はヨコナデによって若干外反する。端部内面は窪みを見せる。底部はナデ調整を施し平坦である。383は土師器壺である。丸みを帯びた体部に屈曲し外方へ開く口縁部が付く。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。387は同安窯系青磁碗である。外面に細かな柳描文、内面には沈線を巡らせ花文・点描文を施す。12世紀中頃から後半と考えられる。

385～387はH-1区SD02出土土器である。何れも内面のみが黒色処理された黒色土器碗A類でヘラミガキが施される。輪高台をもち、口縁部外面にヨコナデ、体部外面とくに中位に横方向のヘラミガキが施される。385は内面口縁端部下に段が生じる。386は同じく弱い凹線が巡る。387は端部内側が窪む。

388～418は各溝出土の土器である。

388はSD07より出土した土師器碗底部である。底部は若干突出し、回転糸切りを施す。389はSD07・SD10出土破片が接合した瓦賀三足脚付き羽釜の脚部である。

390はSD08より出土した瓦器小皿である。平坦な底部に外反する短い口縁部がつく。内外面ともに密にヘラミガキを施す。

391はSD09より出土した明染付小皿である。

392～400はSD11より出土した。392は手捏ね成形の土師器皿である。口縁端部は強いヨコナデによって外側に面をもつ。393は土師器杯である。底部はユビオサエ後ナデ、杯部はヨコナデ調整を施す。394は瓦器小皿である。丸みを帯びた底部に短い口縁部が外方に伸びる浅い小皿である。内面にまばらにヘラミガキが施される。横方向（円状）もしくは渦巻き状と考えられる。395は焼成不良の瓦器碗である。器高は低く、器壁は薄い。調整は不明である。396は球形の体部に受け口状の口縁部がついた土師器鍋である。兵庫津分類の鉄鍋タイプⅢC類に近いが、やや体部が丸い。小破片のため頗りがある可能性がある。外面はタテハケ調整、内面はヨコナデもしくはヨコハケ調整と考えられる。時期は14世紀後半か。397は瓦賀土器羽釜である。球形に内湾する体部・口縁部に、水平に張り出す短い角頭の鈎が付く。口縁端部は角頭である。外面はタテハケ調整、内面はヨコナデもしくはヨコハケ調整と考えられるが摩滅が激しい。398は瓦賀土器羽釜である。内湾する体部・口縁部に、水平に張り出す断面三角形の短い鈎が付く。口縁端部は角頭で、ヨコナデによって内側は窪む。内面はヨコナデもしくはヨコハケ調整と考えられるが摩滅が激しい。399は398に近似した器形を持ち、鈎は角頭である。鈎直下に脚の接着痕が残ることから三足脚付きの羽釜と考えられる。400は球形の体部に内傾する口縁部が付く、398・399に近似した器形の瓦賀土器羽釜である。斜め上方に突き出す長三角形の鈎が付く。鈎直下に脚の接着痕が残ることから三足脚付きの羽釜と考えられる。

401はSD15から出土した瓦器小皿である。丸底に直立する短い口縁部が付く。底部外面はユビオサエ痕が顕著。内面には間隔をあけ渦巻き状にヘラミガキを施す。口縁部はヨコナデ調整である。

402はSD21から出土したやや小径の瓦器碗である。直線的な体部に直口する口縁部をもつ。外面にはヘラミガキはなく、ナデ・ユビオサエ調整。内面は体部上半に横方向のヘラミガキが認められる。13世紀以降と考えられる。

403はSD27から出土した須恵器四耳壺である。球形もしくは長胴形の体部、頭部は窄まり、外反する口頭・口縁部が付く。口縁端部は水平となり、上部及び外側が面となる。頭部外面には平行叩き目が認められ、体部外面はなで上げる板ナデ、内面には横方向のヘラケズリが認められる。頭部直下には耳の貼付痕が認められ、一部残存している。配置から四耳壺と考えられる。中世前期の在地産と考えられる。

404～407はSD22から出土した。404は丹波焼擂鉢である。一本引きの御目を施す。405は備前焼擂鉢

である。口縁部を上部に拡張する。備前焼IV A期15世紀前半代と考えられる。406は丹波焼甕の上半部である。大きく内傾する体部から短く口縁部が外反する。肥厚した口縁端部内側と外面には沈線が巡る。15世紀後半代と考えられる。407は無文青磁碗である。丸みを帯びた体部に外反する口縁部が付く。端部は丸く收める。

408~415はSD24から出土した。

408は手捏ね成形の土師器皿である。器高が低く、外方に聞く器形である。口縁部はヨコナデ調整を施す。409は瓦器椀である。丸みを帯びた体部に外反する口縁部をもつ。外面にはヘラミガキは施されず、内面上半にはまばらにヘラミガキが施される。底部には高台が見られず、極小径もしくは高台が付かない可能性がある。外面底部付近には粘土塊が付着している。410は瓦質土器羽釜である。球形に内湾する体部・口縁部に、水平に張り出す鉢が付く。鉢端部は紡錘形である。口縁端部は内側に巻き込まれる。外面はナデもしくは板ナデ調整、内面は板ナデ調整である。鉢直下には脚部が残存しており、三足脚であったと考えられる。脚は断面が五角形に近い。411は410よりも一回り大きい瓦質羽釜である。口縁端部は角頭である。外面はナデ調整、内面は板ナデ調整である。鉢直下には脚部が残存しており、三足脚であったと考えられる。脚は断面が五角形に近い。412は411よりも更に一回り大きい瓦質羽釜である。口縁端部は内傾し、角頭である。外面は横ナデ調整、内面は縦方向の板ナデ調整である。鉢直下には脚部の接着痕が残存しており、三足脚付き羽釜と考えられる。413は瓦質土器羽釜である。内傾する口縁部にやや上向きの広い鉢が付く。口縁端部は角頭である。内面にはハケ目調整が残る。414は瓦質羽釜脚部である。断面形は不整な五角形である。415は龍泉窯刻花文青磁碗である。外面は無文、大宰府分類I-2aもしくは2a'類である。12世紀中頃から後半の時期が考えられる。

416はSD168から出土した瓦器椀である。丸みを帯びた底部から体部・口縁部まで直線的に立ち上がる深い椀である。底部には三角形の高台が付く。ヘラミガキは外面ではなく、内面には横方向に密に施し、見込みには平行文の暗文を施す。丹波型瓦器椀と考えられる。

417はSD319から出土した黒色土器椀A類（内黒土器）である。内面には横方向のヘラミガキが密に施され、外面にも横方向のヘラミガキが施された可能性が高い。高台部分は剥離して欠失している。

418はH-2南区SD229から出土した肥前系染付碗である。外面にはコンニャク印版による施文がある。また、高台裏には離れ砂が付着している。

419~437は中世水田土壤もしくは水田土壤の上下層から出土した土器である。

419は中世前期から後後にかけての水田土壤から出土している。低い高台をもつ和泉型の瓦器椀である。口径に対して器高がやや低く、聞いた器形である。かまぼこ型の高台が貼付される。内面には間隔を空けた横方向のヘラミガキ、見込みには平行状の暗文を施す。和泉型III-1期、13世紀前半代と考えられる。420は中世後期と考えられる灰色包含層から出土した無釉陶器鍋である。体部は肩の張りがなく寸胴、縦やかに屈曲・外反し口縁部となる。端部は角頭である。体部外面には平行叩き目、口縁部内側は板ナデ、体部内面は縦ハケもしくは板ナデ後、丁寧にナデている。兵庫津分類甕タイプIV類に対応する。15世紀代と考えられる。421は灰色包含層の下半から出土した須恵器鉢である。口縁部は直口し、体部との境に棱をもつ。端部は外方へ摘みだす。11世紀後半代と考えられる。422~430は水田Dの土壤より出土した。422は手捏ね成形の土師器小皿である。灯明皿として使用している。423は手捏ね成形の土師器小皿である。平坦な底部に内湾する短い口縁部を持つ。424は瓦器椀である。内湾する器形をもつ。内外面にヘラミガキが認められる。12世紀代の可能性がある。425は器壁の薄いや小型の瓦器椀である。底径が口径の約

1/2.5と広く、やや腰が張る。体部・口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は丸く收める。高台は小さな三角形である。内面には横方向のヘラミガキ、見込みにも円形あるいは渦巻きの暗文が残る。426は器壁の薄いやや小型の瓦器椀である。体部・口縁部は内湾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く收める。高台は小さな三角形である。内外面ともにヘラミガキを施すが、摩滅のため詳細は不明である。427は退化したかまほこ型の高台をもつ瓦器椀である。外面にはヘラミガキが認められない。内面についてもナデ調整が認められる。428が瓦質土器羽釜である。最大径は体部中位もしくは下半にあつたと考えられる。内湾する体部・口縁を持ち、口縁端部は角頭である。口縁部は短く、短い鈎が貼付される。内面には横ハケ調整が認められるが、体部下半はタテハケの可能性がある。兵庫津分類羽釜タイプ播磨型BのI B類に類似、15世紀代と考えられる。429は大型の瓦質土器羽釜である。寸胴の体部にやや内傾する直口した高い口縁部が付く。端部は角頭である。体部との境に水平に伸びる角頭の鈎が貼付される。鈎の端部は強いヨコナデによって若干窪む。体部外面の調整は縱方向のナデもしくは板ナデである。430は瓦質羽釜脚部である。断面形は円形である。

431は瓦器椀である。中世水田土壤から出土した。丸みを帯びた体部に外反する口縁部をもつ。端部は更に内湾し、端部は丸く收める。外面にはヘラミガキは施されず、見込み部分に斜格子のヘラミガキが施される。底部には小さな逆台形の高台が付く。

432・433は中世水田土壤の直上から出土した。432は手捏ね成形の土師器皿である。丸みを持つ底部に短く外反する口縁部が付く。433は瓦質羽釜である。内傾する体部から口縁部に至り、端部は内側に摘み上げられる。上部には面をもつ。口縁部は短く直下にはやや上方に伸びる短い鈎が付く。断面は角頭である。外面はナデもしくは板ナデ調整、内面は横方向の板ナデ調整である。鈎直下には脚部が残存しており、三足脚であったと考えられる。

434は龍泉窯青磁蓮弁文碗である。内面は無文、外面の蓮弁は輪がなく片切り彫りで表現される。大宰府分類椀II-a類に対応する。13世紀前後から13世紀前半の時期である。

435は中世水田土壤中より出土した土師器もしくは焼成不良の小型瓦器椀である。丸みを帯びた器形、内面には密にヘラミガキを施すが、外面にはない。

436・437は水田 I の下層から出土した。436は手捏ね成形の土師器小皿である。平坦な底部に短い口縁部が外傾して付く。437は龍泉窯青磁蓮弁文碗である。釉薬は外部全面に掛かっており、豊付きから内側は露胎である。

438~443はH-1区包含層から出土した。438は深鉢A 3類と考えられる繩文土器である。梢円形に隆帶、その内側に沈線をもつ。439はH-1区から出土した土師器壺である。丸みを置いた体部に屈曲し外反する口縁部が付く。外面にはタテハケ、内面にはヨコハケを施す。440は土師器小皿である。平な底部から外反気味に体部が低く立ち上がり、口縁端部は若干内湾する。底部は回転糸切りを施す。441は備前焼擂鉢である。備前焼福年VA期、15世紀後半と考えられる。442は華南産褐釉陶器耳壺口頭部である。口縁部は屈曲し下がり気味に伸びる。443は染付輪花碗である。

444~446はH-2北区包含層から出土した。444は土師器羽釜である。緩やかに内湾する体部に短く直立する口縁部が付く。口縁端部は角頭を呈し、上部に面をもつ。兵庫津分類II C類、時期は14世紀後半と考えられる。445は須恵器捏鉢である。体部は直線的に外方へ開き、口縁端部は上下に拡張しやや内傾する。時期は14世紀後半と考えられる。446は青磁皿である。内面見込みに6葉の花弁が描かれ、周間に蓮弁を配している。初期伊万里製品である。

447・449・450はH-2南区包含層から出土した。447は丹波焼擂鉢である。口縁端部は角頭、内側に沈線が巡る。兵庫津分類I B2類 17世紀後半代と考えられる。449は唐津焼皿である。高台はロクロ削りによって削り出され、断面形状は丸い。内面には胎土目痕がある。450は施釉陶器皿である。高台はロクロ削りによって削り出される。449に比べ高台は低く、甚苟底に近く、豊付きは平である。

448はH-3区から出土した瓦器碗である。体部は直線的に開き、口縁部は外反気味に直口する。口縁端部は尖る。内外面共にヨコナデか。ヘラミガキは認められない。

金属製品 (図版138~140・142 写真図版153~155)

M20~M25は、H-1区のP49の埋土上面近くから出土した銅錢である。

M20・21は開元通寶（真書 初鑄唐621年）である。

M22は乾元重寶（初鑄唐758年）、M23は祥符通寶（真書 初鑄北宋1009年）、M24は皇宋通寶（初鑄北宋1038年）と思われる。

M25は元豐通寶（篆書 初鑄北宋1078年）と思われる。直径は2.3cmであるが、裏には別の直径2.5cmのやや大きい銅錢（M25-2）が付着している。

M26~M38は、H-2北区のSK157出土の鉄器で、この火葬木棺墓と思われる土坑からは、腐食が著しいが銅錢（写真図版153 M70・71）も出土しており、M71は熙寧元寶（真書 初錢北宋1068年）と思われる。

M26は短刀で、全長32.5cm、刃部長22.9cm、刃幅2.4cmを測り、X線撮影では茎の前半部に直径0.5cmの透過度の違う部分が観察でき、目釘穴と思われる。小さな両側をもって続く刃部は直線的である。表面に木質等の付着は観察できなかった。比較的肉厚で実用に耐えうる。

M27~38は角釘で、完存のものはないが、巻頭を残すものがある。細い作りのもの（M27・35・37など）や太いもの（M28・29・31など）がある。M32・33は頭部が大きいが、急激に細くなる作りである。

M39はSK292出土の角釘で、残存長が4.5cmを測る。

M40はH-1区SK18出土の板状の鉄製品で、一端が欠失する。刀子などの茎の可能性がある。

M41はH-1区SK12出土の棒状の鉄製品で、断面は円形を呈しており、螺旋が切られている様に観察できる。火箸等の基部かもしれないが、鍛造の過程で形成された可能性もある。

M42はH-1区SX01出土の角釘である。両端部が細くなっている、合釘かもしれない。

M43はH-1区SX04出土の角釘で巻頭をもつ。先端を欠くが5.05cm残存する。

M44はH-2南区のSX300出土の小札である。中央部が折れるが、二列の孔が並ぶ並札である。やや反りがあり、折損部が大きく折れる。

M45はH-2南区SX299出土の鉄板で、鍛造の可能性が高い。

M46・M47はH-1区SD22出土の鉄釘で、角釘である。M46は両端部が細くなっている、合釘かもしれない。M47は頭部を叩き伸ばさずに直角に折り曲げていることから、別の用途に用いられたかもしれない。残存長は6.9cmを測る。

M48はH-1区SD07出土の板状の鉄製品で、断面の一方と先端部が薄く刃状となる。刀子などの工具と思われるが、刃物の茎部かもしれない。

M49はH-1区SD05出土の雁股鎌である。両刃先端、茎先端を欠損するが、刃部の内側には刃を付けている。茎関部は幅・厚さとも広げている。

M50・M51はH-2南区SD229から出土した。M50は溝下層から出土しており、板状の小鉄片である。

M51は角釘で、両端を欠損する。

M52～M66はH区の包含層から出土した。

M52は銅製品で、薄い銅板を丸めて筒状にした煙管吸い口である。接合部が見られるが、銹化が著しく鍍金などは不明である。

M53は棒状の鉄製品で、断面の片側が平らになっている。

M54は小型の包丁で、刃部が短く三角形を呈していることから小出刃包丁であろう。茎には木質が残る。刃は片刃と思われる。

M55からM62は角釘で、巻頭を残すものがある。M56・59は大型のもので、最も長く残ったM59は残存長が10.2cmである。

M63～M66は用途不明の鉄製品である。M64～M66は板状を呈しており、断面は両刃を意識したものである。刀子の柄或いは鐵鍔の刃部かもしれない。

M67～M69はH-1区のSE01から出土した鎌である。

M67はいわゆるねじり鎌で、W32の柄が装着されていた。木製の柄には釘孔が見られるが、鉄製の鎌の茎には目釘穴は見られず、細くなった茎先が細く鍔状に曲がった部分に釘を通したものであろう。茎部には6.3cmの長さに木質が残存している。板状の茎から徐々に幅を広げ、鈍角気味に横と高さ方向に曲げて刃部とする。刃部はさらに中央部で屈曲しているが、本来の形態かは不明である。通常の鎌では、地面付近で使用するときには斜め上に引き上げて使わないと手を地面に擦るが、ねじり鎌は刃の角度から長く水平に引いて使用しても手を擦ることはない。そのため地面の草を削りとることや、樹木の幹をこすって樹皮や付着物を削り取ることに用いられる。現在のものと比べて刃が長い。

M68は通常の鎌で、両端部を欠失するが、刃幅は3.5cmあり、厚さも比較的厚い。

M69も片刃の刃物の一部と思われ、直線的な背に対して斜めに刃が付けられる。M68の先端部の可能性もあるが、接合できず、錆の状態も異なる。

以上の他、M103～M106を写真のみあげた（写真図版155）。M103は楕円鉄鋤、M104・M106はスラッガ、M105は輪羽口片の可能性がある。

石製品（図版140　写真図版155）

H-1区ではSD11よりスクリーパーS34、SK23より砥石S35、SD23より砥石S36、包含層より碁石S37が出土している。不明品S38はH区の北側の野尻川で表採されたものである。S37はなめらかな黒色の礫で、碁石の黒石の可能性がある。S38の不明品は側面に敲打痕が認められることから環状石斧の可能性があるが、中央の孔の直径が1.5cmと狭い。

木製品（図版141～145　写真図版156～160）

W23からW49はH区から出土している。

W23～W25はトレンチNo.101から出土しており、おそらく近世の同一遺構に伴うものであろう。漆器皿・椀でトチノキやモクレン属の挽物の器表面に赤色の漆を塗っている。W25のはがれた漆膜の裏面は黒褐色を呈していることから下地漆を塗った上に赤色漆を塗り重ねたものであり、炭下地ではない。W23の口唇部には黒色漆らしきものが付着しているが、塗り重ねたものかは不明。いずれも木胎は厚い。W23は皿或いは蓋と思われる。内溝して立ち上がる体部と底部の境には稜線を有する。高台は残存していない。W24・25は直立気味に立ち上がる体部から稜をもって底部へと続く。W25は直立する高台が付く。W24は2段の稜線をもって底部へと続くが高台は残存していない。

W26~29は、H-1区のSX03-1から出土した。W26は漆器椀である。クリの横木取りで、口径15.8cm、器高4.7cmを復元する。内外前面に黒色漆を塗布した後、内面全体に赤色漆を塗布する。外面に一部にも赤色漆が見られ、文様を描いたものであろう。底部から緩やかに内湾しながら大きく開く体部へ地続く。外面は体部と底部の境に低い高台を配し、高台内側はやや肉厚となる。

W28はアカガシ亜属の一表面を繰り込んでぞ状に加工したものである。他のものと組み合わさせて使われる物でW29・30と組み合った馬鎌の台木かもしれない。傷みが著しいため詳細は不明である。

W29・30はアカガシ亜属。断面長方形の板材を加工して、下端部を4面方向及び面取りの8方向から削って尖らせ、上半部に括れ部を作つて方形の頭部をもつものである。馬鎌の刃部と思われ、台木に組み合わせて使用するものである。W30は上端部を欠失するが、長さ11.85cm残存しており、幅2.7cm、厚さ1.6cmを測る。W29は、長さ14.65cm、幅2.55cm、厚さ1.4cmを測る。下端の先端は摩耗している。頭部の中央に上から針葉樹板目材の薄板を打ち込んで楔としている。台木に装着するためのものであろう。

W31は曲物底板で、針葉樹の柾目材を用いている。直径20cmほどの曲物が復元でき、側面の弧の部分に直径0.4cmの目釘穴が見られる。表面が黒化しており、使用により付着物が残存したものであろう。

W27はH-1区SE03から出土した大型の柄杓である。柄本体の全長が85.9cmを測る。スギの角材を丁寧に面取りしており、一端を細く尖らせている。杓部との接合は、細くなった先端を杓部の穿孔に斜め上から差し込み、対面の穿孔まで貫いでいる。対面の穿孔の周辺は櫛巻きによって補強している。柄の先端部はアタリによるためかややくぼんでいる。杓部根元側は、側板を挟む位置の柄に2ヶ所穿孔して、直径5.5mmと4.0mmの木釘を嵌め込んで固定している。

杓部の曲物は、厚さが0.5cm近いヒノキ柾目材を曲げて、柄の根元側で綴っており、復元直径が14.1cm、高さが12.7cmを測る。スギ柾目材を用いた底板は、0.3cm角の長さ1.3cmほどのヒノキの木釘によって側板と固定されている。接合できない破片（写真図版157）があり、目釘が残るものがあることから、曲物の底周辺にもう一重の籠を巡らせていた可能性がある。

W32はH-1区のSE01水溜から出土した鎌の柄である。M67のねじり鎌に装着されたものである。クリの割材を長さ37.9cm、幅2.9cm、厚さ1.75cmの棒状に加工する。下端から6cm以上の部分を平らに削って持ち手部としており、下端を大きくて滑り止めとしている。上端面は刃物によって切断されており、上端から7.2cmまで二股に抉り込んで刃部基の装着に備える。抉り部下端には側面からの穿孔が見られ、釘留めに備える。また、上端から0.8~1.8cmの側面が凹んでおり、紐などで縛った可能性が考えられる。

W33はH-1区SK03-1から出土した桶の底板である。針葉樹の柾目材を用いた厚さ1.1cmの板材で、一短辺が刃物によって弧状に成形されている。また一方の長辺には2カ所の直径0.3~0.35cmの目釘穴が見られ、数枚を組み合わせた円盤が復元できる。表面の一部が黒変している。

W34はH-1区SX07から出土した角棒状の木製品である。心持ち材を断面が方形になるように加工しており、下端部はやや細く仕上げている。摩滅が著しく詳細な加工痕は不明である。

W35・W36はH-1区のSX07から出土した杭である。丸太材の一端を尖らせて杭の下端としている。W35では斜めに切り落とすことで尖らせている。W36は広葉樹の樹皮が残されており、下端を削って尖らせている。

W37はH-1区のP129の柱根である。クリの丸太材で、残存最大直径18.9cm、上部は腐食・風化で細くなるが、78.8cmの高さが残存する。下端から約43cmまで柱穴内に埋没していたため、風化が少ない。

根元の端面は外から内側へと刃物で削っており、やや曲面を呈する。面の一番突出した中央部は建物の

重みによるものか、押しつぶれており、面全体に砂粒が食い込んでいる。風化が及んでいない外周面には下から上方方向への粗い削りが見られ、おおよそ八角形に削っているが、断面は歪である。製材というより、枝を払い、真っ直ぐな材に近づけるための加工であろう。削りの幅は6cm以上で8cmに及ぶ箇所も見られる。打ち込んだ部分が少し凹むため、刃先が短く、刃元が厚い手斧様の工具によるものと考えられる。側面や裏面の一部に直交方向や斜め方向の刃物傷が残されているが、柱材として用いる前につけられたものであろうか。

W38～W42はH-1区SK20内の石積み前面に打ち込まれた杭である。すべてクリの割材を用いており、角材に近い形態のものもある。いずれも上端部は欠失しているが、上半部は角材状となる。下端はW38が6方向から、W40も複数方向から削って尖らせている他は明瞭には尖らせてはおらず、たとえばW39は元々尖っていた材の1方向から斜めに落として尖らせており、W41・42も元々尖っていた先端を利用したものである。

W43～W46はH-1区SK21の土坑底周間に打ち込まれた杭であり、下端面には砂粒が食い込んでいる。いずれもクリを用いており、W43・44は丸太材を棍に半分に割った半截丸太材の下端を削って尖らせている。下端部と枝を払った部分以外は、樹皮は残存しないが、全く加工されていない。いずれも上端部は欠失しているが、W43では下端から32.5cmの位置に横方向の刃物傷が見られ、W44では下端から34cm上に幅9cmほどの縫り込みが見られ、横材との結束に備えたものと思われる。

W45・46は直径約1/4のミカン割材を用いており、下端部の割った部分以外の表皮面に3方向から、下端から10cm以下から各1回程度の削りによって尖らせている。

W49はH-2南区のSX300から出土した。針葉樹半柾目材を用いた円盤で、側面に1カ所目釘穴が残されていることから、曲物の底板とする。

W47・48は針葉樹の細片で、上端部に加工が施されている。W48は上端部の両側面を刃物によって切断し、三角形状を作っている。W47は上端部を斜めに切断している。

この他、腐食し、固化できないが、H-1-3区東、SB11のP47から出土した柱材はカヤを用いていることが判明した。

【参考文献】

(土器)

太宰府市教育委員会2002.3『大宰府条坊跡XV-陶磁器分類編-』太宰府市の文化財 第49集

兵庫県教育委員会2004.3『兵庫津遺跡Ⅱ(浜崎・七宮地区の調査)』兵庫県文化財調査報告 第270冊

高槻市教育委員会1991.3『高槻市文化財年報 昭和63・平成元年度』

(金属器)

兵庫埋蔵銭調査会 1996.5『日本出土銭総覧』

(木製品)

奈良国立文化財研究所 1985.3『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 史料第27冊

多可町教育委員会 2008.3『坂本・土井の内遺跡 坂本・クゴ田遺跡 梶屋・土井の後遺跡Ⅱ』多可町

文化財報告 5

第4章 和田山遺跡の調査成果

第1節 遺跡の概要

和田山遺跡は新名神高速道路建設のため猪名川町広根地区と川西市石道地区を結ぶ六石山工事用道路の建設計画に伴い、平成22年度に兵庫県教育委員会が実施した分布調査によって発見された遺跡である。

遺跡は猪名川町と川西市の境にある六石山から北側に張り出した尾根上にあり、分布調査時に土器や石材の散布が確認された。この地点をNo23地点と仮称し、平成23年度に確認調査を実施したところ、遺構・遺物が確認されたため「和田山遺跡」と命名し平成24年度に本発掘調査を実施した。

遺跡は尾根の二つのピークにまたがっており、西側の地表面に石材が露出していた地点を1区、東側の土器が散布していた地点を2区とする。1区と2区の間は細い鞍部になっており、西側の斜面で遺物が採集されているが、遺構は確認していない。

第2節 調査の方法

確認調査によって遺物、遺構が認められた1区と2区について、人力で掘削を行った。

〈1区〉地表面に露出していた集石の清掃、写真撮影、実測をおこなった後に、集石を除去して墓坑の検出をおこなった。検出した墓坑については精査を行い、遺物の出土状況等を写真、図面によって記録して調査を完了した。

〈2区〉土器の散布が認められたマウンドの表土をはぎ精査を行った。マウンドの状況を写真、図面によって記録した後に、幅50cmの断ち割りトレーナーを掘削し、マウンドの構造を確認して調査を完了した。



第2図 和田山遺跡 調査範囲図

第3節 1区の遺構

概要(第3図)

1区は標高105.00mの尾根のピーク上の平坦面に位置している。

調査前の状況では、3.00m×4.00mほどの範囲に人頭大の石材が露出しており、中世墓の可能性を想定して調査を進めた。

腐食土を除去して石材の設置状況を確認したところ、露出していた大半の石材が地山面には接することなく、腐植土中に埋もれていることが明らかになった。

これらの石材は二次的に移動されたものであると判断して、地山面に接する石材以外は除去して遺構精査をおこなったところ、3基の墓坑(SX01～SX03)を検出した。

切り合い関係からSX01、SX03の2基の墓坑が先に存在し、その後2つの墓坑を切ってSX02が設けられたと判断している。

調査区の南西、地表面に露出していた集石の西側の地山直上から、中世末頃の土師器が多数出土している(2～5)。1点のみ完形であった以外は全て細片化していた。これらの土器はSX01もしくはSX03に伴うものであろう。

遺構

墓坑SX01(第4図・第5図・第7図) 調査区のやや西よりで検出した。SX01～SX03のうち最も南側に位置する。

北側はSX02の掘削によって墓坑壁の一部が破壊されている。

0.65m×0.20mの楕円形の平面形をした深さ0.20mほどの墓坑である。

墓坑底から人骨が出土した。人骨は被熱の痕跡があり、火葬骨と判断できる。骨は細片化しており、出土量からみて火葬にされた遺体の一部を埋葬したものであると思われる。

時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺で出土した土師器皿から中世末頃の可能性が高いと考えられる。

墓坑SX02(第4図・第5図・第7図) 調査区のやや西よりで検出した。3つの墓坑の中央に位置する。南側はSX01と重なり、北側はSX03と重なる。

直径0.50mの円形の平面形をした深さ0.55mほどの墓坑である。墓坑上に人頭大の石材を2個置き標石としていた。

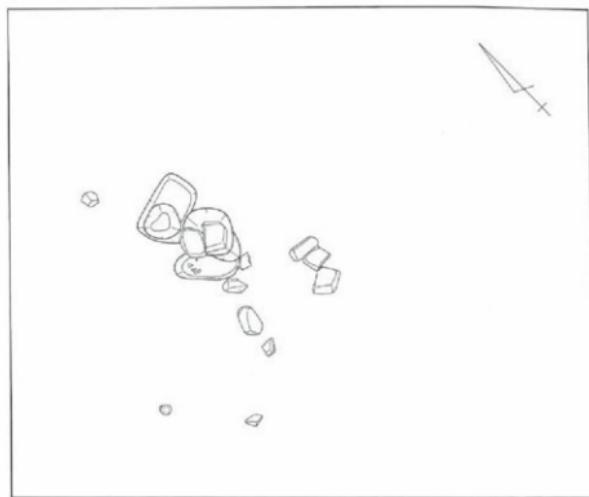
墓坑の底付近から江戸時代(18世紀)の肥前系陶磁器(染付小杯1)が出土している。人骨は出土していない。

出土遺物から、江戸時代(18世紀)の墓と考えられる。

墓坑SX03(第4図・第5図・第7図) 調査区のやや西よりで検出した。3つの墓坑のうち最も北側に位置する。

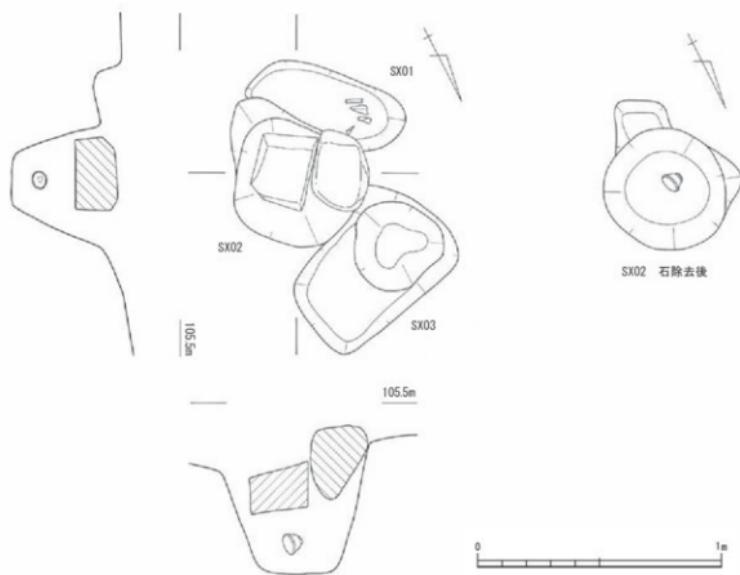
直径0.35mの円形の平面形をした深さ0.50mほどの墓坑である。

人骨、藏骨器などの遺物はなかった。時期を特定できる遺物は出土していないが、周辺で出土した土師器皿から中世末頃の可能性が高いと考えられる。



第3図 1区平面図

0 2m



第4図 SX01～SX03平面図・断面図

第4節 2区の遺構

検出した遺構は7.50m×8.00m、高さ1.00mほどのマウンドであり、東側に平坦面がある。確認調査ではこのマウンド上から14～15世紀の丹波焼甕が出土している。

以上の結果を踏まえ、墓等の可能性を考えて調査をおこなった。

確認調査時と同様に腐植土の中から丹波焼の破片が出土したが、これ以外の出土遺物はなかった。

また、マウンド上を精査したが墓坑等の遺構は認められなかった。

更に、断ち割りトレンチを掘削してマウンドの構造を確かめたが、人為的な盛り土は認められなかった。但し東側の平坦面は人為的なものと考えられるので、マウンド自体は人工的なものであろう。

第5節 出土遺物

1区ではSX02と墓坑の周辺部から土器が出土している。

1はSX02から出土した肥前系の染付小鉢で、18世紀代のものである。

2～5は墓坑の周辺部から出土した手捏ねの土師器皿であり、中世末頃のものである。

2区ではマウンド上から土器が出土している。

6は丹波焼の鉢の底部であり、16世紀後半から17世紀前半のものである。

7は1区と2区の間の西側斜面から出土した龍泉窯系の青磁碗であり、中世後半のものである。

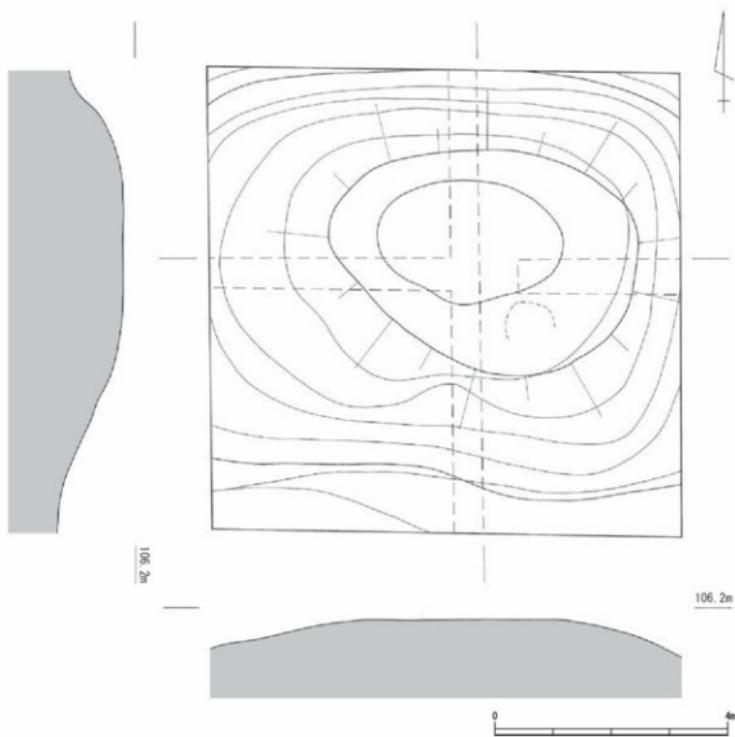
第6節 まとめ

今回の調査の結果、中世～近世の墓地と、中世末～近世はじめに何らかの祭祀行為をおこなったと思われるマウンドを検出した。

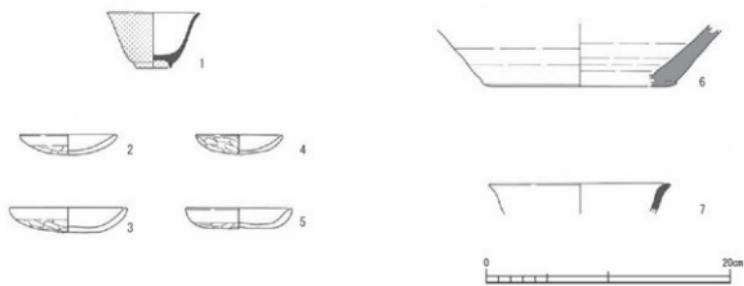
1区で検出した墓地は、中世末頃に火葬骨を直葬した最初の墓が営まれ、その後近世に同じ場所に墓が営まれている。地表面に露出していた集石は、おそらく中世末の墓（SX01かSX03）に伴うものであり、近世に新しくSX02が造られる時に移動されたものであると考えられる。

2区のマウンドも中世末～近世はじめの祭祀場所と思われる。

調査結果から、和田山遺跡が所在する尾根上一帯が中世から近世にいたる葬送の場として用いられてきたことが明らかになった。



第5図 2区全体図



第6図 和田山遺跡 出土遺物



遺跡遠景（西から）



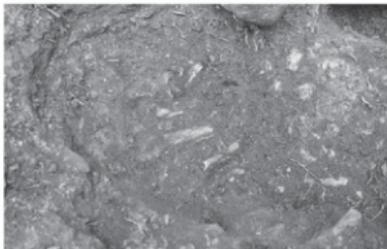
1区 調査前（北から）



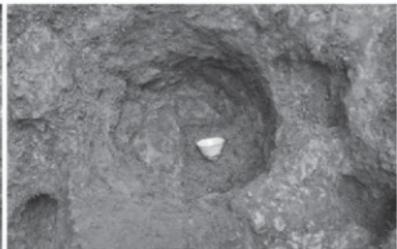
1区 集石検出状況（北から）



1区 SX01～SX03検出状況（東から）



1区 SX01人骨出土状況（南から）



1区 SX02遺物出土状況（西から）



1区 SX01～SX03完掘状況（西から）



1区 調査完了状況（北から）

第7図 和田山遺跡 1区遺構



2区 調査前（南から）



2区 マウンド全景（南から）



2区 マウンド平坦面（南から）



2区 東側平坦面（南から）



2区 断ち割り状況（南から）



2区 東側平坦面付近断面（南から）

出土遺物



第8図 和田山遺跡 2区遺構・出土遺物

第5章 自然科学分析

第1節 広根遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

（株）加速器分析研究所

1. 測定対象試料

広根遺跡は、兵庫県川辺郡猪名川町広根に所在する。測定対象試料は、遺構から出土した炭化物4点と、下層断ち割りトレンチで採取された土壌4点、木炭1点の合計9点である（表3）。

2. 化学処理工程

（1）炭化物、木炭の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- 2) 酸-アルカリ-酸（AAA：AcidAlkaliAcid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常 $1\text{ mol}/\ell$ (1 M) の塩酸 (HCl) を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム (NaOH) 水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- 3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素 (CO_2) を発生させる。
- 4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- 5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト (C) を生成させる。
- 6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

（2）土壌の化学処理

- 1) メス・ピンセットを使い、石などの混入物を取り除き、残りの全試料をすりつぶす（Bulk）。
- 2) 酸処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。処理には $1\text{ mol}/\ell$ (1 M) の塩酸 (HCl) を用い、表1に「HCl」と記載する。

以下、(1)～(3)以降と同じ。

3. 測定方法

加速器をベースとした ^{14}C -AMS専用装置（NEC社製）を使用し、 ^{14}C の計数、 ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)、 ^{14}C 濃度 ($^{14}\text{C}/^{12}\text{C}$) の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸 (HOx II) を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

4. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（%）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ^{14}C 年代 (LibbyAge : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年

を基準年（0 yrBP）として選ぶ年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{14}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMC が小さい（¹⁴Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹⁴Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値も $\delta^{14}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表3に、補正していない値を参考値として表4に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の曆年代範囲であり、1標準偏差（ $1\sigma = 68.2\%$ ）あるいは2標準偏差（ $2\sigma = 95.4\%$ ）で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{14}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い、OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表4に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」または「cal BP」という単位で表される。

5. 測定結果

測定結果を表3、4に示す。

遺構出土試料4点の¹⁴C年代は、12が 1260 ± 20 yrBP、13が 2610 ± 30 yrBP、14が 4010 ± 30 yrBP、15が 3990 ± 30 yrBPである。历年較正年代（ 1σ ）は、12が $690 \sim 768$ cal ADの間に3つの範囲、13が $807 \sim 789$ cal BCの範囲、14が $2569 \sim 2488$ cal BCの間に2つの範囲、15が $2565 \sim 2475$ cal BCの間に2つの範囲で示される。13は縄文時代晩期中葉頃、14、15は縄文時代中期末葉頃に相当する（小林編2008）。

下層断ち割りトレンチ採取試料5点の¹⁴C年代は、土壤16が 11310 ± 40 yrBP、土壤17が 11280 ± 40 yrBP、土壤18が 10350 ± 40 yrBP、木炭19が 9540 ± 40 yrBP、土壤20が 9390 ± 30 yrBPである。历年較正年代（ 1σ ）は、土壤16が $11251 \sim 11151$ cal BCの範囲、土壤17が $11212 \sim 11133$ cal BCの範囲、土壤18が $10430 \sim 10152$ cal BCの間に3つの範囲、木炭19が $9119 \sim 8796$ cal BCの間に3つの範囲、土壤20が $8719 \sim 8629$ cal BCの範囲で示される。16~18は縄文時代草創期頃、19、20は縄文時代早期前葉頃に相当する（小林編2008）。

試料の炭素含有率を検討すると、炭化物、木炭はすべて50%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。土壤は0.1~0.8%というかなり低い値で、堆積、埋没過程などに年代が異なる炭素が混入した場合に影響を受けやすいと考えられることから、年代値の解釈には注意を要する。

表3 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正值）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-38007	12	A-1区(トレンチ)SXII 墓土	炭化物	AAA	-22.6 ± 0.3	1280 ± 30	85.0 ± 0.5
IAAA-38008	13	A-1区 焼土1	炭化物	AAa	-22.6 ± 0.3	2600 ± 30	72.30 ± 0.21
IAAA-38009	14	A-1区 SKIII	炭化物	AAA	-22.4 ± 0.2	4000 ± 30	90.0 ± 0.20
IAAA-38010	15	H-1区 石圓切底ピット	炭化物	AAA	-22.4 ± 0.2	3900 ± 30	90.0 ± 0.19
IAAA-38011	16	H-1区 下層断ち削りトレンチ	土壤	HCl	-22.6 ± 0.6	11,200 ± 40	21.6 ± 0.13
IAAA-38012	17	H-1区 下層断ち削りトレンチ	土壤	HCl	-22.4 ± 0.4	11,200 ± 40	21.6 ± 0.12
IAAA-38013	18	H-1(南)区 下層断ち削りトレンチ	土壤	HCl	-22.1 ± 0.3	10,300 ± 40	21.56 ± 0.13
IAAA-38014	19	H-2(南)区 下層断ち削りトレンチ	木炭	AAa	-22.0 ± 0.2	5,500 ± 40	30.0 ± 0.14
IAAA-38015	20	H-2(南)区 下層断ち削りトレンチ	土壤	HCl	-22.4 ± 0.3	4,300 ± 30	21.65 ± 0.14

[#8072]

表4 放射性炭素年代測定結果（ $\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、曆年較正用 ^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	σ 曆年代範囲	$\pm \sigma$ 曆年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-38007	1,300 ± 30	85.0 ± 0.5	1,254 ± 23	80calAD - 73calAD (0.1%) 73calAD - 72calAD (0.8%) 72calAD - 70calAD (3.3%)	60calAD - 75calAD (6.6%)
IAAA-38008	2,650 ± 20	71.6 ± 0.21	2,605 ± 26	87calBC - 86calBC (6.2%)	87calBC - 77calBC (5.6%)
IAAA-38009	4,800 ± 30	60.12 ± 0.18	4,812 ± 36	256calBC - 255calBC (5.1%) 256calBC - 258calBC (11%)	257calBC - 252calBC (6.6%)
IAAA-38010	4,000 ± 30	60.28 ± 0.18	3,980 ± 25	256calBC - 255calBC (0.1%) 256calBC - 257calBC (2.9%)	257calBC - 251calBC (6.0%) 256calBC - 248calBC (5.6%)
IAAA-38011	11,200 ± 40	21.60 ± 0.13	11,208 ± 42	1151calBC - 1151calBC (0.2%)	1151calBC - 1135calBC (5.6%)
IAAA-38012	11,250 ± 40	21.65 ± 0.12	11,278 ± 39	1152calBC - 1153calBC (0.2%)	1177calBC - 1112calBC (5.6%)
IAAA-38013	10,300 ± 40	21.55 ± 0.13	10,302 ± 37	100calBC - 100calBC (0.1%) 105calBC - 102calBC (3.7%) 109calBC - 105calBC (4.1%)	1041calBC - 1004calBC (5.6%)
IAAA-38014	9,600 ± 30	30.21 ± 0.13	9,501 ± 35	910calBC - 896calBC (4.2%) 896calBC - 880calBC (5.1%) 880calBC - 896calBC (26%)	931calBC - 891calBC (8.1%) 891calBC - 852calBC (6.6%)
IAAA-38015	9,300 ± 30	31.13 ± 0.13	9,304 ± 34	879calBC - 862calBC (4.8%)	876calBC - 859calBC (8.6%) 856calBC - 852calBC (2.8%)

[参考値]

第2節 広根遺跡出土木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

広根遺跡から出土した木製品について、木材利用を確認するための樹種同定を実施したので、その結果について報告する。

1. 試料

試料は、広根遺跡A・D・H地区から出土した木製品28点と、広根遺跡I区から出土した木製品6点の合計34点である。I区出土の木製品の詳細は、「観音寺跡・広根遺跡2」の報告書に掲載する予定である。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表5に記す。

2. 分析方法

資料の木取りを観察した上で、刺刀を用いて木口（横断面）・極目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を直接採取する。切片をガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートとする。プレパラートは、生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東（1982）、Wheeler他（1998）、Richter他（2006）を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

3. 結果

樹種同定結果を表5に示す。木製品は、針葉樹5分類群（マツ属複維管束亜属・スギ・ヒノキ・イヌガヤ・カヤ）と広葉樹6分類群（ブナ属・コナラ属・アカガシ・クリ・モクレン属・ウツギ属・トチノキ）に同定された。なお広根遺跡I区のW2-3は、針葉樹であるが、組織の保存状態が悪く、種類不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亜属 (*Pinus subgen. Diploxyylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直树脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直树脂道は晩材部に認められる。放射組織は、仮道管、柔細胞、水平树脂道、エピセリウム細胞で構成される。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突起が認められる。放射組織は単列、1～10細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と树脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。树脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と树脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、

晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・イスガヤ (*Cephalotaxus harringtonia* (Knight) K. Koch f.) イスガヤ科イスガヤ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか。仮道管内壁にはらせん肥厚が認められる。樹脂細胞は早材部および晩材部に散在する。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型で1分野に1～2個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたせん肥厚が認められる。

放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

- ・ブナ属 (*Fagus*) ブナ科

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2～3個が複合して散在し、年輪界付近で径を減ずる。道管の分布密度は高い。道管は單穿孔および階段穿孔を有し、壁孔は対列状～階段状に配列する。放射組織はほぼ同性、単列、数細胞高のものから複合放射組織まである。

- ・コナラ属アカガシ亜属 (*Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis*) ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では梢円形、単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高のものと複合放射組織がある。

・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属：環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外で急激に径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

・モクレン属 (*Magnolia*) モクレン科：散孔材で、管壁厚は中庸～薄く、横断面では角張った梢円形～多角形、単独および2～4個が放射方向に複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は階段状～対列状に配列する。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～40細胞高。

- ・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1～4細胞幅、40～100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

- ・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で、管壁は厚く、横断面では角張った梢円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で層階状に配列する。

4. 考察

樹種同定を実施した木製品は、伊東・山田(2012)の木器分類を参考にすれば、工具(付け木?)、農耕土木具(馬鍬の歯・鍬の柄・鼻輪)、漁労具(網の枠)、容器(漆桶・漆皿・曲物)、調理加工工具(柄杓)、建築部材(柱・柱根)、土木材(杭)、用途不明(加工材)に分けられる。これらの木製品には、合計11種類が認められた。

同定された各種類の材質をみると、針葉樹の複雑管束亜属は、針葉樹としては比較的重硬な部類に入り、

強度と保存性が高い。スギとヒノキは、木理が通直で割裂性と耐水性が比較的高い。イスガヤは、重硬・緻密で、強度・韌性・耐水性が高い。カヤは、重硬・緻密で強度と耐水性が高い。広葉樹のブナ属は、重硬で強度は高いが、加工は容易であり、保存性は低い。アカガシ亜属は重硬で強度が高い。クリは、重硬で強度と耐朽性が高い。ウツギ属は、いずれも小径であるが、強度は比較的高いとされる。モクレン属とトチノキは、軽軟で強度と保存性は低い。

器種別にみると、工具では付け木がある。付け木は、火移しの道具とされ、端部が僅かに炭化している資料が多い。また、大丹保遺跡（富山県砺波市）の事例では、炭化部分から硫黄が検出され、硫黄を用いた着火剤の存在が指摘されている（宮田ほか,2015）。付け木は、加工時に生じる木つ端を用いる例が多いが、今回の資料はウツギ属の芯持丸木が利用されている。ウツギ属は林縁部等に生育する落葉低木であり、本資料が付け木とすれば周辺に生育し、簡単に入手できる低木を用いたことが推定される。

農耕土木具では、馬鍬の歯、鎌の柄、鼻輪がある。馬鍬の歯2点は、いずれもアカガシ亜属であり、強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。また、鎌の柄も、クリ材を削り出して作られており、同様に強度の高い木材を選択・利用したことが推定される。一方、鼻輪は、イスガヤであり、強度のほか、曲げに強い韌性の高い木材を利用したことが推定される。

漁労具では、網の枠があり、種類不明の針葉樹に同定された。網枠は、これまでの調査でもイスガヤ等の針葉樹が多い器種である（伊東・山田,2012）。イスガヤが多い背景には、強度・韌性・耐水性等の材質が挙げられる。今回の資料は、樹種は不明であるが、強度や耐水性の高い木材の利用が推定される。

容器は、挽物容器である漆器類と板を曲げて作る曲物容器とに分けられる。

漆器類は、ブナ属、クリ、モクレン属、トチノキに同定され、比較的の加工が容易な樹種の利用が多い。とくに、ブナ属とトチノキは、漆器本地としてよく利用される樹種であり（伊東・山田,2012）、本遺跡でも利用されていたことが推定される。クリはブナ属、モクレン属、トチノキとは異なり、硬い木を用いる挽物容器も存在したことが推定される。兵庫県内では、入佐川遺跡や加都遺跡の中世とされる資料、福田片岡遺跡や初田遺跡の室町時代とされる資料、明石城武家屋敷跡の江戸時代とされる資料にクリの漆器が散見され（伊東・山田,2012）、中世～近世にかけて利用されていたことが推定される。

一方、曲物は、複縦管束亜属であり、加工が容易な針葉樹の利用が推定される。

調理加工工具では、柄杓がある。柄杓は、柄、底板、底板の釘、側板で構成される。柄と底板はスギ、釘と側板はヒノキであり、2種類の木材で構成される。いずれも加工性や耐水性が比較的高い木材であり、こうした材質を考慮した用材選択が推定される。

建築部材は柱2点がクリに同定され、強度と耐朽性の高い木材を利用したことが推定される。また、土木材の杭も14点全てがクリであり、柱と同じく強度・耐朽性の高い木材の選択と利用が推定される。一方、柱根（W50）とされる資料は、ミカン削状でカヤに同定されたことから、強度や耐水性を要する用途・部位として用材選択されている。

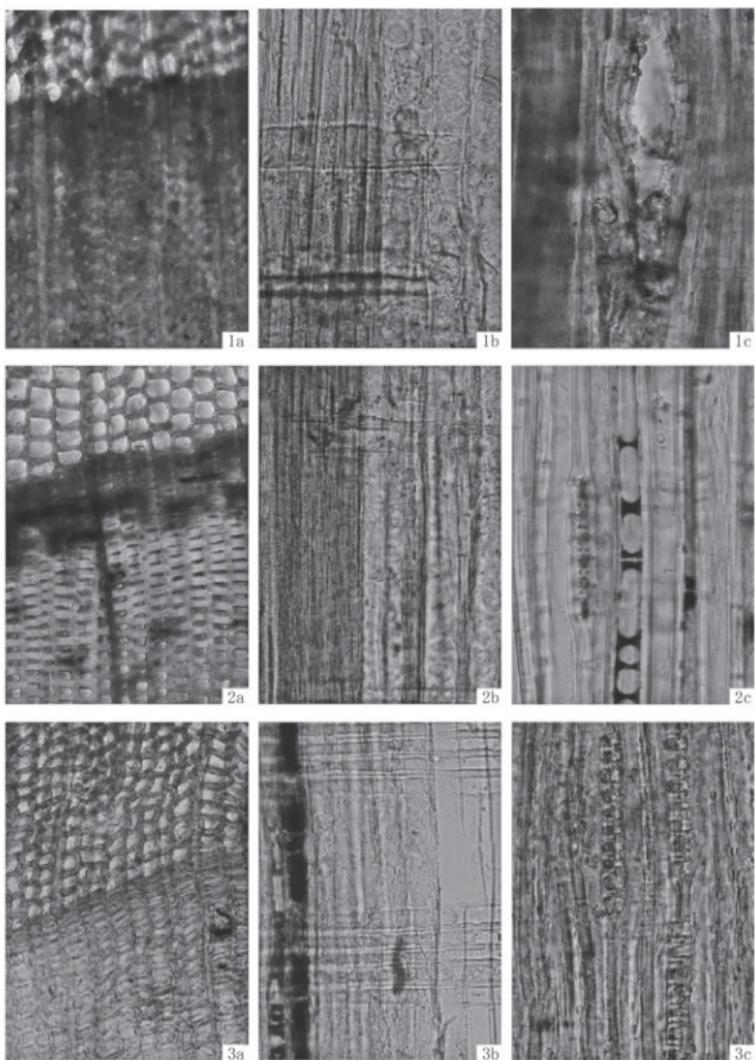
用途不明では、加工材とされる資料がある。加工材は、ミカン削状を呈し、アカガシ亜属に同定されることから、強度を要する用途・部位の可能性がある。

(引用文献)

- 林 昭三,1991,日本産木材 顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載 I.木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81–181.
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載 II.木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66–176.
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載 III.木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83–201.
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載 IV.木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30–166.
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載 V.木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47–216.
- 伊東隆夫・山田昌久(編),2012,木の考古学 出土木製品用材データベース,海青社,449p.
- 宮田佳樹・藤田慎一・勝田長貴・千葉博俊・高橋 敦,2015,付け木着火部位の科学的検討,日本文化財学会第32回大会研究発表要旨集,348–349.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].

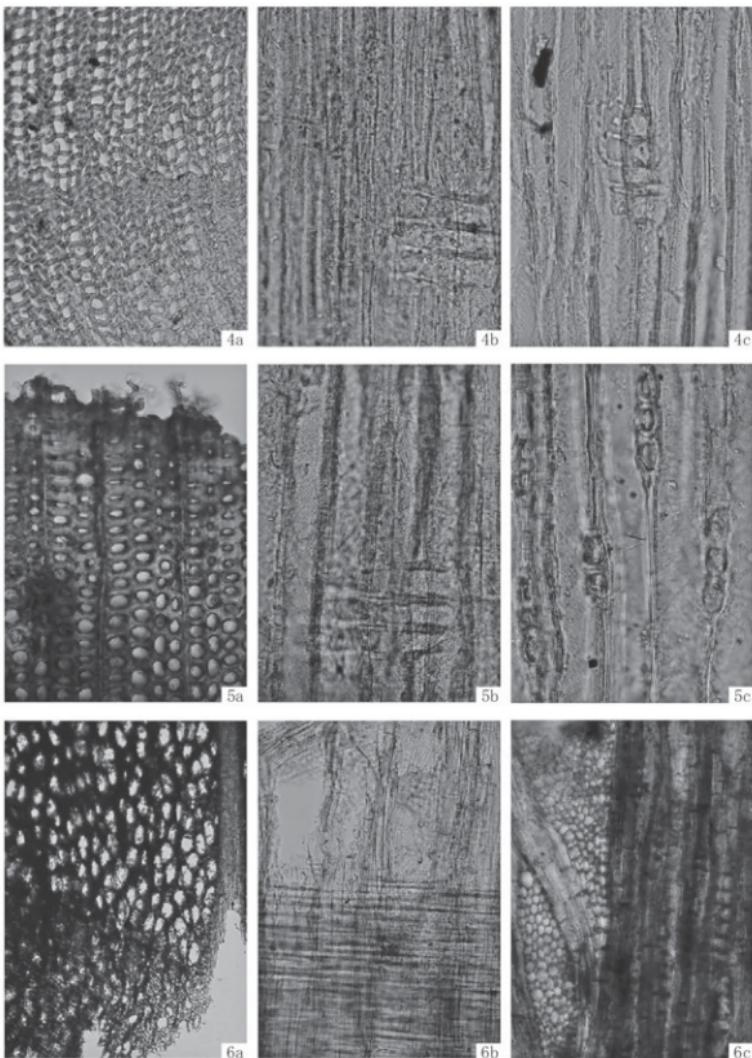
表5 広根遺跡A区・H区・I区の樹種同定結果

報告番号	器種	遺跡名	木取り	種類
R1	轟輪	広根遺跡AI区	芯持材	イヌガヤ
R18	杭	広根遺跡AI区	ミカン割	クリ
R19	杭	広根遺跡II区	分割材	クリ
R20	杭	広根遺跡II区	分割材	クリ
R21	杭	広根遺跡II区	半裁状	クリ
R23	漆器	広根遺跡III区	漆木地	トチノキ
R24	漆桶	広根遺跡III区	漆木地板目取	モクレン属
R25	漆桶	広根遺跡III区	漆木地板目取	トチノキ
R26	漆桶	広根遺跡III区	漆木地	クリ
R27	柄杓 柄	広根遺跡III区	分割角材	スギ
R27	柄杓 底板	広根遺跡III区	板目	スギ
R27	柄杓 底板の釦	広根遺跡III区	頭出	ヒノキ
R27	柄杓 扇板	広根遺跡III区	板目	ヒノキ
R28	加工材	広根遺跡III区	ミカン割	コナラ属アカガシ東属
R29	馬糞の糞	広根遺跡III区	板目	コナラ属アカガシ東属
R30	馬糞の糞	広根遺跡III区	板目	コナラ属アカガシ東属
R32	鍵の柄	広根遺跡III区	頭出	クリ
R37	柱	広根遺跡III区	芯持材	クリ
R38	杭	広根遺跡III区	ミカン割	クリ
R39	杭	広根遺跡III区	ミカン割	クリ
R40	杭	広根遺跡III区	ミカン割	クリ
R41	杭	広根遺跡III区	分割材	クリ
R42	杭	広根遺跡III区	板目	クリ
R43	杭	広根遺跡III区	半裁	クリ
R44	杭	広根遺跡III区	半裁状	クリ
R45	杭	広根遺跡III区	ミカン割	クリ
R46	杭	広根遺跡III区	ミカン割	クリ
R50	柱標	広根遺跡III区	ミカン割	カヤ
R22	曲物	広根遺跡I区	板目	マツ属複数管束東属
R23	網の枠	広根遺跡I区	芯持丸木	針葉樹
R24	柱	広根遺跡I区	芯持丸木	クリ
R25	杭	広根遺跡I区	ミカン割	クリ
R27	付け木?	広根遺跡I区	芯持丸木	ウツギ属
R28	漆桶	広根遺跡I区	漆木地	ブナ属



1. マツ属複維管束亜属(W2-2)
 2. スギ(W27 柄杓の柄)
 3. ヒノキ(W27 柄杓の側板)
- a : 木口, b : 桿目, c : 板目

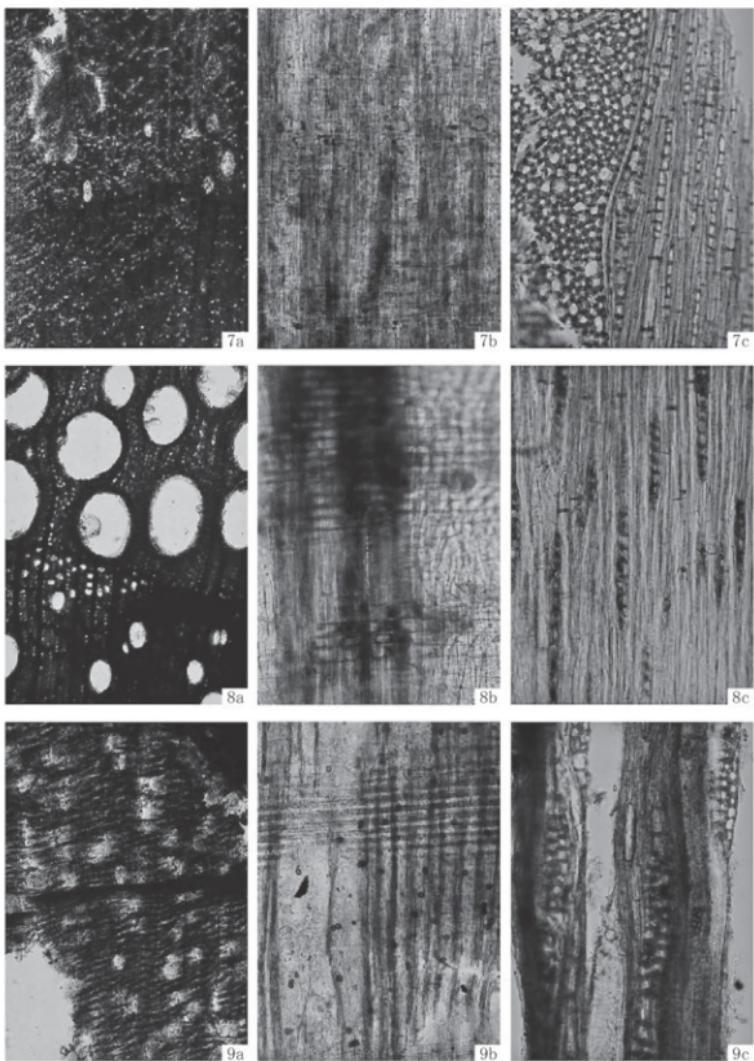
第9図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(1)



4. イヌガヤ(W1)
5. カヤ(W50)
6. ブナ属(W2-8)
a : 木口, b : 柾目, c : 板目

— 100 μm : 6a
— 100 μm : 4-5a, 6b, c
— 100 μm : 4-5b, c

第10図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(2)



7. コナラ属アカガシ亜属(W28)

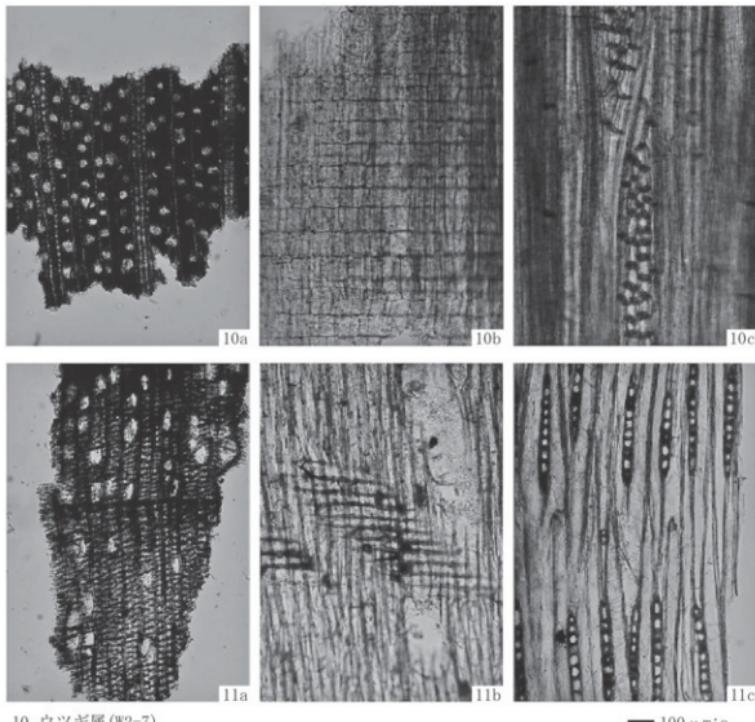
8. クリ(W43)

9. モクレン属(W24)

a : 木口, b : 桿目, c : 板目

— 100 μ m:a
— 100 μ m:b, c

第11図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(3)



10. ウツギ属(W2-7)

11. トチノキ(W25)

a : 木口, b : 桿目, c : 板目

— 100 μ m:a
— 100 μ m:b, c

第12図 広根遺跡A区・H区・I区の木材(4)

第6章 広根遺跡の地形環境

- A区、D区、G区、及びH区を中心とする-

青木 哲哉（立命館大学非常勤講師）

1. はじめに

人間は、自然環境に影響され、またそれを利用しながら活動してきた。中でも地形は、人間の生活舞台であり、活動の場となってきただけに、地形環境と人間生活との間には密接な関係が存在する。地形環境は、第四紀に変化を経て、現在に至っている。そのため、過去の人間生活を浮き彫りにするには、各時期の地形環境とその変化を明らかにすることが必要と考えられる。

人間生活の解明につながる地形環境は、数万年や数千年オーダーでの考察だけでなく、それより細かいオーダーで捉えなければならない。これには、考古遺跡の発掘調査区における地形・地質調査が有効な方法となる。調査区では、微地形とそれを構成する堆積物が直接観察され、堆積物については詳細な区分が行える。そのため、堆積物ごとの細かいオーダーで地形環境を復原し、その変化を辿ることができる。しかも、堆積物には縦年された考古遺物がしばしば含まれる。復原された地形環境の時期はそれを通して明確にすることが可能となる。また調査区では、人間活動の痕跡である遺構が検出されるため、過去の人間生活が知られる。そこでは、地形環境と人間生活の係わりをも分析できるのである。

本稿では、広根遺跡の調査区における地形環境を明らかにし、それと人間活動との関係について考察したい。今回は、報告の対象となるA区からH区のうち、A-1・2区と3区（A-3-1区とA-3-2区）、D-3区、G-1区と2区、及びH-1区と2区（H-2北区、H-2南区ならびにH-2東区）を中心に考察を行う。

調査では、これらの調査区付近における地形の分類と堆積物の把握を試みた。地形分類では、まず20,000分の1と5,000分の1空中写真の判読から調査区周辺の地形を区分し、ついで5,000分の1空中写真の判読と現地踏査によって各調査区付近における微地形の分類を行った。堆積物に関しては、ボーリング資料を解析するとともに調査区での地質断面を詳細に観察した。地質断面の観察は、遺構検出面より上位だけでなく、A-1・2区北側、A-3-2区、D-3区の東部と西部、H-1区中央部、及びH-2南区で掘削したトレンチの断面によって遺構検出面以深についても行った。こうして得られた地形と堆積物の調査結果に、遺構の分布や時期などの発掘調査成果を加えて、調査区付近の地形環境ならびにそれと人間活動との係わりを考察した。

2. 調査区周辺の地形

本遺跡は、猪名川の支流である野尻川とともにその支流にあたる猪瀧川の合流点付近に位置する。野尻川は猪名川中流域の山間部を概ね南東へ潜入蛇行しながら流れる。猪瀧川との合流点付近には、500m前後の幅と約2kmの長さをもつやや開けた盆地がみられ、盆地内には平野が発達する。平野の周辺には標高140～230mの山地が分布し、そこでは近年主に宅地の開発に伴う人工改変が著しい。平野は更新世段丘、完新世段丘、現氾濫原、ならびに支流性扇状地に区分され、さらに完新世段丘は2面に、支流性扇状地は3面に分けられる（第13図）。本稿では、これらを高位のものから完新世段丘ⅠとⅡ、支流性扇状地ⅠからⅢと呼ぶ。各地形の特徴は次のとおりである。



第13図 調査区周辺の地形分類図

〔更新世段丘〕 調査区周辺では、この段丘が1面しか認められない。これは河川による侵食のため発達があまりよくなく、G区の西方やA区の南東方にみられるのみである。この段丘は完新世段丘Iと比高2m前後の段丘崖で接する。

〔完新世段丘I〕 これは、調査区周辺において比較的よく発達し、野尻川の北岸やG区の西にみられる。段丘面は、完新世段丘IIより約1m高く、下流へ緩やかに傾斜する。段丘崖は下流に向かって比高を減じ、野尻川北岸の段丘東端では比高がほとんどない。

〔完新世段丘II〕 この段丘は、完新世段丘Iと同様に比較的広い範囲で認められる。これは、野尻川沿いで連続性がよいものの、猪瀧川に沿っては断続的に分布する。段丘面はほぼ平坦で、下流へ緩やかに高度を下げる。段丘崖の比高は、調査区より上流で1.5~2mを有するもの、下流に向かって減少し、A-1・2区の北では30~40cmとなる。完新世段丘IIには、A-1・2区、A-3-1区、A-3-2区、B区、C区、D-1区と2区、E区、ならびにG-1区が位置する。

〔現氾濫原〕 この地形面は最も低く、河川の氾濫時には冠水する可能性が大きい。これは、野尻川と猪瀧川の合流点を中心に比較的連続してみられるものの、幅が最大で約110mと狭長である。地表は完新世段丘IやIIより緩やかな傾斜で下流へ高度を減じる。G-2区は猪瀧川に沿う現氾濫原に位置する。

〔支流性扇状地I〕 支流性扇状地は背後の山地から堆積物が供給されてきた小規模な扇状地である。そのうち支流性扇状地Iは、調査区周辺に散在し、G区の西方、D-3区の南、及びA区の東方にみられる。いずれも約9.3%の傾斜で地表高度を下げ、更新世段丘とは傾斜変換線で接する。この扇状地は段丘化しており、支流性扇状地IIとの境界には比高3~4mの段丘崖が認められる。

〔支流性扇状地II〕 これは支流性扇状地の中で最もよく発達する。この扇状地は野尻川の北岸や猪瀧川の南岸に多く分布し、大部分は複合扇状地をなす。地表傾斜は約5.6%で、完新世段丘Iと傾斜変換線で接する。この扇状地も段丘化しており、完新世段丘IIとの間には比高2~3mの段丘崖が認められる。猪瀧川の南岸に発達する支流性扇状地IIには、F-1区と2区やH-1区から3区が位置する。

〔支流性扇状地III〕 この扇状地は調査区周辺に点々とみられる。多くは面積が小さいものの、調査区より上流の猪瀧川沿いには複合扇状地をなす大規模なもののが発達する。地表は約12.4%の急傾斜で高度を減じ、完新世段丘IIと傾斜変換線で接している。ただし、この扇状地では支流が下刻しておらず、それによって形成される谷が認められない。A-3-3区やD-3区はこうした支流性扇状地IIIに位置する。

3. 調査区付近における微地形と遺構の分布

(1) A-1・2区と3区、及びG-1区付近の微地形と遺構について

A-1・2区、A-3-1区、A-3-2区、ならびにG-1区は完新世段丘Iに位置し、これは野尻川や猪瀧川によって形成された扇状地が埋没後に段丘化したものである。そのため、これらの調査区では埋没した旧中州と旧河道が認められる。

A-1・2区、A-3-1区、及びA-3-2区では、A-1・2区北部、A-1・2区南半部からA-3-1区北半部、ならびにA-3-1区南端に埋没旧中州が分布する(第14図)。これらはおおむね東西に長く伸び、そこでは現地表がわずかに高い。これらのうち、A-1・2区北部の埋没旧中州上では縄文時代後期と13世紀の集石土坑など、またA-1・2区南半部からA-3-1区北半部のそれでは古墳時代から8世紀の石敷遺構や9世紀と12世紀の掘立柱建物跡などが検出されている。

埋没旧河道はA-1・2区北部及びA-3-1区南部からA-3-2区に2本みられる。A-1・2

区北部の埋没旧河道は、西南西－東北東方向に延び、野尻川の流路跡に相当する。A-3-1区南部からA-3-2区にかけてのそれは、西方の山地から流れ出す小規模な支流の流路跡で、東南東へ延びる。これは、複数の流路跡が密集するため、A-3-1区以東で全体の幅が広がる。この埋没旧河道上からA-3区南端の埋没旧中州末端上にかけて13世紀と15世紀から16世紀の水田跡が検出されている。

G-1区は南東端を除いて猪瀬川北岸の埋没旧中州上に位置する（第15図）。この埋没旧中州は猪瀬川の流下方向にあたる南西－北東方向に長く延びる。そこでは、主に13世紀の掘立柱建物と木棺墓、14世紀の石積造構が検出されている。埋没旧河道はG-1区南東端に分布する。これは猪瀬川の流路跡で、南西から北東へ延びる。埋没旧河道上では、建物や墓の遺構が認められない。

(2) G-2区付近の微地形と遺構について

この調査区は猪瀬川沿いの現氾濫原に位置する。調査区付近には扇状地が埋没しており、旧中州と旧河道が埋没した状態で認められる（第15図）。G-2区の北西半部には埋没旧中州がみられ、南東半部には埋没旧河道が分布する。いずれも猪瀬川によって形成されたものである。これらの微地形上では、顕著な遺構が検出されていない。

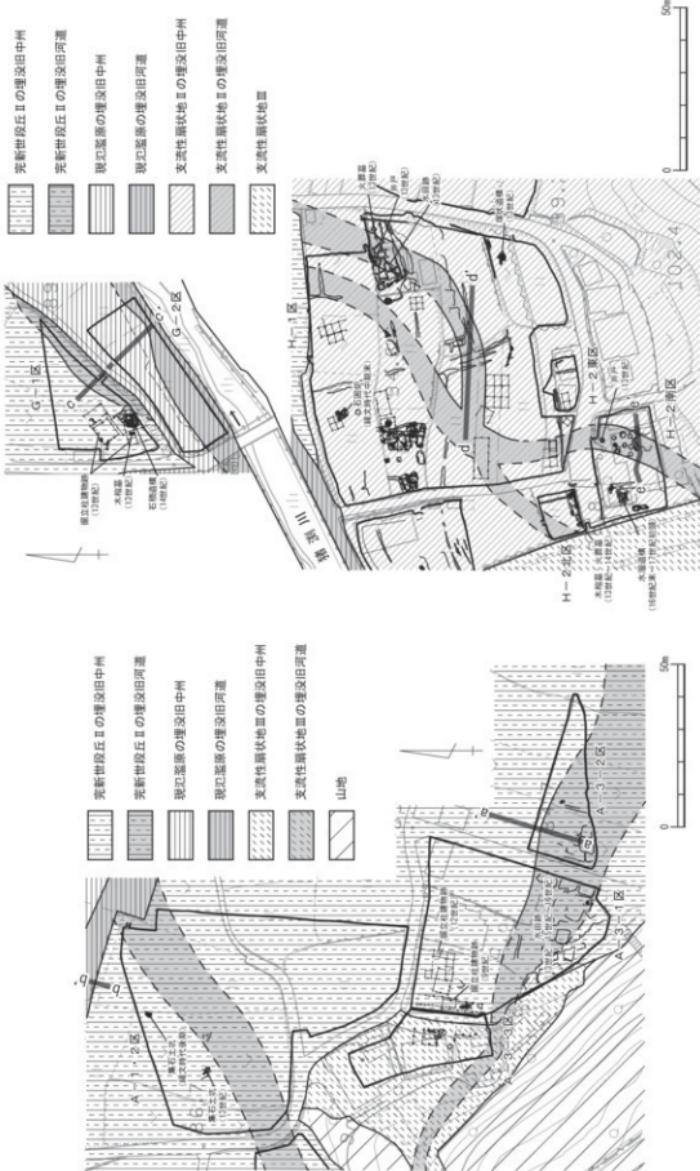
(3) H-1区とH-2区付近の微地形と遺構について

これらの調査区は猪瀬川南岸の支流性扇状地Ⅱに位置する。そこには、埋没旧中州が4ヶ所でみられ、埋没旧河道は2本認められる（第15図）。埋没旧中州はH区全体の南西部、南東部、北西部、及び中央部から北東部に分布する。これらは南西－北東方向に長く延び、中でもH区中央部から北東部の埋没旧中州は狭長で面積が小さい。H区南西部の埋没旧中州上では、13世紀から14世紀の木棺墓や火葬墓（H-2北区）と16世紀末から17世紀初頭の水溜造構（H-2南区）などが検出され、H区南東部のそれでは、12世紀から13世紀の掘立柱建物跡や13世紀の塚状造構と火葬墓（いずれもH-1区）などが認められる。また、H区北西部の埋没旧中州上からは縄文時代中期末の石臼炉（堅穴住居跡）と13世紀の掘立柱建物跡、中央部から北東部のそれでは13世紀の掘立柱建物跡などが検出されている。

埋没旧河道は、H-2北区北西部からH-1区北東部へ延びるものと、H-2南区東部からH-1区北東部に至るもののが確認される。これらはやや蛇行しながら北東方へ延びる。H-1区北東部の埋没旧河道上付近では13世紀の水田跡と井戸、H-2南区のそれでは13世紀の井戸が検出されている。また、H-1区南西部にみられる12世紀から13世紀の掘立柱建物跡には、埋没旧中州上から埋没旧河道上にかけて分布するものが3～4棟認められる。

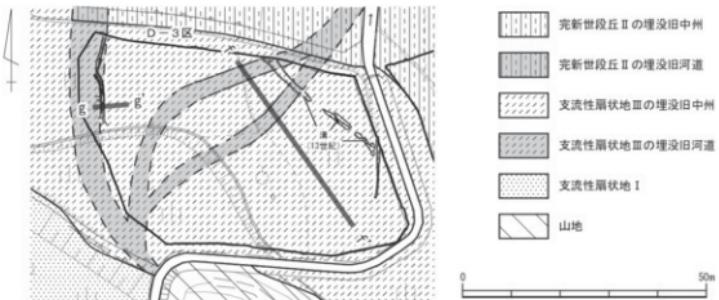
(4) D-3区付近の微地形と遺構について

この調査区は野尻川南岸の小規模な支流性扇状地Ⅲに位置する。調査区付近には埋没旧中州が3ヶ所に分布し、これらは調査区の北西部、中央部、ならびに南東部に認められる（第16図）。これらのうち中央部のそれは面積が小さい。他方、埋没旧河道は3本みられる。1本は調査区西端をほぼ北へ向かって、また他の2本は調査区南西部から北東へやや蛇行して延びる。これらの微地形上では、13世紀の溝などが検出されている。



第14図 A-1・2区と3区付近における微地形の分布

第15図 G-1区と2区及びH-1区と2区付近における微地形の分布



第16図 D-3区付近における微地形の分布

4. 調査区付近における堆積物の特徴

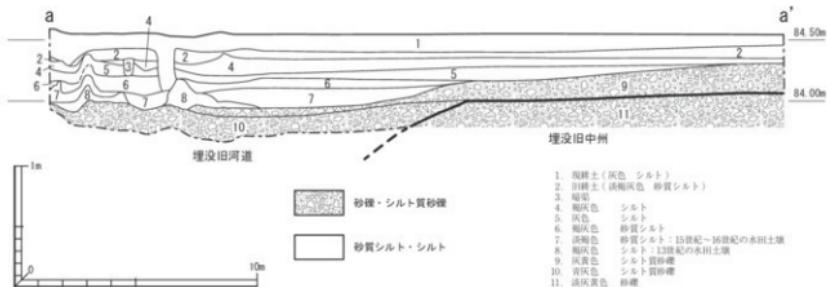
(1) A-1・2区と3区付近、及びG-1区における完新世段丘の堆積物

A-1・2区、A-3-1区、A-3-2区、ならびにG-1区が位置する完新世段丘では、基本的に砂礫とそれを覆う細粒堆積物が観察される。ボーリング資料によると、A-1・2区と3区付近の完新世段丘では現地表下2m以深に基盤岩が認められ、砂礫はその上に約1.8mの厚さで堆積する。これは扇状地堆積物に該当し、トレンチ断面ではその上部が観察される(第17図・第18図)。A-1・2区、A-3-1区、及びA-3-2区では、扇状地堆積物の中でも旧中州堆積物にあたる砂礫(第17図の堆積物11、第18図の堆積物13)が広い範囲で認められる。これは、淡灰黄色と黄灰色を呈し、径4~22cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。埋没旧中州の分布範囲ではその上面が高くなり、現地表下20cm~1.2mにみられる。とくに、A-1・2区の中央部から南部にかけては上面高度が高く、砂礫が遺構検出面に露呈する。

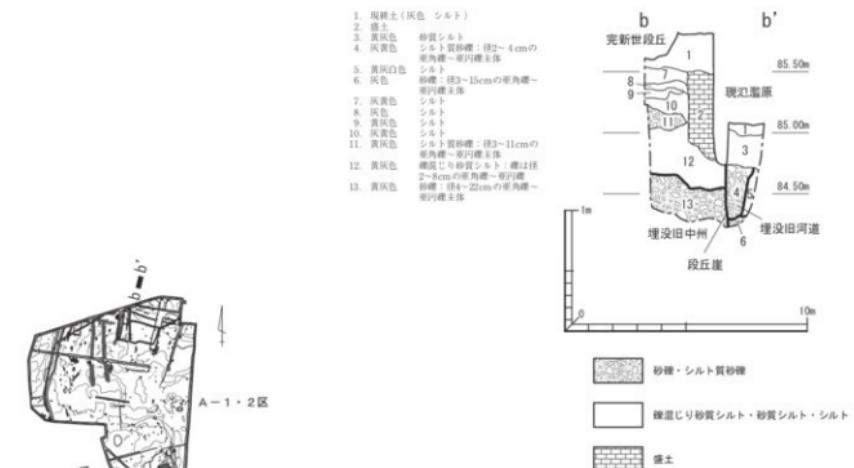
A-3-1区南部からA-3-2区にかけては、こうした砂礫を切る旧河道が認められる(第17図)。この旧河道は17m以上の幅をもち、深さが30cm以上である。旧河道堆積物は青灰色のシルト質砂礫(第17図の堆積物10)で、旧中州堆積物より径の小さい礫からなる。その上面は旧中州堆積物上面よりやや低い。

砂礫の上位にみられる細粒堆積物は5層前後に分けられる。これらは褐灰色や黄灰色などを呈する砂質シルト(第17図の堆積物6・7、第18図の堆積物12)とシルト(第17図の堆積物4・5・8、第18図の堆積物7~10)である。間には、径3~11cmの亜角礫や亜円礫からなる黄灰色のシルト質砂礫(第17図の堆積物9、第18図の堆積物11)が部分的に挟まれる。これらは22cm以下の厚さで観察され、とくにA-1・2区北部とA-3-2区で比較的厚く認められる。A-1・2区とA-3-1区北部では、細粒堆積物の上部に位置する灰色シルト(第18図の堆積物9)下面の層位で繩文時代後期から13世紀の遺構が検出される。また、A-3-1区南部からA-3-2区にかけて分布する埋没旧河道付近では、細粒堆積物の下部にみられる褐灰色のシルト(第17図の堆積物8)と淡褐色の砂質シルト(第17図の堆積物7)が水田土壤にあたり、それぞれ13世紀と15世紀から16世紀の遺物を含む。

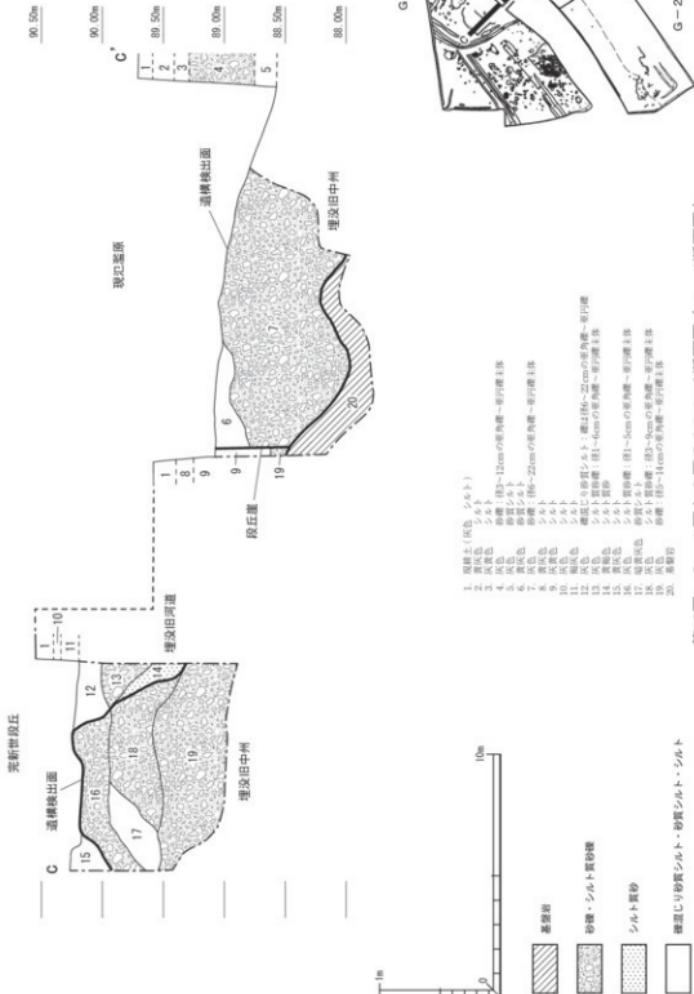
一方、G-1区では砂礫が現地表下30cm以深に堆積する(第19図)。この砂礫は扇状地の旧中州堆積物に相当し、少なくとも3層に細分される。いずれも亜角礫から亜円礫を主体とする灰色の砂礫(第19図の堆積物19)またはシルト質砂礫(第19図の堆積物16・18)である。最下位の砂礫(第19図の堆積物19)を構成する礫は主に径5~14cmであるものの、最上位のシルト質砂礫(第19図の堆積物16)は径1~5cmの



第17図 A-3-2区のトレーニング断面図(a-a'断面図)



第18図 A-1-2区北側のトレーニング断面図(b-b'断面図)



第19図 G-1区と2区のトレチ断面図 (c-c'断面図)

礫からなり、下位のものほど径の大きい礫を主体とする。間には砂質シルト（第19図の堆積物17）が約30cmの厚さでレンズ状に挟まる。

このような砂礫を切る旧河道がG-1区の南東端に認められる。これは猪瀧川の流路跡に該当し、2.8m以上の幅と約1.8mの深さをもつ。旧河道堆積物は下位から黄褐色のシルト質砂（第19図の堆積物14）、灰色のシルト質砂礫（第19図の堆積物13）、及び灰色の礫混じり砂質シルト（第19図の堆積物12）であり、シルト質砂礫は径1～6cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。

砂礫の上位に位置する細粒堆積物は、黄褐色や褐灰色、灰色を呈するシルトで、旧中州堆積物と旧河道堆積物を覆う。最下位の黄褐色シルト（第19図の堆積物15）は旧中州堆積物上面の低い箇所に断続的に分布し、その上位にみられる褐灰色と灰色のシルト（第19図の堆積物10・11）はG-1区のはば全域に広がる。G-1区南東部では、これらの間に黒褐色のシルトが20cm前後の厚さで挟まる。この堆積物は13世紀から14世紀の遺物を含んでおり、下面の層位で同時期の遺構が検出される。

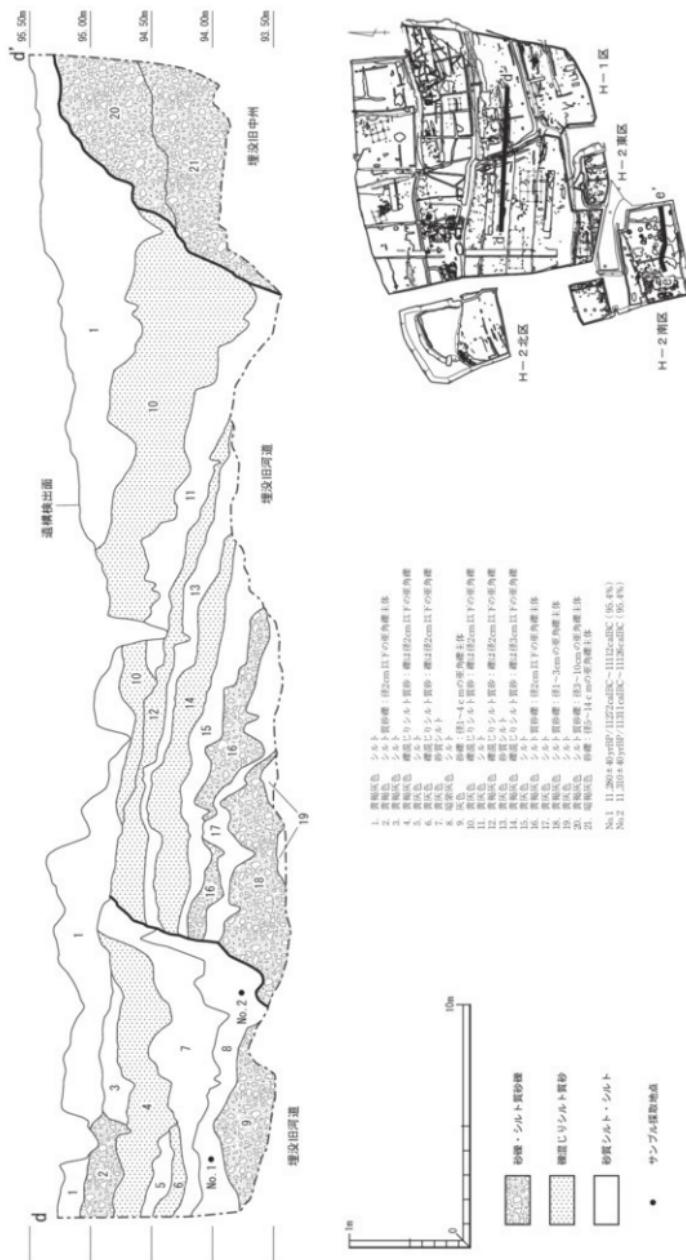
（2）A-1・2区北側とG-2区における現氾濫原の堆積物

A-1・2区北側とG-2区では、大きくみて砂礫とその上位にみられる細粒堆積物が現氾濫原を構成する（第18図・第19図）。A-1・2区北側で観察される砂礫（第18図の堆積物6）は扁状地堆積物にあたる。これは灰色を呈し、径3～15cmの亜角礫から亜円礫を主体とする。これを覆う細粒堆積物は、約70cmの厚さをもち、黄灰白色のシルト（第18図の堆積物5）と黄灰色の砂質シルト（第18図の堆積物3）に細分される。これらのうち、下位の黄灰白色シルトを切る旧河道が認められる。これは、野尻川の分流跡にあたり、幅が約1m、深さがおよそ45cmの小規模なものである。旧河道は灰黄色のシルト質砂礫（第18図の堆積物4）に埋積されており、これは径2～4cmの比較的小さい礫からなる。

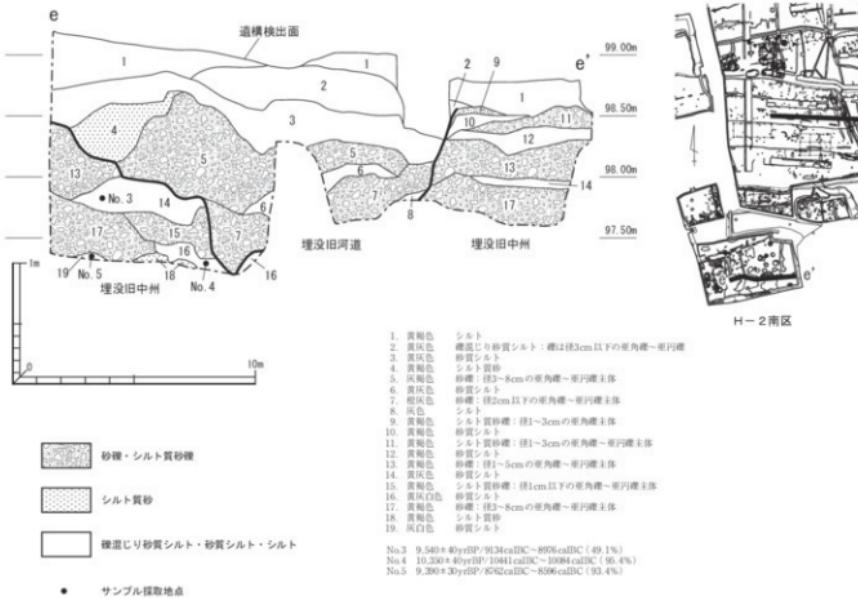
G-2区では、現氾濫原の堆積物が約1.7mの厚さで堆積する。下位には基盤岩（第19図の堆積物20）が認められ、灰色の砂礫（第19図の堆積物7）がその上に観察される。この砂礫は扁状地の旧中州堆積物に該当する。礫は径6～22cmの亜角礫から亜円礫を主体とし、厚さは約1mである。砂礫を被覆する細粒堆積物は、黄灰色や灰色などの砂質シルトとシルト（第19図の堆積物2・3・5・6）で、少なくとも4層に分けられる。これらのうち、最下位に位置する黄灰色の砂質シルト（第19図の堆積物6）上面が遺構検出面にあたり、そこからは旧河道が検出されている。これは猪瀧川の流路跡に該当し、9m以上の幅と約65cmの深さをもつ。旧河道堆積物は灰色の砂質シルト（第19図の堆積物5）と径3～12cmの亜角礫から亜円礫を主体とする灰色の砂礫（第19図の堆積物4）である。

（3）H-1区と2区における支流性扁状地Ⅱの堆積物

H-1区と2区が位置する支流性扁状地Ⅱでは、基本的に砂礫の上に細粒堆積物が認められる。H-1区でのボーリング資料によると、これらは基盤岩の上に約3mの厚さで堆積する。それらのうち砂礫は扁状地堆積物にあたり、現地表下2m以深にみられる。トレンチ断面では、このような砂礫のうち扁状地の旧中州堆積物に相当するものの上部が観察される（第20図・第21図）。これは、暗褐灰色や黄褐色などを呈する砂礫（第20図の堆積物21、第21図の堆積物13・17）とシルト質砂礫（第20図の堆積物20、第21図の堆積物9・11）で、2～4層に分けられる。下位の砂礫ほど径の大きい礫からなり、最下位にみられる砂礫（第20図の堆積物21、第21図の堆積物17）はH-2南区で径3～8cm、H-1区で径5～14cmの亜角礫や亜円礫を主体とする。



第20図 H-1区のトレチ断面図 (d-d'断面図)



第21図 H-2 南区のトレーン断面図（e-e'断面図）

砂礫の間には、黄褐色や黄灰色などのシルト質砂（第21図の堆植物18）と砂質シルト（第21図の堆植物10・12・14・16・19）が30cm以下の厚さでレンズ状に挟まる。H-2 南区では、こうした砂質シルト（第21図の堆植物14・16・19）が三つの層位で認められ、それぞれに植物遺体が混入する。これらの¹⁴C年代値は下位のものから $9,390 \pm 30$ yrBP (8762calBC~8596calBC)、 $10,350 \pm 40$ yrBP (10441calBC~10084calBC)、ならびに $9,540 \pm 40$ yrBP (9134calBC~8976calBC)である¹⁾。

このような砂礫を切る旧河道が2本認められる。ひとつは、H-2 北区北西部からH-1 区北東部へ延び、深さが1.8m以上である。他の一つは、H-2 南区東部からH-1 区北部に至り、17m以上の幅と約1.4mの深さをもつ。どちらも猪瀧川の小規模な支流跡で、後者の旧河道が前者を切る。

前者の旧河道堆積物は、下部が黄褐色のシルト質砂礫（第20図の堆植物16・18）と黄灰色を呈するシルト（第20図の堆植物17・19）の互層、中部から上部は黄褐色や黄灰色の疊混じりシルト質砂（第20図の堆植物10・12・14）と黄灰色シルト（第20図の堆植物11・13・15）の互層である。シルト質砂礫や疊混じりシルト質砂に混入する礫は小さく、径3cm以下の亜角礫を主体とする。後者の旧河道では、下半部に褐灰色や灰色などの砂礫（第20図の堆植物9、第21図の堆植物5・7）がみられ、上半部には主として黄灰色や黄褐色などを呈するシルト質砂（第20図の堆植物4・6、第21図の堆植物4）、砂質シルト（第20図の堆植物7、第21図の堆植物2・3）、及びシルト（第20図の堆植物3・5・8）が認められる。これららのうち上半部の最下位に位置する暗紫灰色のシルト（第20図の堆植物8）は、 $11,280 \pm 40$ yrBP ($11272\text{calBC} \sim 11112\text{calBC}$)と $11,310 \pm 40$ yrBP ($11311\text{calBC} \sim 11126\text{calBC}$)の¹⁴C年代値を示す²⁾。

砂礫を被覆する細粒堆積物は最大およそ1.5mの厚さをもち、3層に分けられる。これらのうち、下部

に位置する黄褐色や黄褐色のシルト（第20図の堆積物1、第21図の堆積物1）はH-1区と2区の広範囲にみられ、中部の暗灰黄色や黄褐色を呈するシルトは断続的に分布する。中部のシルトには13世紀から16世紀を中心とする遺物が含まれており、下面の層位からは繩文時代中期末以降の遺構が検出される。上部にみられる黄褐色のシルトは江戸時代以降の旧耕土である。

（4）D-3区における支流性肩状地Ⅲの堆積物

D-3区が位置する支流性肩状地Ⅲは砂礫とそれを覆う細粒堆積物からなる（第22図・第23図）。これらのうち、砂礫は肩状地堆積物に相当する。中でも灰色や褐灰色の砂礫（第23図の堆積物12・14）とシルト質砂礫（第22図の堆積物6・8・10、第23図の堆積物16）は旧中州堆積物にあたり、少なくとも3層に分けられる。最下位で観察されるシルト質砂礫は径4～22cm、またそれより上位の砂礫やシルト質砂礫は径1～4cmの亜角礫を主体とする。これらの間には、褐灰色と暗褐灰色の砂質シルト（第23図の堆積物13・15）やシルト（第22図の堆積物7・9）が30cm以下の厚さでレンズ状に挟まれる。

砂礫の上位に位置する細粒堆積物は褐灰色や黄灰色などを呈する砂質シルト（第23図の堆積物2）とシルト（第22図の堆積物2・5、第23図の堆積物3など）である。これらは1.1～1.3mの厚さで広がり、5層前後に細分される。D-3区東部では、これらの間に径1～4cmの亜角礫を主体とする褐灰色のシルト質砂礫（第22図の堆積物4）が断続的に挟まれる。こうした堆積物のうち、遺構は中部に位置する褐灰色や黄灰色のシルト（第22図の堆積物2、第23図の堆積物2）上面で検出され、これより上位には16世紀以前の旧耕土が観察される。

このような堆積物のうち三つの層位で4本の旧河道が認められる。これらは野尻川の小規模な支流跡にあたる。下位の旧河道はD-3区西端に分布する。そこには新旧2本の旧河道が重複してみられ、両者とも旧中州堆積物である砂礫を切る。古い旧河道は約1.4m、新しいものは約1mの深さをもち、いずれも6m以上の幅を有する。これらの旧河道は主に砂礫（第23図の堆積物5・7・9・11）と砂質シルト（第23図の堆積物6・8）によって埋積されている。

中位と上位の旧河道はそれらより東に分布する。中位の旧河道は細粒堆積物に挟まれる褐灰色のシルト質砂礫（第22図の堆積物4）を切る。これは幅およそ4.4m、深さ約1.2mで、旧河道堆積物は褐灰色の礫混じり砂質シルト（第22図の堆積物3）である。上位の旧河道は細粒堆積物の中部に位置する褐灰色のシルト（第22図の堆積物2）を切る。この旧河道は最も小規模で、幅が2m前後、深さが約1mである。これは褐灰色のシルト質砂礫（第22図の堆積物1）によって埋積されている。

5. 調査区付近における地形環境の変遷

これまで述べた事柄からみて、調査区付近では次のように地形環境が変遷したと考察される。

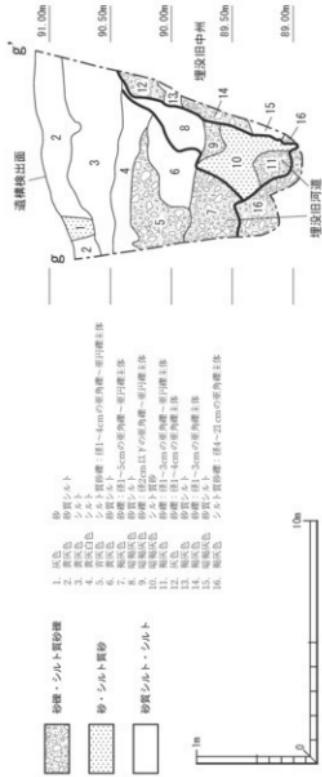
〔ステージ1〕 調査区付近では、更新世段丘の形成後、野尻川と猪瀧川による砂礫の堆積がみられ、両河川に沿って肩状地がつくられた。また、これとはほぼ同時期にあたる1万年前後には、H-1区と2区付近をはじめとする山麓にも小規模な支流によって砂礫がもたらされ、急な傾斜の肩状地が発達した。H-1区と2区付近の肩状地では、複数の中州と流路変更に伴う旧河道の形成がなされた。

〔ステージ2〕 肩状地の形成後、河川の氾濫が度々発生し、肩状地は砂質シルトやシルトなどの細粒堆積物によって覆われた。これらの堆積によって旧中州と旧河道は埋没した。

〔ステージ3〕 約9,500年前以降、野尻川と猪瀧川、及びそれらの支流が下方侵食を行った。その結果、



第22図 D-3区東部のトレーンチ断面図 (f-f'断面図)



第23図 D-3区西部のトレーンチ断面図 (g-g'断面図)

埋没した扇状地は段丘化し（完新世段丘Ⅰと支流性扇状地Ⅱの形成）、段丘面は洪水のほとんど発生しない安定した環境となった。

〔ステージ4〕 完新世段丘Ⅰが形成された後、その段丘崖下を流れる野尻川と猪瀧川沿いでは砂礫の堆積がみられた。これに伴って扇状地が再び発達した。他方、D-3区などが位置する山麓でも、支流によって砂礫が堆積し、急傾斜の小規模な扇状地が形成された。当時、A-1・2区、A-3-1区、A-3-2区、G-1区、及びD-3区付近の扇状地では中州と流路跡がつくられた。

〔ステージ5〕 その後縄文時代後期までに、扇状地上では洪水に伴う砂質シルトやシルトなどの堆積がなされた。これによって扇状地は旧中州や旧河道とともに浅く埋没した。D-3区付近の支流性扇状地では、その過程で流路が変更し、旧河道が形成された。

〔ステージ6〕 こうした埋没扇状地上では、遅くとも縄文時代後期から14世紀にかけて比較的安定した環境が訪れた。このような環境の下、縄文時代後期にはA-1・2区の埋没旧中州上に集石土坑がつくられた。さらに、9世紀と12世紀にはA-3-1区の埋没旧中州上に掘立柱建物が建てられ、A-3-1区とA-3-2区の埋没旧河道上付近では13世紀に水田稲作が営まれた。また、G-1区の埋没旧中州上では13世紀に掘立柱建物と木棺墓、14世紀に石積造構がつくられた。一方、支流性扇状地Ⅱに位置するH-1区と2区の埋没旧中州上では、縄文時代中期末に石圓炉をもつ竪穴住居が建てられ、12世紀から13世紀と13世紀には掘立柱建物からなる集落が形成された。ただし、12世紀から13世紀に建てられた掘立柱建物の中には一部が埋没旧河道上にまで及ぶものもみられた。埋没旧中州上では他にも木棺墓や火葬墓などの墓が13世紀から14世紀にかけて築造され、H-1区北東部の埋没旧河道上付近には水田が13世紀につくられた。

〔ステージ7〕 14世紀以降、野尻川と猪瀧川に沿う埋没扇状地上には、再び細粒堆積物が洪水によってもたらされた。そのため、埋没扇状地はさらに深く埋没した。このころ、D-3区付近の支流性扇状地でも同様の現象がみられた（支流性扇状地Ⅲの形成）。

〔ステージ8〕 野尻川と猪瀧川による下方侵食が各流路に沿う幅100m以下の狭い範囲で行われた。これに伴って、埋没扇状地が段丘化する（完新世段丘Ⅱの形成）とともに、流路沿いには深さ2.5m前後の谷が形成された。

〔ステージ9〕 流路沿いの谷には、野尻川と猪瀧川によって砂礫がもたらされ、扇状地が発達した。この時期、G-2区付近では中州の形成がみられた。

〔ステージ10〕 谷中の扇状地は細粒堆積物に覆われて埋没した（現氾濫原の形成）。G-2区では、その過程で旧河道が流路変更に伴って形成された。他方、A-3-1区とA-3-2区の埋没旧河道上付近では15世紀から16世紀に水田耕作が行われた。その後、この付近にはA-3-1区の西から流れる小規模な支流によってシルトが堆積し、水田は浅く埋もれた。

6. おわりに

本遺跡の調査区周辺には、更新世段丘、完新世段丘ⅠとⅡ、現氾濫原、及び支流性扇状地ⅠからⅢが認められる。これらのうち、完新世段丘ⅡにはA-1・2区、A-3-1区、A-3-2区、ならびにG-1区、現氾濫原にはG-2区、支流性扇状地ⅡにはH-1区と2区、支流性扇状地ⅢにはD-3区が位置する。これらの地形には扇状地が埋没しており、その微地形にあたる旧中州と旧河道が埋没した状態で分布している。完新世段丘Ⅱと支流性扇状地Ⅱはそうした埋没扇状地が段丘化したものに相当し、段丘化の

時期は支流性扇状地Ⅱが約9,500年前から縄文時代後期まである時期、完新世段丘Ⅱは14世紀以降であった。他方、支流性扇状地Ⅲは完新世段丘Ⅱとほぼ同じ時期に発達し、現氾濫原はその後形成された。

こうした各地形面では、環境が安定し、洪水のほとんど発生しない時期が現出した。このような時期に人間活動が活発化し、高燥で排水の便がよい埋没旧中州上は居住域や墓域、またわずかに低く集水する埋没旧河道上は生産域（水田）として人間に利用された。

支流性扇状地Ⅱでは、段丘化した時期以降の環境が安定していた。このような環境下で縄文時代中期末には、H-1区の埋没旧中州上に石闕炉をもつ堅穴住居が立地した。さらにH-1区と2区の埋没旧中州上では、12世紀から13世紀と13世紀に掘立柱建物からなる集落、また13世紀から14世紀には木棺墓や火葬墓などがつくられ、13世紀にはH-1区の埋没旧河道上で水田が経営された。ただし、12世紀から13世紀の掘立柱建物には一部が埋没旧河道上にまで及んで立地するものもみられた。これは、支流性扇状地Ⅱが比較的の大きい段丘であるとともに急傾斜の段丘面をもつため、埋没旧中州上でなくとも排水されやすいことに起因すると考えられる。

完新世段丘Ⅱでは、比較的の安定した環境が遅くとも縄文時代後期から14世紀にかけてと段丘化した時期以後にみられた。こうした環境の下、縄文時代後期にはA-1・2区の埋没旧中州上に集積土坑がつくられ、9世紀と12世紀にはA-3-1区の埋没旧中州上、13世紀にはG-1区のそれに掘立柱建物が建てられた。また、A-3-1区とA-3-2区の埋没旧河道上付近では、13世紀及び15世紀から16世紀に水田耕作が営まれた。以上のように、本遺跡の調査区では地形環境と人間活動が深く係わっており、人間活動は安定した環境下で微地形の種類に応じてなされたと考えられるのである。

注

1) これらの放射性炭素年代値は株式会社東洋研究所によるものである。

2) 前掲1)

第7章　まとめ

1. 各区の調査成果と変遷

今回の調査では、北向き斜面の山地・扇状地・段丘上から縄文時代中期から晩期、弥生時代前期、平安時代中頃から後期、鎌倉時代、室町時代から近世初頭、近世から近代と幅広い時期の遺構・遺物が見つかっている。各区の遺構の時期・変遷を以下にまとめておく。

A区 A-1・2区では完新世段丘を形成する埋没中州上に、縄文時代後期の集石遺構が営まれ、以降は、中世前期・後期において土地利用がなされている。中世前期の遺構は集石土坑以外には乏しく、集落の縁辺であった可能性が高い。石敷き遺構が検出されているが時期は特定しがたい。SX04は現行の畦畔と向きを同じく南北方向にしており、近世の暗渠や畦畔の基部とも考えられる。

A-3区では、西端の山地との境にある扇状地の根元付近に平安時代前期の集落が形成され、平安時代中頃には下方の扇状地上に集落が形成され、土坑や遺物から集落は鎌倉時代まで存続したと考えられる。また、同時期には埋没した旧河道上の湿地に、等高線に沿って畦畔が造られ、水田が造成され、室町時代には地割の向きを変え現在の地割に踏襲される。室町時代の集落は見られない。

B区 野尻川左岸では段丘上に鎌倉時代の集落が形成され、以降は近代に酒造遺構が営まれるまで、集落などは形成されない。

C区 D・E区とともに字京田に位置する。15世紀中頃の文書に経田として登場する地点にあたる。低位段丘に位置しており、東西方向に走る中世後期前後の畦畔痕跡がある。

D区 完新世段丘と支流性扇状地からなる。D-1区の旧河道内からは平安時代前期の遺物が出土しており、近辺に当該期の生活があったと推測される。D-3区では鎌倉時代と戦国時代の溝が検出されており、鎌倉時代の溝は北東方向に下降する地形に沿っている。戦国時代の溝は南北方向に近く、現在の地割に沿っている。

E区 15世紀中頃の文書に経田として登場する地点にあたり、田畠が多田院に寄進されている。低位段丘上からは多数の犁溝が上下2層で検出されており、上層は南北方向N11°～15°E、下層は北西・南東方向N48°～70°Wを向いている。出土遺物は瓦器椀片を若干含むが、多くは15世紀から16世紀の青磁碗・天目椀などである。上下どちらの遺構面が文書に対応するかは包含層が薄く、遺物からは詳らかではない。

F-1区 支流性扇状地に位置しており、縄文時代中期の土坑、弥生時代前期から中期にかけての土器棺、平安時代中期の土坑群、鎌倉時代の集落跡、近世の犁跡が見つかっている。鎌倉時代の建物は南北方向を指向する。

F-2区 支流性扇状地に位置しており、中世前期の集落跡及び溝を検出している。鎌倉時代と室町時代の包含層が存在し、遺構には一部12世紀に遡る可能性のある建物跡を含む。

G区 G-1区は段丘の埋没中州上にあり、13世紀～14世紀代の集落・墓などが存在する。G-2区には旧中州と旧河道が認められ、包含層中には12世紀代の遺物が含まれている。

H区 支流性扇状地上に位置している。縄文時代中期の住居、平安時代後期の溝、鎌倉時代の建物・井戸・墓・区画溝・水田遺構、室町時代の鍛冶炉・土坑、近世初頭の水溜遺構群などが見つかっている。概ね、埋没中州に縄文時代後期から晩期の住居、鎌倉時代の建物と墓地、室町時代から近世初頭の水溜遺構が認められ、旧河道上には鎌倉時代の水田・井戸・墓、室町時代の水田がある。平安時代後期の溝・鎌

倉時代の建物・溝・水田区画のいくつかは正方位を指向しており、東半の水田区画を中心[newline]に新しい水田や建物の一部は西へ振った方位をもつ。室町時代には、溝・水田・土坑・水溜遺構が再び正方位を指向する。

2.まとめ

今回の調査では主に北向きの斜面、扇状地に形成された縄文時代・弥生時代の遺構及び平安時代前期から近世にかけての集落遺跡を検出した。各区の遺構概要一覧をもとに、第6章 青木哲哉氏の論考を参考に、簡単に遺構の変遷を述べる。

広根遺跡（A～H区）のなかで最も古い人間活動は、縄文時代である。縄文時代の遺構は主に中期末から後期にかけており、扇状地帯に散在している。これらは、A区の集石土坑SK01では標高86.00mと低位にあるが、F-1区の土坑やH区の住居址は標高94m前後の中位で検出している。

弥生時代前期の遺構は、F-1区の土器棺のみであるが、標高94m前後の中位にある。

以後、古墳時代にかけての人間活動の動向は詳らかではなく、古墳時代後期の遺物が見つかっている。

古墳時代後期の遺物はA-3-3区の山地、標高87m前後の土坑から出土している。

古代の遺構は扇状地の低位にあるA-4区の焼土坑が8世紀代の可能性があることを除けば、A-3-3区の山地に近い支流性扇状地から検出された平安時代前期の建物があげられる。そして、D-1区の旧河道中の9世紀代の遺物もまた、更に谷奥の支流性扇状地から供給されていると考えられる。A-3-3区の建物群は標高86m～87mに位置している。D-1区の旧河道もまた、同様の標高にあり、同時期の遺構は更にD-3区より高所にあったと考えられる。

平安時代中期以降の遺構はA-3-1区のSB06やF-1区の方形変色部周辺の土坑群がある。SB06は標高85.50m前後、F-1区の方形変色部は標高95.00m前後に位置している。平安時代前期の遺構同様、山地に近い支流性扇状地上に位置するが、前期の遺構よりもやや標高が低い斜面に位置している。また、H区では11世紀代の溝SD02が検出されている。SD02はほぼ正方位、東西方向に流れており、中世前期につながる土地区画が出現した可能性がある。

平安時代の遺構・遺物は、広根遺跡の西端に位置するI-6区でも見つかっており、山裾から流れ出る旧河道から10世紀代の墨書き土器や灰釉陶器が出土している。また、更に西側に位置する猪渕遺跡においても土器が見つかっている。

これら平安時代の集落遺跡の痕跡は、後述する中世前期の集落遺跡よりも更に立地条件の悪い地点に平安時代の集落が点在することを示している。猪渕遺跡では中世前期の屋敷地よりも更に奥まった場所に占地したと推測され、中世前期には同遺跡の旧谷部が埋没していることからも明らかな様に、中世前期には安定する扇状地が、平安時代にはまだ安定していなかったことが、占地の要因になったものと考えられる。

12世紀代の遺構はごく少ない。F-2区とH-1区において建物跡が見つかっているのみである。

鎌倉時代（13世紀代）の集落遺跡は、A-1・2・3区においてその痕跡が見つかっており、B区・D-3区・F-1区においても柱穴などが見つかっている。概ね平安時代の集落よりも更に標高が低い扇状地上から遺構が見つかっており、B区やG区では旧河道に近い段丘上にまで遺構が広がっている。

H区ではこの状況が顕著となっており、集落は平安時代の遺構と重複する場所から段丘崖付近まで広がっている。H区の建物には正方位を指向するものが幾つかあり、溝SD168・SD02・SD319・SD318なども正方位に近い。これは、SD02などの11世紀代の地割りを踏襲していた可能性が考えられる。同様の方位を持つ建物はF-1・2区にも存在しており、同じく前代の地割りを意識していた可能性が考えられ

る。

またH区では、N18°W前後に振る建物・溝が存在している。溝は、正方位よりも後に掘削された溝にこの方向のものが認められる。H区では調査区東半において水田遺構が検出されており、下層の水田畦畔はN16°Wに向いており（水田遺構B）、ほぼ同じ方位を指向している。同様の水田遺構はA-3区においても検出されている。両区ともに自然地形に沿った下層の水田遺構と規格性をもった上層の水田遺構が検出されているのである。上層の水田遺構は中世後期に属すると考えられ、後述する。

鎌倉時代と考えられる遺構は他にD-3区の溝SD21他があり、N50°Wに方位をもつ。正方位をとらず、北東方向に広がる扇状地に沿って溝が造られている。H区においても見られたように、過去の地割りに規制されない地割り・開発が行われたと考えられる。このことは、対岸のG区においても認められる。

E区の犁溝は低位の扇状地に造られた田畠である。出土遺物の時期は中世全般にわたり、上下2層・2方向の方位を持っている。下層の犁溝が示すN48°W～N70°WはD-3区の溝と近い方位である。

以上、中世前期の遺構を概観した。遺物から見て時期は概ね13世紀代に限られる。扇状地の緩斜面に13世紀に入って一度期に集落が出現した可能性が高く、当初は前代の正方位の地割りを踏襲し、以後地形に沿ったバリエーションのある開発を行ったと考えられる。続く14世紀の遺構はG区・H区において墓地などが検出されているが、大規模な集落は認められない。H区のSE282に見られるように13世紀中に屋敷地の廃絶行為などがあったものと考えられる。

中世後期の遺構は、H区に存在する上層の土坑SK01が15世紀である。このほか、H区では北西半の水溜状遺構群が16世紀に入って形成される。機能は不明であるが、付随する溝は概ねN8°WのSD28やN6°EのSD22など正方位を左右する南北方向を指向している。これは現在の地割りにつながる。16世紀代の遺構は、溝・水田以外はF-2区の集石土坑以外にはほぼ確定できず、各区での居住はなくなったものと考えられる。生産遺構として、A-3区の上層水田、C区の波板状凹凸面、D-3区のSD13などは中世後期主に16世紀代の遺構である。これらは正方位もしくはN15°E前後に方位をとり、現在の地割りにつながる方位をとるものである。このN15°E前後の地割りはE区上層の犁溝の方向にも認められる。

その中でも典型的なものは、A-3-2区の中規模畦畔④である（図版25）。この延長上には南北に通る現農道があり、更に対岸の現在の水田地割りの方位と対応している。また、H区上層水田の向きはN5°～7°Wに向いており、同地区の現在の地割りにつながるものである。

以上、今回の調査によって判明した各時期の遺構の分布について述べた。

繩文時代から奈良時代についての遺構は散漫である。本格的には平安時代前期から扇状地の奥に集落が営まれ、13世紀代になって一気に集落が形成される。しかし、14世紀に継続する集落は少なく、15世紀以降H区にはほぼ集中し、居住地の性格は薄れ、工房址の色合いが濃くなる。

広根遺跡周辺の開発は、地割りから見る限り、古代に部分的に正方位を指向して開発されたことが分かる。中世前期には概ね引き続き指向するが、個別の開発によって個々に方位にはバラエティができる。しかし、中世後期に入り、再び大規模に統一的に開発された可能性が高く、各地点の遺構は正方位あるいは現在の地割りに近い形をとる様になる。おそらく、時期が定かでないA-1・2区のSX01や石敷き遺構SX02は中世後期以降の地割りに則っている可能性が高く、SX04についても現在の地割り下に重複し、同方向に走ることから中世後期以降の基幹的な大型の畦畔であった可能性が高いといえよう。

表6 広根遺跡遺構概要一覧

表7 出土遺物観察表1

報告 番号	国版 番号	写真図 番号	種別	器種	法面(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考		
					口径	器高	底径	重量 (g)	口縁	底部	他				
1	110	113	調文土器	深鉢	4.0				小片			A-1-25	S001		
		113	調文土器	深鉢					小片			A-1-25	S001		
2	110	113	調文土器	深鉢		8.1			小片			A-1-25	S001	同一個体	
3	110	113	調文土器	深鉢		5.85			小片			A-1-25	S001		
4	110	113	調文土器	深鉢		6.2				体部小片			A-1-25	S001	
5	110	113	調文土器	深鉢		6.0			小片			A-1-25	S001		
6	110	113	調文土器	深鉢		8.9				体部小片			A-1-25	S001	No.7と同一個体
7	110	113	調文土器	深鉢		6.0		10.90	小片			A-1-25	S001	No.9と同一個体	
8	110	113	調文土器	深鉢		4.1		10.80		体部若干			A-1-25	S001	No.3と同一個体
9	110	113	調文土器	深鉢		5.75				体部若干			A-1-25	S001	No.6と同一個体
10	110	113	土器底	小皿	9.4	1.1	8.0		若干	1.9		A-1-25	S002(手)		
11	110	113	土器底	小皿	9.8	1.2			1/12	1/12		A-1-25	S002		
12	110	113	黒色土器	楕円		1.30	8.0	1.5				A-1-25	S002(手)	内裏	
13	110	113	黒色土器	楕円		3.5			小片			A-1-25	S002		
14	110	113	黒色土器	楕円		2.1			1/3			A-1-25	S002		
15	110	114	調文器	盤	55.0	11.0			1/12			A-1-25	S001	内裏	
16	110	114	調文器	盤	49.6	9.4			1.6			A-1-25	S001		
17	110	114	調文器	盤		7.4				断面L5			A-1-25	S001(周辺確認)	
18	110	114	調文器	盤		6.4	(15.8)		1/12			A-1-25	S001(周辺確認)		
19	110	114	調文器	盤		7.6			1/3			A-1-25		精光	
20	111	114	調文器	盤		2.6			1/7			A-1-25			
21	111	114	調文器	盤		6.35				断面L3			A-1-25		断面
22	111	114	黒陶器	皿		2.05	(4.5)		1/2			A-1-25			
23	111	114	黒陶器	皿	(18.0)	3.1			若干			A-1-25		トレンチNo.4 内壁安土1b期	
24	111	114	黒陶器	皿	15.9	4.0			1/12			A-1-25		遺構まで 灰陶瓦混レキシルト	
25	111	114	黒陶器	皿		3.25	6.6			1/2厚			A-1-25		
26	111	114	土器底	杯	14.9	3.5	5.6	1.2	1/4			A-1-25	P10/S002	右引削として使用	
27	111	114	土器底	杯	14.0	3.2			1/4			A-1-25	P10/S002		
28	111	114	土器底	杯	15.8	3.85	8.0	1.6	若干			A-1-25	P11/S003		
29	111	114	土器底	杯	11.35	1.8			1/8			A-1-25	P13/S003		
30	111	114	土器底	小皿	18.5	1.1			2/5			A-1-25	P14/S003		
31	111	114	土器底	小皿	2.9	2.9	1.1	1.1	若干	1.1		A-1-25	P15/S003	断面矢張り2段	
32	111	115	土製品	土鍵	3.65	4.61	1.91	1.37				A-1-25	P16/S003	灰陶木工工具まで	
33	111	115	土製品	土鍵	3.2	4.3	1.1	1.5				A-1-25	P17/S003		
34	111	115	土製品	土鍵	3.75	4.61	0.95	1.05	1.8			A-1-25	P18/S003		
35	111	115	土製品	土鍵	4.0	4.61	1.1	1.5	1.6			A-1-25	P19/S003		
36	111	115	土製品	土鍵	4.0	4.61	0.92	1.15	1.5			A-1-25	P20/S003		
37	111	115	土製品	土鍵	3.65	2.2	3.65	1.2	1/2厚			A-1-25	P21/S003		
38	111	115	土製品	土鍵	10.85	2.0	9.1		2/3	1/1(F充)		A-1-25	P22/S003		
39	111	115	土器底	杯	13.2	3.45	5.6	1.6	1/2厚			A-1-25	P23/S003		
40	111	115	黒色土器	楕円	16.4	5.5	8.9	1.3	1/2(F充)			A-1-25	P24/S003		
41	111	115	土製品	土鍵	3.45	4.61	1.1	1.1	若干	1/2厚		A-1-25	P25/S003		
42	111	114	調文器	皿	11.3	2.9	7.8	1.6	1/4			A-1-25	P26/S004		
43	111	115	調文器	皿	13.6	3.25			1/7			A-1-25	S002		
44	111	115	土器底	杯	13.9	5.4			1/4			A-1-25	S001		
45	111	115	土器底	小皿	6.35	2.2	3.65	1.2	1/2厚			A-1-25	S003(埋植)	格柵9c代 右引削	
46	111	115	土器底	小皿	35.7	5.6			若干	1/2厚		A-1-25	S004		
47	111	115	土器底	小皿		3.1	1.1		若干	1/2厚		A-1-25	S005		
48	111	115	土器底	小皿	9.6	1.9	2.0	1.4	1/4	1.6		A-1-25	S006		
49	112	116	土器底	杯	12.8	3.1	6.0		1/8	1/3		A-1-25	S007		
50	112	116	土器底	杯	13.8	3.5	6.2	1.6	1.8			A-1-25	S007		
51	112	116	土器底	杯	13.7	4.05	7.6	1.0	1/0	1/4(F充)		A-1-25	S008		
52	112	116	土器底	杯	17.0	4.1			1/2	1.6		A-1-25	S008		
53	112	116	土器底	杯	14.0	4.1	8.8	1.6	1.6			A-1-25	S008		
54	112	116	土器底	杯	14.0	4.1	8.0	1.6	1.6			A-1-25	S008		
55	112	116	土器底	杯	13.5	3.75	6.4	1.5	1.5			A-1-25	S008		
56	112	116	土器底	杯	14.4	4.1	6.8	1/0	1/2			A-1-25	S008		
57	112	117	土器底	杯	15.8	3.9			1/3	1.8		A-1-25	S009		
58	112	117	土器底	杯	14.6	3.8			1/2	1.2		A-1-25	S009		
59	112	117	土器底	杯	14.6	3.8	5.9	1.2	1/2	1.2		A-1-25	S009		
60	112	116	土器底	杯	14.4	4.1	7.7	1.2	1/2	1.4		A-1-25	S010		
61	112	116	土器底	杯	14.6	4.1	6.8	1.2	1.2			A-1-25	S010		
62	112	116	土器底	杯	14.8	4.1	7.8	1.9	1.9			A-1-25	S010		
63	112	117	土器底	杯	13.6	3.45	7.2	1.9	1/1(F充)			A-1-25	S010		
64	112	117	土器底	杯	15.0	3.4	9.3	1.4	1.5			A-1-25	S010		
65	112	116	土器底	杯	14.3	3.6	9.05	1.4	1.4			A-1-25	S010		
66	112	116	土器底	杯	13.4	3.45	7.9	3/4	1/1(F充)			A-1-25	S010		
67	112	116	土器底	杯	2.8	6			若干			A-1-25	S010		
68	112	116	土器底	皿	15.8	13.0	(16.6)	1/1		体部L8		A-1-25	S010	No.69と同一個体#	
69	112	116	土器底	皿	(16.6)	9.3	19.0	1.8				A-1-25	S010	No.68と同一個体#	
70	112	116	土器底	皿	15.2	8.5				断面L12		A-1-25	S010		
71	112	116	土器底	皿	16.6	6.30			1/2			A-1-25	S010		
72	112	116	土器底	皿	15.8	6.5			1/2	1.2		A-1-25	S010		
73	112	116	土器底	皿	17.0	5.55			1.6			A-1-25	S010		
74	112	116	土器底	皿	17.1	6.30			1.7			A-1-25	S010		
75	112	116	土器底	皿	14.5	6.35			1/2			A-1-25	S010		
76	112	116	土器底	皿	14.2	6.3	6.3	1.5	1/2	1.2		A-1-25	S010		
77	112	116	土器底	皿	14.6	4.2	6.3	1.2	1/2	1.2		A-1-25	S010		
78	113	118	黒色土器	杯	15.2	4.85	7.4	1/0	1/10			A-1-25	S010	内裏	
79	113	117	黒色土器	杯	15.7	4.29	8.2	1/2	1/4(F充)			A-1-25	S010	内裏	
80	113	118	黒色土器	杯	16.8	3.70			1/3			A-1-25	S010	内裏	
81	113	118	黒色土器	杯	17.4	5.5			1.8	若干		A-1-25	S010	内裏	
82	113	118	黒色土器	杯	17.4	5.5			1.8	若干		A-1-25	S010	内裏	
83	113	118	黒色土器	杯	17.4	5.5			1.8	若干		A-1-25	S010	内裏	
84	113	118	黒色土器	杯	17.4	4.8	8.1	1.9	3/4	1/1(F充)		A-1-25	S010	内裏	
85	113	117	黒色土器	杯	15.0	4.8	7.7	1.2	1/4			A-1-25	S010	内裏	
86	113	118	黒色土器	杯	14.9	2.7	6.6	1.7	1/4			A-1-25	S010	内裏	
87	113	118	黒色土器	杯	10.5	1.6	6.6	若干	1/7			A-1-25	S010	内裏	

表8 出土遺物観察表2

報告書番号	國版番号	写真図版番号	種別	器種	測定(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考		
					口径	器高	底径	重量(g)	口縁	底部					
88	113	118	灰陶器	杯A	[13.0]	3.3	9.3	1.6	1/4		A-3-1区	S001			
89	113	118	灰陶器	杯B	[13.0]	3.5	8.8	1.6	1/2		A-3-1区	S001			
90	113	118	灰陶器	杯C	[13.0]	3.5	8.6	1.6	1/2		A-3-1区	S001			
91	113	118	灰陶器	杯D	[13.0]	3.4	8.0	1.6	1/2		A-3-1区	S001			
92	113	118	灰陶器	杯E	[13.0]	4.9	6.8	3.4	完存		A-3-1区	S001	No.93と同一個体 No.65と同一接合 No.92と同一個体		
93	113	118	灰陶器	碗	[17.1]	5.2	7.7	1.7	1/3		A-3-1区	S001			
94	113	118	灰陶器	碗	[17.1]	5.1	7.5	1.7	1/2		A-3-1区(西端)	S001			
95	113	118	灰陶器	碗	[17.1]	5.0	7.6	1.8	1/2		A-3-1区	S001			
96	113	118	灰陶器	碗F	[21.1]	長(3.6)	幅(1.7)	厚(0.9)			A-3-1区	S001	上端欠損		
97	113	118	灰陶器	碗G	[21.8]	長(3.8)	幅(2.2)	厚(1.2)	5.5		A-3-1区	S001			
98	113	118	灰陶品	土師器	[長(3.7)]	幅(1.5)	厚(1.5)	5.7			A-3-1区	S001	上端欠損 表面粗面剥離		
99	113	118	灰陶品	土師器	[長(5.3)]	幅(1.4)	厚(1.4)	7.7			A-3-1区	S001			
100	114	119	白陶器	杯	[13.0]	4.0	6.0	1.6	1/2		B部若干	S002			
101	114	119	白陶器	小壺	[2.7]	2.0	1.5	1.5			A-3-1区	S002	中世木田1層上層		
102	114	119	白陶器	小壺	[2.8]	2.0	1.6	1.2			A-3-1区	S002	中世木田1層上層 初期伊万里17世前半		
103	114	119	白陶器	小壺	[10.4]	2.7	5.6	1.8	若干		A-3-2区	S002	中世木田1層中		
104	114	119	白陶器	小壺	[10.6]	1.2	1.8	1.8			A-3-2区	S002	中世木田1層中		
105	114	119	白陶器	小壺	[13.6]	2.8	1.8	1.8			A-3-2区	S002			
106	114	119	白陶器	小壺	[13.6]	2.8	1.8	1.8			A-3-2区	S002			
107	114	119	白陶器	小壺	[13.6]	2.8	1.8	1.8			A-3-2区	S002			
108	114	119	白陶器	小壺	[8.5]	1.6	5.4	1.8	若干		A-3-2区(西端)	S002	水田上壤層		
109	114	119	白陶器	碗	[13.6]	2.0			1/2		A-3-2区	S002	水田上壤層		
110	114	119	白陶器	小壺	[7.8]	1.0	4.6	1.4	1/4		A-3-2区	S002			
111	114	119	白陶器	碗	[13.6]	2.0			2/3		A-3-2区	S002			
112	114	119	白陶器	碗	[2.85]	7.1			完存		部若干	A-3-2区			
113	114	119	白陶器	碗	[13.6]	3.8			1.5			A-3-1区(東北)			
114	114	119	白陶器	杯C	[4.15]	8.8			1/3		部若干	A-3-2区		中古玉器 褐色毛色	
115	114	119	白陶器	杯	[13.8]	3.2			1/2		部若干	A-3-2区		南北朝割合比	
116	114	119	白陶器	碗	[18.0]	6.65			若干		部若干	A-3-2区(西端)		遺物包含層	
117	114	119	白陶器	碗	[15.2]	2.3			若干		部若干	A-3-2区(西端)			
118	114	119	白陶器	耳杯	[7.5]						部若干	A-3-2区(西端)			
119	114	119	白陶器	小口壺	[23.1]	4.05			1.5			A-3-2区(西端)			
120	114	119	白陶器	小口壺	[1.05]	5.95			1/2%			A-3-2区			
121	114	119	白陶器	碗	[13.0]	7.2			1/2			A-3-2区			
122	114	119	白陶器	碗	[2.35]	5.55			1/2			A-3-2区		白絵玉印跡	
123	114	119	白陶品	土師器	[長(3.65)]	幅(1.2)	厚(2.5)	5.0				2/3	A-3-2区(西端)	遺物包含層	
124	118	127	瓦	瓦片瓦	[長(27.1)]	幅(1.8)	厚(1.7)				1/2	B区		埋積	
125	118	127	瓦	瓦片瓦	[3.1]	0.8	2		1/2			B区		かまと瓦	
126	118	127	瓦	瓦片瓦	[8.8]	1.45	3.2	1.6	若干			D-3区	S033-a	灰褐色土	
127	118	127	瓦	瓦片瓦	[長(10.05)]	幅(2.8)	厚(2.6)							SC22	
128	118	127	瓦	瓦片瓦	[14.8]	3.2			1/8			D-3区(中段推)		灰褐色土	
129	118	127	瓦	瓦片瓦	[4.35]	7.2			若干			D-3区(下段)			
130	118	127	瓦	瓦片瓦	[3.05]				若干			D-3区(下段)			
131	118	127	瓦	瓦片瓦	[1.1]	0.5	2		1/2%			D-3区(西端)		負荷圧出	
132	118	127	瓦	瓦片瓦	[1.4]	0.5			1/5			D-3区(西段)		遺物面直上まで	
133	118	128	灰陶品	大形	[長4.0]	幅4.25	厚5.05	25.0						右側-後段灰	
134	119	128	灰陶品	小口壺	[12.0]	5.8	5.8							D-3区(北西端)	
135	119	128	灰陶品	小口壺	[13.8]	5.2								S033-a	内裏
136	119	128	灰陶品	小口壺	[10.0]	1.7			1/50			E区	東南部	側面透光且	
137	119	128	灰陶器	碗	[16.0]	5.0			1/14			E区	東半部	遺物面直上	
138	119	128	灰陶器	各型	[3.6]	9.2			1/10			E区	東半部		
139	119	128	灰陶器	各型	[12.0]	5.8	5.8				E区	東半部	遺物包含層		
140	119	128	灰陶器	各型	[12.0]	5.8	5.8				E区	東半部	断面透光且		
141	119	128	灰陶器	各型	[16.2]	3.0	1.2		1/14			E区		側面透光且	
142	119	128	灰陶器	各型	[11.0]	4.2			1/14			E区	東半部	遺物包含層	
143	119	128	灰陶器	各型	[13.8]	3.7			1/16			E区		側面透光且	
144	119	128	灰陶器	各型	[1.9]	5.0			1/4			E区	東南端	日本製造	
145	119	128	灰陶器	各型	[22.0]	6.6	6.6				E区	東半部			
146	119	128	灰陶器	各型	[16.0]	5.6	5.6				E区	東半部	SC32		
147	119	129	白陶器	杯A	[14.8]	3.2	5.0	1.6	1/4		F-1区		P135		
148	119	129	白陶器	杯B	[10.0]	2.3	4.6	1.3	1/3		F-1区		P135 杯脚推土		
149	119	129	白陶器	杯C	[14.6]	5.5	4.8	1.4	若干		F-1区		P135 杯脚		
150	119	129	白陶器	杯D	[16.0]	4.0			1/50			F-1区		P149-S001	
151	119	129	白陶器	杯E	[12.8]	5.6	5.6	1.5			F-1区		P149-S004		
152	119	129	白陶器	杯F	[16.0]	4.5	5.0	1.5			F-1区		P149-S005		
153	119	129	白陶器	杯G	[24.4]	3.8			1/16			F-1区		P196	
154	119	129	白陶器	杯H	[13.6]	4.3			1/8			F-1区		P198	
155	119	129	白陶器	碗	[33.8]	7.8			1/14			F-1区(中段)中央部	P121		
156	119	129	白陶器	碗	[15.6]	1.40			1/16			F-1区(中段)中央部	P194		
157	120	129	白陶器	碗	[14.6]	4.0	3.4		1/2	完存		F-1区(中段)	S036		
158	120	129	白陶器	碗	[13.8]	3.7	3.7		1/5			F-1区(中段)			
159	120	129	白陶器	碗	[13.8]	3.7	3.7		1/5			F-1区(中段)	S037		
160	120	130	白陶器	碗	[15.6]	3.2			1/4			F-1区(段)	S037		
161	120	130	白陶器	碗	[16.0]	2.5			1/8			F-1区(段)	S037		
162	120	130	白陶器	碗	[16.0]	4.3	4.3		完存			F-1区(段)	S0364		
163	120	130	白陶器	碗	[14.4]	3.9	4.4		1/10	2/3		F-1区(上段)	S0368	埋土	
164	120	130	白陶器	碗	[14.4]	3.9	4.4		1/10	2/3		F-1区(上段)		古代	
165	120	130.131	白陶器	碗	[10.0]	1.3	7.0		1/2	1/49		F-1区(段)		側面透光且	
166	120	130	白陶器	碗	[16.2]	4.65	4.25		1/40	2/3		F-1区(段)		側面透光且	
167	120	130.131	白陶器	碗					1.3	10.0		F-1区(上段)		黒褐色土層 牛糞-中段部	
168	120	130.131	白陶器	碗	[28.0]	5.0				1/12			F-1区(段)		黒褐色土層

表9 出土遺物観察表3

報告書番号	国版番号	写真図版番号	種別	器種	法面(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					口径	器高	底径	重量(g)	口縁	底部			
169	120	130.131	土器	甌	16.0	5.8	—	1.5	—	—	F1区F2段E1号	黒褐色土層	
170	120	130.131	土器	甌	16.6	5.3	—	1.6	—	—	F1区F2段E1号	黒褐色土層	内里
171	120	130.131	土器	小甌	9.8	3.8	—	3.1	—	—	F1区F2段E1号	黒褐色土層	
172	120	130.131	土器	甌	16.0	5.75	7.6	1.3	1/2強	—	F1区F2段E1号	黒褐色土層	
173	120	130.131	土器	甌	—	—	6.4	1.3	—	—	F1区F2段E1号	通体焼成直上まで	
174	120	130.131	青磁	甌	—	—	—	—	1/4弱	—	F1区トレンチNo.58	石垣筑込み	面口尖端 灰明度なし
175	120	130.131	土器	甌	12.0	3.3	—	1.6	—	—	F1区F2段E1号	灰黑色土層	白堀窯灰口縁
176	121	132	土器	小甌	9.8	3.9	—	1.9	—	—	F2区4段E1号	P02-S01	
177	121	132	土器	小甌	10.0	3.6	—	1.5	—	—	F2区4段E1号	P02-S01	
178	121	132	土器	小甌	10.6	5.6	4.6	1.4	1/2	—	F2区4段E1号	P02-S01	
179	121	132	土器	小甌	12.0	3.8	—	1.2	—	—	F2区4段E1号	P02-S01	
180	121	132	土器	杯身状灰陶	—	—	—	—	1/6	—	F2区4段E1号	S014	
181	121	132	土器	羽形	—	—	—	—	—	—	西面1/100	—	
182	121	132	土器	小甌	7.6	3.1	—	1.4	1/4	—	F2区4段E1号	S017	
183	121	132	土器	小甌	7.6	3.2	—	1.4	1/4	—	F2区4段E1号	西面西端の集石	
184	121	132	土器	小甌	15.8	5.7	6.6	1.2	—	—	F2区4段E1号	S018	
185	121	132	土器	小甌	8.6	3.5	—	1.5	1/2	—	F2区4段E1号	S009	
186	121	132	土器	小甌	8.0	3.2	—	1.6	1/2	—	F2区4段E1号	S009	
187	121	132	土器	甌	—	—	—	—	1/6	—	F2区4段E1号	S009(上層)	
188	121	132	土器	甌	15.4	2.8	—	1.0	—	—	F2区4段E1号		
189	121	132	無施陶器	甌	22.4	6.3	—	1.9	—	—	体部若干	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用
190	121	132	瓦質土器	羽付き引手	15.4	8.8	—	—	—	—	西面1/80	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用
191	121	132	瓦質土器	羽付き引手	20.8	12.5	—	—	—	—	西面1/80	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用
192	121	132	瓦質土器	羽付き引手	—	—	—	—	—	—	西面1/9	F2区4段E1号	中世汎用
193	121	132	瓦質土器	羽付	—	—	—	—	—	—	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用	器底丸 中世汎用
194	121	132	瓦質土器	羽付	27.0	3.4	—	1/2	—	—	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用	器底丸 中世汎用
195	121	132	青磁	甌	15.2	4.0	—	—	—	—	F2区4段E1号	器底丸 中世汎用	器底丸 中世汎用
196	122	134	土器	小甌	8.0	1.6	4.2	—	2/3(1.6)保存	—	G1区	P01	
197	122	134	土器	小甌	8.0	1.6	4.2	—	2/3(1.6)保存	—	G1区	P02	
198	122	134	土器	小甌	8.6	2.1	—	—	1/3(2.1)保存	—	G1区	P02	
199	122	134	土器	小甌	8.4	1.6	5.4	—	2/3(1.6)保存	—	G1区	P02	
200	122	134	瓦質土器	甌	15.6	4.4	5.2	—	1/6(1.6)保存	—	G1区	P02	
201	122	134	瓦質土器	甌	17.0	4.5	4.8	—	1/6(1.5)保存	—	G1区	P12	
202	122	134	瓦質土器	羽付	20.6	9.2	—	—	1/6(9.2)保存	—	G1区	P13	
203	122	134	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(0.6)保存	—	G1区	P14	
204	122	134	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(0.6)保存	—	G1区	P15	月汲場
205	122	134	瓦質陶器	小甌	11.5	2.0	—	—	1/6(2.0)保存	—	G1区	S038	
206	122	134	瓦質土器	甌	13.9	4.3	5.6	—	1/6(4.3)保存	—	G1区	S039	
207	122	134	瓦質土器	甌	11.7	4.7	4.6	—	1/6(4.7)保存	—	G1区	S040	
208	122	134	瓦質土器	羽付	11.9	5.7	4.6	—	1/6(5.7)保存	—	G1区	S041	
209	122	134	瓦質土器	羽底製品	11.7	2.8	—	—	1/7(2.8)保存	—	G1区	S042	
210	122	134	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S043	
211	122	134	瓦質陶器	羽底	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S044	
212	122	134	瓦質土器	甌	15.4	2.8	—	—	1/6(2.8)保存	—	G1区	S045	
213	124	135	無施陶器	羽根付	35.2	17.9	(15.4)	2/9(15.4)	2/9(1.9)	—	F1区	S027	月汲場
214	124	135	無施陶器	羽根付	39.0	13.2	—	—	1/8(1.8)保存	—	F1区	S027	月汲場
215	124	135	無施陶器	羽根付	20.9	18.5	(15.0)	1/6(1.6)若干	1/6(1.6)若干	—	G1区	S027	月汲場
216	124	135	無施陶器	羽根付	—	—	—	—	—	—	F1区	S027	月汲場
217	124	135	無施陶器	羽根付	—	—	—	—	—	—	F1区	S027	月汲場
218	124	136	土器	小甌	8.0	1.7	4.6	—	1/4(1.7)保存	—	G1区	S040	
219	124	136	土器	小甌	9.9	1.7	8.1	—	1/2(1.7)保存	—	G1区	S041	
220	124	136	土器	小甌	8.4	1.0	7.4	—	1/3(1.0)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
221	124	136	瓦質土器	甌	11.9	4.0	4.3	—	1/6(1.9)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
222	124	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
223	124	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
224	124	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
225	124	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
226	124	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
227	124	136	瓦質土器	羽付	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
228	124	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
229	124	136	瓦質陶器	羽付	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
230	124	136	瓦質土器	羽付	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	G1区	S040	石瓶底下
231	125	136	土器	小甌	10.2	1.1	(2.7)	—	1/8(1.1)保存	—	G1区	P03	
232	125	136	土器	小甌	11.0	1.8	—	—	1/8(1.8)保存	—	G1区	P03	人工削削
233	125	136	瓦質土器	甌	13.8	5.4	6.6	—	1/8(5.4)保存	—	G1区	P03	人工削削
234	125	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P030	
235	125	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P031	人工削削
236	125	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P032	人工削削
237	125	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P033	人工削削
238	125	136	瓦質陶器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P034	人工削削
239	125	136	瓦質土器	甌	—	—	—	—	1/6(—)保存	—	F1区	P035	人工削削
240	126	137	織文土器	深甌	—	—	—	—	若干	—	F1区	S049	
241	126	137	織文土器	深甌	—	—	—	—	若干	—	F1区	S049	
242	126	137	織文土器	深甌	—	—	—	—	若干	—	F1区	S049	
243	126	137	土器	小甌	9.0	2.0	—	—	1/6(1.6)若干	—	F1区	S049	
244	126	137	土器	小甌	10.2	1.6	(4.4)	—	1/8(1.6)若干	—	F1区	P040	
245	126	137	土器	小甌	9.4	1.4	6.8	—	2/3(3.4)保存	—	F1区	P040	
246	126	137	土器	小甌	8.6	1.5	6.4	—	1/2(1.5)保存	—	F1区	P041	
247	126	137	土器	小甌	11.0	1.9	—	—	1/2(1.9)保存	—	F1区	P042	
248	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P043	
249	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P044	
250	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P045	
251	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P046	
252	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P047	
253	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P048	
254	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P049	
255	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P050	
256	126	137	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P051	
257	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P052	生焼けカ
258	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P053	生焼け
259	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P054	生焼け
260	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P055	生焼け
261	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P056	生焼け
262	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P057	生焼け
263	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P058	生焼け
264	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P059	生焼け
265	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P060	生焼け
266	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P061	生焼け
267	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P062	生焼け
268	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P063	生焼け
269	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P064	生焼け
270	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P065	生焼け
271	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P066	生焼け
272	126	138	土器	小甌	—	—	—	—	1/2(—)保存	—	F1区	P067	生焼け
273	126	138	土器	小甌	—	—	—	—					

表10 出土遺物観察表4

報告 番号	国版 番号	写真圖 版番号	種別	器種	測量(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					口径	器高	底径	重量 (g)	口縁	底部			
260	126	138	玉器	小豆	8.8	1.9	4.7				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S601
261	126	138	玉器	小豆	8.7	1.6	4.7	3/4 完存				H-1-1×上層	S601
262	126	138	玉器	小豆	8.4	1.4	4.7	1/3 完存				H-1-1×上層	S601
263	126	138	玉器	小豆	8.8	1.8	4.9				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S601
264	126	138	玉器	小豆	8.9	1.9	4.5				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S601
265	126	137	玉器	小豆	8.9	1.8	5.0				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S601
266	126	138	玉器	小豆	7.80	1.9	[5.0]	1.8	1/3		(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S601
267	126	137	玉器	小豆	8.5	1.8	4.3				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S602
268	126	137	玉器	小豆	8.5	1.8	4.3				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S602
269	126	138	玉器	小豆	8.9	1.8	5.2				(ほぼ完形)	H-1-1×上層	S602
270	126	138	玉器	小豆	10.5	2.5		1/5				H-1-1×西	S607
271	126	138	玉器	小豆	18.0	5.5		1/5				H-1-1×東	S611
272	126	138	玉器	小豆	11.4	2.9		1/5				H-1-1×西	S612
273	126	138	玉器	小豆	6.8	1.8	[2.8]	1/4	1/4			H-1-1×西	S613
274	126	138	玉器	小豆	15.0	2.5	5.0					H-1-1×西	S619
275	126	138	玉器	小豆	17.8	1.2		1/2				H-1-1×中	S620
277	127	138	玉器	輪	13.8	3.5		1/8				H-1-1×東	S620(右側)
278	127	138	玉器	輪	16.4	5.6		1/7				H-1-1×東	S620
279	127	138	玉器	輪	31.0	7.0		1/12				H-1-1×東	S620(左側)
280	127	139	玉器	輪	9.2	2.0	4.6				完形	H-2南×	S620
281	127	139	玉器	輪	8.5	1.4					完形	H-2南×	S620
282	127	139	玉器	輪	15.0	6.0	6.0	230 完存				H-2南×	S620
283	127	139	玉器	輪	7.4	1.4	3.0				(ほぼ完形)	H-2南×	S622
284	127	139	玉器	輪	10.4	5.5	4.0	230/230				H-2南×	S622
285	127	139	玉器	輪	26.7	7.5		1/4				H-2南×	S622
286	127	139	玉器	輪	9.7	5.0	5.3	1/28 完存				H-2南×	S623(複数埋立)
287	127	139	玉器	輪	5.5	2.0	高(3.7)				台のふ	H-2南×	S623(複数埋立)
288	127	140	竹筒形	小豆	7.0	3.2	2.6	1/10 完存				H-2南×	S624
289	127	140	竹筒形	小豆	6.2	6.35	3.8	1/4 完存				H-2南×	S625
290	127	140	竹筒形	小豆	11.8	6.0	4.6	8/1 完存				H-2南×	S629
291	127	140	竹筒形	小豆	10.4	6.9	5.5	1/2 1/4				H-2南×	S629
292	127	140	竹筒形	小豆	18.6	7.0	9.4					H-2南×	S629
293	127	140	竹筒形	小豆	34.4	11.9	7.5	1/3 1/3				H-2南×	S629
294	127	141	竹筒形	小豆	14.8	4.8	1/16	1/40 完形				H-2北×	S629
295	127	141	竹筒形	小豆	10.0	2.55		1/12				H-1-1×西	S629(側面) (1-5kg)
296	127	141	竹筒形	小豆	15.0	3.3		1/4				H-1-1×西	S629(側面) (1-5kg)
297	127	141	竹筒形	小豆	32.9	2.2		1/10				H-1-1×東	S629
298	128	141	玉器	小豆	7.0	3.2	2.6				(ほぼ完形)	H-2北×	S629
299	128	141	玉器	小豆	8.6	1.7	2.0	2/3 1/4				H-2北×	S629
300	128	141	玉器	小豆	8.4	1.8	2.7	1/3 1/3				H-2北×	S629
301	128	141	玉器	小豆	18.8	11.65	8.21	1/15				H-2北×	S629(複数埋立)
302	128	141	玉器	小豆	22.9	20.1	8.6	2/26 2/26			体部1/4	H-2北×	S629(複数埋立)
303	128	141	玉器	小豆	37.0	9.7		1/26				H-2北×	S629
304	128	143	玉器	楕	14.2	4.4	6.0	1/28 1/2				H-2北×	S629
305	128	143	玉器	楕	13.2	4.6	5.4	1/4 1/4				H-2北×	S629
306	128	143	玉器	楕	13.2	4.6	5.4				(ほぼ完形)	H-2北×	S629
307	128	143	玉器	楕	13.6	4.7	5.4	230 完存				H-2北×	S629
308	128	142	玉器	楕	13.7	4.95	6.65	1/12 7/8				H-2北×	S629
309	128	143	玉器	楕	6.95	4.75	6.45	1/4 3/4				H-2北×	S629
310	128	143	玉器	楕	14.0	4.3	5.8	1/26 2/3				H-2北×	S629
311	128	143	玉器	楕	14.0	3.9	5.2	2/3 1/2				H-2北×	S629
312	128	143	玉器	楕	11.9	4.75	5.2	1/4 1/2				H-2北×	S629
313	128	143	玉器	楕	13.4	4.7	6.2	1/38 中央欠損				H-2北×	S629
314	128	143	玉器	楕	12.7	4.9	6.4	1/6 (ほぼ完形) 高台山遺物				H-2北×	S629
315	129	142	玉器	楕	15.9	4.4	4.65	3/4 3/4				H-2北×	S629
316	129	143	玉器	楕	13.65	3.75	4.7	5/6 完存				H-2北×	S629
317	129	143	玉器	楕	12.5	3.8	4.2	5/9 1/3				H-2北×	S629(複数埋立)
318	129	143	玉器	楕	14.4	4.1	5.1	2/20 2/30				H-2北×	S629
319	129	143	玉器	楕	13.4	3.7	4.7	1/26 1/26				H-2北×	S629(複数埋立シルト)
320	129	143	玉器	楕	13.4	3.7	4.7	1/26 1/26				H-2北×	S629(複数埋立シルト)
321	129	143	玉器	楕	13.5	3.5	3.8	2/5 3/4				H-2北×	S629(複数埋立シルト)
322	129	143	玉器	楕	13.2	4.4	4.6	2/98 (ほぼ完形)				H-2北×	S629
323	129	143	玉器	楕	14.0	3.6	3.0	2/3 1/5				H-2北×	S629
324	129	143	玉器	楕	12.5	3.6	3.35	1/3 1/3				H-2北×	S629
325	129	143	玉器	楕	13.9	3.8	4.6	2/3 1/2				H-2北×	S629
326	129	143	玉器	楕	20.2	7.1		1/6 1/6				H-2北×	S629
327	129	143	玉器	楕	18.2	5.25		1/3				H-2北×	S629
328	130	143	瓦質土器	神付付き筒形	11.8	15.6					新潟県付筒形の複数	H-2北×	S629
329	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	13.5	12.55					新潟県付筒形	H-2北×	S629
330	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	14.0	14.1		1/2			新潟県付筒形	H-2北×	S629
331	130	145	瓦質土器	神付付き筒形	15.6	11.1	筒直角	2/3			筒直角	H-2北×	S629
332	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	16.2	16.25		2/25 若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
333	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	16.2	16.25		5/6 若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
334	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	18.25	14.86		1/3 若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
335	130	144	瓦質土器	神付付き筒形	16.6	14.7	17.7	2/3 1/24			新潟県付筒形	H-2北×	S629
336	130	145	瓦質土器	神付付き筒形	18.5	13.4	1/5				新潟県付筒形	H-2北×	S629
337	130	145	瓦質土器	神付付き筒形	18.0	13.3		若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
338	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	16.8	14.96		5/12 若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
339	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	18.9	15.65		1/4 若干			新潟県付筒形	H-2北×	S629
340	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	20.0	11.15	筒直角	2/3			新潟県付筒形	H-2北×	S629
341	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	18.0	10.8	筒直角	1/9			新潟県付筒形	H-2北×	S629
342	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	18.0	10.8	筒直角	1/2			新潟県付筒形	H-2北×	S629
343	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	11.1	13.58					新潟県付筒形	H-2北×	S629
344	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	17.2	16.4	筒直角	2/3 2/3			新潟県付筒形	H-2北×	S629
345	131	145	瓦質土器	神付付き筒形	16.2	15.7	筒直角	1/2			新潟県付筒形	H-2北×	S629

表11 出土遺物観察表5

報告 番号	国版 番号	写真図 番号	種別	器種	法面(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					口径	器高	底径	口縁	底部	他			
346	131	145	瓦質土器	脚付小引瓶	(22.6)					脚のみ	B2西	SE282	
347	131	145	瓦質土器	引瓶	23.4	11.6	10.2	5.6		全体	B2西	SE282	
348	131	145	瓦質土器	引瓶	25.5	16.2	10.3	6.0		全体	B2西	SE282	萬葉集シート
349	131	146	瓦質土器	引瓶	26.4	12.0	9.9	5.5		全体	B2西	SE282	萬葉集シート
350	131	146	瓦質土器	引瓶	28.0	10.7	9.2	5.1		全体	B2西	SE282	萬葉集シート
351	132	146	瓦質土器	引瓶	(24.4)	(20.75)	(8.6)	1/4			B2西	SE282	
352	132	146	瓦質土器	引瓶	(25.8)	(11.4)	(9.6)	1/3		全体	B2西	SE282	
353	132	146	瓦質土器	引瓶	(26.7)	(10.5)	(9.5)	1/3		全体	B2西	SE282	
354	132	146	瓦質土器	引瓶	(27.6)	(10.4)	(9.5)	1/3		全体	B2西	SE282	
355	132	146	瓦質土器	引瓶	(27.9)	(10.5)	(9.5)	3/4	若干	全体	B2西	SE282	萬葉集シート
356	132	147	瓦質土器	鉢	(29.1)	10.85	10.45	1/2	1/4	全体	B2西	SE282	萬葉集シート
357	132	147	瓦質土器	鉢	(29.8)	9.05	9.15	1/3	1/4	全体	B2西	SE282	
358	132	147	瓦質土器	鉢	27.8	11.25	9.1	3/4	完全	全体	B2西	SE282	萬葉集シート
359	133	147	瓦質土器	鉢	(26.0)	(3.03)	(8.0)	1/20		全体	B2西	SE282	
360	133	147	瓦質土器	鉢	27.8	(3.24)	(8.0)	完全		全体	B2西	SE282	萬葉集シート
361	133	147	瓦質土器	鉢	6.4	2.5	7.5	1/20	(は)完全	全体	B2西	SE282	萬葉集シート
362	134	148	瓦質土器	鉢	(12.0)	4.6	4.6	1/6		B1-3西	S201		
363	134	148	瓦質土器	鉢	(28.4)	1.5	1.5	1/4		B1-3西	S201		
364	134	148	瓦質陶器	鉢	(3.2)	6.0	6.0	完全		B1-3西	S201(南西)	南西	
365	134	148	瓦質陶器	鉢	(4.0)	7.6	1.2			B1-3西	S201	月夜地力	
366	134	148	瓦質陶器	鉢	(10.0)	22.0	1/10			B1-3西	S201	月夜	
367	134	148	瓦質陶器	鉢	(17.0)	1.7	8.4	1/4	2/3	B1-3西	S201	亞都系	
368	134	148	瓦質陶器	鉢	(25.6)	9.2		1/10		B1-3西	S201	伽南地	
369	134	148	瓦質陶器	鉢	(4.0)	(16.8)		1.5		B1-3西	S201	伽南地	
370	134	148	瓦質陶器	鉢	(42.9)	(14.0)		若干		B1-3西	S201	月夜	
371	134	148	瓦質陶器	鉢	(21.2)	2.8		1/40		B1-3西	S201	月夜	
372	134	148	瓦質陶器	鉢	(10.6)	2.5		若干		B1-3西	S201	月夜	
373	134	148	瓦質陶器	小皿	(7.3)	1.8	1.5	1/2	3/4	B1-3西	S201	月夜	
374	134	148	瓦質陶器	鉢	(3.4)	(4.4)		1/4		B1-3西	S201	伽南地力	
375	134	148	瓦質陶器	鉢	(2.5)	7.1		1/3		B1-3西	S201	月夜	
376	134	148	瓦質陶器	小皿	(10.0)	2.9	3.8	4.9	2/3	B1-3西	S201	月夜	
377	134	148	瓦質陶器	小皿	(11.6)	3.3	4.5	1/4	1/4	B1-3西	S201	月夜	
378	134	148	瓦質陶器	小皿	(7.9)	1.9	2.2	1/9	1/4	B1-3西	S201	月夜	
379	134	148	瓦質陶器	小皿	(12.2)	2.5	6.2	1/7	1/3	B1-3西	S201	月夜	
380	134	148	瓦質陶器	小皿	(7.7)	1.6	1.6	1.9	1/2	B1-3西	S201	月夜	
381	134	148	瓦質陶器	小皿	(7.75)	1.3		1.8		B1-3西	S201	月夜	
382	134	148	瓦質陶器	小皿	(8.8)	1.4	6.5	1.8	1/4	B1-3西	S201	月夜	
383	134	148	瓦質陶器	小皿	(2.7)	5.3	5.3	1/5		B1-3西	S201	月夜	
384	134	148	瓦質陶器	小皿	(14.7)	3.75		若干		B1-3西	S201	月夜	
385	135	149	瓦質土器	鉢	(16.4)	5.4	8.4	1/2	1/3	B1-3西	S202	月夜	
386	135	149	瓦質土器	鉢	(14.9)	4.9	7.9	1/3	1/3	B1-3西	S202	月夜	
387	135	149	瓦質土器	鉢	(14.4)	5.8	7.0	1/4	完全	B1-3西	S202	月夜	
388	135	149	瓦質土器	鉢	(14.6)	3.3		1/2		B1-3西	S202	月夜	
389	135	149	瓦質土器	鉢	(20.0)	2.8	2.8	2.8	2.8	B1-3西	S202	月夜	
390	135	149	瓦質土器	脚付小引瓶	(15.0)					脚のみ	B1-3西	S202	
391	135	149	瓦質土器	小皿	(8.6)	1.5	7.4	1/2	1/7	B1-3西	S202		
392	135	150	參付磁器	小皿	(2.0)					若干	B1-3西	S202	月夜
393	135	150	參付磁器	皿	(13.4)	2.2		1.6		B1-3西	S202		
394	135	150	參付磁器	杯	(15.5)	2.9		(1.6)		B1-3西	S202		
395	135	150	參付磁器	小皿	(8.4)	1.4	7.0	1.0	1/4	B1-3西	S202		
396	135	150	參付磁器	小皿	(14.6)	3.3		1/2		B1-3西	S202	生けけ	
397	135	150	參付磁器	小皿	(16.6)	(7.7)		1/4		B1-3西	S202		
398	135	150	參付磁器	小皿	(17.4)	5.9		1/10		B1-3西	S202		
399	135	150	參付磁器	脚付小引瓶	(16.5)	6.3		1.6		B1-3西	S202		
400	135	150	參付磁器	脚付小引瓶	(18.5)	9.0		1/8		B1-3西	S202		
401	135	150	瓦質土器	小皿	8.4	1.8				(日本記念)	B1-3西	S205	
402	135	150	瓦質土器	鉢	(12.4)	3.2		1.8		B1-3西	S205~500	S201 段の落ち面	
403	135	150	瓦質土器	鉢	(11.7)	3.1		1/2		B1-3西	S205~500		
404	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(1.9)	(16.2)				脚のみ	B1-3西	S206	
405	136	151	瓦質陶器	脚付小引瓶	(28.9)	15.9		1/4		B1-3西	S206	月夜	
406	136	151	瓦質陶器	脚付小引瓶	(42.9)	(15.0)		若干		B1-3西	S206	月夜	
407	136	151	瓦質陶器	脚付小引瓶	(14.3)	4.4		若干		B1-3西	S206	月夜	
408	136	151	瓦質陶器	小皿	(14.1)	2.9		1/4		B1-3西	S206	月夜	
409	136	151	瓦質陶器	鉢	(14.8)	2.4	(5.2)	1/6		B1-3西	S206	月夜	
410	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(17.3)	(14.4)		1/2		脚若干	B1-3西	S206	
411	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(20.3)	(15.2)		1/6		B1-3西	S206		
412	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(25.7)	(12.7)		1/4		B1-3西	S206		
413	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(29.2)	(7.2)		1/6	1/5	B1-3西	S206		
414	136	151	瓦質土器	脚付小引瓶	(14.9)					脚のみ	B1-3西	S206	伽南堂花文
415	136	151	瓦質土器	鉢	(14.6)					全体/1/5	B1-3西	S206	
416	136	151	瓦質土器	鉢	(11.7)	4.7	(4.2)	1.6	1/4	若干	B1-3西	S206	
417	136	151	瓦質土器	鉢	(15.1)					B1-3西	S206		
418	136	151	瓦質土器	鉢	(10.0)	4.5	4.5	1/2		B1-3西	S206		
419	137	152	瓦質土器	鉢	(14.2)	4.2	5.6	1/3		脚のみ	B1-3西	S207	マンダラ層の下
420	137	152	瓦質陶器	鉢	(22.8)	7.8		1/10		B1-3西	S207	灰色低含金	
421	137	151	灰器	鉢	(30.7)	6.4		1/12		B1-3西	下	灰色低含金(下)	
422	137	152	三輪器	小皿	(7.5)	3.35	(3.7)	1/3	若干	B1-3西	水田		
423	137	152	三輪器	小皿	(9.0)	3.5	4.6	若干		B1-3西	水田		
424	137	152	三輪器	小皿	(15.5)	4.0		1/2		B1-3西	水田		
425	137	152	三輪器	小皿	(12.2)	4.7	5.0	1/4	1/3	B1-3西	水田		
426	137	152	三輪器	小皿	(15.0)	4.6	4.8	1/20	若干	B1-3西	水田		
427	137	152	瓦質土器	鉢	(4.2)	5.35		若干		全体/4	B1-3西	水田	
428	137	152	瓦質土器	鉢	(25.7)	8.70		若干		全体/1/7	B1-3西	水田	
429	137	152	瓦質土器	鉢	(31.7)	15.4		若干		全体/4	B1-3西	水田	

表12 出土遺物観察表6

報告 番号	国版 番号	写真図 版番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					口径	高径	重量 (g)	口縁	底部	他			
430	137	152	瓦質土器	輪付小鉢	[17.3]					面のみ	H-1-東X東	水田D	
431	137	152	瓦質土器	楕	[13.6] 4.4	[3.9]		若干	若干	体部1/4 高台1/4	H-1-E東	水田E	
432	137	152	土器	直	[11.8]	[2.8]		1/5			H-1-E<	水田上(最高まで)	
433	137	152	瓦質土器	輪付小鉢	[18.2]	[5.6]		1/3			H-1-E<	水田上(最高まで)	
434	137	152	青銅器	鏡	[16.1]	[3.2]		1/5		体部上半部	H-1-E東	水田E	
435	137	152	土器	楕	[11.9]	[2.9]		1/4			H-1-E東半	水田E	
436	137	152	土器	小鉢	8.2	1.5	6.9	4/5	〔はげて〕	H-1-E	水田の下層		
437	137	152	土器	小鉢	8.0	1.5	5.5	4/5	〔はげて〕	H-1-E	水田の下層		
438	138	152	鐵土器	鍛錬				小片			H-1-E中		複数個見出
439	138	152	土器	素	[30.0]	[8.6]		1/6			H-1-E中		
440	138	152	土器	小皿	[8.7]	[1.2]	[6.3]	1/3	1/3		H-1-E中	灰化(最高下)	
441	138	152	無施陶器	盤	[34.0]	[8.1]		1/20			H-1-E中	複数個(青銅鏡)	複数個
442	138	152	無施陶器	盤	[9.4]	[3.6]		1/6			H-1-E中	複数個(青銅鏡)	
443	138	152	土器	直				1/7			H-1-E		
444	138	152	土器	直口	[20.9]	[11.6]	[20.2]	1/6			H-2北	系統一灰褐色土	
445	138	152	無施陶器	鉢				若干			H-2北	灰化	
446	138	152	青銅器	直	[1.3]	[4.6]				1/20	H-2北	系統一灰褐色土	初期伊万里
447	138	152	無施陶器	盤	[33.8]	[5.4]		1/12			H-2北(西半)	濃焼鏡面	月流模
448	138	152	瓦器	楕	[13.8]	[2.2]		1/6			H-30上段	濃焼鏡面	
449	138	152	無施陶器	盤	[11.1]	[3.0]	[3.8]	1/20			H-2北(東半)	濃焼鏡面	直
450	138	152	無施陶器	盤	[10.2]	[3.1]	[4.0]	若干	若干	1/3	H-2北(東半)	濃焼鏡面	直
451		118	無施陶器	楕							A-3-3西	人力掘削	万葉のみ
452		127	青銅器	杆							D-1北	機械掘削	万葉のみ
453		127	青銅器	鏡							D-1北	中段	万葉のみ
454		127	青銅器	杆							D-1北	灰化土、半	万葉のみ
455		127	青銅器	鏡							D-1北	機械掘削	万葉のみ
456		127	青銅器	杆							D-1北	青銅鏡表面	万葉のみ
457		129	鐵土器	鍛錬							F-10中央地	P002, P103	万葉のみ
458		129	鐵土器	鍛錬							F-10中央地	P002, P103	万葉のみ
459	130.131	152	無施陶器	楕	H-1						H-1	青銅鏡地	
460	130.131	白陶									H-1	青銅鏡地	万葉のみ
461	130.131	灰陶	青	明器							H-1	青銅鏡地	万葉のみ

金属製品

報告 番号	国版 番号	写真図 版番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					長さ	幅	厚み	重さ (g)	口縁	底部			
W1	114	119	漆製品	不明	[11.1]	4.35	[0.8]	66.5			A-30X	SK105	
W2	114	119	漆製品	漆器蓋	[9.9]	4.15	4.15	87.0	[13.9]		A-30X	SM01	
W3	114	119	漆製品	漆器蓋	4.65	1.1	1.1	1.1			A-30X	SM01	
W4	114	119	漆製品	漆器蓋	[7.7]	1.1	1.1	1.1			A-30X	SM01	
W5	114	119	漆製品	漆器蓋	[5.1]	4.31	2.4	2.8			A-30X		
W6	114	119	漆製品	漆器		4.8	0.5	0.5	3.79		A-30X		中段～上段 並合層 (遺物はほとんど既)段)
W7	114	120	漆製品	漆器							A-30X		埋積
W8	114	120	漆製品	漆器							A-30X		貯水池質 沢木のみ
W9	114	120	漆製品	漆器	[6.7]	16.9	0.1	18.0			A-30X		貯水池質 沢木のみ
W10	114	120	漆製品	漆器	[6.8]	16.9	0.1	18.0			A-30X		埋積
M11	114	120	漆製品	漆器	[5.6]	6.05	0.4	3.47			A-30X		埋積
M12	114	120	漆製品	漆器	[4.9]	11.2	0.9	7.16			A-30X		埋積
M13	114	120	漆製品	漆器	[7.2]	10.6	0.7	7.45			A-30X		中段
M14	114	120	漆製品	漆器	[7.2]	10.6	0.7	7.45			A-30X		中段
M15	120	331	漆製品	漆器	3.4	2.06	0.2	16.07			F-10	一段下段	
M16	120	331	漆製品	漆器	[5.4]	3.9	0.7	30.39			F-10		濃焼油面まで
M17	122	132	漆製品	漆器(腹)	[2.9]	1.10	0.02	2.64			F-20	一段Bの底	中盤(既合層)
M18	122	132	漆製品	漆器	[2.3]	0.8	0.8	1.27			F-20X		
M19	122	132	漆製品	漆器	[7.65]	2.4	2.7	46.32			F-25西-既II	谷の側土下層	
M20	128	154	漆製品	漆器							H-4北		埋積 製本のみ
M21	128	154	漆製品	漆器							H-4北		埋積 製本のみ
M22	128	154	漆製品	漆器							H-4北		既水通質 製本のみ
M23	128	154	漆製品	漆器							H-4北		既水通質 製本のみ
M24	128	154	漆製品	漆器							H-4北		既水通質 製本のみ
M25.1	138	153	漆製品	漆器							H-4北		既水通質 製本のみ 既水通質 製本のみ 既水通質 製本のみ
M25.2	138	153	漆製品	漆器							H-4北		既水通質 製本のみ 既水通質 製本のみ 既水通質 製本のみ
M26	139	153	漆製品	短刀	32.5	2.5	0.85	15.91			H-2北		既水通質 製本(既)の茎柄
M27	139	153	漆製品	短刀	2.45	0.8	0.1	31.41			H-2北		既水通質 製本
M28	139	153	漆製品	短刀	2.15	1.15	1.6	31.51			H-2北		既水通質 製本
M29	139	153	漆製品	短刀	2.6	0.85	0.95	27.20			H-2北		既水通質 製本
M30	139	153	漆製品	短刀	[2.85]	0.65	0.5	1.68			H-2北		既水通質 製本
M31	139	153	漆製品	短刀	3.2	1.10	1.1	3.41			H-2北		既水通質 製本
M32	139	153	漆製品	短刀	[3.25]	1.10	0.9	2.94			H-2北		既水通質 製本
M33	139	153	漆製品	短刀	[3.15]	1.12	1.1	3.58			H-2北		既水通質 製本
M34	139	153	漆製品	短刀	3.1	0.55	0.55	1.60			H-2北		既水通質 製本(既)の茎柄
M35	139	153	漆製品	短刀	3.1	0.55	0.55	1.60			H-2北		既水通質 製本
M36	139	153	漆製品	短刀	3.5	0.5	0.5	1.60			H-2北		既水通質 製本
M37	139	153	漆製品	短刀	[4.3]	0.5	0.4	1.43			H-2北		既水通質 製本
M38	139	153	漆製品	短刀	[2.45]	0.5	0.45	1.08			H-2北		既水通質 製本
M39	139	153	漆製品	短刀	4.5	0.7	0.8	1.66			H-2北		既水通質 製本
M40	139	153	漆製品	短刀	4.5	0.7	0.8	1.66			H-2北		既水通質 製本(既)の茎柄
M41	139	154	漆製品	短刀	3.0	0.6	0.6	2.12			H-3北		既水通質 製本
M42	139	154	漆製品	短刀	4.25	0.7	0.65	3.23			H-2北		既水通質 製本
M43	139	154	漆製品	短刀	5.05	0.7	1.0	3.55			H-1-E		既水通質 製本
M44	139	154	漆製品	小札	6.05	1.9	0.2	3.57			H-2北		既水通質 製本
M45	139	154	漆製品	不明	[5.6]	4.0	0.4	7.07			H-2北		既水通質 製本
M46	139	154	漆製品	短刀	4.85	0.5	0.5	2.63			H-1-S		既水通質 製本
M47	139	154	漆製品	短刀	4.0	0.7	0.4	2.53			H-1-S		既水通質 製本
M48	139	154	漆製品	短刀	[5.1]	0.9	0.3	4.04			H-3北		既水通質 製本
M49	139	154	漆製品	短刀	5.0	0.25	1.0	10.17			H-2北		既水通質 製本
M50	139	154	漆製品	不明	2.1	3.35	0.45	2.16			H-2北		既水通質 製本

表13 出土遺物観察表7

報告書番号	国版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構・層位	備考
					長さ	幅	厚み	重量(g)	口縁	底部			
M51	139	154	鉄製品	剝離	1.6	0.5	0.45	0.61			先端部	H2西C	S029
M52	139	154	鉄製品	剝離(吸上)	2.25	0.5	0.45	2.52			先端部	H2西C	未確認
M53	139	154	鉄製品	剝離	1.8	0.5	0.45	0.61			先端部	H2西C	未確認
M54	139	154	鉄製品	剝離	13.0	3.6	0.7	23.00			先端部	H1-1西	未確認
M55	139	154	鉄製品	剝離	6.7	0.7	0.9	4.98			先端部	H1-3西	未確認
M56	139	154	鉄製品	剝離	5.2	1.0	0.7	2.37			先端部	H1-3西	未確認
M57	139	154	鉄製品	剝離	3.9	1.0	0.7	1.42			先端部	H1-3西	未確認
M58	139	154	鉄製品	剝離	11.25	3.9	0.65	1.86			先端部	H1-3西	未確認
M59	139	154	鉄製品	剝離	10.0	3.9	0.75	1.53			先端部	H1-3西	未確認
M60	139	154	鉄製品	剝離	5.0	0.7	0.9	3.94			先端部	H1-2北	遺構表面
M61	139	154	鉄製品	剝離	4.5	0.7	0.7	3.30			先端部	H1-4西	未確認
M62	139	154	鉄製品	剝離	3.1	0.5	0.6	1.42			先端部	H1-4西	未確認
M63	139	154	金屬品	鉛塊	5.1	2.3	1.5	20.00			先端部	H1-2北段	未確認
M64	139	154	金屬品	不明	4.25	1.5	0.5	6.62			先端部	H1-3西	未確認
M65	139	154	金屬品	不明	3.11	1.6	0.5	5.71			先端部	H1-3西	未確認
M66	139	154	金屬品	不明	3.11	1.8	0.5	4.07			先端部	H1-3西	未確認
M67	142	158	鉄製品	鍔	11.9	20.6	3.3	37.90			H1-4東	水槽内	薙刀式慶飲食器シルト
M68	142	158	鉄製品	鍔	10.5	11.3	0.8	6.12			H1-4西	西	S010
M69	142	158	鉄製品	鍔	5.50	2.40	0.5	8.82			H1-4西	西	S010
M70	142	158	鉄製品	鍔	5.50	2.40	0.5	8.82			H1-4西	西	S010
M71	119	158	金屬品	鉛塊	5.1	2.3	1.5	20.00			H1-2北段	未確認	万子のス
M72	119	158	金屬品	鉛塊	5.1	2.3	1.5	20.00			H1-2北段	未確認	万子のみ
M73	119	158	金屬品	鉛塊	5.1	2.3	1.5	20.00			H1-2北段	未確認	万子のみ
M74	120	158	鉄製品	鍔							A-3北	埋地	万子のみ
M75	120	158	鉄製品	鍔							A-3北	埋地	万子のみ
M76	120	158	鉄製品	鍔							A-3北	埋地	万子のみ
M77	120	158	金屬品	スプーン							A-3北	埋地	万子のみ
M78	120	158	金屬品	スプーン							A-3北	埋地	万子のみ
M79	120	158	金屬品	スプーン							A-3北	埋地	万子のみ
M80~M84	121	159	金属器	スラッシュ	8.3~	11.5~	5.6~	21.0~			H1-1南	研磨	万子のみ
M85	121	159	金属器	スラッシュ	9.25	12.3	5.6	21.0			H1-1南	研磨	万子のみ
M86	121	159	金属器	スラッシュ	7.65	8.7	5.6	21.0			H1-1南	研磨	万子のみ
M87	121	159	金属器	スラッシュ	9.25	13.4	6.4	20.4			H1-1南	研磨	万子のみ
M88~M102	121	159	金属器	スラッシュ	3.8~	6.0~	2.5~	8.0~			H1-2北	埋地	万子のみ
M103	155	159	鉄製品	鉛塊	11.44	13.9	4.2	31.12			H1-2南	直上	万子のス
M104	155	159	鉄製品	鉛塊							H1-2南	直上	万子のみ
M105	155	159	鉄製品	不明							H1-3中	伝告合宿場	万子のみ
M106	155	159	鉄製品	不明							H1-3西	西	万子のみ

石器品

報告書番号	国版番号	写真図版番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構	備考
					長さ	幅	厚み	重量(g)	口縁	底部			
S1	115	122	石器	石劍	22.0	17.0	3.0	1.1			A-1北	東北部	遺構表面まで 伝告合宿レキシルト
S2	115	122	石器	石劍	25.0	16.2	2.6	1.1			A-1北	トレンチ No.3東端	包含層
S3	115	122	石器	石劍	34.0	38.3	9.2	6.1			A-1北	トレンチ	人形頭
S4	115	122	石器	石劍	37.5	16.0	7.5	4.0			A-1北	トレンチ	人形頭
S5	115	122	石器	石劍	55.5	20.0	6.5	6.5			A-1北	東北部	人形頭まで 伝告合宿レキシルト
S6	115	122	石器	スティーラー	56.2	27.2	10.5	21.0			A-1北	トレンチ	伝告合
S7	115	122	石器	スティーラー	54.3	41.2	13.5	26.2			A-1北	トレンチ	伝告合
S8	115	122	石器	スティーラー	43.5	22.0	6.0	5.4			A-1北	トレンチ	伝告合
S9	115	122	石器	石劍	39.5	17.5	10.0	8.0			A-2北	直上	人形頭
S10	115	122	石器	石劍	37.5	16.0	10.0	17.6			A-3北	直上	人形頭シルトベース
S11	115	122	石器	石劍	56.0	48.0	17.0	53.2			A-1北	直上	小癒合む
S12	115	123	石器	石劍	18.0	29.0	17.0	7.9			A-1北	西端	人形頭
S13	115	123	石器	石劍	64.1	26.0	12.0	1.5			A-1北	西端	人形頭
S14	115	123	石器	石劍	72.0	26.0	12.0	1.5			A-1北	西端	人形頭
S15	116	123	石器	石劍	57.3	66.9	40.0	19.65			A-1北	西端	人形頭
S16	116	123	石器	石劍	110.0	81.3	33.0	33.9			A-1北	西端	人形頭
S17	116	124	石器	石劍	103.8	91.5	51.0	18.0			A-1北	西端	人形頭
S18	116	124	石器	石劍	102.3	84.5	21.0	26.3			A-1北	西端	人形頭
S19	116	124	石器	門附	156.0	129.0	60.0	30.0			A-1北	西端	人形頭
S20	116	124	石器	門附	93.5	94.0	50.5	20.0			A-1北	西端	人形頭
S21	116	124	石器	門附	151.3	131.5	54.0	31.0			A-1北	西端	人形頭
S22	116	124	石器	門附	89.5	73.0	60.0	56.0			A-1北	西端	人形頭
S23	116	125	石器	石劍	230.0	206.0	110.5	60.0			A-1北	西端	人形頭
S24	116	125	石器	石劍	107.8	113.4	62.0	16.0			A-1北	西端	人形頭
S25	116	125	石器	石劍	137.5	114.5	51.0	12.0			A-1北	西端	人形頭
S26	116	125	石器	月牙石劍	80.0	55.0	28.0	13.2			A-1北	西端	人形頭
S27	116	125	石器	月牙石劍	100.0	80.0	30.0	17.0			A-1北	西端	人形頭
S28	116	125	石器	石劍	172.8	110.6	38.0	9.8			A-3北	西	軸頭
S29	116	126	石器	石劍	160.0	187.0	92.0	33.0			A-3北	西	軸頭
S30	119	128	石器	石劍	48.0	36.0	17.5	52.7			E1北	東北木造土塗	復元304.0mm
S31	120	131	石器	石劍	150.0	80.5	78.0	18.2			F1北	森木造土塗	黒頭色上締
S32	122	132	石器	石劍	42.0	19.0	4.5	4.6			F1北	森木造土塗	黒頭色上締
S33	122	133	石器品	穂	72.5	92.5	7.6	19.6	19.6	19.6	F2北	西段	中央鍵食 包含層
S34	140	155	石器	スティーラー	71.2	37.8	11.0	30.5			H1-3北	中	S011
S35	140	155	石器	石劍	32.0	31.3	9.0	7.6			H1-4北	西	S023
S36	140	155	石器	石劍	47.0	32.0	10.0	24.0			H1-4北	西	S023
S37	140	155	石器	石劍	47.0	31.0	10.0	24.0			H1-4北	中	S023
S38	140	155	石器	不明	98.0	98.0	30.0	56.5			H1-4北	中	直径16.0~17.0mm
S39	140	155	石器	石劍	42.0	147.0	113.0	180.0			H1-3北	中	S011

表14 出土遺物観察表8

木製品

報告 番号	図版 番号	写真図 番号	種別	器種	法量(cm)			残存			出土地区	出土遺構	備考
					長さ	幅	厚み	重量 [g]	口縁	底部			
E1 117	126	木製品	轡輪	直輪(曲物)	9.6	9.6	0.9				1-3 北東面	水田上層	
E2 117	126	木製品	轡輪	(24.1) 5.35	1.05						A-3-15c	水田	復元底(834.0cm)
E3 117	126	木製品	板材	(22.45) 7.6	2.2						A-3-14c	東西北斜面土まで	
E4 117	126	木製品	板材	(4.3) 2.45	0.9						A-3-14c	東西下斜面土まで	
E5 117	126	木製品	曲物	10.08	1.75	0.3					A-3-24	遺構付近時	
E6 117	126	木製品	曲物	9.6	2.5	0.5					A-3-25	茶碗付近植土	
E7 117	126	木製品	付け木	8.55	1.55	0.65					A-3-25	遺構付近時	
E8 117	126	木製品	付け木	14.6	1.6	1.1					A-3-25	遺構付近時	
E9 117	126	木製品	付け木	(15.3) 2.35	0.9						A-3-10c	罐内	
E10 117	126	木製品	付け木	16.0	2.0	1.12					A-3-25c	茶色質植土	計量測定
E11 117	126	木製品	付け木	(15.5) 1.95	0.55						A-3-25c	茶色質植土	
E12 117	126	木製品	付け木	12.95	1.85	1.05					A-3-10c	水田上層	
E13 117	126	木製品	付け木	15.5	2.15	0.8					A14-トレンチ No.11	茶色質植土	
E14 117	126	木製品	板材	6.95	3.25	0.7					A14-トレンチ No.11	茶色質植土	
E15 117	126	木製品	板材	(15.1) 3.46	1.1						A-3-25c	遺構付近時	
E16 117	126	木製品	板	(13.05) 3.1	2.8						A-3-10c	茶色質植土	
E17 117	126	木製品	板	(11.9) 4.2	3.1						A-3-25c	水田上層	
E18 117	126	木製品	板	(33.63) 7.2	4.85						A-3-11c	水田遺構	
E19 118	127	木製品	板	34.4	7.6	4.02.5					D-30c	S025c	
E20 118	127	木製品	板	(33.3) 4.9	23.24.5						D-30c	S033	
E21 118	127	木製品	板	(22.25) 3.35	1.55						D-30c	S023	
E22 120	131	木製品	船の底板	16.25	3.95	1.0					トレンチ No.12	暗灰色シルト	
E23 141	156	木製品	漆器	11.9	2.0						トレンチ No.101		
E24 141	156	木製品	漆器	(33.63)	7.2	4.85					トレンチ No.101		
E25 141	156	木製品	漆器	34.4	7.6	4.02.5					トレンチ No.101		
E26 141	156	木製品	漆器	(33.3) 4.9	23.24.5						H-1-4c西	S023	
E27 141	156	木製品	漆器	(22.25) 3.35	1.55						H-1-4c西	S033	E27を回復した法量
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	12.55	3.95	1.0					H-1-4c西	S033	
E27 141	157	木製品	柄杓	(10.9) 2.0							H-		